

一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡4

(本文編 2)

2002

財団法人 鳥取県教育文化財団

一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡4

(本文編 2)

2002

財団法人 鳥取県教育文化財団

目 次

本文編 2 目次

第 3 章 出土遺物

第 6 節 木器	259
第 7 節 骨角器	361
第 8 節 ガラス製品	435

第 4 章 関連諸分野の成果

第 1 節 青谷上寺地遺跡から検出された人骨	436
鳥取大学医学部解剖学第二講座 井上貴央 松本充香	
第 2 節 青谷上寺地遺跡から検出された動物遺存体について	470
鳥取大学医学部解剖学第二講座 井上貴央 松本充香	
第 3 節 青谷上寺地遺跡出土土器の金属学的調査	481
(株)九州テクノリサーチ・TACセンター 大澤正己	
第 4 節 青谷上寺地遺跡出土の金属製遺物の材質と構造	490
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 村上隆	

第 5 章 青谷上寺地遺跡をめぐる諸問題

第 1 節 青谷上寺地遺跡出土土器の数量的分析	494
第 2 節 青谷上寺地遺跡の遺物組成	500
第 3 節 青谷上寺地遺跡出土石器の石材をめぐって	504
第 4 節 殺傷痕のある人骨をめぐる諸問題	507

第 6 章 おわりに

抄録

挿 図 目 次

第234図	木器・斧藤柄(1)	260	第271図	木器・盾(5)	295
第235図	木器・斧藤柄(2)	261	第272図	木器・盾(6)	295
第236図	木器・斧直柄(1)	262	第273図	木器・縦櫛、木履	297
第237図	履柄装着例	263	第274図	木器・衣笠(1)	298
第238図	木器・斧直柄(2)	263	第275図	木器・衣笠(2)	299
第239図	木器・直柄平鋏(1)	264	第276図	木器・衣笠(3)	300
第240図	木器・直柄平鋏(2)	265	第277図	木器・衣笠(4)、櫛、 鏡板の類品と衣笠復元骨格	301
第241図	木器・泥除	266	第278図	木器・匙(1)	302
第242図	木器・直柄又鋏	267	第279図	木器・匙(2)	303
第243図	九州地方における 方形柄孔の又鋏	268	第280図	木器・匙(3)	304
第244図	木器・直柄横鋏	269	第281図	木器・匙(4)	305
第245図	木器・曲柄鋏	270	第282図	木器・匙(5)	306
第246図	木器・組合せ鋏(1)	271	第283図	木器・匙(6)	307
第247図	木器・組合せ鋏(2)	272	第284図	木器・縦杓子、片口	308
第248図	木器・組合せ鋏(3)、一木鋏	273	第285図	木器・壺、碗、皿、杯	310
第249図	木器・田下駄(1)	274	第286図	木器・碗形容器	311
第250図	木器・田下駄(2)	275	第287図	木器・桶形容器	313
第251図	木器・木庖丁	276	第288図	木器・高杯(1)	314
第252図	木器・木鎌	277	第289図	木器・高杯(2)	315
第253図	木器・櫓、堅杵、 横槌、糺み台	278	第290図	木器・高杯(3)	316
第254図	木器・カセ、紡錘車	279	第291図	木器・高杯(4)	317
第255図	鬼虎川遺跡の紡錘	280	第292図	木器・高杯(5)	318
第256図	木器・舟	281	第293図	木器・高杯(6)	319
第257図	木器・櫓(1)	282	第294図	木器・高杯(7)	320
第258図	木器・櫓(2)	283	第295図	木器・高杯(8)	321
第259図	木器・アカトリ	284	第296図	木器・槽、盤(1)	322
第260図	木器・浮子、タモ杵	285	第297図	木器・槽、盤(2)	323
第261図	木器・網杵(1)	286	第298図	木器・槽、盤(3)	324
第262図	木器・網杵(2)	287	第299図	木器・蓋(1)	325
第263図	森浜遺跡の輪模型田下駄と輪	287	第300図	木器・蓋(2)	326
第264図	木器・ヤス	288	第301図	木器・蓋(3)	327
第265図	木器・武器	289	第302図	木器・その他容器(1)	328
第266図	鬼虎川遺跡の矢柄	290	第303図	木器・その他容器(2)	329
第267図	木器・盾(1)	291	第304図	木器・その他容器(3)	330
第268図	木器・盾(2)	292	第305図	木器・その他容器(4)	331
第269図	木器・盾(3)	293	第306図	六大A遺跡の曲物脚と 民俗例による使用法	331
第270図	木器・盾(4)	294	第307図	木器・曲物(1)	332

第308図	木器・曲物(2)	333	第349図	骨角器・釣針(2)	377
第309図	木器・桶(1)	334	第350図	骨角器・釣針(3)	378
第311図	木器・桶(2)	335	第351図	骨角器・擬餌状骨角器	379
第311図	木器・桶(3)	336	第352図	骨角器・ポイント状骨角器	380
第312図	木器・箱(1)	337	第353図	骨角器・アワビオコシ(1)	381
第313図	木器・箱(2)	338	第354図	骨角器・アワビオコシ(2)	382
第314図	木器・箱(3)	339	第355図	骨角器・アワビオコシ(3)	383
第315図	琴・箱出土状況	340	第356図	骨角器・アワビオコシ(4)	384
第316図	木器・琴(1)	341	第357図	骨角器・刺突具(1)	385
第317図	木器・琴(2)	342	第358図	骨角器・刺突具(2)	386
第318図	木器・琴(3)	343	第359図	骨角器・ヘラ(1)	387
第319図	木器・武器形(1)	345	第360図	骨角器・ヘラ(2)	388
第320図	木器・武器形(2)	346	第361図	骨角器・ヘラ(3)	389
第321図	木器・農具形	347	第362図	骨角器・針(1)	390
第322図	木器・動物形・舟形	348	第363図	骨角器・針(2)、舳筋車	391
第323図	木器・火鑪臼、火鑪杵、 把手、自在鉤	349	第364図	骨角器・骨鏝(1)	392
第324図	木器・腰かけ(1)	350	第365図	骨角器・骨鏝(2)	393
第325図	木器・腰かけ(2)	351	第366図	骨角器・根挟み、鳴鏝	394
第326図	木器・腰かけ(3)	352	第367図	骨角器・弭、鬚	395
第327図	木器・栓	353	第368図	骨角器・銅剣形骨角器	396
第328図	木器・礎板(1)	354	第369図	骨角器・把頭	397
第329図	木器・礎板(2)	355	第370図	骨角器・柄	398
第330図	部材出土状況(1)	356	第371図	骨角器・柄状骨角器(1)	399
第331図	部材出土状況(2)	357	第372図	骨角器・柄状骨角器(2)	400
第332図	木器・用途不明品(1)	358	第373図	骨角器・筒状骨角器	400
第333図	木器・用途不明品(2)	359	第374図	骨角器・装身具(1)	401
第334図	骨角器・ヤス(1)	362	第375図	骨角器・装身具(2)	402
第335図	骨角器・ヤス(2)	363	第376図	骨角器・装身具(3)	403
第336図	骨角器・ヤス(3)	364	第377図	骨角器・装身具(4)	404
第337図	骨角器・ヤス(4)	365	第378図	骨角器・弧状骨角器	405
第338図	骨角器・ヤス(5)	366	第379図	骨角器・用途不明品	406
第339図	骨角器・ヤス(6)	367	第380図	骨角器・刻み目のある骨角器	407
第340図	骨角器・ヤス(7)	368	第381図	骨角器・又状骨角器	408
第341図	骨角器・ヤス(8)	369	第382図	犠牲獣、研磨された下顎骨	409
第342図	骨角器・ヤス(9)	370	第383図	骨角器・縦断半載塗上の鹿角、 角鹿骨(1)	410
第343図	骨角器・ヤス(10)	371	第384図	骨角器・縦断半載塗上の鹿角(2)、 縦断半載された鹿角	411
第344図	骨角器・ヤス(11)	372	第385図	骨角器・骨角器素材(1)	412
第345図	骨角器・ヤス(12)	373	第386図	骨角器・骨角器素材(2)	413
第346図	骨角器・罐頭鋸頭(1)	374	第387図	骨角器・加工塗上品	414
第347図	骨角器・罐頭鋸頭(2)	375	第388図	卜骨(1)・A1	416
第348図	骨角器・釣針(1)	376			

第389図	ト骨(2)・A1	417
第390図	ト骨(3)・A2	418
第391図	ト骨(4)・A2	419
第392図	ト骨(5)・A2	420
第393図	ト骨(6)・A2	421
第394図	ト骨(7)・B1、B2	422
第395図	ト骨(8)・B2	423
第396図	ト骨(9)・B2	424
第397図	ト骨(10)・B2	425
第398図	ト骨(11)・C2、C3	426
第399図	ト骨(12)・D1、D4	427
第400図	ト骨(13)・D2、D4	428
第401図	ト骨(14)・D4	429
第402図	ト骨(15)・D4	430
第403図	ト骨(16)・タイプ不明(焼灼痕3)、 イノシシ下顎骨使用ト骨	431
第404図	ト骨の変遷	432
第405図	ト骨一覧(1)	433
第406図	ト骨一覧(2)	434
第407図	ガラス製品・勾玉、管玉、小玉	435
第408図	SX1の埋葬人骨	436
第409図	SX2の埋葬人骨	437
第410図	銅鍍の骨盤への侵入方向	457
第411図	創痕の部位	459
第412図	脳1の残存範囲	461
第413図	脳3の残存範囲	461
第414図	左右の対をなす同一人物の 人骨の分布図	464
第415図	左右の対をなす同一人物の 人骨の分布図	465
第416図	青谷上寺地遺跡男性骨の 顎骨弓幅と上顎幅	466
第417図	供試材の試料採取位置	484
第418図	東アジア諸国初期鉄器文化 発展模式図	484
第419図	八禽鏡に対する蛍光X線分析の結果 (表面の汚れの少ない部分)	493
第420図	八禽鏡に対する蛍光X線分析の結果 (表面が鉄サビ色をした部分)	493
第421図	6区、7区における 時期別土器組成	495
第422図	6区層位別土器組成	496

第423図	7区層位別土器組成	497
第424図	6区における前期末～中期前葉の 層位別土器組成	498
第425図	7区における前期末～中期前葉の 層位別土器組成	498
第426図	中国地方東部の地質図	505
第427図	遺跡周辺の地質図	505
第428図	山陰～丹後における 環濠集落の消長	510

挿 表 目 次

表10	県道5、6、7区から検出された 人骨の点数	437	表22	イノシシの年齢別頭数	471
表11	県道4、5、7区の新生児骨	438	表23	シカの時代別検出点数	471
表12	県道8区から検出された 人骨の点数	438	表24	下顎の咬耗度からみた シカの年齢と検出数	472
表13	県道8区の頭蓋骨	439	表25	供試材の履歴と調査項目	485
表14	創痕を認めた人骨の部位別点数	451	表26	青谷上寺地遺跡出土青銅製品の 蛍光X線分析の結果	493
表15	県道8区で検出された 主要四肢骨の部位別点数	462	表27	6区、7区土器一覧表	494
表16	県道8区の新生児骨	462	表28	青谷上寺地遺跡遺物組成表(1)	501
表17	寛骨の恥骨結合面の形状からみた 年齢構成	463	表29	青谷上寺地遺跡遺物組成表(2)	502
表18	Pearson式から求めた 県道8区人骨の推定身長	463	表30	青谷上寺地遺跡遺物組成表(3)	503
表19	シカ・イノシシ部位別点数	470	表31	石器石材一覧表	506
表20	イノシシの時代別検出点数	470	表32	山陰～丹後における 環濠集落一覧表	509
表21	イノシシの年齢別個体数	471	表33	山陰～丹後における 墓室内出土の鐵一覧表	509

文中写真目次

文中写真1	鑿断面のマクロ組織	485	文中写真4	鑿の顕微鏡写真	488
文中写真2	鑿の顕微鏡写真	486	文中写真5	鉄中非金属介在物の 定量分析結果	489
文中写真3	鑿の顕微鏡写真	487			

第6節 木器

はじめに

県道調査区からは5,818点の木器が出土した。このうち器種認定できた1,540点を用途別に見ると、工具36点(2.3%)、農具417点(27.1%)、紡織具43点(2.8%)、漁具162点(10.5%)、武具62点(4.0%)、服飾具42点(2.7%)、食具89点(5.8%)、容器550点(35.7%)、楽器5点(0.3%)、祭祀具40点(2.6%)、建築材を除く雑具94点(6.1%)となる。多彩な容器類が特徴で、完形に復元しうる琴の出土や絵画資料などが目をひくが、割合としては日常生活用具が大部分を占めることが分かる。今回はこのうち482点を図示した。

青谷上寺地遺跡の各報告において、溝の護岸施設や板材を列状に並べた性格不明の遺構(SAと略称を付したものを)を報告しているが、これらに用いられた板材等は建築材の転用がかなりの割合に上るものと思われ、建築材は2,756点と木器全体の47.4%と高い割合を占める。今回の報告では建築材の検討がまったくといっていいほどできていないことを断っておかねばならない。

用途不明としたものも1,522点と多く、木器全体の26.2%にのぼる。きわめて印象的な話であるが、これらの多くは単独で使用されたというより、組み合わせで用いられたものが多いように思われ、そうしたものが往時の姿をとどめていないことが器種認定を困難にしていると思われる。

県道調査区出土木器で、ポイントとなる知見を最初に掲げておこう。

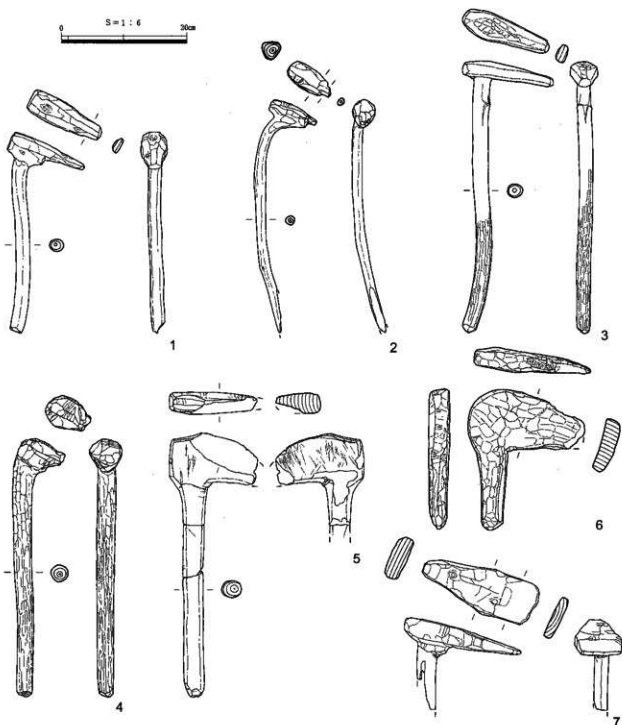
- (1) 弥生後期の日本沿岸地域に特徴的に分布する朝物桶の祖形が、中期後葉段階に確認できたこと(312ページ)。
- (2) 国道調査区の報告ですでに明らかであるが、従来北陸地方で知られていた、弥生後期段階の精巧な作りの高杯が山陰地方にも存在し、数の上では北陸を凌駕すること(313ページ)。
- (3) 蓋や底板といった本体に、薄い別材を組み合わせる「曲物」の技法が、弥生中期後葉に確認できたこと(332ページ)。
- (4) 「四方転びの箱」が弥生中期後葉に存在したことが明らかになったこと(337ページ)。
- (5) 槽作りの琴が、ほぼ復元できる状態で出土したこと(341ページ)。

木器の分類は基本的に奈良国立文化財研究所発行の『木器集成図録 近畿原篇』(以下『木器集成』と略す)に依拠している⁽¹⁾。各部名称もこれにならっている。

工具

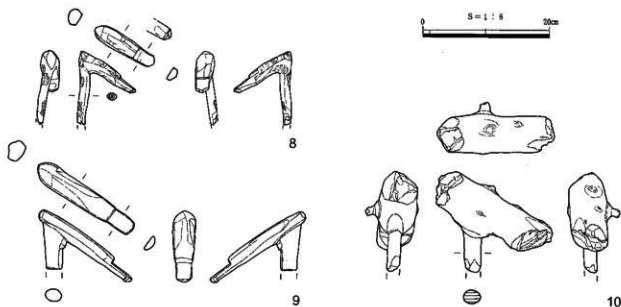
斧膝柄(第234、235図) 1～4は袋状鉄斧の柄である。斧身の装着部が完全に残る1と3で見ると、ともに明瞭な変化がないため計測部位に不安をもつが、1は長さ4.8cm、最大幅3.1cm、最大厚1.5cm、3は長さ5.1cm、最大幅3.3cm、最大厚2.0cmを測る。斧身と考えられる袋状鉄斧の袋部の法量でこれに合致するものは第218図15～20、第219図21～23などで、小型～中型の斧身を装着した柄と想定できる。袋状鉄斧が装着状態で出土した国道調査区の例を見ると⁽²⁾、必ずしもストッパーまではめ込んでいなかったようである。握りの長さは完存する3、4でそれぞれ41cm、36cmを測る。「木器集成」で想定された中型品に相当する長さである。

1～4が横斧の柄であるのに対して、5、6は縦斧の柄と考えられる。5は装着部の長さ4cm以上、最大幅3.0cm、最大厚5.8cm、6は先端が焼け焦げており往時の姿をとどめているか不明であるが、長さ6.0cm程度、最大幅2.2cm、最大厚5.9cmの装着部が想定できる。いずれにしてもこの装着部に見合う斧身は1～4に装着されたような小型～中型の袋状鉄斧ではなく、第217図14に示した鑄造鉄斧や第219図24の有肩鉄斧がふさわしい。前者の袋部の法量を見ると長さ8.3cm、最大幅(斧台の厚さに対応)8.3cm、最大厚(斧台の幅に対応)3.9cmであり、5、6の装着部よりやや大きい、矛盾はなかろう。柄の握りの長さは完存する5で33.2cmと短い。折損後の再生も考えられるが、この程度であれば材の分割には使用可能であったのだろうか。6は握りの端部を確かに二次加工している。斧台部分が焼け焦げていることもあり、斧の柄としての機能を失ったものかもしれない。



第234図 木器・斧跡柄(1)

発見番号	器種	調査区	清層・層位	時期	法 量	備 考	取上番号
1	斧跡柄	B区	A層	弥生後期	長(31.8)、弁台長(12.4)、幅(4.2)、装着部幅(2.4)、柄径(2.2)		30299
2	斧跡柄	4区	6A4~6	弥生後期初頭~後葉	長(37.8)、弁台長(7.7)、幅(3.2)、装着部幅(1.4)、柄径(1.8)	イタガヤ	3839
3	斧跡柄	B区	SD38	弥生後期初頭~後葉	長(44.1)、弁台長(14.6)、幅(4.4)、装着部幅(2.2)、柄径(2.4)		33203
4	斧跡柄	B区	SD69	弥生後期末~古墳初頭	長(41.3)、弁台長(7.1)、幅(5.1)、装着部幅(2.8)、柄径(2.7)		28063
5	斧跡柄	3区	SD20	弥生後期初頭~後葉	長(42.3)、弁台長(14.1)、幅(3.5)、装着部幅(5.8)、柄径(3.1)	ツルギ	21106
6	斧跡柄	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	長(22.4)、弁台長(6.4)、幅(3.4)、装着部幅(5.8)、柄径(3.5)	ツルギ	5998
7	斧跡柄	B区	SD38	弥生後期初頭~後葉	長(14.5)、弁台長(19.0)、幅(7.5)、装着部幅(6.9)、柄径(3.0)		35398
8	斧跡柄	7区	L層以下	弥生前期末~中期後葉	長(11.7)、弁台長(10.7)、幅(3.5)、装着部幅(2.0)、柄径(1.5)		43557
9	斧跡柄	7区	K層	弥生中期後葉	長(9.2)、弁台長(16.0)、幅(3.2)、装着部幅(2.5)、柄径(2.6)		44639
10	斧跡柄(木製品)	B区	SD54	弥生後期初頭~後葉	長(16.8)、弁台長(20.3)、幅(5.8)、厚(5.8)、柄径(2.7)		34227



第235図 木器・斧鎌柄(2)

7は横斧の柄である。全体の作りから未製品ではなく、成品と判断できる。装着部の幅が厚さに比べかなり広い点が特徴である。各面に斧身を装着したことによる段が形成されており、長さ6.3cm、最大幅6.8cm、最大厚1.8cmの装着部を認めることができる。ここにはめ込まれた斧身は大型の袋状鉄斧か鑄造鉄斧以外に考えられない。袋状鉄斧とすればきわめて扁平な袋部ということになるし、鑄造鉄斧とすれば横斧としての使用を考えなければならず、いずれとも決しがたい。

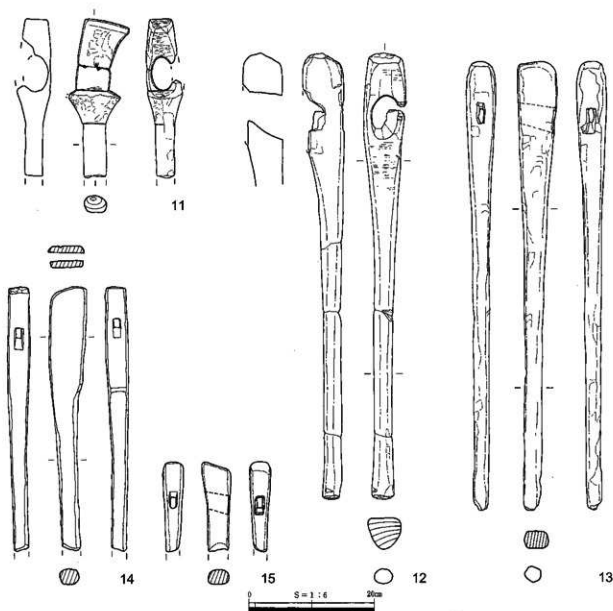
8、9は板状の斧身を装着して、横斧として使用したものである。装着部の量法は8が長さ3.2cm、幅2.0cm、9が長さ4.1cm、幅2.5cmを測る。本遺跡で出土している板状の斧身は、板状鉄斧と扁平片刃石斧であり、いずれも8、9に合うような幅の狭い小型品がある。

10は斧鎌柄の未製品であろう。幹を斧台に、枝を握りに用いている。

斧直柄(第236、238図) 第236図11、12は伐採石斧の柄である。11は頭部が後方へ反るもので、装着孔の下端には面の作り出しがある。12は頭部の反りも面の作り出しもなく、棍棒状の先端付近に装着孔を穿ったものである。

13～15は握りに対して鋭角に方形孔を穿ったものである。こういったタイプの柄は板状の斧身を直接装着するか、袋状鉄斧を装着した組合せ式の斧台をはめ込むかのどちらかであろうが、斧身を直接装着する場合は縦斧となるから、斧身は板状鉄斧とみた方がよからうが、斧台前面の方形孔の径は13が4.0cm×1.5cm、14が3.5cm×1.4cm、15が2.7cm×1.2cmを測り、本遺跡出土の板状鉄斧の厚さが1cmを超えないことから、板状鉄斧を直接装着した可能性は低いように思われる。むしろ八尾市亀井遺跡で知られ⁽³⁾、本遺跡国道調査区でも出土した⁽⁴⁾ 組合せ式の斧台を装着するタイプと理解したほうがよいように思う(第237図)。亀井例の方形孔は組合せ式斧台の量法記載から3.7cm×1.3cmほどであり、青谷上寺地例はおよそ3cm×1cmで、13～15の方形孔の径とはほぼ同じといっている。斧身の装着部は亀井例で長さ5.0cm、最大厚3.9cmで、斧身は大型の袋状鉄斧が考えられる。青谷上寺地例は装着部の長さ2.5cm、最大幅2.5cmとひと回り小さい。組合せ式の斧台を装着した2例ともに装着部の形状から縦斧となる。青谷上寺地例は小型の袋状鉄斧が縦斧として使用される場合があったことを教えてくれる。

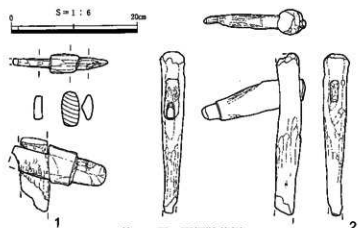
16、17は斧直柄の未製品である。16は頭部が幅広となっており、伐採石斧の柄を作る過程のものか。片面に平坦な面が認められる。17は小型の棍棒状で、13～15のような組合せ式の斧台を装着するタイプの柄なのであろう。



第236図 木器・斧直柄(1)

図面番号	種類	調査区	遺構・層位	時期	寸法	備考	取上番号
11	斧直柄	7区	N層		長(25.7)、幅5.5、装着部径3.9x4.0、柄径3.7x2.5		44852
12	斧直柄	7区	I層	弥生中期後葉	長72.4、幅6.7、装着部径7.2x4.4、柄径3.1x2.5		35539
13	斧直柄	8区	SD69	弥生後期末～古墳初葉	長72.3、幅4.5、装着部径4.0x1.5、柄径2.6x2.5		27829
14	斧直柄	3区	SD20	弥生後期初葉～後葉	長42.3、幅3.6、装着部径3.5x1.4、柄径3.0x2.5	カシ類	21216
15	斧直柄	8区	SD38	弥生後期初葉～後葉	長(14.3)、幅2.3、装着部径2.9x1.5		30461
16	斧直柄未製品	7区	L層	弥生中期後葉	長(49.5)、本体幅6.6、厚9.9、柄径5.6x5.0		40713
17	斧直柄未製品	7区	SD27	弥生中期後葉	長(34.4)、本体幅4.8、厚5.3、柄径5.7		43097

青谷上寺地遺跡における木器の様相については、第5章第2節でふれるが、斧の柄について特徴的な事柄をここで記しておきたい。国道、県道調査区を合わせて斧身の出土数は、伐採斧としての鑄造鉄斧2点、伐採石斧103点、加工斧としての袋状鉄斧11点、板状鉄斧18点(鑄造鉄斧片の再加工品含む)、扁平片刃石斧72点、柱状片刃石斧14点を数えるが¹³⁾、柄は確實なところで袋状鉄斧柄23点、鑄造鉄斧柄3点、板状鉄斧または扁平片刃石斧柄3点、柱状片刃石斧柄1点と、斧身とそれに対応する柄との数が合わず、袋状鉄斧柄が著しく多いのが分かる。11点ある直柄が袋状鉄斧柄だとすればなおさらである。他の柄が少なすぎるといったほうが正確なのであろうが、使用される場所、折損の頻度、廃棄などの多様な問題を含む事柄として注意を喚起しておきたい。



第237図 屈柄装着例

(1) 龜井、2 青谷上寺地。註(2)、(3) 文献より一部改変のうえ再トレース

農具

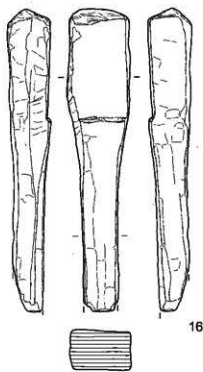
直柄平鋏(第239、240図) 『木器集成』によれば、直柄平鋏は身幅15cmを境にして広鋏と狭鋏に分類され、身の形態や柄孔周囲の隆起(以下、隆起と略す)の平面形で細分される。これに基づき以下記述を進める。

18、19は湾曲する側面をもつ狭鋏Ⅰ式で、隆起はAⅠ型である。20は狭鋏Ⅱ式で、AⅢ型の隆起と泥除装着装置CⅠ類をもつ。21、22はB型隆起の狭鋏Ⅱ式である。

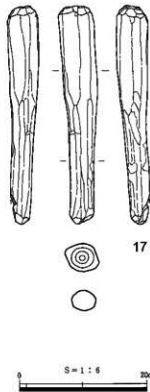
第240図には未製品を掲げた。23は狭鋏Ⅰ式である。成品に比べ隆起の長さが短い。24はAⅠ型隆起の広鋏Ⅰ式で、C類の泥除装着装置をもつ。隆起の削りだしも進んでおり、柄孔を開ければ成品となる段階のものである。25～27は広鋏の未製品である。

泥除(第241図) 28は笠形をなすⅠ式である。29はどのタイプに属するか不明である。柄孔の角度からすると図の左側が前面(使用者側)と考えられる。後面の上部に平坦な面を有し、下部は前面側に反り返る。30、31は未製品で、ともにⅠ式であろう。

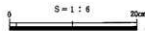
直柄又鋏(第242図) 32、33は着柄状態で出土した。32は4本歯の鋏身を装着して、目釘で固定したものである。柄は基本的に断面円形であるが、装着部のみは4面を削り角柱状に仕上げている。身の柄孔も方形孔である。目釘は前後方向に打ち込まれており、『木器集成』に収録された直柄横鋏の例(PL. 34)とは方向が異なる。着柄角度は78度を測る。33も4本歯の鋏身を装着したものである。柄は握る部分は断面円形であるが、先端に行くにしたがい角柱状に面取りしており、装着部には方形のほぞを削り出している。身の柄孔も方形孔となる。柄と身の固定方法は不明である。34は5本歯で、柄孔はやはり方形である。目釘孔が柄孔の前後に穿たれており、柄に対して斜めに釘を打ち込んで柄と固定している。35は6本歯と思われる。身の前面の柄孔周囲にB型隆起を作り出している。36は4本歯、37もそうであろう。35～37の柄孔も方形である。



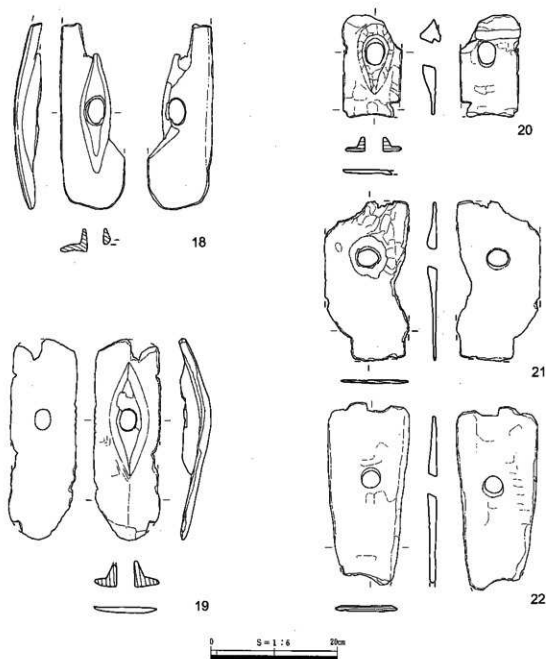
16



17

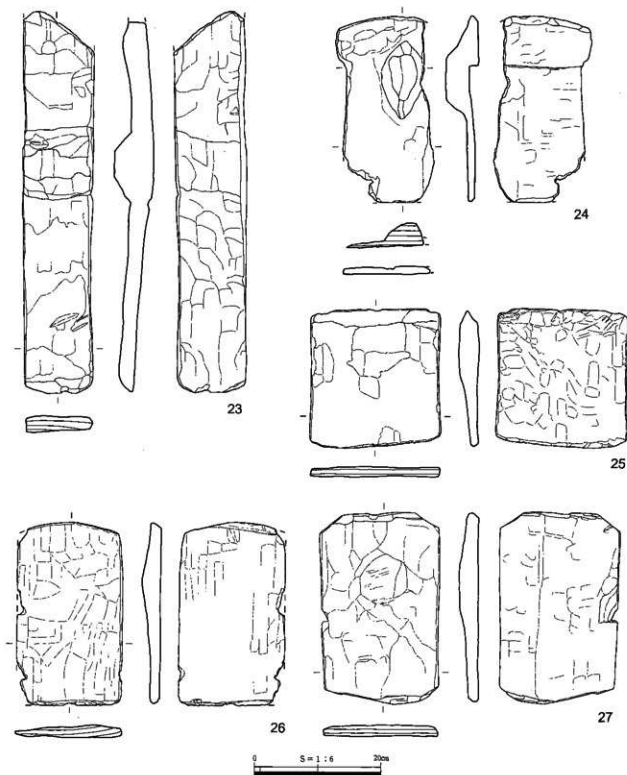


第238図 木器・斧直柄(2)



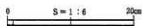
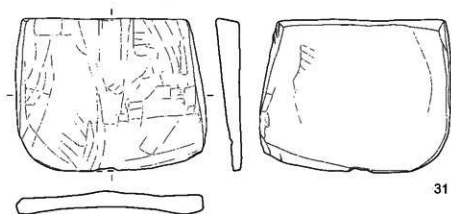
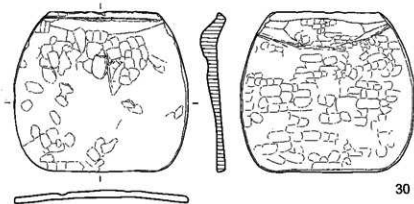
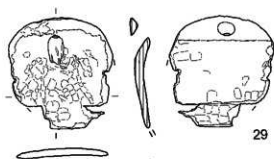
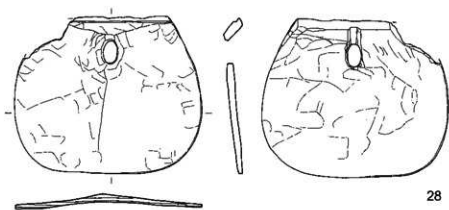
第239図 木器・直柄平鋏(1)

図号	器種	調査区	遺構・層位	時期	寸法	出所	取上番号
18	直柄平鋏	4区	⑥層相当	弥生前期末~中期前半	長29.8, 幅10.3, 刃部厚0.9, 柄孔径4.0x2.6	コナラ属アカガシ重層	4224
19	直柄平鋏	6区	F層	弥生前期末~中期後半	長32.3, 幅10.3, 刃部厚0.9, 柄孔径3.3x2.6		33044
20	直柄平鋏	7区	M層	弥生前期末~中期前半	長16.4, 幅9.6, 刃部厚0.8, 柄孔径3.8x2.8		42786
21	直柄平鋏	7区	K層	弥生中期後半	長25.6, 幅12.4, 刃部厚0.5, 柄孔径3.2x2.8		40648
22	直柄平鋏	7区	SD27	弥生中期後半	長29.4, 幅13.0, 刃部厚0.9, 柄孔径2.9		42321
23	直柄平鋏未製品	7区	L層	弥生中期後半	長(61.3), 幅11.4, 刃部厚2.4, 柄孔径起長11.6		41384
24	直柄平鋏未製品	7区	M層	弥生前期末~中期前半	長26.9, 幅(16.7), 刃部厚1.3, 柄孔径起長12.7, 幅0.9		40905
25	直柄平鋏未製品	7区	M層	弥生前期末~中期前半	長22.5, 幅20.9, 厚3.2, 刃部厚1.8		40946
26	直柄平鋏未製品	7区	M層	弥生前期末~中期前半	長29.5, 幅16.9, 厚2.9, 刃部厚1.4		42027
27	直柄平鋏未製品	7区	N層	弥生中期中葉	長30.6, 幅19.1, 厚3.0, 刃部厚1.8		40929

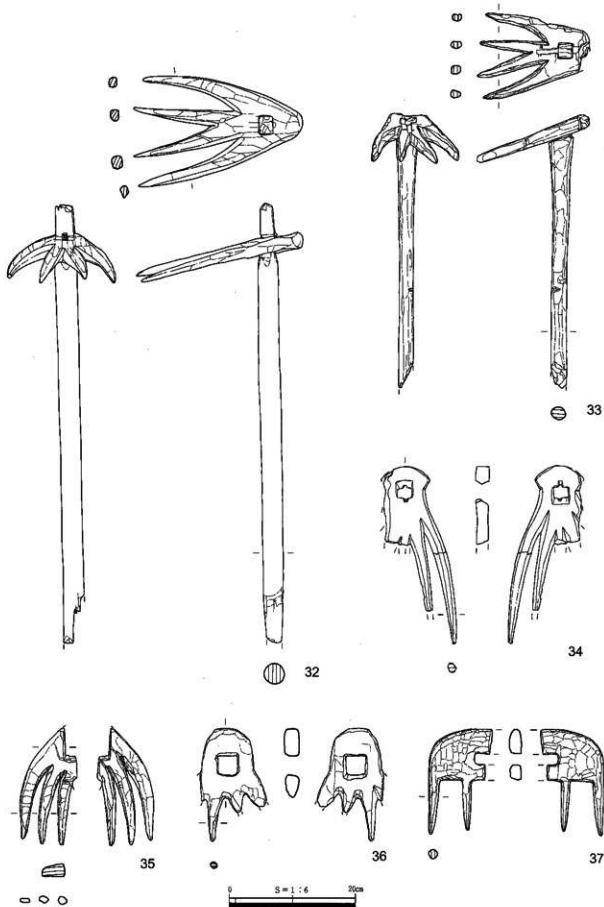


第240図 木器・直柄平縁(2)

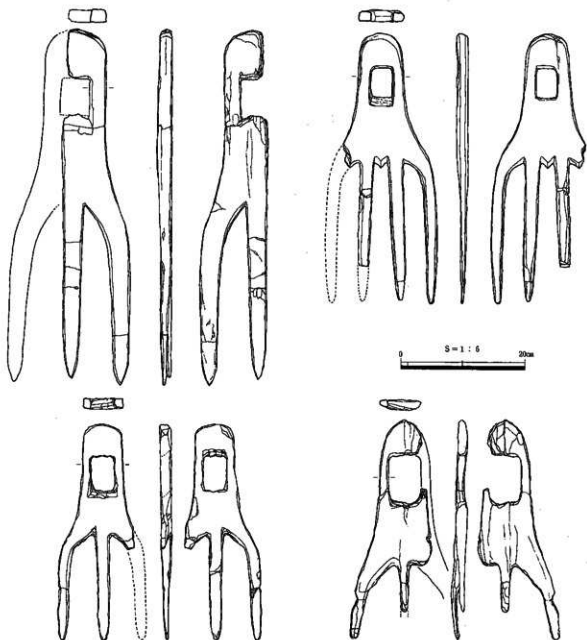
図番	種類	出土区	遺跡・層位	時期	寸法	備註	取上番号
28	形跡	7区	N層	弥生中期中葉	長25.0、幅30.0、厚1.0、柄孔径3.7x2.2		40709
29	形跡	8区	SD38	弥生後期初葉～後葉	長17.0、幅18.0、厚1.0、柄孔径2.7x2.2		28812
30	形跡	7区	L層	弥生中期後葉	長26.0、幅27.0、厚1.0		36880
31	形跡	7区	K層	弥生中期後葉	長30.4、幅24.0、厚4.0		42442



第241圖 木器・泥除



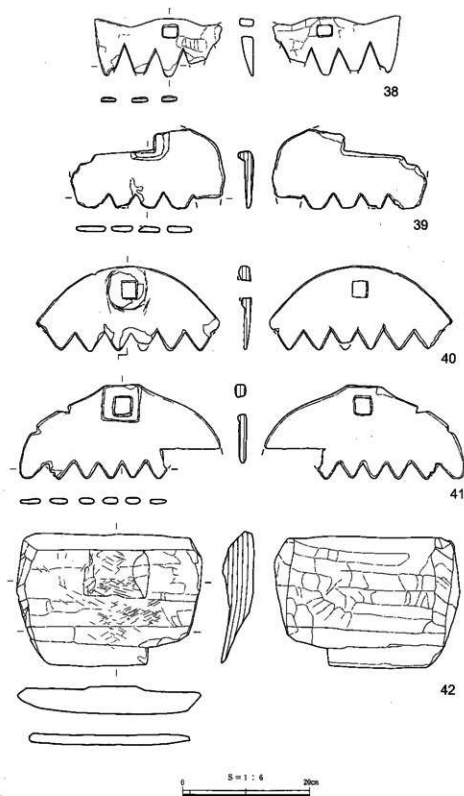
第242図 木器・直柄又鉞



第243図 九州地方における方形柄孔の又鋏

このような方形の柄孔をもつ又鋏は九州地方に特徴的である(第243図)が、系統問題は今後の課題としたい。
直柄横鋏(第244図) ここに掲げた成品4点はすべて刃縁が鋸歯状を呈する。『木器集成』分類の横鋏Ⅲ式である。38を除き柄孔周囲に隆起をもつ。齒の数は復元を含め38、39が5本、40が6本、41が8本である。42は未製品で、隆起の作り出しが始まっていることから、全体形状はおおむね示していると考え、横長の形状から横鋏の未製品と想定している。

埋蔵番号	種類	調査区	遺構・層位	時期	法	量	備	取上番号
32	直柄又鋏	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	長(70.5)、柄径3.2、鋸長27.0、幅18.0		刃:カシ羅、柄:木平	4460
33	直柄又鋏	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(44.2)、柄径2.4x2.1、鋸長18.1、幅13.9			33106
34	直柄又鋏	3区	SD20	弥生後期初頭～後葉	長28.1、柄孔径2.8x2.8、鋸長18.2		カシ羅	20972
35	直柄又鋏	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(18.9)、厚2.0			33373
36	直柄又鋏	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長18.1、厚2.3、柄孔径3.1			30429
37	直柄又鋏	8区	仁層	弥生中葉中葉～後葉	長17.0、厚1.9、柄孔径1.9(不明)			30233



第244図 木器・直柄横鉢

標本番号	器種	出土区	遺積・層位	時期	法量	備 考	取上番号
38	直柄横鉢	7区	K層	弥生中期後葉	長9.3、幅20.3、厚2.3、柄孔径2.2x1.7		36918
39	直柄横鉢	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長12.7、幅24.6、厚2.5		33078
40	直柄横鉢	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	長13.4、幅(28.8)、厚1.3、柄孔径2.6x2.5	コナツ属アカガシ産風	5054
41	直柄横鉢	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長13.2、幅(32.1)、厚1.7、柄孔径2.6x2.5		33282
42	直柄横鉢未製品	7区	P288	弥生後期	長20.8、幅29.8、厚4.9、柄孔径10.5x7.5		41384

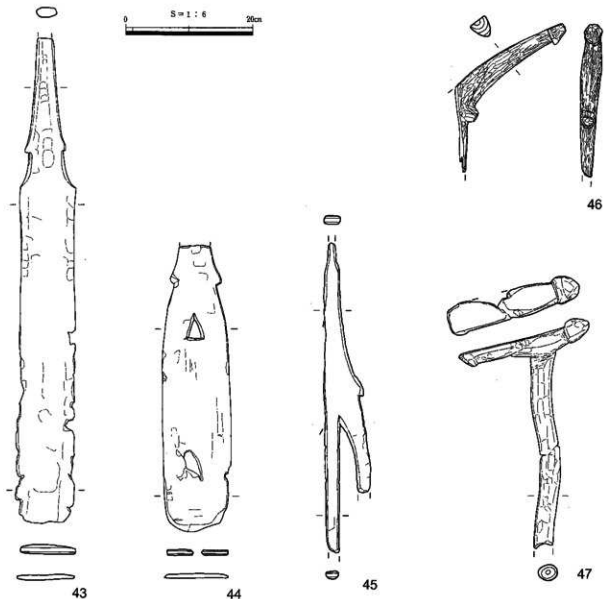
曲柄鋸(第245図) 本遺跡で出土した曲柄鋸は破損して出土したものが大部分で、図示したものは少ない。曲柄鋸には平鋸と又鋸の別があるが、このような事情から、ここでは柄も含めて曲柄鋸として一括記載する。

43、44は平鋸である。「木器集成」に従えばDⅡ式に該当する。43は平行に延びる刃縁が54.1cmを測る長大なものである。長さに対して刃部厚は1.0cmと薄い。44は笠部のやや下に三角形のスリットをもつ。

45は反柄DⅡ式である。欠損のため刃部長は不明であるが、3本歯に復元できる。

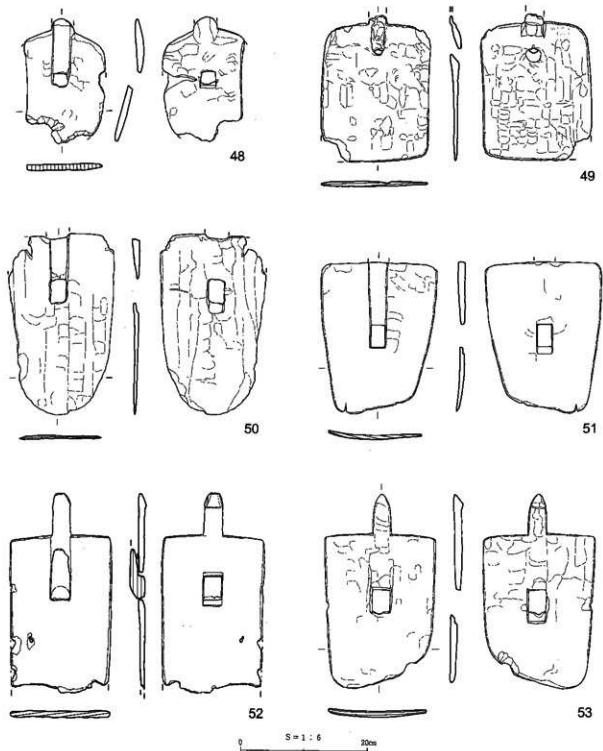
46は曲柄、47は膝柄に分類される。46はふたつの鉤かけが認められ、鋸身の装着部の幅は3.0cmである。47は身の装着部が完存し、平坦面の長さ17.2cm、幅4.7cmを測る。46に比べ身と柄のなす角度は緩い。

錡(第246～248図) 48～55が組合せ平鋸である。着柄軸をもち、樋を経て柄孔に至る柄結合で角屑のもの、が基本である。先端に向かい尖る平面形をもち、身の中央近くで左右2孔で緊縛するとされる鉤結合のものは、



第245図 木器・曲柄鋸

発掘番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法 量	製 種	取上番号
43	曲柄平鋸	8区	SD38	弥生後期前期～後葉	長(50.1)、幅2.2、刃部厚1.0		24547
44	曲柄平鋸	7区	I層	弥生中期後葉	長(45.9)、幅11.0、刃部厚1.0、スリット2.9x2.0		42055
45	曲柄又鋸	8区	SD38	弥生後期前期～後葉	長(49.8)、刃部厚1.2		32087
46	曲柄鋸	4区	GD11	弥生後期前期～後葉	鉤結合面長(19.7)、幅3.0、深3.1	マ牛属	5985
47	膝柄鋸	7区	I層	弥生中期後葉	長(36.2)、鉤結合面長21.4、幅4.7、柄径3.0		40982



第246図 木器・組合せ鋸(1)

発掘番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	寸法	埋没	取上番号
48	組合せ平鋸	7区	M層	弥生前期末～中期前半	長(19.7)、幅(13.1)、刃部厚1.0、柄孔径2.8x2.8		40972
49	組合せ平鋸	7区	M層	弥生前期末～中期前半	長(23.5)、幅(17.1)、刃部厚0.7、柄孔径2.4x1.5		40854
50	組合せ平鋸	7区	BA27	弥生中期後半	長(29.0)、幅(16.8)、刃部厚0.5、柄孔径3.7x2.5		57488
51	組合せ平鋸	7区	I層	弥生中期後半	長(24.2)、幅(18.5)、刃部厚0.7、柄孔径3.6x2.3		42081
52	組合せ平鋸	8区	8C38	弥生後期初頭～後半	長(31.8)、幅(15.9)、刃部厚0.8、柄孔径4.5x3.0、 鋸柄軸長6.7		53438
53	組合せ平鋸	8区	8C38	弥生後期初頭～後半	長30.2、幅17.6、刃部厚1.0、柄孔径3.6x2.8、 鋸柄軸長6.3		53370

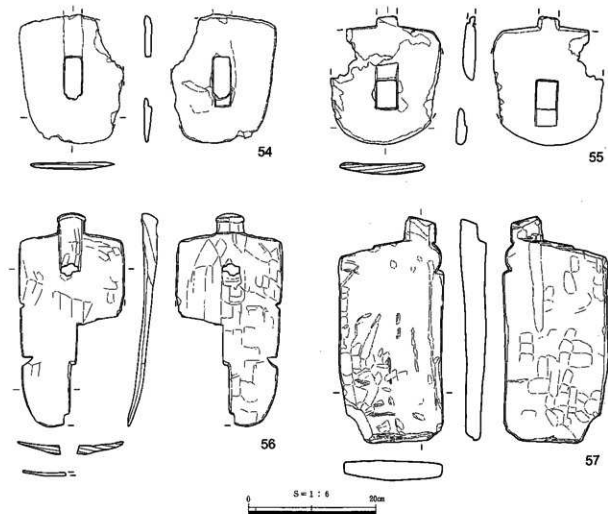
61がその未製品の可能性があり、これが広葉樹なので鐮の可能性をまったく否定するわけではないが、針葉樹を用いたものは今回祭祀具として分類した。344ページを参照されたい。

56は組合せ又鋸である。先端部を欠失するが、残っている端部の状況から二又になるものと思われる。それを除けば『木器集成』で指摘されるとおり、組合せ平鋸と平面形態が大きく異なることはない。

57、60は角屑タイプの未製品であろう。

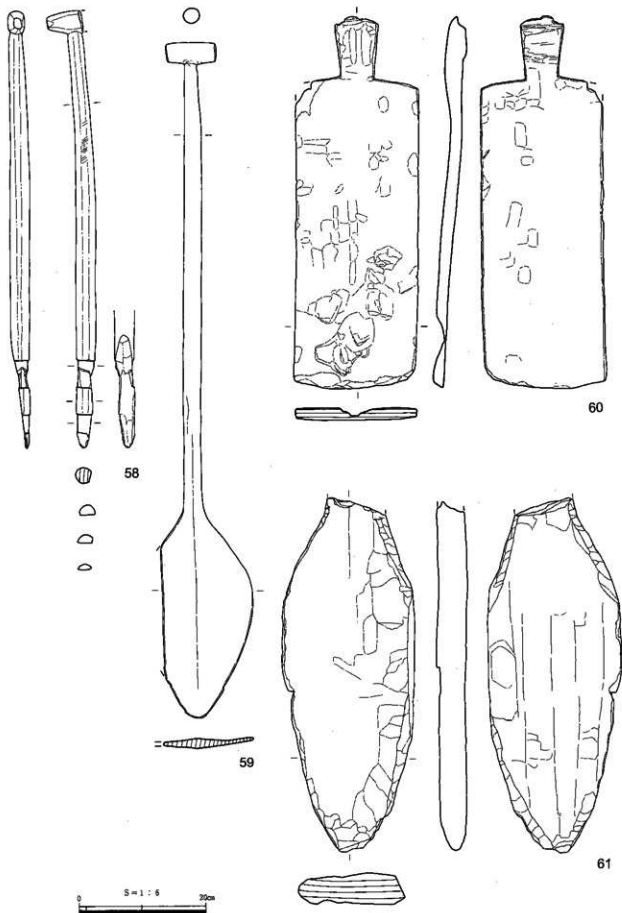
58はT b型把手をもつ組合せ鋸の柄である。表面に18.2cmの平坦面を作り、先端にはふたつの鉤かけが認められる。

59は一木平鋸で、柄と刃部が直線をなす。把手はT b型である。後述する釵との区別がつきにくい、把手の形態から鋸と認定した。

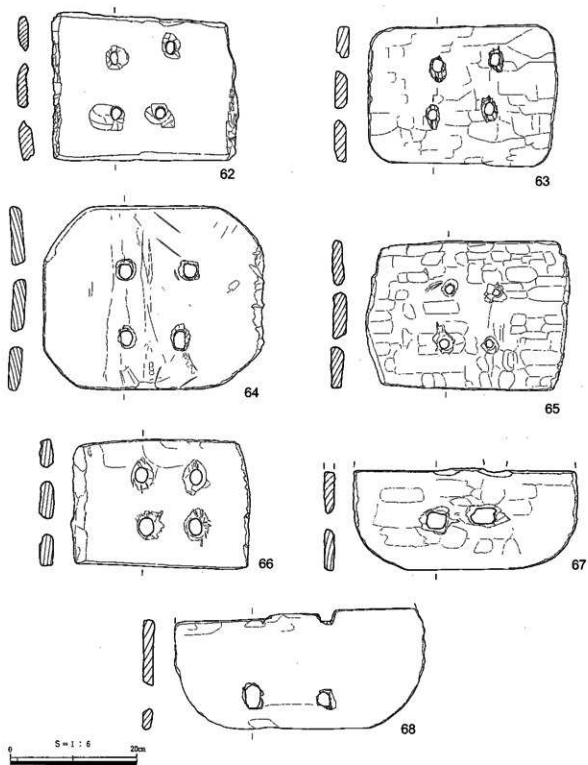


第247図 木器・組合せ鋸(2)

発掘番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	寸法	備註	出土番号
54	組合せ平鋸	6区	SD38	弥生後期初頭~後葉	長(20.3)、幅16.8、刃部厚0.8、柄孔径5.9x2.8		30241
55	組合せ平鋸	6区	SD38	弥生後期初頭~後葉	長(20.7)、幅17.4、刃部厚1.5、柄孔径4.5x3.3		33403
56	組合せ又鋸	7区	N層	弥生中期中葉	長34.5、幅18.9、刃部長10.1、刃部厚0.5、柄孔径28x2.2、磨柄軸長3.2		42446
57	組合せ鋸未製品	7区	L層	弥生中期中葉	長36.5、幅15.9、厚4.0、磨柄軸長3.9		40703
58	組合せ鋸の柄	7区	SA39	弥生中期中葉	長70.5、柄径2.8、裝着面長18.2		36681
59	一木平鋸	7区	J層	弥生中期中葉	長117.2、身径(14.1)x1.5、磨径2.6x2.5		36682
60	組合せ鋸未製品	7区	K層	弥生中期中葉	長68.8、幅19.5、厚2.0、磨柄軸長10.0		42381
61	組合せ鋸未製品	7区	J層	弥生中期中葉	長(58.8)、幅21.6、厚4.9		42448



第248図 木器・組合せ鎌(3)、一木鎌

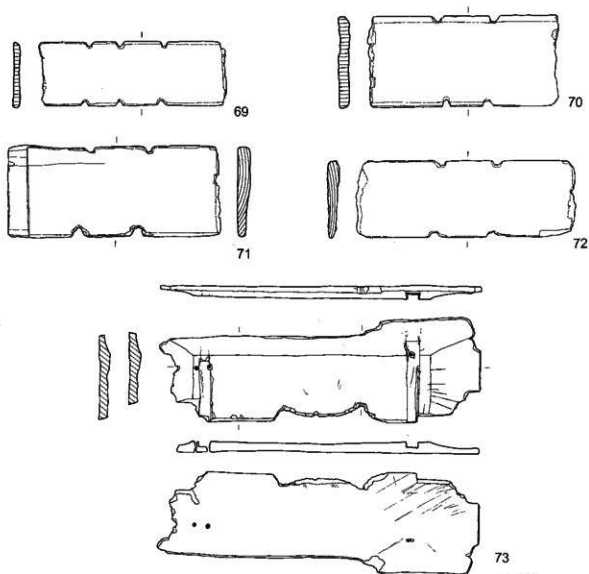


第249図 木器・田下駄 (1)

図記番号	器種	調査区	透視・層位	時期	法	量	層位	取上番号
62	田下駄	7区	N層	弥生中期中葉	長29.7、幅23.8、厚2.1			44982
63	田下駄	7区	N層	弥生中期中葉	長30.4、幅22.9、厚1.9			39012
64	田下駄	7区	I層	弥生中期後葉	長35.2、幅29.7、厚2.0			42083
65	田下駄	7区	I層	弥生中期後葉	長32.5、幅23.7、厚2.2			42826
66	田下駄	7区	SO27	弥生中期後葉	長28.8、幅20.5、厚2.4			42219
67	田下駄	7区	N層	弥生中期中葉	長36.0、幅(15.9)、厚2.4			39986
68	田下駄	7区	J層	弥生中期後葉	長40.1、幅(19.2)、厚1.5			36004

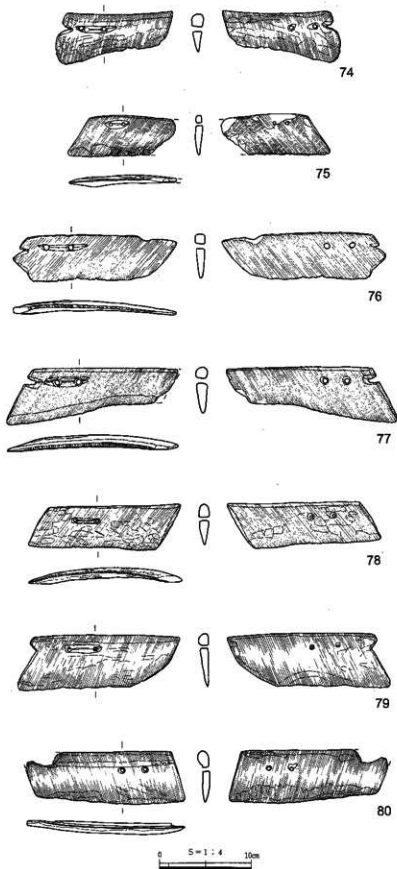
田下駄 (第249、250図) ここで取り上げる田下駄は板型田下駄である。枠型田下駄は、遺物観察時にその部材も含め十分に把握できていなかったため、ここでは取り上げることができなかった。本遺跡で認められる板型田下駄の形態は4孔を穿孔するもの(穿孔タイプ)と両側縁に4ヶ所の抉りを入れるもの(抉りタイプ)が基本である。これらは特に後者において、正方形というよりは長方形の板材を用いている。これを縦位に用いたか横位に用いたかということになるが、県内出土の田下駄を対象に緒孔間の距離を見た場合、一見同じ間隔に思えても微妙な違いがあり、緒孔間距離と足の幅(つま先が広く踵が狭い)とはは相関関係があるという前提で検討すると、横位の使用が基本であったとの結論に達した。紙幅の都合で詳しく述べられないが、この点については別稿を用意したい。

第249図は穿孔タイプ、第250図は抉りタイプである。69は6ヶ所の抉りをもつ。73は出土層位からおそらく古墳時代以降のもので、机の天板を転用している。



第250図 木器・田下駄(2)

発掘番号	器種	所在区	遺構・層位	時期	法	量	樹種	取上番号
69	田下駄	4区	赤褐色粘土	弥生後期～古墳	長30.0、幅10.4、厚1.2		スギ	2011
70	田下駄	4区	②層位	弥生後期～古墳初期	長30.4、幅14.7、厚1.7		スギ	2413
71	田下駄	4区	9A4～6	弥生後期初頭～後葉	長35.3、幅14.9、厚2.2		スギ	2735
72	田下駄	4区	9D11	弥生後期初頭～後葉	長35.4、幅12.5、厚2.2		スギ	4381
73	田下駄	3区	⑤層位	古墳以降	長61.0、幅16.6、厚2.1		スギ	26022



第251図 木器・木庖丁

木庖丁 (第251図) 平面形が平行四辺形をなし、背を水平に据えた際に木目が斜交する。鉋孔はふたつで、それを結ぶ溝を設けるのを基本とする。背谷上寺地遺跡の木製・石製穂摘具は多量に認められる反面、鉄器の穂摘具は若干例認められるのみである。本遺跡の後期段階における鉄器の普及を見ると、木製・石製穂摘具がその代用品にとどまっていたとは考えにくく、十分に機能していたことを教えてくれる。

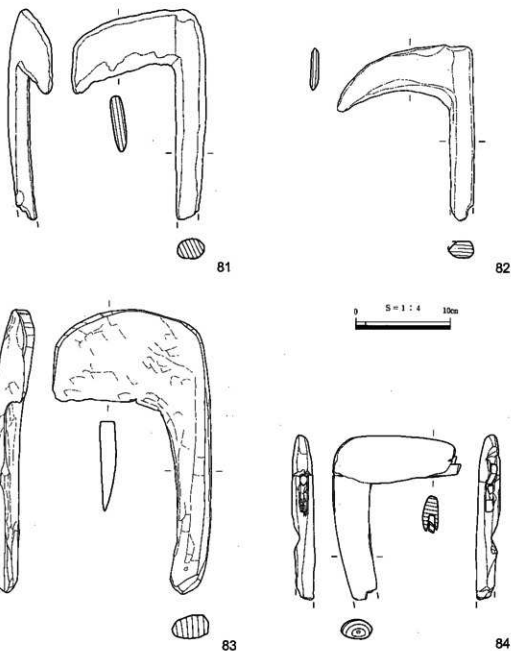
木鎌 (第252図) 一木式が多いが、84のように刃を組み合わせるものもある。形態はやや特異で、一木式のものの刃部に相当する部分に溝を入れ、木製の別材が装着されていた。刃をはめ込む溝は柄の後面を貫く孔となって続いている。

種 (第253図) 85は欠失する部分が多く、本来の形状を捉えにくい。滑板に相当する接地面は湾曲しており、断面図に示すように隆起の輪線がやや傾いているなど、穂あるいは鋤の特徴を示している。残存長52cmという量から種と認識したものである。

整杵 (第253図) 本遺跡における杵、臼の出土数は少ない。86は完存しないが、整杵の搗部である。先端はよく磨耗している。

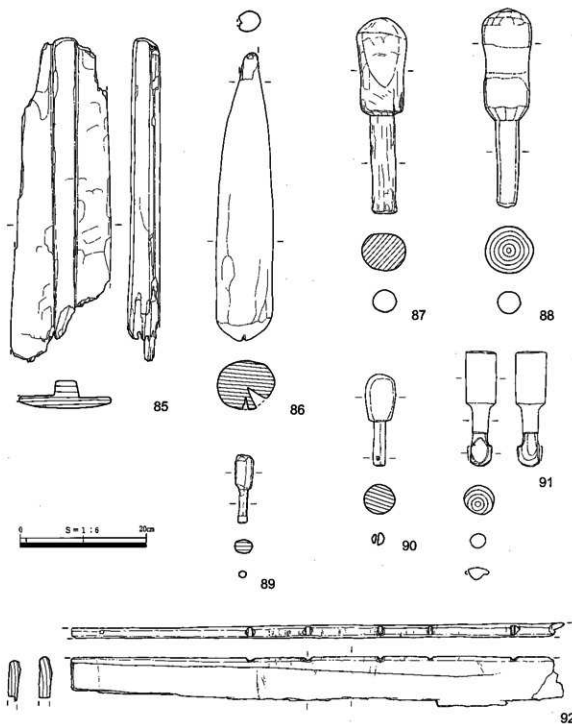
横槌 (第253図) 87～91に掲げた。大きさにばらつきがあり、89のような微小のものは横槌としていいか疑問が残る。本遺跡での横槌の一般的な姿としては87や88に示した大きさ・形状のものが挙げられる。使用の痕跡をとどめるものが多い。91は精巧に作り、握りにも装飾性を持たせている。

編台 (第253図) 92は確証を欠くが、編台の目盛板と想定している。刻みは5ヶ所残っており、間隔は8cm程度と13cm程度との2種が認められる。左端にも浅い刻み状の痕跡があるが、同じものか分からない。



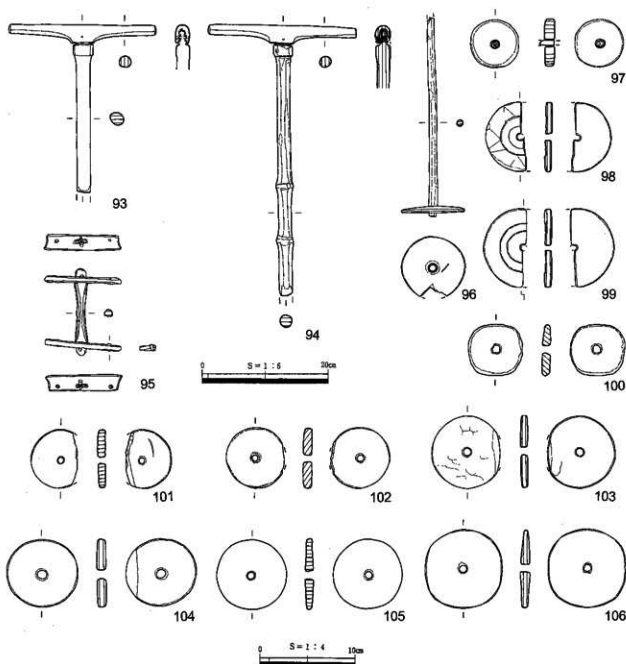
第252図 木器・木鏝

器名番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	寸法	材質	取上番号
74	木杓丁	8区	A層	弥生後期	長12.6、幅5.7、厚1.2		27389
75	木杓丁	4区	BD11	弥生後期初頭～後葉	長(11.7)、幅4.6、厚0.9	ケヤキ	4463
76	木杓丁	4区	BD11	弥生後期初頭～後葉	長17.8、幅5.2、厚1.1	ニレ科(ケヤキ?)	3030
77	木杓丁	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長16.5、幅6.1、厚1.1		33075
78	木杓丁	8区	SD55	弥生後期初頭～後葉	長16.5、幅5.0、厚1.1		34205
79	木杓丁	8区	C層	神奈下葬	長17.7、幅5.8、厚1.1		27004
80	木杓丁	8区	D層	弥生中期～後期	長(17.2)、幅5.7、厚1.2		54847
81	木鏝	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(22.2)、刃部長10.5、柄径3.8x2.1		30371
82	木鏝	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(16.7)、刃部長10.7、柄径2.8x1.8		34500
83	木鏝	8区	A層	弥生後期	長30.1、刃部長11.4、柄径3.8x2.5		30281
84	木鏝	4区	BA4～B	弥生後期初頭～後葉	長(17.4)、刃部長(9.3)、幅0.6、柄径3.2x2.0	ヤブツバキ	2645



第253図 木器・櫛、竪杵、横杵、編み台

発掘番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法	数量	器種	取上番号
85	櫛	7区	N層	弥生中期中葉	長(52.0)、幅14.9、隆起高2.7			44769
86	竪杵	4区	SA4~6	弥生後期前期~後葉	長(46.4)、胴部径9.2x7.9		コウヤミズキ?	2479
87	横杵	4区	SD11	弥生後期前期~後葉	長51.6、身径7.8x6.9、柄径3.8x3.5		ヤブツバキ	4130
88	横杵	4区	SD11	弥生後期前期~後葉	長32.1、身径7.9x7.5、柄径3.7x3.5		ヤブツバキ	4312
89	横杵	4区	②層相当	弥生後期~古墳初期	長11.0、身径5.0x2.1、柄径1.5x1.2		スギ	4564
90	横杵	8区	SD38	弥生後期前期~後葉	長14.7、身径4.8x4.7、柄径2.0x1.9			30010
91	横杵	7区	J層	弥生中期中葉	長18.3、身径4.8x4.8、柄径2.5x2.4			38526
92	編み台	4区	GA4~6	弥生後期前期~後葉	長78.2、高8.0、厚2.1、踏み間隔8.0~13.0		スギ	3887

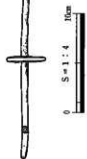


第254図 木器・カセ、紡錘車

標頭番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	寸法	製種	取上番号
93	カセ	7区	I層	弥生中期後葉	長(26.9)、腕木長23.5、幅1.8		42075
94	カセ	7区	SD27	弥生中期後葉	長(42.5)、腕木長23.6、幅1.8		44288
95	カセ	3区	SD20	弥生後期前期～後葉	長13.6、腕木長12.2、幅2.4	スギ	21440
96	紡錘車	8区	SD38	弥生後期前期～後葉	径6.6、厚0.7、筋葉長(21.0)、径1.0		27840
97	紡錘車	7区	SD27	弥生中期後葉	径5.0x4.9、厚1.1、筋葉長(1.8)、径1.2x0.9		43408
98	紡錘車	7区	I層	弥生中期後葉	径元径7.3、厚0.8～0.7、孔径0.7		42031
99	紡錘車	7区	I層	弥生中期後葉	径元径6.4、厚0.8、孔径0.8		42142
100	紡錘車	7区	L層	弥生中期後葉	径5.7x5.4、厚0.8、孔径0.8		44847
101	紡錘車	7区	K層	弥生中期後葉	径元径6.2、厚0.8、孔径0.8		36715
102	紡錘車	7区	J層	弥生中期後葉	径元径6.4、厚0.9、孔径0.7		36737
103	紡錘車	7区	J層	弥生中期後葉	径元径7.6、厚0.7、孔径0.8		36827
104	紡錘車	7区	I層	弥生中期後葉	径7.4x7.2、厚0.9、孔径1.0		42582
105	紡錘車	7区	SD27	弥生中期後葉	径7.4x7.3、厚0.8、孔径0.8		42301
106	紡錘車	7区	SD27	弥生中期後葉	径8.2x8.1、厚1.0、孔径0.8		42200

紡織具

カセ(第254図) 図示したものとすべ支え木の先端を腕木に差し込んだ「支え木さしこみ式」である。93、94は支え木が腕木を貫通せず、目釘を打ち込んで固定する。腕木の長さとはともに23cmである。



第254図
鬼虎川遺跡の紡錘
(註6) 文献より
一部改変のうえ再
トレース)

95も同様の結合法をとるものであるが、目釘が腕木に差し込まれず、腕木を押しえつける形で固定している。93、94の腕木が円形の断面を示すのに対し、本例は板状であり、端部に穿たれた一対の小孔の存在も相違点である。また何より支え木長13.6cm、腕木長12.2cmと、著しく小さい。『木器集成』に示される例の半分程度の大きさである。95は支え木と腕木を工字型に組み合わせるといった形態はカセそのものであるが、別のものである可能性を考えたほうがいいかもしれない。

紡錘車(第254図) 本遺跡で出土した紡錘車は木製のほか土器片利用のものが多数あり、特異なものとして鯨骨製が若干見られる。紡錘は紡錘車と紡茎からなる。ほとんどが紡錘車単独の例であるが、紡茎付のものが2例認められた。

96は紡茎の上端を欠失するが、紡錘車との結合法などをよく示す資料である。紡茎の長さは残存値で21.0cmと、石製紡錘車付の大府元鬼虎川遺跡例(第255図)⁽⁶⁾と同じかやや長いくらいであろう。ただし決定的な違いがある。紡錘車の位置である。鬼虎川例では紡茎のほ

は中ほどに装着されているのに対し、青谷上寺地例は紡茎の下端に紡錘車が位置する。紡茎の下端1.0cmは径0.7cmと本体に比べ細く作り出され、そこに紡錘車が装着されている。したがって本来の位置から動いているわけではない。紡茎の下端は欠損しているわけではないので、本例は紡茎の先端に紡錘車を装着して用いたことを示している。紡錘の復元図や絵画資料では鬼虎川例の形が示されている。確かに撚りがかった糸を巻き取るには手に持つ部分以外にスペースが必要で、鬼虎川例は紡織具として矛盾がない。96に示した資料も下端に別

に紡茎を取り付ければ紡織具とみれなくもないが、そのような使用法が証明できない以上、推測の域を出ない。97も紡茎の一部が残っている。紡錘車の周縁にはコンパスでひいたような線があり、形を作り出す前にあらかじめ予定線をひくことがあったことを示している。紡錘車98、99は片面を3段に作り、98はさらに鋸歯文を巡らす。紡錘車は基本的に広葉樹を用いているが、100は針葉樹製である。ややいびつな形から紡錘車ではない可能性もある。

ここでは説明の都合上「紡茎」「紡錘車」という用語を用いたが、96の例もあり別の機能を考える必要がある。山崎頼人が指摘するように⁽⁷⁾、紡錘車がすべて紡織具とするには慎重な姿勢が必要である。

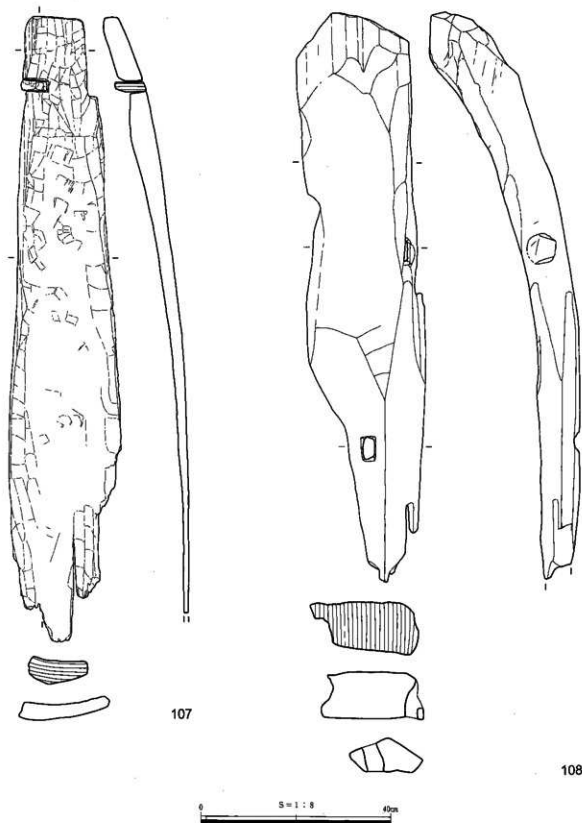
漁具

船(第256図) 『木器集成』では船は運搬具に分類されている。船の用途は多様であつたらうし、青谷上寺地遺跡では立地のうえからも海上交易も考えられるので、運搬具としてもいいのであるが、多量の漁具の存在を重視して漁具として報告したい。

船と思われる断片はいくらか出土している。中には護岸用の板材に転用されていた例もある(SA1及びSD24)⁽⁸⁾。107、108は大型の破片を図化したものだが、全体の形状や大きさを窺い知ることはできない。SA1に転用されていた丸木舟の破片は長さは旧状をほぼ表していると思われるが、4.7mを測る。船の破片の中で明確に準備造船といえるものは今のところ確認していない。

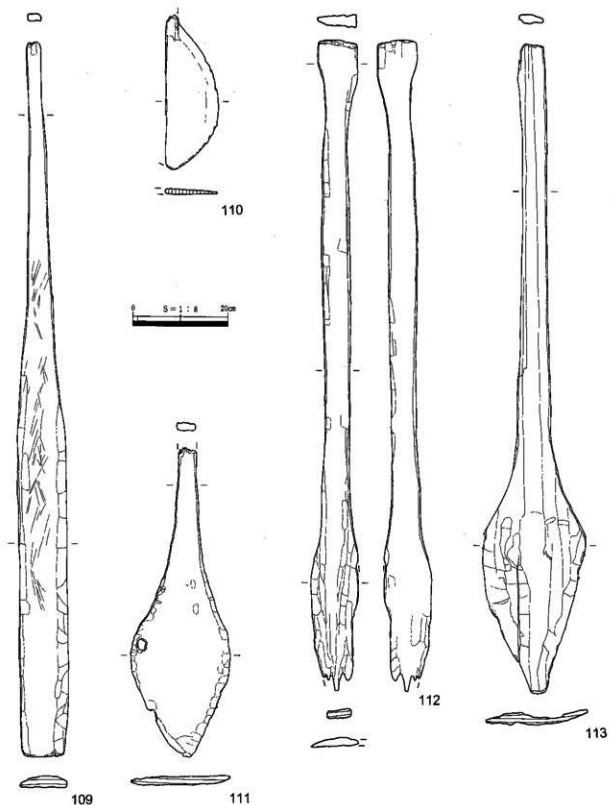
櫂(第257、258図) 水かきに適したとみられる身と長めの柄をもつものを櫂として認識した。ただし形態的に農具の一木鋤や掘り棒との区別がつきにくい場合もあり、樹種も『木器集成』によれば針葉樹・広葉樹ともあるようで決め手にはならない。一木鋤とした第248図59も柄の頭部がなければ櫂と分類してしまいそうなのである。

第257図は弥生後期の資料である。109、112は身が板状となるもので、112は柄の頭部を幅広く作る。110、111、



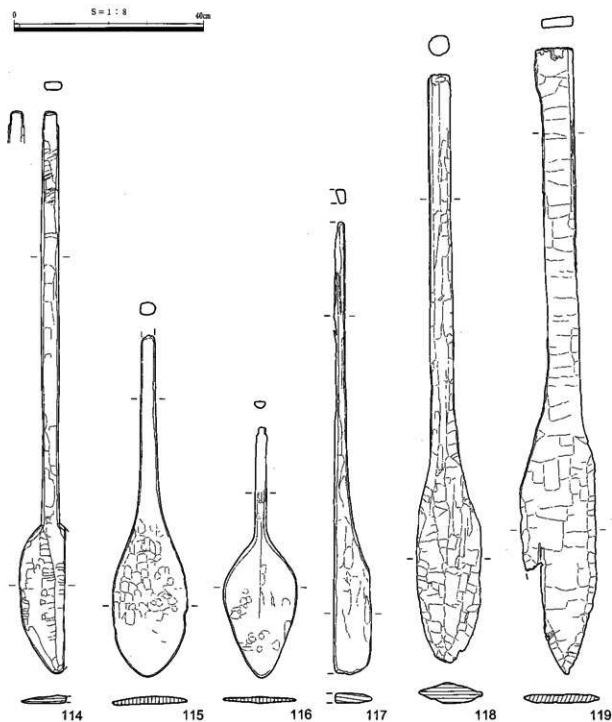
第256図 木器・舟

標記番号	器種	調査区	溝段・層位	時期	法	量	材質	取上番号
107	舟	4区	SA4~6	弥生後期初段~後段	長(131.0)、幅(20.3)、高18.0		スギ	4533
108	舟	4区		弥生後期上・古墳	長(120.4)、幅(25.0)、高30.4			892



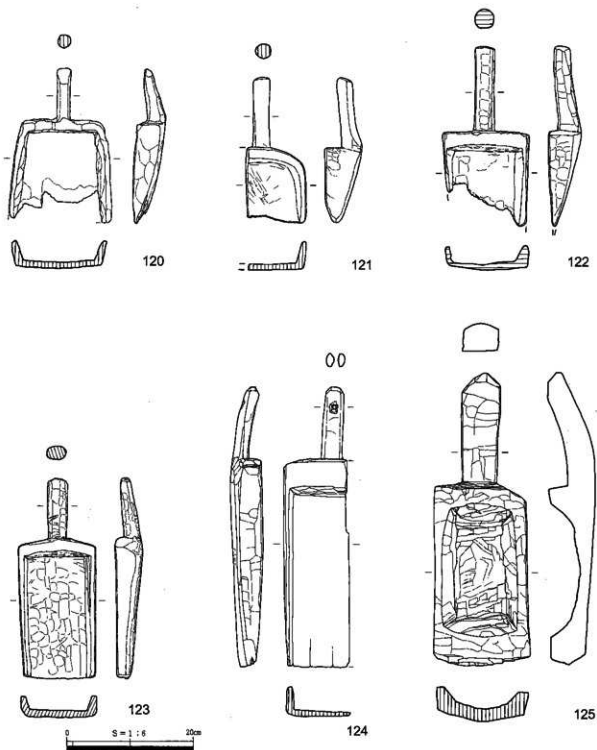
第257圖 木器・櫛(1)

標本番号	種類	調査区	遺構・層位	時期	法量	樹種	取上番号
109	櫛	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	長151.0, 身径10.1x2.5, 柄径2.9x1.9		2518
110	櫛	3区	SD20	弥生後期初頭～後葉	長(32.8), 身径(11.2)x1.2		21560
111	櫛	8区	A層	弥生後期	長(55.5), 身径21.1x1.8, 柄径4.0x1.7		27376
112	櫛	4区	BD11	弥生後期初頭～後葉	長137.8, 身径10.1x1.8, 柄径5.2x1.7	スギ	4294
113	櫛	8区	BD38	弥生後期初頭～後葉	長137.5, 身径21.7x2.7, 柄径5.2x1.1		33487



第258圖 木器・櫛(2)

器物番号	器種	産出区	遺構・層位	種類	法量	相模	取上番号
114	櫛	7区	K層	弥生中期後葉	長119.8、身径(9.6)×1.7、柄径3.8×1.9		36710
115	櫛	7区	N層	弥生中期中葉	長(72.5)、身径15.8×1.7、柄径3.1×2.8		40867
116	櫛	7区	J層	弥生中期後葉	長53.0、身径15.3×1.3、柄径2.2×1.4		36638
117	櫛	7区	不明	不明	長125.5、身径(7.9)×2.0、柄径3.6×(2.1)		37647
118	櫛	7区	J層	弥生中期後葉	長(124.6)、身径13.5×4.4、柄径4.4×4.3		36639
119	櫛	7区	N層	弥生中期中葉	長132.4、身径15.9×1.8、柄径6.5×2.0		42478



第259図 木器・アカトリ

標本番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法 量	器種	取上番号
120	アカトリ	4区	SD11	弥生後期初葉～後葉	長(24.6)、幅(16.3)、身深3.4、柄径2.3		2616
121	アカトリ	8区	SD69	弥生後期末～古墳初期	長23.2、幅(9.4)、身深3.0、柄径2.4		27476
122	アカトリ	8区	SD69	弥生後期末～古墳初期	長(28.9)、幅(13.3)、身深3.1、柄径3.5		28410
123	アカトリ	7区	SD27	弥生中期後葉	長31.9、幅(11.9)、身深2.4、柄径3.1		43475
124	アカトリ	7区	J層	弥生中期後葉	長44.3、幅(10.2)、身深2.6、柄径3.2		36457
125	アカトリ未製品	7区	I層	弥生中期後葉	長46.0、幅(15.2)、身深3.4、柄径5.8		40984

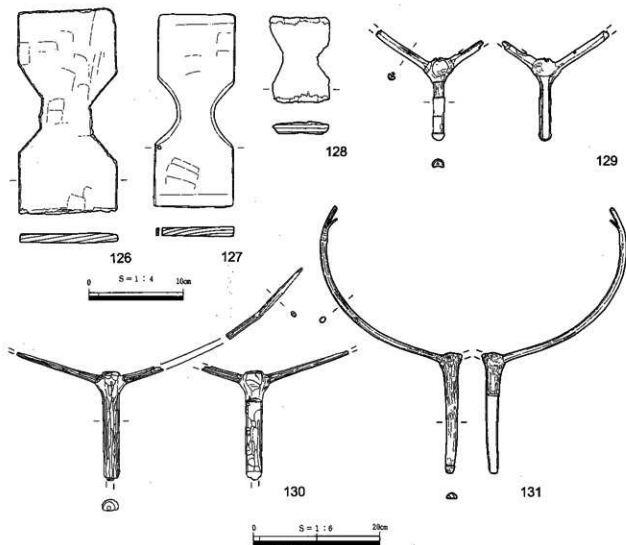
113は身が紡錘形を呈する。110は59の一木簡の身とよく似ているが、權としてここに掲げておく。

114～116は弥生中期のものである。いずれも紡錘形の身をもつ。116は柄の頭部を細く作り出している。柄の上半裏面は平坦面をなしており、曲柄に装着される平縁の可能性がある。權であるならば柄を組み合わせていたことになる。114も柄の頭部を細く作り出しているようである。

117は時期不明で、身は板状となる。118、119は未製品であろう。

アカ取り (第259図) いずれも一木削り抜きで、外底面の延長で柄が延び、上端面との間に段差をもつI類である。124は柄に鈕孔とおぼしき穿孔が認められる。

125は未製品と考えている。全体の形状をほぼ作り出し、身を削り抜いている途中のものである。同様のものが亀井遺跡で出土している⁽⁹⁾。長さ47cm、復元最大幅17～18cmを測り、125とほぼ同じ大きさである。報告では「取手付容器の未製品」とされている。出雲市姫原西遺跡では「取手付の長方形盤」と報告されている資料が



第260図 木器・浮子・タモ杵

検出番号	器種	部数区	遺構・遺位	時期	法量	処理	取上番号
126	浮子	7区	A層	弥生中期中期	長21.5、幅10.3、厚1.6		58878
127	浮子	7区	J層	弥生中期後葉	長20.5、幅8.4、厚1.0		36965
128	浮子	7区	H～J層	弥生中期後葉～後期	長9.0、幅5.9、厚1.3		42827
129	タモ杵	7区	I層	弥生中期後葉	長(17.3)、口径1.2、柄幅1.7		36550
130	タモ杵	7区	I層	弥生中期後葉	長(25.2)、柄幅2.5		36420
131	タモ杵	8区	A層	弥生後葉	長(42.0)、口径1.0x0.7、柄幅1.6x0.9		28051

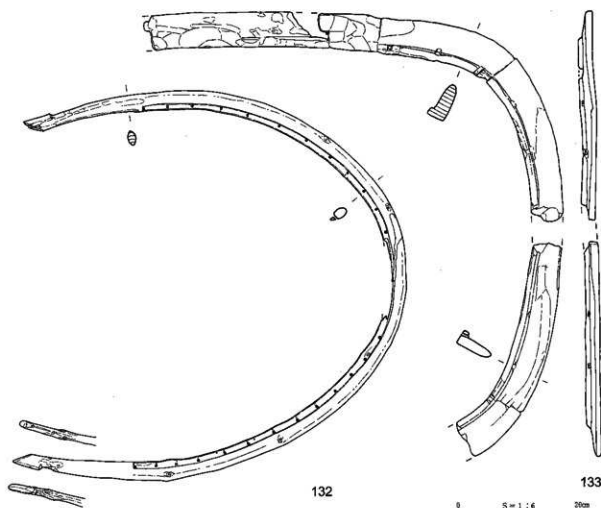
ある⁽¹⁰⁾。1点は成品で、把手付の浅い皿状容器があったことを教えてくれるが、125よりひと回り小さい。把手（アカ取りでは柄）の長さ・形状も異なり、青谷上寺地例はアカ取りの未製品と考えておきたい。

浮子（第260図） 126～128を浮子として掲げる。確証はないのであるが、「木器集成」にある農具としての木錘を板材で作ったものとみれば、形態が似ている。

タモ杵（第260図） 枝分かれした木を用い、枝を杵としたものである。「木器集成」で網杵の第1類とされている。いずれも別材の柄を組み合わせたと思われ、柄の裏面を見ると129は浅い溝を掘り込んでおり、130、131は平坦面を削り出している。129はさらに表面に緊縛用の溝を2ヶ所設ける。

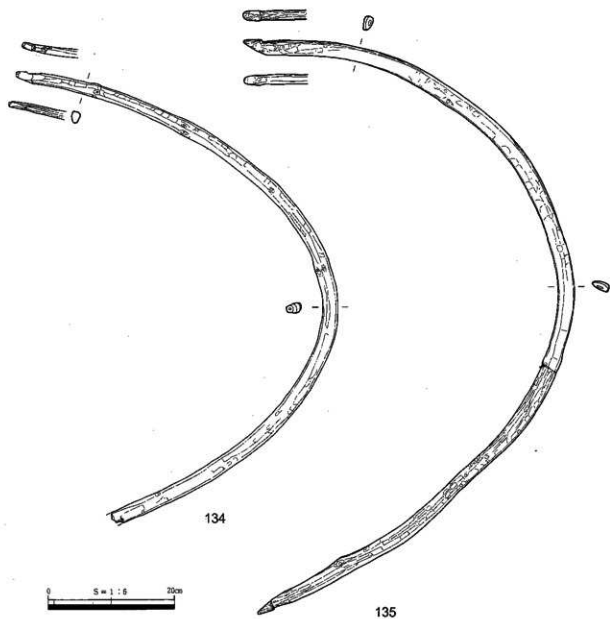
網杵（第261、262図） 網杵第2類とされたものである。

132は両端からそれぞれ19cmのところから幅1.0cm程度の段を作り出し、3.5～5.5cm間隔で網を留めるためと思われる孔を穿つ。両端は緊縛用の紐かけが扶られる。133も孔を穿つたものであるが、杵の幅が5cmと他のものの倍ほどある。さらに異なるのは穴を穿つ部分を段状に削り出すのではなく、杵本体より高く設けていること

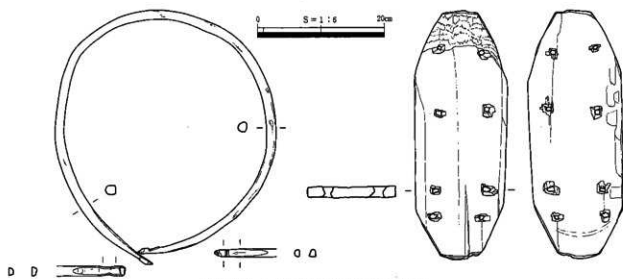


第261図 木器・網杵（1）

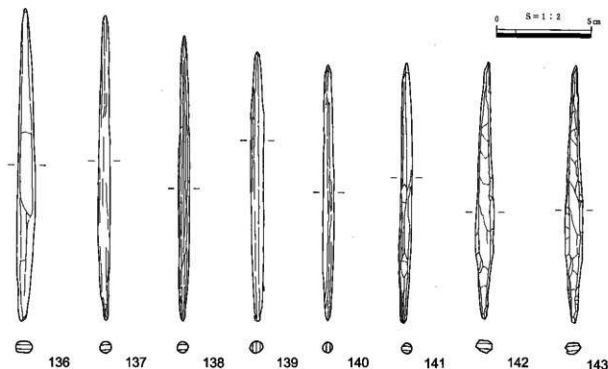
発掘番号	種類	地区	遺構・層位	時期	注	樹種	取上番号
132	網杵	7区	L層	弥生中期後葉	長64.0、幅04.0、杵径2.4x1.4、孔径0.2～0.3、孔間隔3.5～5.5		42333
133	網杵	4区	SD11	弥生後期初期～後葉	長(85.4)、幅(72.5)、杵径5.0x3.0、孔径0.7x0.5、マメ科(ユクノキ)孔間隔4.5～8.0		4263
134	網杵	7区	J層	弥生中期後葉	長51.3、幅(72.1)、杵径2.4x1.8		36883
135	網杵	7区	K層	弥生中期後葉	長52.0、幅11.9、杵径2.7x1.4		42474



第262図 木器・網杵 (2)



第263図 森浜遺跡の輪型田下駄と輪
(註 (11) 文献より一部改変のうえ再トレース)



第264図 木器・ヤス

博物館号	器種	調査区	遺跡・層位	時期	長さ	断面	取上番号
136	ヤス	7区	N層	弥生中期中葉	長16.6, 厚0.8		42005
137	ヤス	7区	J層	弥生中期後葉	長16.2, 厚0.8		38631
138	ヤス	7区	J層	弥生中期後葉	長15.1, 厚0.8		38626
139	ヤス	7区	I層	弥生中期後葉	長14.2, 厚0.6		38618
140	ヤス	7区	J層	弥生中期後葉	長13.8, 厚0.6		38948
141	ヤス	7区	J層	弥生中期後葉	長13.8, 厚0.6		38690
142	ヤス	7区	J層	弥生中期後葉	長13.6, 厚0.7		42419
143	ヤス	7区	N層	弥生中期中葉	長13.7, 厚0.6		38848

である。両端が欠失しているため紐かけの痕りがあるかどうか確認できず、網杵第2類としていいか疑問がないではないが、杵状の本体と網を留めるための孔が並ぶという共通点を重視して、ここに含める。孔の間隔は6.5～9.0cmである。

第262図も網杵第2類である。この2点は孔を穿たないものであるが、それを除けば132と同じである。

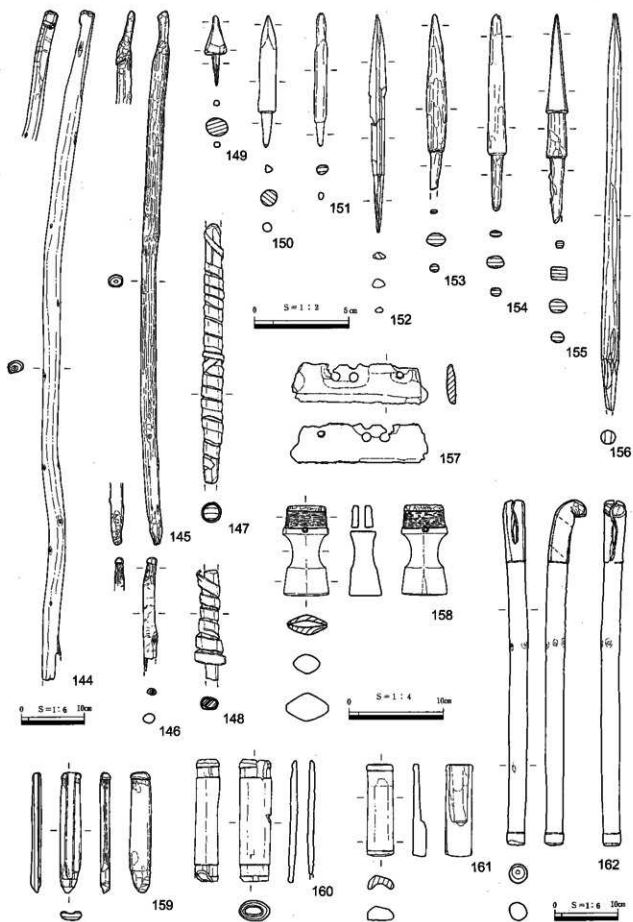
網杵第2類とされた杵木のみからなるタイプが、輪探型田下駄の輪と判別しにくいことは『木器集成』ですでに指摘されている。事実、滋賀県森浜遺跡で出土した輪は形態的には網杵と区別できない(第263図)¹⁰⁾。両端に紐かけの痕りが見られ、丸くたわめた形態はまったく同じである。今回は輪探型田下駄の足板を認識できていないが、網を留める孔をもつものとはともかく、第262図のような網杵は田下駄の輪の可能性も残す。

ヤス(第264図) 刺突の機能が想定されるものを掲げた。『木器集成』にもあるように、茎のあるものは織とされている。木針に分類された形態のものは確認していない。

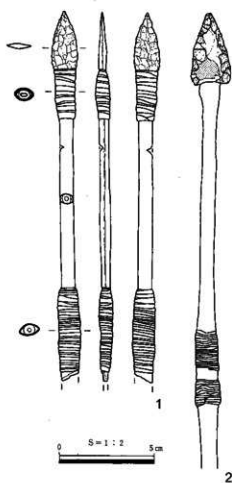
表面を滑らかに仕上げたものと、加工痕を残すものがあり、142、143は未製品の可能性がある。第7節にみるように骨角製のヤスは多量に出土しているが、木製は少ない。

武器

弓(第265図) 網杵や輪探型田下駄の輪と区別しがたいところもあるが、端部(弓とすれば頸部分)に挟りと面取りによる尖りが無いものを弓とした。本体の断面形態も網杵が楕円形を呈するのに対し、弓と認定したも



第265圖 木器・武器



第266図 鬼虎川遺跡の矢柄
(註(6)、(12) b文獻より一部改変のうえ再トレース)

のは丸いという相違点もある。

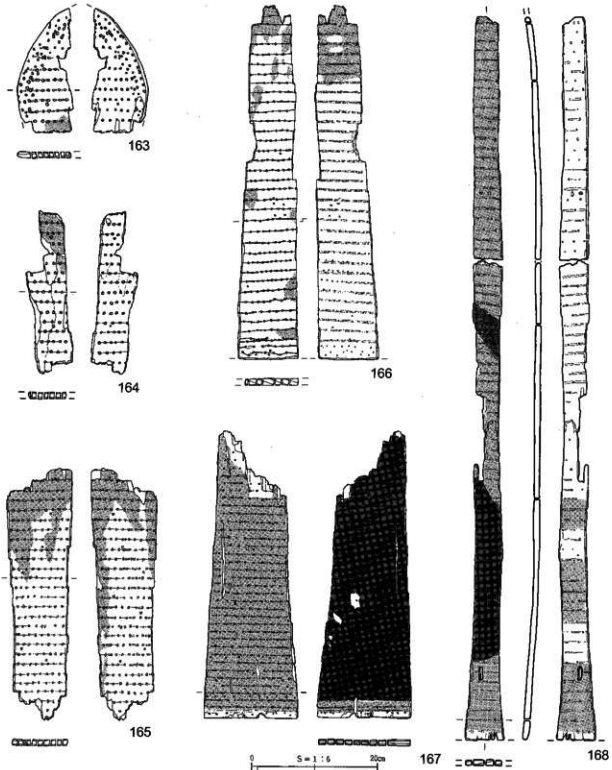
144は残存長107cmを測るものである。頭部分は前面に弦をかける袈りを入れ、後面は14.2cmの範囲で平坦面を作り出す。本体は大きく加工を加えるわけではなく、木のそのままを使っているようだ。145は完存するもので、長さ85.8cmを測る。頭部分は上下端とも5.4cmの長さに細く削りだされている。弓本体には加工痕が顕著である。146は端部のみ残っており、弦をかける袈りが入れられている。

矢柄(第265図) 細い棒材に樹皮かと思われるものを巻きつけたものである。2点図示したが、いずれも一部残るのみである。比較できる資料としては鬼虎川遺跡出土の石鏃を装着した矢柄がある(第266図)⁽¹²⁾。報告書に従って記載すれば、1は残存長19.5cm、径0.7cmを測る。樹皮の巻きつけ範囲は石鏃を矢柄ではさんだ部分の2.5cmと矢柄の中途の4.5cmが確認されている。2は長さ99cm、径1.1を測る。樹皮の巻きつけは3ヶ所に残り、図上で計測すると約4.0cmの範囲に認められる。青谷上寺地例は147が残存長13.8cm、148が同じく5.8cmで、両者ともほぼ全体に樹皮が巻かれているので、鬼虎川例より広い範囲に巻かれている。矢柄の径は147が1.1cm、148が0.7cmと鬼虎川例と同じである。

木鏃(第265図) 149は杵状鏃か。身が極めて短く、鏃としては特異な形態である。150は三稜鏃である。骨角器に類品がある(第365図221)。151~156は細身鏃で、156はヤスに含めるべきものかもしれないが、茎を意識的に作り出しているので鏃と理解した。155は身の断面が四角形であり【木器集成】に従えば三稜鏃に含めるべきか。

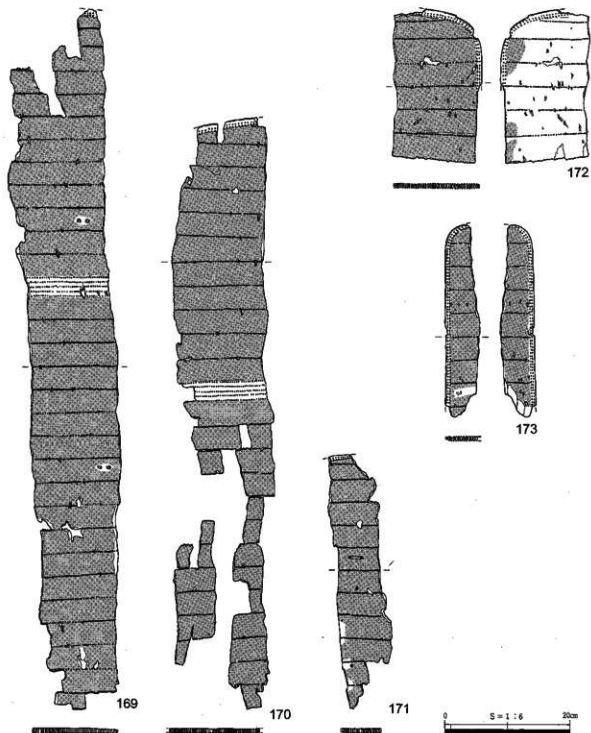
短甲の小札(第265図) 断片であるが、小孔が穿たれ表面に黒漆が塗られており、短甲の小札とした。

発掘番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	長さ	径	重量	取上番号
144	弓	7区	N層	弥生中期中央	長(107.3)、径2.5x1.8			44833
145	弓	7区	L層	弥生中期後葉	長85.8、径2.2x2.0			42498
146	弓	8区	SD64	弥生前期初葉~後葉	長(18.2)、径1.3x1.5			34818
147	矢柄	8区	SD38	弥生前期初葉~後葉	長(13.0)、径1.1			33026
148	矢柄	8区	SD38	弥生前期初葉~後葉	長(5.8)、径0.7			30486
149	木鏃	8区	SD69	弥生前期末~古墳初葉	長2.7、鏃身径1.2、茎径0.3			29000
150	木鏃	8区	A層	弥生後期	長7.0、鏃身径0.8、茎径0.5			27148
151	木鏃	7区	C層	弥生前期初葉~古墳初葉	長7.0、鏃身径0.8、茎径0.4			37057
152	木鏃	3区	C層	古墳以降	長11.5、鏃身径0.9、茎径0.4		モス属	20054
153	木鏃	8区	SD64	弥生前期初葉~後葉	長(9.2)、鏃身径0.7、茎径0.5			34840
154	木鏃	8区	SD64	弥生前期初葉~後葉	長10.3、鏃身径0.9x0.8、茎径0.5			34741
155	木鏃	8区	A層	弥生後期	長(11.0)、鏃身径0.9、茎径0.7			27348
156	木鏃	7区	J層	弥生中期後葉	長(21.0)、鏃身径0.8、茎径0.6			36990
157	短甲の小札	5区	SK37	弥生中期中央~後葉	長(2.1)、幅(7.2)、厚0.5			9411
158	短甲の小札	8区	F層	弥生中期	長6.5、幅4.8、厚3.0、刺突部長4.0x0.7			34592
159	刀剣器具	4区	SD11	弥生前期初葉~後葉	長(12.8、幅2.2、厚0.8、鍔部長さ?長(11.3)、幅0.7、厚0.2)			4144
160	刀剣器具	7区	SD27	弥生中期後葉	長(12.8、幅3.2、厚2.2、孔径1.8x0.8)			42123
161	刀剣器具	7区	J層	弥生中期後葉	長6.8、幅2.8、厚1.5、鍔部長さ?長6.0、幅2.0、厚0.6			43678
162	戈の柄	8区	SD38	弥生前期初葉~後葉	長55.8、柄径2.8、戈頭部長4.4			28066



第267図 木器・盾(1)

発掘番号	器種	調査区	遺跡・層位	形制	度量	材質	取上番号
163	盾	4区	8D11	弥生後期初頭～後葉	長(19.2)、幅(9.9)、厚0.3、縦孔横間隔1.0、縦間隔1.5	毛茭属	5953
164	盾	4区	8D11	弥生後期初頭～後葉	長(25.8)、幅(7.3)、厚1.0、縦孔横間隔1.0、縦間隔1.5	スズ	5954
165	盾	4区	8D11	弥生後期初頭～後葉	長(40.0)、幅(10.4)、厚1.0、縦孔横間隔0.8～1.2、縦間隔1.5	毛茭属	6094
166	盾	4区	8D11	弥生後期初頭～後葉	長(35.5)、幅(9.7)、厚1.0、縦孔横間隔0.7～1.0、縦間隔1.5	毛茭属	6085
167	盾	8区	8D55	弥生後期初頭～後葉	長(46.4)、幅(14.9)、厚1.0、縦孔横間隔1.0～1.5、縦間隔1.0	毛茭属	34712
168	盾	4区	8A4～6	弥生後期初頭～後葉	長(116.2)、幅(6.2)、厚0.3、縦孔横間隔1.5～2.0、縦間隔1.5、下縁縦孔横間隔2.0	毛茭属	4000



第268図 木器・盾(2)

発掘番号	種類	調査区	遺構・層位	時期	説明	出土番号
169	盾	B区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(113.9)、幅(13.0)、厚(1.0)、縦孔間隔0.3～0.4、 横孔間隔3.7縁芯部厚0.4	33263
170	盾	B区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(95.0)、幅(15.0)、厚(0.9)、縦孔間隔0.3～0.4、横孔間 隔3.7縁芯部厚0.4	33262
171	盾	B区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(41.0)、幅(3.2)、厚(0.9)、縦孔間隔0.3～0.4、縦間隔4.0 縁芯部厚0.7	33246
172	盾	B区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(24.3)、幅(13.8)、厚(0.9)、縦孔間隔0.3～0.4、 横間隔2.7～4.1、縁芯部厚0.3	33264
173	盾	B区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(30.2)、幅(3.2)、厚(0.9)、縦孔間隔0.4、 縦間隔3.6、縁芯部厚0.4	33301

刀剣装具(第265図) 158は短剣の把と思われる。握りの部分はおよそ6cmである。剣を装着するための切り込みは幅4.0cmで、厚みに相当する値は最大で0.7cm、深さは3.1cmである。剣の固定は目釘と緊縛によっている。切り込みの深さからすると目釘は剣の基部ぎりぎりのところに打ち込まれたようである。緊縛部分には非常に細い繊維状のものが残っており、その部分が黒くなっているので緊縛の後固定のためか何かを塗っていたようである。

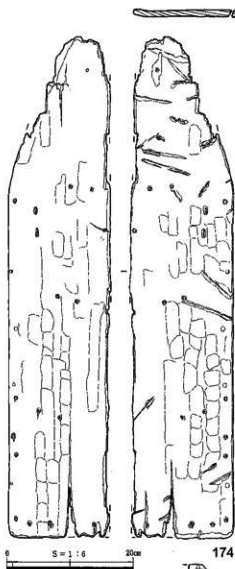
159~161は把か鞘かと思われるものである。161は『木器集成』で剣鞘とされたものである。長さ9.8cm、幅2.8cmを測り、剣を入れるための切り込みの長さ6.0cm、深さ0.6cmである。159は削り込んだ溝が幅0.7cm、深さ0.2cmと小さいため、武器というよりは工具の柄か鞘であるかもしれない。

戈の柄(第265図) 長さ55.5cm、柄の径2.8cmを測る。頭部に戈を装着する孔が穿たれ、孔の幅(戈の茎の幅に相当する)は4.4cmと広い。側面観は頭部が後方に反り返り、身は柄に対して鈍角に取り付く。

戈の柄の類例は少ないながら認められている。鬼虎川遺跡ではサヌカイト製の身を装着した例がある⁹³⁾。全長67cmを測り、側面観はまっすぐとなる。身は柄に対して鋭角に取り付けられている。この前後関係の根拠として握り部の形状が挙げられているが、図面を見ると握り部は欠損しているようで、検討の余地はないであろうか。守山市下之郷遺跡例は頭部を含む上部3分の1をややきつく反り返させたものである⁹⁴⁾。全体に黒漆が塗られていたとされ、復元では身は柄に対して鈍角に取り付く。岡山市南方(済生会)遺跡例は綾杉文で装飾したうえに黒漆を塗ったものである⁹⁵⁾。頭部はきつく反り返り、身の装着部は他の例よりも下位にある。身の装着角度は不明だが、図を見る限り柄に対して鋭角には取り付けられないようである。

盾(第267~272図) 盾はほとんどの場合破片となって出土している。

第267~269図は後期に属するものである。163~166はS D11より出土したもので、163は弧を描く縁辺から盾の上端

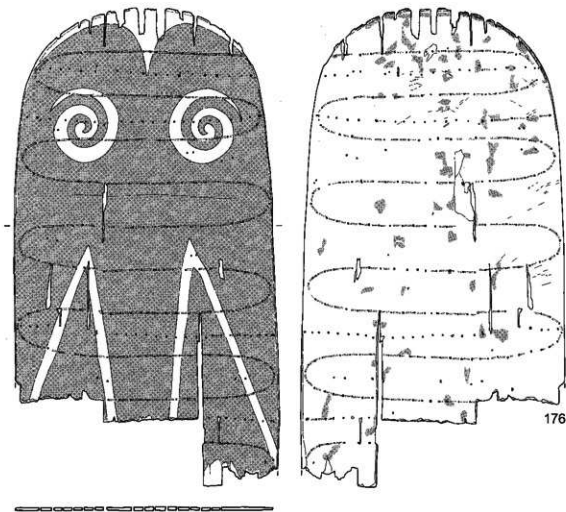


第269図 木器・盾(3)

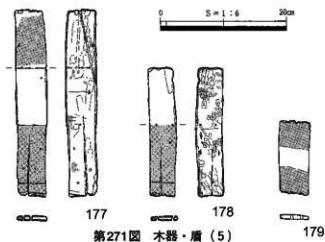
発掘番号	層	調査区	遺構・層位	時期	法	長さ	幅	厚	取上番号
174	盾	4区	SA4~6	弥生後期初頭~後葉	長(60.5)、幅(18.3)、厚1.0			大平	3585
175	盾	8区	SD54	弥生後期初頭~後葉	長(11.8)、幅(3.8)、厚0.9				34537
176	盾	7区	K層	弥生中期後葉	長(77.1)、幅(41.8)、厚0.7、蛇行する筋(孔縦間隔)5~20 縦間隔7.0			毛氈	35718
177	盾	7区	J層	弥生中期後葉	長(29.8)、幅(4.8)、厚0.8、縦孔縦間隔0.2				35009
178	盾	7区	K層	弥生中期後葉	長(20.7)、幅(4.0)、厚0.7、縦孔縦間隔0.2				35691
179	盾	7区	J層	弥生中期後葉	長(11.9)、幅(4.8)、厚0.7				35632
180	盾	7区	SA44		長(137.5)、幅(13.2)、厚0.7、縦孔縦間隔0.0				39125

部と分かる。小孔が多数確認でき、およそ1.0cm間隔で穿たれた小孔の列が縦に1.5cmの間隔で並ぶ。それとは別に縁辺にはやはり1.0cm間隔に並ぶ3列の小孔が認められ、本体と縁辺では孔のあり方に違いがある。鬼虎川の報告ではこの小孔を鈕縦じ痕としているが¹⁶⁰、本遺跡のものを見ても縦じた痕跡があるので頷ける。以下この小孔を縦じ孔と呼ぶ。また縦じた痕跡についてであるが、縦じ孔を結んで縦じたと思われる部分が変色あるいは彩色が及ばないもの（縦じ痕A）と縦じ孔の間に筋状に引っかいたような痕跡を残すもの（縦じ痕B）の2者があり、縦じ方を考えるうえで興味深い。163では片面に縦じ痕Bが見られる。164、165は本体の一部で、縦じ孔の横間隔は1.0cm、縦間隔は1.5cmほどである。縦じ痕はともに両面縦じ痕Aである。166は下端が残る。縦じ痕は一方の面がA、もう一方はBである。縦じ痕Aは下端部の縦じ孔まですべて見られるのに対し、縦じ痕Bは下端部の縦じ孔3列には見られない。163～166の片面または両面には赤色塗彩が残る。167も下端部を残すものである。片面は赤色塗彩、もう片面は黒色塗彩に下端部の一部を赤色塗彩する。両面とも下端1.0cmは彩色されない。赤色塗彩される面の縦じ痕はA、反対側は筋状に引っかいたような跡があるとともに変色しているAB混合である。168は上部を欠きながらも残存長116.6cmを測るものである。彩色は赤と黒の塗りわけがあり、文様を描いていた可能性がある。縦じ痕Aである。

第268図にはSD38出土のものを掲げた。169は残存長113.9cmを測る。彩色のない上部の一部が残っており、上下が確定できる。縦じ孔の間隔はSD11のものと異なり、横間隔は0.4cm程度と狭く、縦間隔はおおよそ4.0cm



第270図 木器・盾(4)



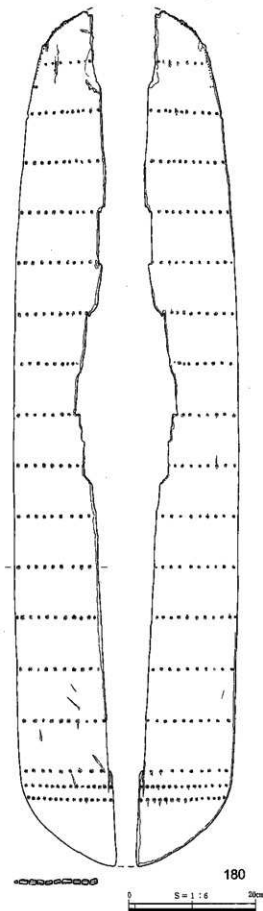
第271図 木器・盾 (5)

と広い。縦じ痕Aである。上半部に3.0cmの幅で彩色されな
いところがあり、縦じ孔の縦間隔も0.7cm程度と狭く、何か
を縦じ合わせていたものか。彩色は表面に赤色塗彩され、裏
面は塗らない。170は169と同一個体の可能性がある。171も
似たものであるが、169、170に比べて縦じ孔の縦間隔がやや
狭い。172、173は上部部から側縁部にかけて残る。169～171
にも認められることであるが、縁辺に1.0cm弱の幅で彩色さ
れない部分が廻り、何かを縦じ合わせていたものか。172は
169、170と同一個体の可能性がある。173は表裏両面赤色塗
彩される点が異なる。

第269図は彩色されていないものである。174は縁辺のカー
ブの具合からして上部部から側縁部が残ったものと思われる。
カーブのあり方は172、173より緩やかで、163に近い。縦じ
孔は不規則にあげられており、彩色盾が規則正しくあげられ
るのは対照的である。器体には鋭い刃物キズのようなもの
が表面にのみ多数認められる。表面をまっすぐ立てた場合で
キズの方角を見ると、斜め上8ヶ所、やや斜め上1ヶ所、横
8ヶ所、斜め下1ヶ所、やや斜め下6ヶ所となる。これが盾
であれば、まさに実戦で用いられたかのようなあり方を示す
が、縦じ孔の不規則さや使用樹種が盾に一般的に用いられる
モミではなくスギであることから、器種認定には検討を加え
る必要がある。175も上部部の一部と考えられる。残ってい
る範囲で縦じ孔が1.5cmの横間隔で見られ、縦じ痕Bが4列
確認できる。表面には文様と思われる陰刻があり、全体が残
っていないため定かでないが、渦文状のものか。

第270～272図は中期の盾である。

176は類例のないものである。両側縁上に向かい少しずつ
すばまり、上縁部は弧を描く。下部は欠失しており、形状は
不明で本来の長さも分からない。表面には上縁部に沿ってT
字状に、上部に1対の渦文を、下部に1対の三角文をそれぞれ



第272図 木器・盾 (6)

れあらかじめ浅く彫り込んでおき、それ以外の部分を赤彩することで文様として目立たせている。縦じ孔の列は蛇行するものとまっすぐなもの2種がある。前者は縦じ痕Aが明瞭で、縦間隔はすべて7.0cmと規則正しい。まっすぐなものは上部に縦間隔7.5cmで2列、下部に縦間隔13.5cmで2列見られる。下部の2列の間に3孔ほど方向に穿たれており、これを含め3列とすれば、それぞれの縦間隔は7.0cm、6.5cmである。縦じ痕Aであるが、明瞭ではない。これらとは別に上縁部には微細な孔が見られる。この孔は厚さも0.7cmと薄く、例のない装飾性からして、実戦用の武器とはみながたいように思われる。

第271図は一部のみ残るものである。すべて表面に部分的な赤色塗彩が見られ、縦じ孔の縦間隔は177、178はともに9.2cmで、179は11.0cmとやや広いものの、同一個体の可能性がある。

180は半分程度残っている。彩色はなく、上下両端とも弧を描く。1.0～1.5cmの横間隔で並ぶ縦じ孔が17列あり、下端の2列を除き縦間隔8.0cmと一定である。縦じ痕は認められない。上縁部には径の小さな縦じ孔が見られ、これをもって上下を決定した。

服飾具

櫛(第273図) 3点図示した。いずれも刻歯式擬櫛である。181はほぼ完存し、9本歯を見る。頭部は装飾性にとみ、片面には流水文が施される。182は対照的に装飾がない。183は歯のみ残るものである。181、182の歯はそれぞれ独立しきっていないが、本例は細く長い歯を根元まで作り出しており、想像をたくましくすれば歯が少なく、横幅のそう広くない櫛であったのだろう。

木屨(第273図) 国造調査区に続いて、本遺跡2例目である。左右非対称の舟形を呈し、裏面に3条の溝を彫り込むことにより歯を作り出している。側面の立ち上がりには4孔2対の紐孔とおほしきものを認める。内底面長は21.0cmを測る。

弥生時代のものとしては本遺跡以外に、姫原西遺跡⁽⁹⁾、福岡市那珂久遺跡⁽¹⁰⁾、同拾六町ツイジ遺跡⁽¹¹⁾、佐賀県吉野ヶ里遺跡⁽¹²⁾で知られている⁽¹³⁾。姫原西例は側面の残りが悪く、全体の形状をつかみにくいが、踵部に対する先端部の広がり他の例より大きい。紐孔と思われるものが底面に穿たれているのも特異である。内底面の法量記載のある那珂久平例、吉野ヶ里例で見ると、それぞれ22.5cm、23.3cmを測り、本遺跡とおおむね同じといえる。これらの時期は前期後半に属する拾六町ツイジ例を除いて、すべて後期のものである。

弥生時代の木屨の検出例が上記6例しかないことは、履物を履く習慣が一般的でなかったかのようであるが、木製の履物が実用であったかどうかを含め検討する必要がある。今のところ木屨が知られているのが北部九州と山陰のみであることは注意しておく点であろう。

衣笠(第274～277図) 衣笠については浅間俊夫の論考があり、『木器集成』以後も再検討がなされているので⁽¹⁴⁾形式分類はそれにならう。

185～193は、幹を軸木とし、放射状に張り出した枝を腕木とするもので、軸受孔が貫通しないI類である。腕木の先端が残るものは少なく、185が挟りをもたず、193が挟りをもつのを認めるに過ぎない。腕木は4本を基本とし、5本(185)、6本(188)が存在する。軸木の頭部は短く尖らすものが多く、191のように加工が頭部先端のみにとどまり、かつ腕木よりも下に軸木が延びるものは例外といっている。I類は軸木に他の部材を装着しうる加工を見出しにくく、本来衣笠が各部材を組み合わせて用いられたと考えられるだけに、復元が困難である。浅間も広義の衣笠(浅間は「壺状木製品」とする)と呼んだうえで、「構造上復元しにくく、果たして壺であるかという問題は解決できていない」と述べる。

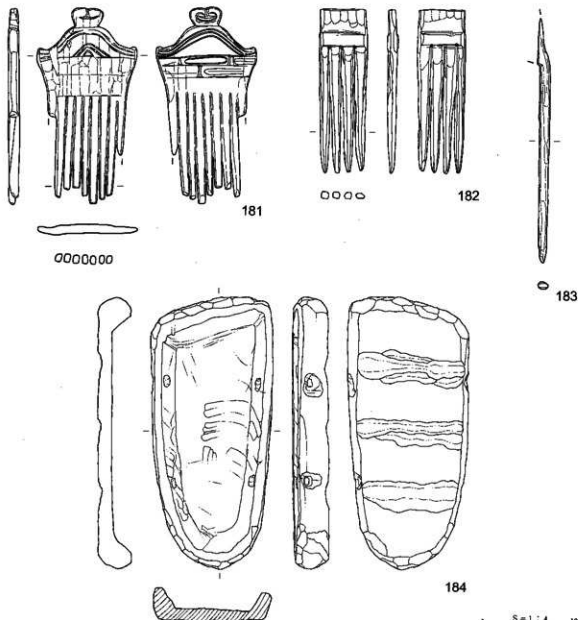
194～196はV類とされた軸木を半載するタイプである。図示した3点はいずれも腕木が1～2本であるが、このほかに滋賀県大中の湖南遺跡例(註(22)b文献の図3の12)と同じものが複数例出土しており、他遺跡の例も合わせ、腕木は3本が基本であったようだ。浅間が示した例は軸木の頭部を有頭状に加工したものがほとんどで、腕木の先端は尖らせるとしているが、本遺跡出土の図示した3点を見ると、I類との違いは軸木を半載する以上には認められない。軸木を半載するタイプには機能を異にする2者を含んでいるように思われる。

197はⅥ類とされたものである。軸木の頭部を有頭状に加工し、鉤状となる2本の腕木をもつ。

浅岡は7つに型式分類したものを多枝付木製品と総称し、広く衣笠と呼ぶものとしてそれ以外のものを分けている。ここで記述したⅤ類、Ⅵ類は後者にあたるうえ、前者に含まれるⅠ類も衣笠であるとの確証がないことはすでに述べられている。本遺跡の衣笠も服飾具と認定するにはさらなる検討が必要である。

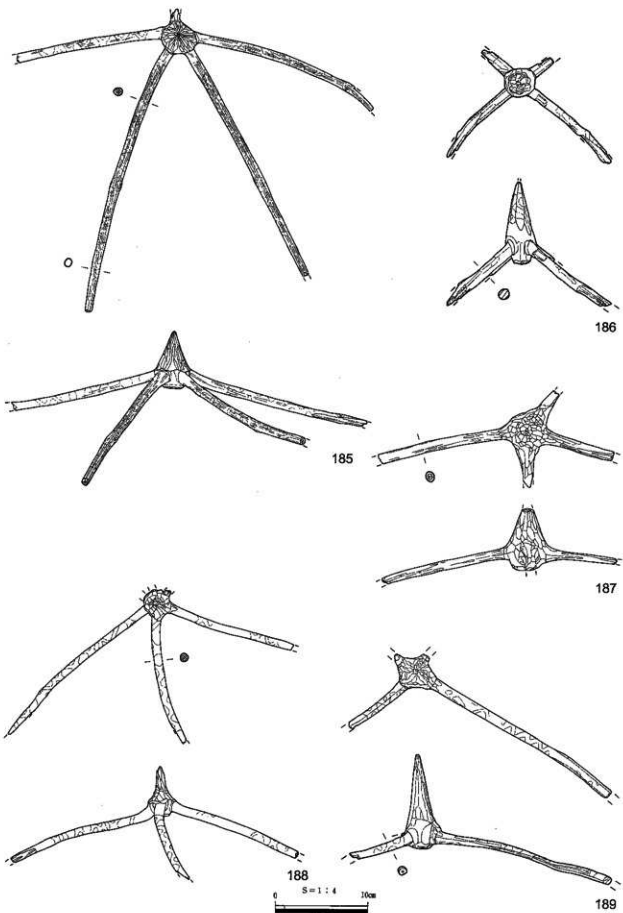
浅岡の示した衣笠の復元図⁽²²⁾(第277図)にみる鏡板は、その候補が挙げられている(註(22) b 文献の図3の22~24)。これらは古墳中期以降のものである。本遺跡においてもその候補となりうるものが出土している⁽²³⁾。

198、199がそれで、径8.5cm、9.7cmの円盤形をなし、放射状に延びる8本の溝が設けられている。198にはそこに「受骨」、「小骨」に相当する別材の一部が残っており、8本の溝のうち2本には目釘孔と思われるものを認

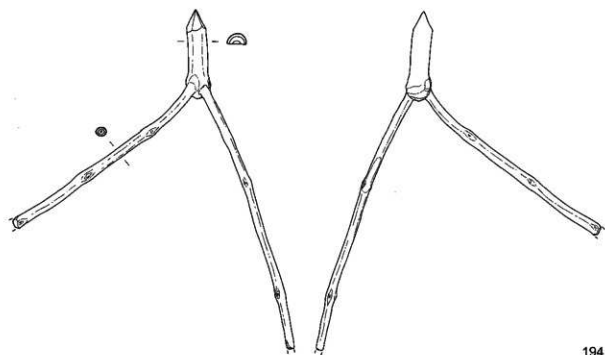
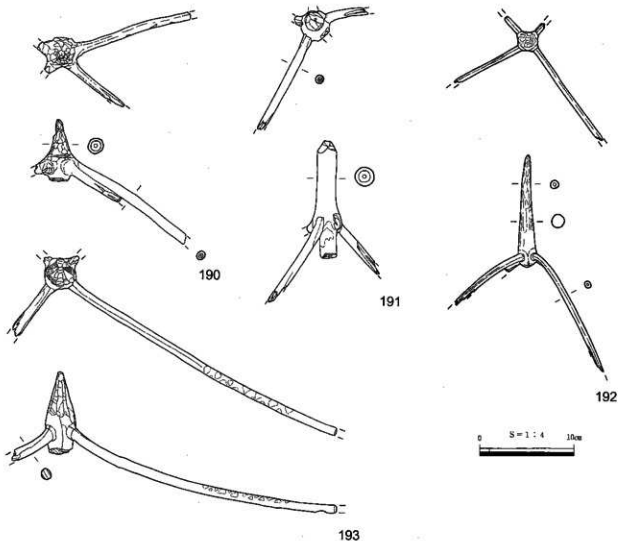


第273図 木器・縦櫛、木履

発掘番号	部材	部材区	遺跡・層位	時期	法量	樹種	取上番号
181	縦櫛	4区	SD11	弥生後期初段~後葉	長10.3、幅5.2、厚0.5、櫛歯長5.7、径0.4		4373
182	縦櫛	8区	SD54	弥生後期初段~後葉	長8.6、幅2.6、厚0.6、櫛歯長6.5、径0.4		34824
183	縦櫛	8区	SD38	弥生後期初段~後葉	長(12.9)、櫛歯長10.4、径0.6		30454
184	木履	3区	SD20	弥生後期初段~後葉	長26.8、幅12.9、高3.8、内底面長21.0	スギ	20078



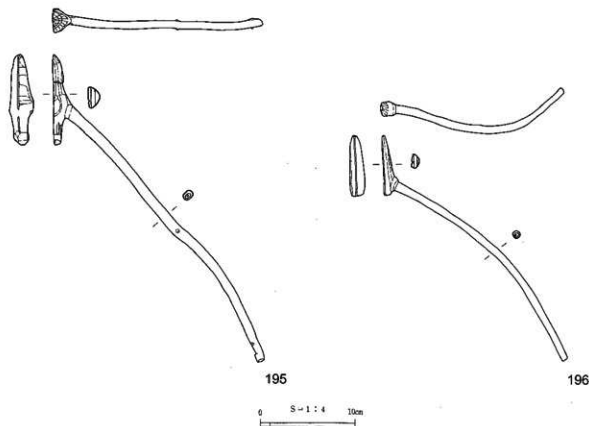
第274図 木器・衣笠(1)



第275圖 木器・衣笠 (2)

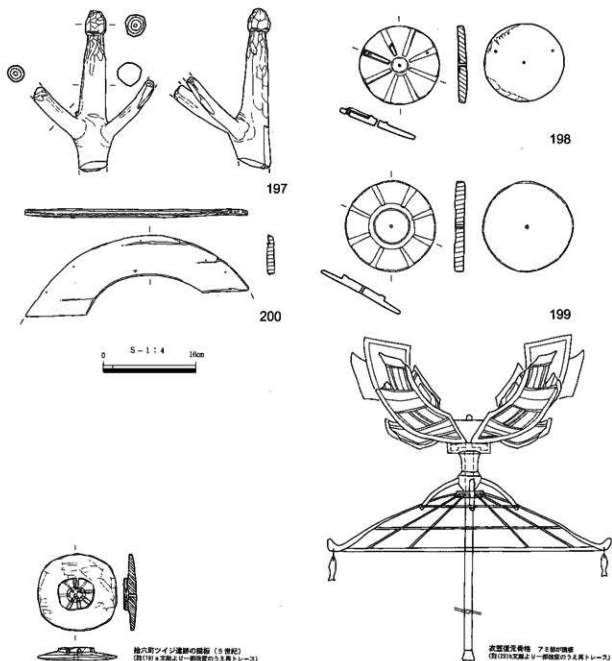
めることができる。柄が取り付けべき部分の装着孔の小ささと、「受骨」「小骨」をどう固定したかという問題、さらにこの2点が弥生中期後葉の遺物包含層より出土していること³⁰など、鏡板とするにはいくつかの問題を抱えているが、今後注意すべき遺物としてここに紹介しておく。

鬮(第277図) 弧を描く帯状の製品の外縁部に小孔が並ぶものである。欠損部の形状を知ることはできないが、図示した状態で見た場合の幅が広がり気味となり、平面形態は正円とはならないようである。鬮とすれば柄が取り付けはすであるが、残っている範囲ではそのような痕跡はない。外縁部の小孔は確認できるだけで44個あり、かなり密である。小孔には何かを差し込んでいたものと思われ、各孔の間は削れている。このように放射状に細い別材が取り付けられていた点を重視して鬮と理解した。



第276図 木器・衣笠(3)

図録番号	種類	調査区	遺構・層位	時期	検量	樹種	取上番号
186	衣笠	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	高(16.7)、腕末径1.6±0.5	イヌガヤ	3130
186	衣笠	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	高(13.3)、腕末径1.2±1.0	イヌガヤ	5899
187	衣笠	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	高(7.7)、腕末径1.2±0.9	マツ属埋木管末葉類	5898
188	衣笠	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	高(12.2)、腕末径0.9	イヌガヤ	5899
189	衣笠	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	高(13.7)、腕末径0.9	イヌガヤ	8052
190	衣笠	8区	SD54	弥生後期初頭~後葉	高(12.8)、腕末径1.0±0.8		34787
191	衣笠	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	高(17.2)、腕末径0.9	イヌガヤ	5898
192	衣笠	8区	D層	弥生中期~後期	高(29.9)、腕末径0.7±0.5		30161
193	衣笠	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	高(14.8)、腕末径1.2±1.0	イヌガヤ	5900
194	衣笠	8区	SD38	弥生後期初頭~後葉	高(36.0)、腕末径1.1±1.0、腕末長9.2、幅2.1		30135
195	衣笠	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	高(32.4)、腕末径1.1±0.8、腕末長9.8、幅2.5		5901
196	衣笠	4区	SD11	弥生後期初頭~後葉	高(24.1)、腕末径0.8±0.7、腕末長6.4、幅1.7	イヌガヤ	5916
197	衣笠	7区	I層	弥生中期後葉	長(17.4)、腕末径1.7		36503
198	鏡板?	7区	J層	弥生中期後葉	径8.5、厚0.9、溝長3.1、幅0.3~0.6、深0.3~0.4		36659
199	鏡板?	7区	J層	弥生中期後葉	径9.7、厚1.0、溝長2.4、幅0.3~0.8、深0.4~0.5		37855
200	サシバ	8区	A層	弥生後期	高8.6、幅(24.0)、厚0.7、孔間隔0.5~0.7	スギ	27716

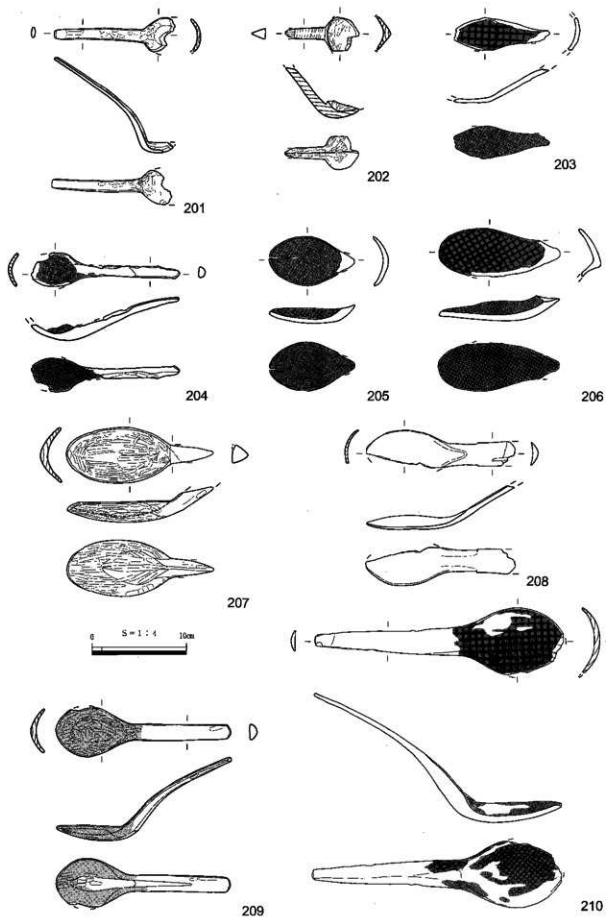


第277図 木器・衣笠(4)、鬚、鏡板の類品と衣笠復元骨格

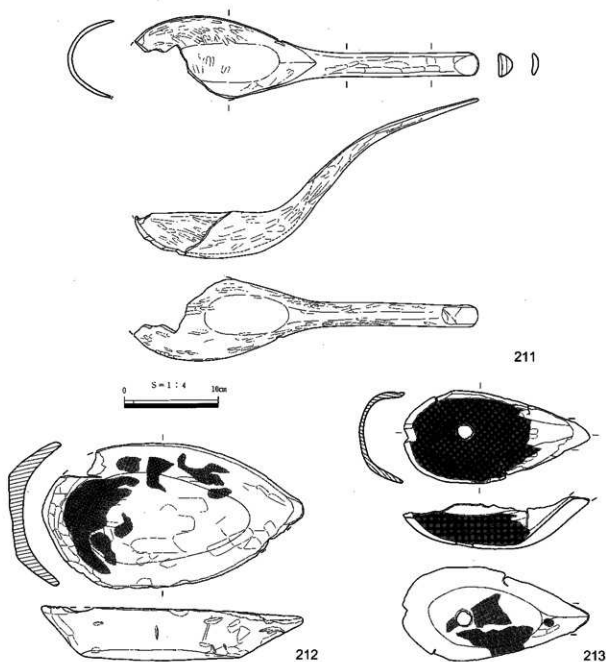
食事具

匙(第278～283図) 匙と杓子の区別について『木器集成』では「匙と杓子とを厳密に区別することは難しいが、本書では身が浅く、平面形が柄の軸方向に長い楕円形もしくは紡錘形を呈しているものを匙、身が深く、平面形が正円に近いものを杓子と呼ぶ(P153～155)」と述べている。本報告でも基本的にこれにならうが、身が深くても正円とならないもの(第279図)は、大型であるがゆえに身も深くなったものと理解し匙とする。正円に近い身が復元できるもの、深さがそれほど深くない215も匙とした。『木器集成』P L 124に示される典型的な杓子(横杓子)は本遺跡には基本的に見られない。ただし216は柄しか残っていない例であるが、横杓子の可能性はある。

匙は形態からA類、BⅠ類、BⅡ類と分けられているが、A類は228の未製品が候補であるものの、それ以外に見られず、BⅠ類も2点図示できただけである。青谷上寺地遺跡の匙はBⅡ類で占められ、それ以外はごく例外的な存在といっても過言ではない。以下、製品を時期ごとに大別し、BⅡ類を軸として小型(全長30cm未満)、

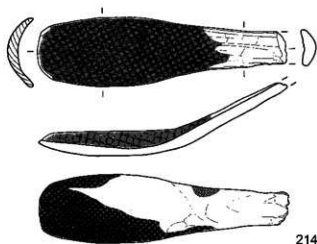


第278圖 木匙・匙(1)

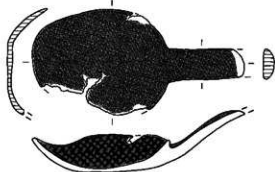


第279図 木器・匙(2)

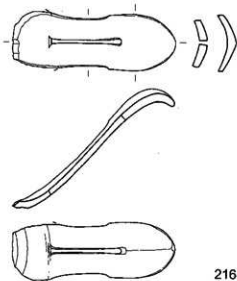
標記番号	器種	器置区	遺構・層位	種類	法量	埋積	取上番号
201	匙	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長(12.7)、高10.0、匙深(0.7)、柄径1.1x0.5		53374
202	匙	8区	9D38	弥生後期初頭～後葉	長(7.9)、高(5.4)、匙深(0.7)、柄径1.5x1.1		33252
203	匙	4区	2層相当	弥生後期～古墳初	長(10.1)、高3.8	イヌガヤ	5833
204	匙	4区	9D11	弥生後期初頭～後葉	長(15.6)、高4.4、匙深0.7、柄径1.1x0.8	イヌガヤ	2900
205	匙	4区	9D11	弥生後期初頭～後葉	長(9.0)、高(2.0)、匙深1.1		5957
206	匙	4区	9D11	弥生後期初頭～後葉	長(12.8)、高(2.7)、匙深1.4	サカキ	4359
207	匙	4区	9D11	弥生後期初頭～後葉	長(15.5)、高(3.7)、匙深1.5	ヒノキ	2861
208	匙	8区	9D66	弥生後期初頭～後葉	長(19.8)、高(4.8)、匙深1.2、柄径2.5x0.5		34745
209	匙	4区	9A4～6	弥生後期初頭～後葉	長18.4、高8.9、匙深0.9、柄径1.6x0.8		3098
210	匙	8区	9D66	弥生後期初頭～後葉	長(20.3)、高13.8、匙深1.3、柄径2.2x0.5		28597
211	匙	4区	9D11	弥生後期初頭～後葉	長(30.4)、高17.1、匙深4.3、柄径2.5x1.5	マキ属	2032
212	匙	4区	9D11	弥生後期初頭～後葉	長(27.7)、高(5.8)、匙深4.0		2823
213	匙	4区	9D11	弥生後期初頭～後葉	長(19.8)、高(5.8)、匙深4.3	ヤマグワ	2892



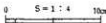
214



215



216



第280図 木器・匙(3)

大型(全長30cm以上)と分けてみた。

201~215は後期のものである。215を除いてB II類に分類される。身の形状や大きさ、柄の取り付け角度などで細分しようが、個体差が大きいこともあり、いたずらに細分することはかえって混乱をきたすものと思われる。第279図を大型とするにとどめたい。ただし小型と一括したのも、柄を含めた全長よりも身の容量に本来の意味があると思えることから、201、202は(204も?)他と区別する必要がありそうである。

215は身の口縁を柄の付け根よりも高く作るB I類である。身の平面形も正円に近い。

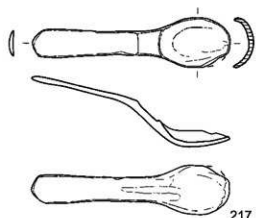
216はかなりきつく立ち上がる柄をもつのであるが、身を欠失するため全体の形状は不明である。本遺跡出土の匙が作りそのものにそれほど装飾性を加えていないのに対し、本例は透かしを入れたり、柄の先端部の幅を広げたり、その部分の裏面に後縁をもつなど手の込んだ作りとなっている。柄の取り付け角度とともに横杓子である可能性を考える所以である。

第281、282図は中期の匙である。後期同様B II類が基本である。217は身と柄の接する部分にわずかに段をもち、B I類としてもいいのだが、明確な区別と認められないことからB II類と理解しておく。219は身の部分が変形しているため本来の姿をつかみにくいが、柄の角度が途中で大きく変わる例である。222、223は身を欠く。ともに本来のあった部分を平坦に削った後、孔を開け、222は緊縛痕跡を残す。身が欠損した後修繕したものか。身と柄を別作りにした匙は管見の及ぶところでは類例を知らない。他の用途に転用された可能性も含め類例を待ちたい。

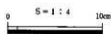
第282図は大型品で、225はB I類である。

匙にはほぼ例外なく黒色(黒茶色)塗彩が施される。成分については分析を行っていないので残念ながら分らない¹⁰⁾。214のように使用により身が磨耗し、その部分の塗彩もはげてしまった例がある。匙は日常的な道具とは考えにくい、実用に供されていたことを知る好例であろう。

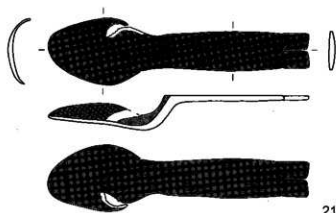
第283図には未製品を掲げた。加工痕を顕著に残しながらも、塗彩を施した例があり(210など)、これらは成品と認めうるものであり、匙は必ずしも精巧



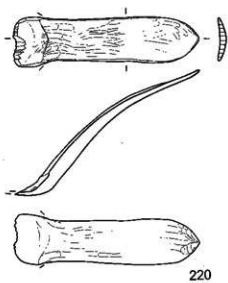
217



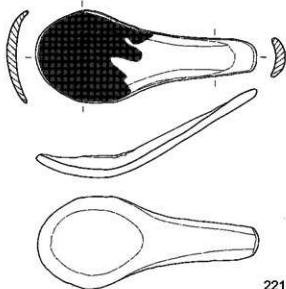
218



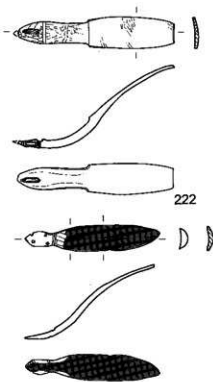
219



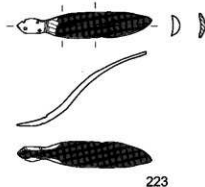
220



221

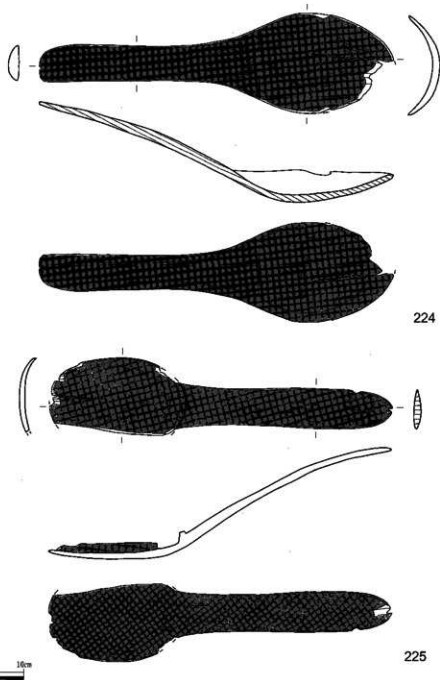


222



223

第281圖 木器・匙(4)



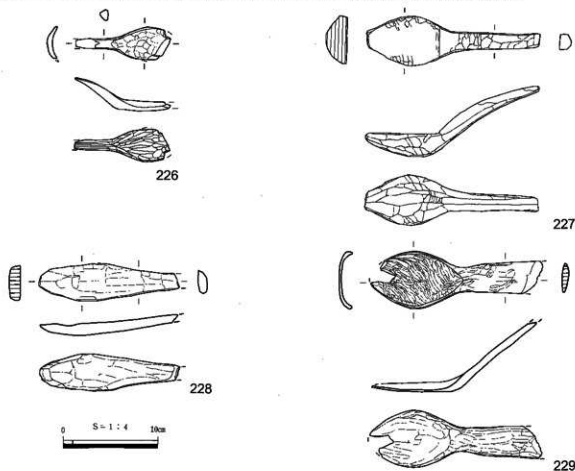
第282図 木器・匙(5)

発掘番号	器種	調査区	通稱・層位	時期	法量	備註	取上番号
214	匙	8区	SD56	弥生前期初葉～後葉	長(24.3)、高(7.5)、匙深1.7、柄径3.7x1.2		30235
215	匙	8区	SD56	弥生前期初葉～後葉	長(22.5)、高(8.7)、匙深3.7、柄径3.2x1.1		30236
216	匙	8区	D層	弥生中期～後葉	長(17.3)、高(2.7)、柄径5.8x0.9		34915
217	匙	7区	J層	弥生中期後葉	長21.0、高7.5、匙深1.7、柄径3.4x0.4		43456
218	匙	7区	SD27	弥生中期後葉	長(19.3)、高7.8、匙深(0.6)、柄径3.2x0.8		42245
219	匙	7区	J層	弥生中期後葉	長27.6、高3.7、匙深1.9、柄径4.1x0.7		42889
220	匙	7区	SD27	弥生中期後葉	長(19.6)、高(13.4)、柄径4.8x0.7		42228
221	匙	7区	J層	弥生中期後葉	長23.4、高9.5、匙深1.3、柄径4.0x1.0		36822
222	匙	7区	J層	弥生中期後葉	長(16.5)、高8.8、柄径3.4x0.3		42378
223	匙	7区	J層	弥生中期後葉	長(14.3)、高(8.0)、柄径2.7x0.5		44975
224	匙	7区	I層	弥生中期後葉	長(37.4)、高10.6、匙深2.5、柄径3.6x1.1		36506
225	匙	7区	J層	弥生中期後葉	長36.2、高12.0、匙深1.2、柄径4.2x0.8		38624

に仕上げたわけではなさそうである。加工の前半段階の227、228などでは大ぶりの加工痕を残している。これらを次第に成品に近づけていくのであるが、229などに残る加工痕は幅の狭い細長い単位が基本となっている。曲面を作り上げる技術とあわせ考えると、鉄器の使用を思わずに入られない。

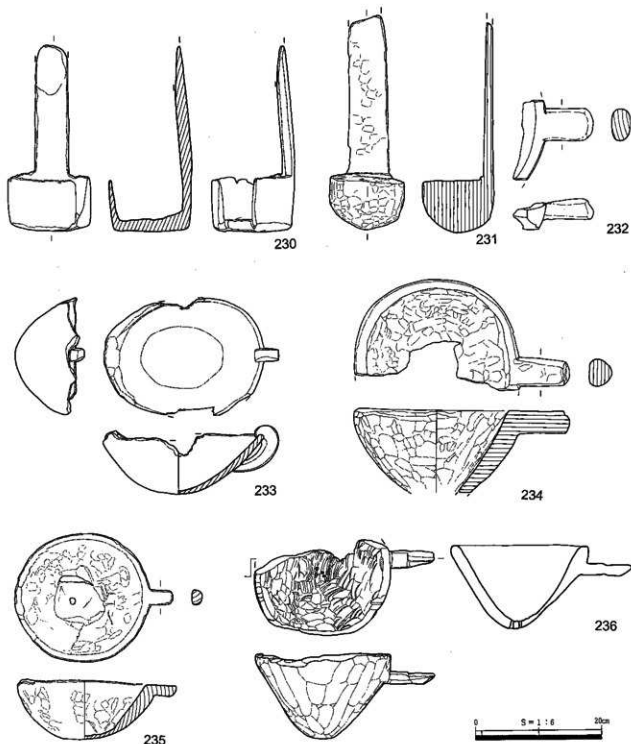
杓子(第284図) 本遺跡で知られる杓子は縦杓子である。数はいたって少ない。230は身の深さ6.4cmを測る。柄は途中で欠失しており、本来の長さを知ることはできない。231は未製品である。身に相当する部分の高さ8.2cmと、230と同じ程度の身が作り出されるものである。柄はやはり途中から欠失する。縦杓子の柄は幅広く、厚さの薄い板状となることが一般的であったようで、それは柄を握るというよりつかむといったほうが適当のように思われる。「木器集成」掲載分も含めて未製品を見ると、身と柄の形を作り出しておいて身を削り込むという順序で作られていることが分かる。

片口(第284図) 「木器集成」によると、横杓子に似たもので柄に相当する部分に樋が切つてあるものを片口と呼んでいる。本報告では深い身に短い柄をもち、柄のつく反対側に注ぎ口と思われるものを作ったものとその類品を片口として掲げた。233は他のものと異なり作りもよく、柄の形状も違う。容器の類に含めるべきかもしれないが、注ぎ口の存在を重視しここに含めた。234、235はすり鉢状の身をもち、235では注ぎ口とおぼしきものを認める。235の断面に見るように底を薄く作っており、234も底部を欠いている。236は234、235の未製品と考えられる。柄が身の口縁より下がった位置に付く点が他のものと異なる。本例は底部に4孔が開いており、同様に孔のある国道調査区出土品(報告書第148図107)とあわせ、機能を考えるうえで興味深い。



第283図 木器・匙(6)

標識番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	器種	取上番号
226	未製品	4区	9A4~6	弥生前期初段~後葉	長(10.0)、高(3.5)、柄径1.7x0.8		4592
227	未製品	8区	SD56	弥生後期初段~後葉	長18.3、高7.8、柄径1.7x1.2	イスガヤ	33341
228	未製品	7区	K層	弥生中期後葉	長(14.8)、高(2.2)、柄径1.8x1.0		42004
229	未製品	7区	SD27	弥生中期後葉	長(18.2)、高(7.3)、底径1.1、柄径3.2x0.8		42316



第284図 木器・綴約子、片口

発掘番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法 量	器 種	取上番号
230	綴約子	7区	1層	弥生中期後葉	長(29.5)、身幅(12.6)、深6.4、柄径5.2x1.7		41055
231	綴約子木製品	7区	L層	弥生中期後葉	長(32.8)、身幅(11.8)、高8.2、柄径5.8x1.2~1.0		44010
232	片口	4区	BD11	弥生後期初葉~後葉	柄長7.5、径5.0x2.9	スズ	2932
233	片口	8区	SD38	弥生後期初葉~後葉	長27.5、幅18.5、高10.9、注口幅6.0、身深8.1		33172
234	片口	8区	BD38	弥生後期初葉~後葉	長34.1、幅(17.4)、高(12.9)、柄長7.9、径4.3x3.6		33387
235	片口	8区	BD56	弥生後期初葉~後葉	長25.1、幅20.3、高9.3、身深8.8、柄長3.5、径2.3x1.8		30300
236	片口木製品	4区	SD11	弥生後期初葉~後葉	長28.8、幅(15.4)、高13.6、身深12.3、柄長7.0、径2.9x1.9	スズ	5979

容器

壺・杯・皿・椀 (第285、286図) 237、238はともに外面黒漆を塗布した後、赤漆で文様を描く。やや離れて出土したが、文様の意匠の類似より壺と蓋とのセットをなすものと思われる。237は口縁がやや広がる形態で、復元口径9.8cmを測る。口縁内面には壺の口縁部を受ける段を作る。外面の文様は直線文により区切られた文様帯に、下から三重圏の同心円文、斜格子文を配し、頂部は三重圏同心円文の間を円形に塗りつぶし、中央に四重圏同心円文を描く。赤漆で描かれた文様は線の太さにばらつきが見られ、描き始めと終わりが確認できるところもあり、スタンプで押捺したのではなく、手書きであろう。筆のようなもので描かれたのではなからうか。238は算盤玉状の体部に脚台の付く壺である。頸部より上を欠く。一木を削り込んで作られているが、体部の張り出した部分の内側もきちんと削り込んでおり、内面には幅の狭い放射状の加工痕が認められる。文様は脚台部に一重圏同心円文、体部には蓋同様文様帯を設け、体部下半に円形状の塗りつぶし、3段の二重圏同心円文、三重圏同心円文を2本の斜線でつなぎ連続渦文としたものが、上半には逆くの字状の刺突文風の文様を挟み上下に三重圏同心円文と小さな一重圏同心円文のセットが蓋同様手書きで描かれる。

239、240は至近距離で出土したもので、蓋はおよそ半分を欠失するが、壺の口縁にぴったりとかぶさるうえ、紐かけと思われる1対の孔の位置が壺のものに一致することから、セットであったことが分かる。蓋の形態は237に似るが、頂部につまみ状のものを、鈕孔横に突起状の装飾を削り出している。この装飾は鈕孔の外側に設けられており、欠失部分には鈕孔を挟むようにもう1対存在していた可能性がある。240も算盤玉状の体部と脚台をもつ。体部の張り出しには突帯状にアクセントをつけることで装飾効果を出している。口縁部は短く直立し、頸部には前述のとおり2孔1対の紐孔が見られる。器体外面の所々に赤色塗彩が残っており、本来は全体が赤く塗られていたであろう。

山陰地方の弥生後期にはこのような算盤玉状の体部をもつ土器の壺が存在する²⁰⁾(例えば第69図150)。この形態の土器もスタンプ文などで飾り立てることが普通で、木製壺をモデルにしていたのであろう。

241、242は先の壺に伴うような形態の蓋である。

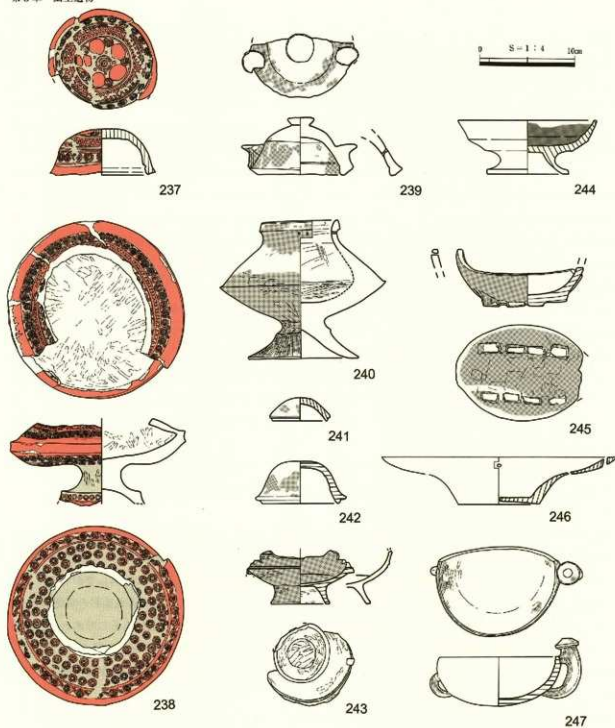
243、244は杯形容器である。243は直立気味に立ち上がる脚台をもつ。体部には突帯を削り出している。上半を欠失し全体の形状は不明であるが、内面底部に段を設け装飾としていることや、外面とともに内面も赤色塗彩されていることから、内面に見える器体であると考えられる。244の脚台は低く、体部は内湾しながら立ち上がる。外面に2本の突帯を設けるとともに、内面にも突帯状の段を作り出している。外面に赤色塗彩の痕跡が残る。

245、246は皿形容器と呼んでおく。245は平面楕円形の舟形を呈し、両端部を立ち上げるものであろう。底部には片側4つの短い脚が2列削りだされている。立ち上がる端部には小孔が空けられており、蓋がつくものか。246は接合しないため図上で復元した。広く平坦な面を底部と理解し、器高が低く口縁部の広がる容器と考えている。

247は椀形容器である。浅い半円状の体部で、笠形の頭部をもつ大きめの把手と小さな環状の把手が対になる。器形は洗練された美しさを持ち、完存しないのが惜しい。外面は赤色塗彩される。

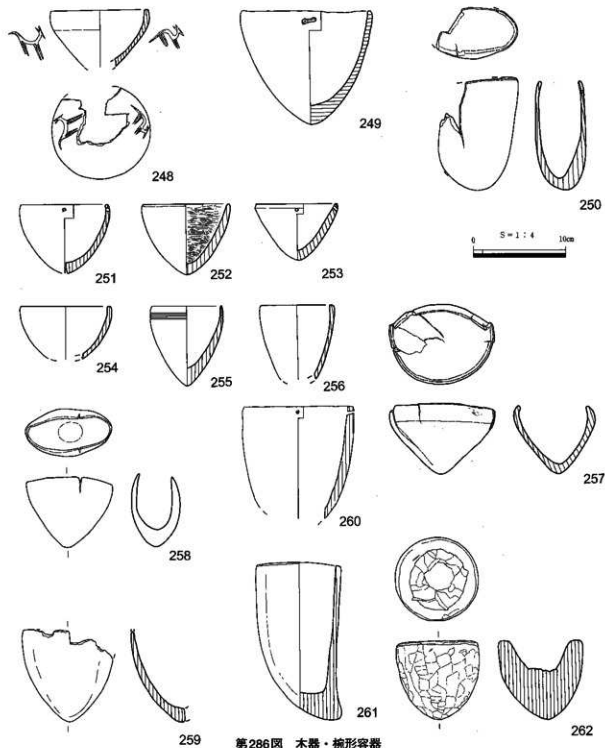
第286図も椀形容器である。砲弾状の体部で、これのみでは自立しない。やや形態にばらつきがあるが、261以外は同じ形と見ていいだろう。こうした椀形容器は山陰地方においてよく見られ、松江市西川津遺跡²¹⁾、米子市目久美遺跡²²⁾に類似があるほか、韓国光州広域市新昌洞遺跡²³⁾でも出土している。西川津ではコップ型容器と報告されており、255と同様に口縁部直下に沈線の巡るものがある。未製品も出土している。目久美のものは縦杓子の可能性もあるとされているが、砲弾状の形態を見るかぎり、椀形容器としていいだろう。248は外面に線刻絵画が認められる。描かれたのはシカと思われ、隣り合って描かれるのではなく相対する位置に配する。体部の表現を連えることで躍動感あふれる動きを表しており、離れて描かれてはいるものの、独立した絵画ではなく一連のものとするべきである。261は底部の一端が張り出し、角杯状を呈する。椀形容器の未製品でないことは、ていねいに仕上げられた器面により明らかである。これら砲弾状の体部をもつ椀形容器は248の絵画により上下が確定した。最初にもふれたとおり、これのみでは自立せず、これを受ける脚台の存在が想定されるが、その候補

第3章 出土遺物



第285図 木器・壺、碗、皿、杯

種別番号	種類	調査区	遺構・層位	時期	法	尺	材質	出土番号
237	皿	8区	SD56	弥生後期初頭～後葉	復元径11.1, 復元口径9.0, 高4.6, 厚0.9		モクレン科モクレン属	30227
238	壺	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	高19.0, 推定底径9.0, 厚0.4～1.4		バウ科サクラ属	34542
239	皿	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	口径(内径)8.4, 高6.1, 厚0.8～1.2		クワ科クワ属	26814
240	壺	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	口径8.0, 高14.6, 幅17.5, 厚0.5～, 底径11.6, 身深8.7		クワ科クワ属	26711
241	皿	8区	不明	不明	復元径6.4, 復元口径5.4, 高2.5, 厚0.7			26369
242	皿	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	径9.8, 口径7.8, 高4.3, 厚0.7			27031
243	杯形容器	4区	2層相当地	弥生後期初頭～古墳初頭	高(5.6), 復元底径6.1, 高台高1.9, 厚0.3～		ヤマグツ	5453
244	杯形容器	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	復元口径14.6, 復元底径8.6, 高台高2.3, 身深2.7, 厚0.7～		クワ科クワ属	30403
245	皿形容器	7区	N層	弥生中期後半	長(13.4), 幅10.2, 高6.0, 幅高0.4, 身深2.3, 厚0.8～			44977
246	皿形容器	7区	SD27	弥生中期後半	復元口径24.8, 復元底径5.0, 復元底径8.6, 身深4.3, 厚0.5～			42315
247	碗形容器	8区	SD54	弥生後期初頭～後葉	口径12.6, 高9.2, 身深4.3, 厚0.7～		イヌガヤ	28000



となるものは今のところない。

桶形容器 (第287図) 木を削り抜いて筒状の体部と脚台部を作ったものとその蓋を掲げた。すべて弥生中期に属し、後述するように後期の製物桶の祖形となるものと考えられるため、桶形容器と呼んでおく。263と264はセットで出土した。264の容器は口縁部、脚台部ともに広がるもので、上面視は端の尖った楕円形を呈する。器高21.5cmのうち脚台部が9.5cmを占める。脚台部は狭い透かしを入れ、接地面には2個1単位の小突起が6ヶ所に等間隔で配される。口縁部の両端には蓋と対をなす鈕かけ孔が空けられる。口縁部と脚台部には補修孔があり、前者は緊縛された状態である。263の蓋は笠形を呈するもので、口縁部の形態から検蓋Ⅱ類に分類されるものである。265～267の蓋も桶形容器のものと思われる。口縁部の形態から分類すれば266が検蓋、265と267が置き蓋

となる。266と267は平面円形である。268は264とはやや異なった形態の身である。口縁部直下に最大径をもつ膨ぶくれのもので、器高18.9cmのうち脚台部は3.4cmと低い。脚台部は透かしを入れることにより独立し、16個を数える。口縁部両端の紐かけ孔は横に作り出された突起に開けられる。

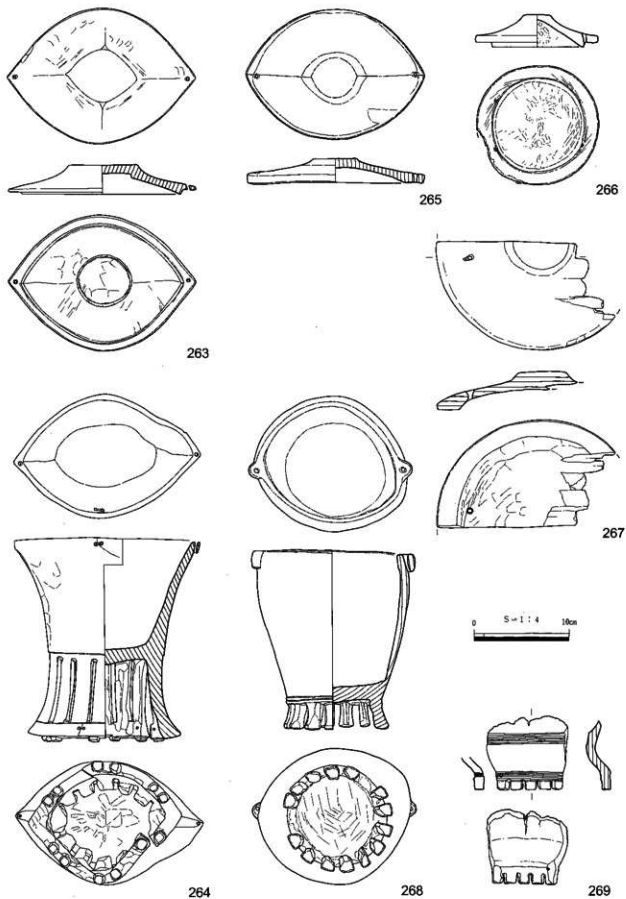
269は身の一部である。独立した脚台部が低く立ち上がり、そこから体部は外に張る形態となる。264、268が一本削り抜きなのに対して、269は底板を組み合わせるもので、目釘孔の中に目釘が残っている。弥生中期後葉の包含層より出土し、後期の刳物桶とは形態を異にするうえ使用樹種も広葉樹でありながら、底板は別作りであるという刳物桶の特徴も有する。刳物桶の中期における存在は確認できず、中期の桶形容器と後期の刳物桶を系統的に結ぶ貴重な資料である。

高杯 (第288～295図) 本遺跡における高杯の出土数は多く、弥生前期から認められる。

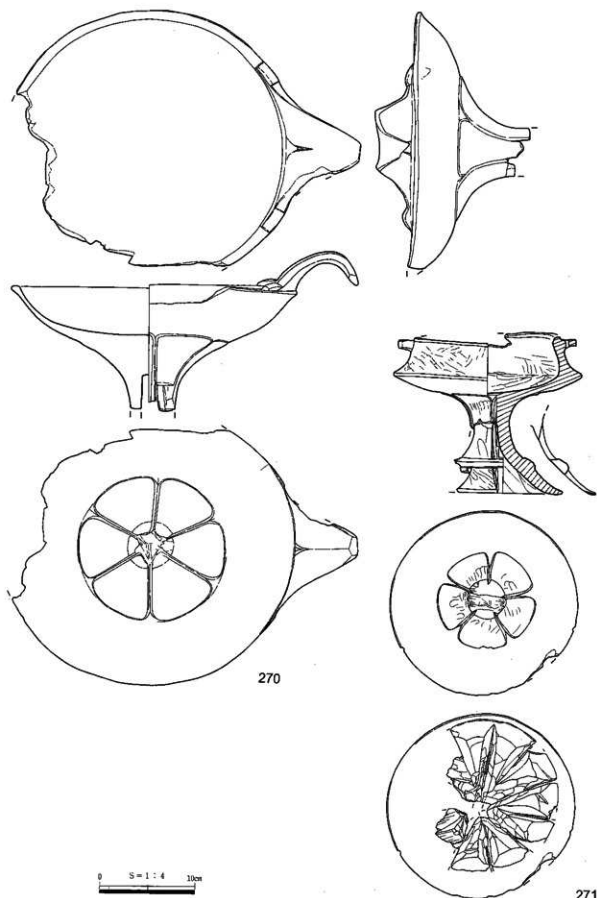
第288～292図は後期の高杯で、第290図までは従来北陸地方で知られていた精巧な作りの組合せ式高杯またはその可能性のあるものである⁹⁰⁾。ほとんどが破片なので必ずしも個体数を表していないが遺跡全体で52点出土した。270は杯部のみ残る。復元口径30.2cm、口縁部までの残存高14.0cmである。プロポーションは優美なカーブを描き、口縁端部は水平に面取りを行ったうえ透かしのある舌状の飾り耳を作り出す。外面から結合部にかけて六つの花弁状の彫刻をもつ。外面全体と飾り耳に赤色塗彩を施す。口縁端部と花弁状彫刻の外周にケビキの線を残す。271は一本作りの小型品であるが形態が類似するためここに示す。杯部はいったん外方に大きく開いた後、内傾しながら立ち上がる。従って他の高杯の杯部が浅い皿状となるのとは異なり、口径も15.2cmと狭く、深めとなる。杯部外面の花弁状彫刻は5花弁で、花弁間の削り込みは脚柱部に至り透かしとなり、脚台部の透かしとして連続する。脚台部は脚柱部より続く透かしの間でさらに半割される。その結果脚台部は10脚となり、脚台部の数は花弁の数の2倍という関係が成立する。脚台部の形態は大型のものとなり、この部分のみの出土では必ずしも組合せ式の高杯であるか分からないことになる。赤色塗彩の痕跡は残っていない。

第289図は脚柱部から脚台部の資料である。脚柱部の透かしが確認できない275、278を除き、先に述べた杯部

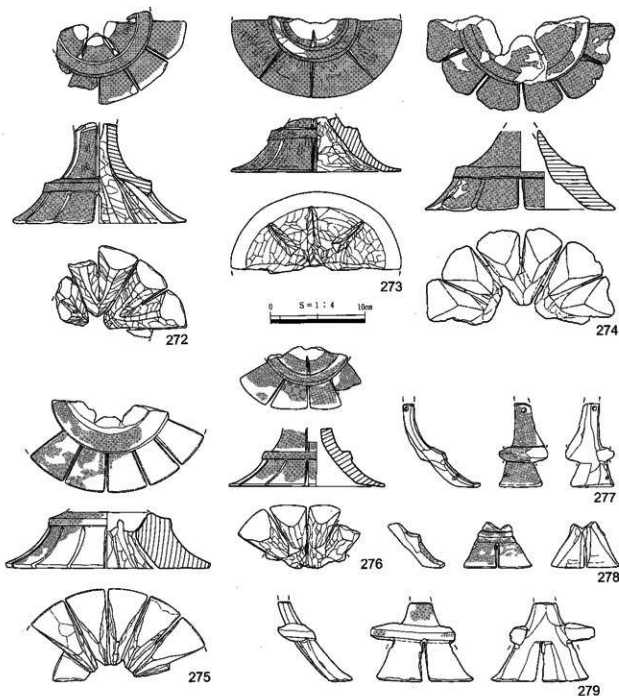
図号	器種	調査区	遺構・層位	時期	径	高さ	脚柱	取上番号
248	桶形容器	8区	E層	弥生中期	口径10.6、底(8.1)、厚0.3～		クワ科クワ属	27000
249	桶形容器	8区	木割溝5	弥生後期?	口径14.2、高12.2、厚0.5～、身深10.2			30384
250	桶形容器	7区	J層	弥生中期後葉	高12.2、厚0.3～、身深10.9			43903
251	桶形容器	8区	D層	弥生中期～後期	復元口径9.4、高7.5、厚0.5～、身深6.3			27731
252	桶形容器	7区	K層	弥生中期後葉	口径9.6、高7.6、厚0.8～、身深6.4			42431
253	桶形容器	7区	K層	弥生中期後葉	口径8.9、高6.0、厚0.8～、身深5.0			42385
254	桶形容器	7区	L層	弥生中期後葉	復元口径9.8、高3.7、厚0.5～			43979
255	桶形容器	7区	BD27	弥生中期後葉	口径7.8、高8.0、厚0.6～、身深6.7			42302
256	桶形容器	7区	N層	弥生中期中葉	復元口径8.0、高3.0、厚0.4～			44733
257	桶形容器	7区	J層	弥生中期後葉	高7.7、厚0.4～、身深8.4			38605
258	桶形容器	7区	J層	弥生中期後葉	高7.6、厚0.9～、身深5.8			42351
259	桶形容器	7区	H層	弥生後期	復元口径10.6、高9.9、厚0.7～			36805
260	桶形容器	7区	本跡溝3	弥生中期後葉	復元口径11.6、高(12.2)、厚0.7～、推定身深8.4			39110
261	桶形容器	7区	J層	弥生中期後葉	口径9.1、高17.0、厚0.8～、身深14.1		クワ科クワ属	39824
262	桶形容器未製品	7区	I層	弥生中期後葉	口径9.0、高8.5、削り貫き深3.0			40890
263	蓋	7区	J層	弥生中期後葉	径18.8×14.3、高3.0、厚0.8～			44000
264	桶形容器	7区	J層	弥生中期後葉	口径19.6×13.1、高21.5、脚高9.5、身深11.8、厚0.7～、底径16.0			44000
265	蓋	7区	J層	弥生中期後葉	径18.7×13.7、高2.7、厚0.6～		クワ科クワ属	40818
266	蓋	7区	J層	弥生中期後葉	径12.8、口径9.0、高3.4、厚0.8～			42417
267	蓋	7区	SD27	弥生中期後葉	復元径22.0、高4.1、厚0.8～			42888
268	桶形容器	7区	J層	弥生中期後葉	口径17.3×14.4、高18.9、脚高3.4、身深14.5、厚0.8～、底径11.0		クワ科クワ属	39961
269	桶形容器	7区	I～J層	弥生中期後葉	高(7.0)、厚0.9～、脚高1.0、目釘までの高1.8			39476



第287圖 木器・桶形容器

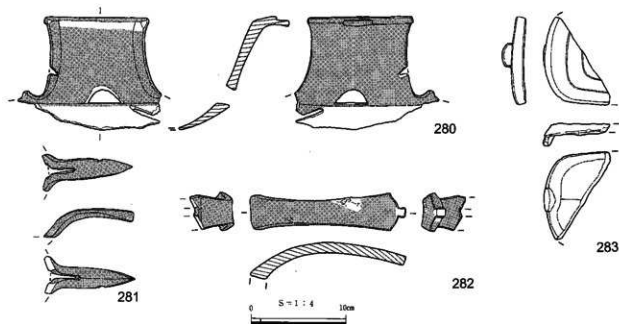


第288図 木器・高杯(1)



第289図 木器・高杯(2)

発掘番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	樹種	取上番号
270	高杯	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	復元口径50.2、耳を含めた幅38.6、高(17.0)、 杯縁深4.9、花弁文様径18.3～19.6	ヤマブツ	4282
271	高杯	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	口径15.2、耳を含めた幅16.7、高17.0、杯縁深6.4、 復元底径15.3、花弁文様径10.2	クワ科クワ属	26385
272	高杯	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	高(10.8)、復元底径18.3、透かし幅0.2～0.4	ヤマブツ	6067
273	高杯	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	高(5.8)、復元底径17.8、透かし幅0.4	カヤ	3187
274	高杯	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	高(8.4)、復元底径20.0、透かし幅0.2～0.4		33148
275	高杯	8区	SD64	弥生後期初頭～後葉	高(5.8)、復元底径21.8、透かし幅0.2～0.4		34779
276	高杯	8区	SD64	弥生後期初頭～後葉	高(6.1)、復元底径18.4、透かし幅0.2～0.4		34724
277	高杯	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	高(8.0)、透かし幅0.3	ヤマブツ	4456
278	高杯	8区	SD64	弥生後期初頭～後葉	高(4.8)、透かし幅0.2～0.3		34219
279	高杯	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	高(9.3)、透かし幅0.4～0.6		3000



第290図 木器・高杯(3)

標記番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法 量	樹 種	取上番号
280	高杯	8区	SD3B	弥生後期初頭～後葉	高(11.9)、幅(15.1)、耳の高9.1		33038
281	高杯	4区	SD11	弥生後期初頭～後葉	長(9.5)、幅3.9、耳の高3.0	ヤマダ	5906
282	高杯	7区	H層	弥生後期	長(16.4)、幅4.1、高(4.5)		38314
283	高杯	8区	SD3B	弥生後期初頭～後葉	長(7.1)、幅(9.3)、高(2.5)		30239

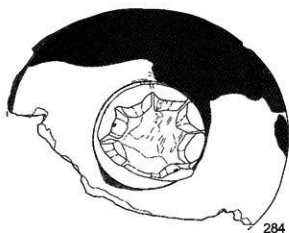
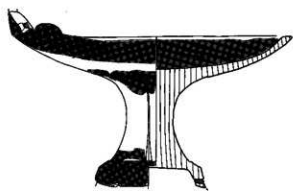
外面の花弁数と脚台部数の相関関係は認められる。脚台部の数が復元できるもののうち272、274、276は12脚で花弁は6花弁であろう。273は幅広ということもあり推定8脚で、先の関係からすると4花弁となるが、そのような杯部は知られていない。275も推定14脚で類例のない7花弁ということになる。花弁の数にこだわったのは高杯の大小と関係しないか考えたからであるが、6花弁が推定される276の底径は復元値で16.4cmと小さく、必ずしも器体の大きさを示すわけではない。ここに示した資料はすべて外面赤色塗彩されている。

第290図には飾り耳を掲げた。北陸地方の例や本遺跡の国道調査区出土例を見ると、形態に若干の違いはあるが、透かしをもち外反しながら立ち上がるという基本的な姿はあったようである。280は大型で幅広のまま外反し、先端に突起状のアクセントをもつ。杯部の復元口径は29.4cmである。281は先端に向けて尖りながら立ち上がる。282は細長い点が気がかりであるが、外反しながら立ち上がることや先端の突起状のアクセントなど共通するところが多い。283も組合せ式高杯の飾り耳といつていいか不安に思うが、精巧な作りと形態的な特徴から飾り耳と理解した。

以上のような高杯の製作には木工用轆轤の使用が指摘されている⁹⁹⁾が、本遺跡ではそれを確認することはできなかった。

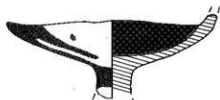
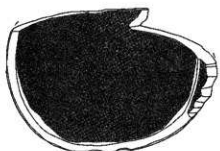
第291、292図は上記以外の後期の高杯である。284～286は飾り耳が付く。284は一本作りであるが、形態的には組合せ式に近い。287は組合せ式である。遺存状態は悪いが杯部口径29.4cm、底径22.4cmを測り、器高は25cmほどに復元できる。脚柱部の様子は不明だが、杯部と脚台部には接合用の方形孔が空けられ、それぞれ2.4cm、1.9cmを測る。脚台部には長さ5cm、径1.8cmの接合材が残っていた。288、289も口径25cm程度の高杯杯部である。外面には段を設けてアクセントを付けている。290は椀形の杯部に脚柱部から裾広がりにつく脚台部をもつ。291～294は杯部あるいは脚台部の一部である。292は脚柱部の短さから別器種の可能性もある。

第293～295図は中期の高杯である。第293、294図は土器に同一形態を認める(第106図307)もので、水平に延びる口縁の端部を肥厚させる。口径を見ると25cm程度の小型と、30cmを超える大型に分けられそうである。

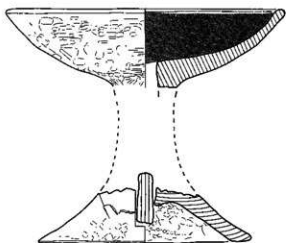
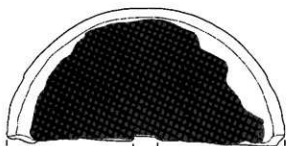


284

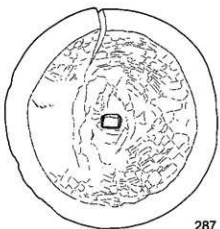
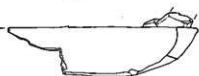
0 S=1:4 10cm



285



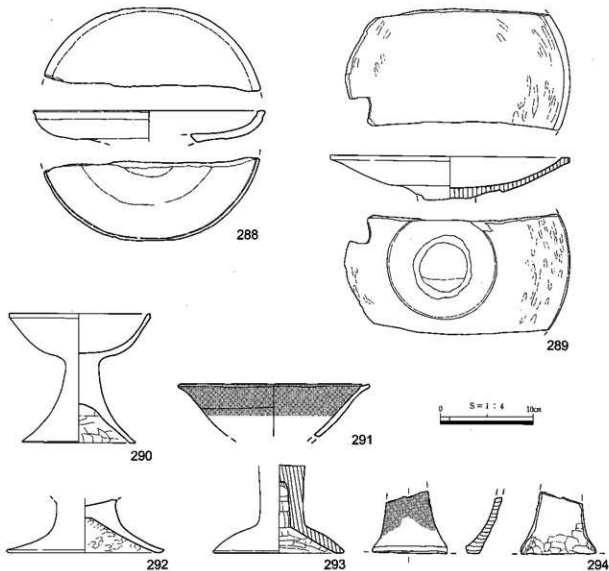
286



287

第291圖 木器・高杯(4)

出土例のほとんどが脚台部を欠くため全体の形状や規模は不明である。295のみが結合のための深い柄を残す。深い柄は見えている範囲で4.1cmを測る。杯部にどれだけ入っているかは分からない。299は木製品である。内外面に粗い加工痕を顕著に残す。このタイプの高杯も木工用轆轤で成形したという意見がある³⁰⁰。本遺跡出土品の中でそれに関する確証は得られていないが、確かに杯部の上面観は正円をなしている。木工用轆轤の使用も十分に可能性のあるところである。ただ299の未製品も正円であるので、轆轤の使用が想定されとしても299以前の段階で、細部の成形や加工は手作業によっていたようだ。

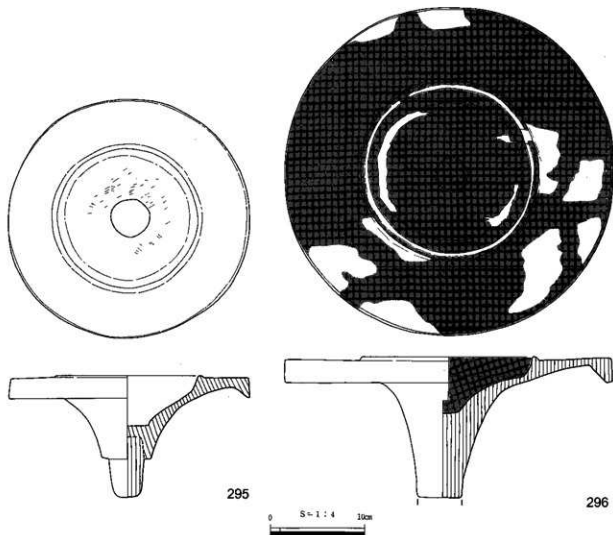


第292図 木器・高杯(5)

埋蔵番号	器種	期要区	遺構・層位	時期	法	規模	備註	取上番号
284	高杯	B区	SD38	弥生後期初層～後葉	口徑29.7、高19.0、杯縁厚3.4、厚0.5～			29113
285	高杯	B区	SD38	弥生後期初層～後葉	復元口徑22.2、高(8.8)、杯縁厚4.9、厚0.7～			30482
286	高杯	3区	SD20	弥生後期初層～後葉	複元口徑22、高(6.7)、杯縁厚4.9、厚0.4～		ヤマガツ	21525
287	高杯	B区	SD38	弥生後期初層～後葉	復元口徑29.4、復元底径22.4、杯縁厚3.4、脚高4.4			30093
288	高杯	B区	SD38	弥生後期初層～後葉	復元口徑(復元)24.4±1.9、複合材厚1.8±1.4			34558
289	高杯	B区	SD38	弥生後期初層～後葉	復元口徑25.0、高(3.4)、杯縁厚3.2、厚0.7～			33293
290	高杯	B区	SD38	弥生後期初層～後葉	復元口徑15.1、高14.0、杯縁厚3.3、厚0.5～、復元底径12.3、脚高4.1			27982
291	高杯	B区	SD38	弥生後期初層～後葉	復元口徑20.8、高(5.7)			33376
292	高杯	B区	不明	不明	高(5.6)、復元底径17.0、脚高3.8			27024
293	高杯	4区	SD11	弥生後期初層～後葉	高(9.5)、底径14.0、脚中空部高7.7		トチノキ	3707
294	高杯	4区	SD11	弥生後期初層～後葉	高(6.6)			3716

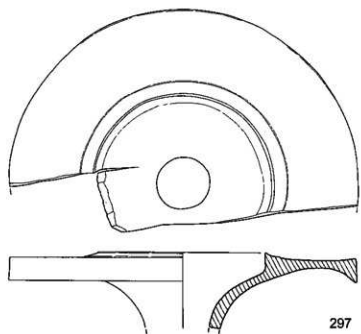
300は上記のような高杯の脚台部なのか不明だが候補としてここに掲げる。復元底径20.8cmを測り、脚柱部に雇い柄が挿入されている。雇い柄は長さ9.2cm、径3.1cmで目釘で固定されていた。

301は弥生後期の遺物包含層から出土したものだが、脚台部の突起状の作り出しが中期的な特徴なのでここに掲げた。302は内湾して立ち上がる深めの杯部で、鈕かけ孔と考えられる小孔をもつ。303は脚台部の一部で、中心の方形穴の四隅部分に目釘孔かと思われる痕跡がある。雇い柄を挿入して杯部と結合したものか。出土層位から前期に遡るものと思われる。304は脚台部の未製品である。方形孔の存在から組合せ式であることが分かる。

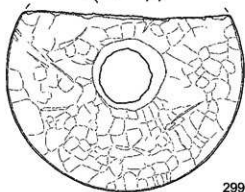
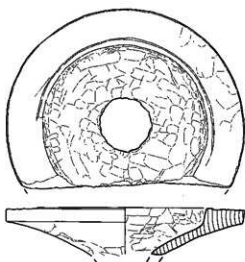


第293図 木器・高杯(6)

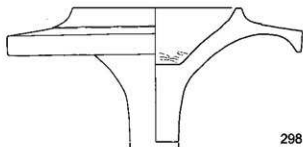
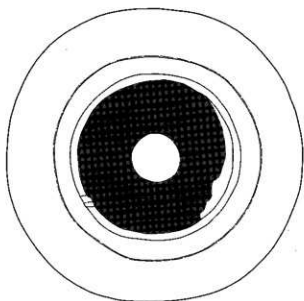
標識番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備考	出土番号
295	高杯	7区	J層	弥生中期後葉	径25.4、口径15.0、高12.9、杯部深5.3、厚0.8～、 鈕ぞ孔径3.0、接合材径3.0		36648
296	高杯	7区	J層	弥生中期後葉	径34.8、口径17.6、高(14.6)、杯部深5.9、厚0.8～		38650
297	高杯	7区	L層	弥生中期後葉	径36.8、復元口径17.4、高(8.1)、厚0.8～		42332
298	高杯	7区	J層	弥生中期後葉	径31.2、口径16.4、高(14.2)、杯部深5.0、厚1.7～		42300
299	高杯未製品	7区	J層	弥生中期後葉	径25.2、口径17.2、高(5.3)、厚0.9～		36592
300	高杯	7区	J層	弥生中期後葉	高(15.5)、復元底径20.8、脚部径5.5、鈕ぞ孔径3.4、 接合材長9.2、径3.1		42355



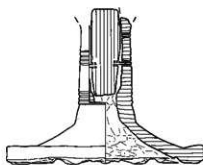
297



299



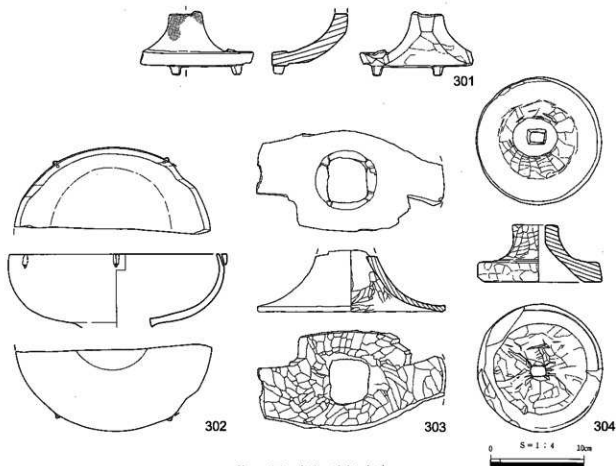
298



300



第294圖 木器・高杯（7）



第295図 木器・高杯(8)

図番	器種	区画	遺物-遺位	時期	寸法	樹種	取上番号
301	高杯	7区	I層	弥生中期後葉	蓋(6.7)、厚1.5		3675B
302	高杯	7区	J層	弥生中期後葉	復元口径22.9、高(7.8)、杯部深6.9、厚0.7~		42461
303	高杯	4区	①層埋当	弥生前期末~中期前葉	復元口径10.0、高(6.6)、厚0.6~	ヤマグワ	6280
304	高杯未製品	7区	K層	弥生中期後葉	口径13.7x13.4、高6.1、杯口径1.6x1.1、厚1.1~		42428

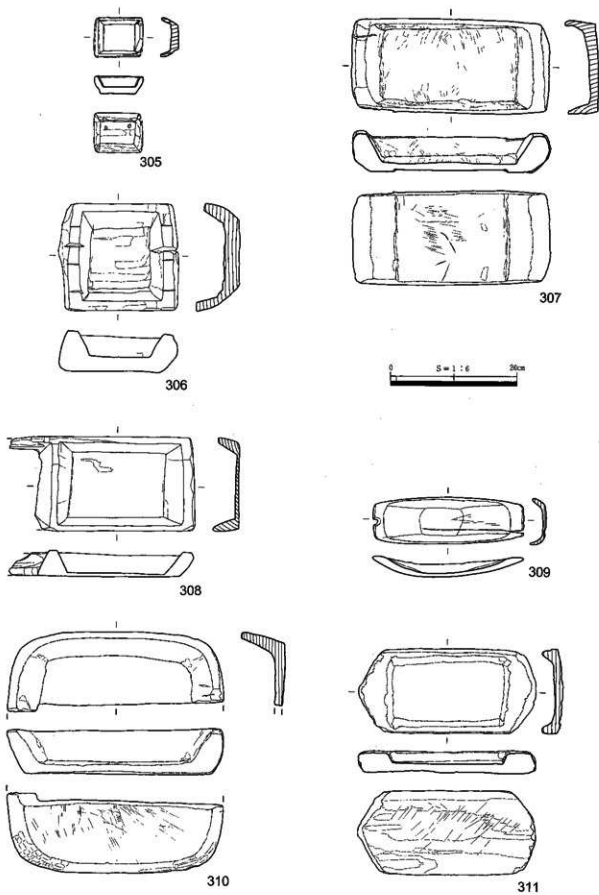
槽・盤(第296~298図) 305~309は中期のものである。305、306は箱形をなし小型である。307は短辺の両端をわずかに高く仕上げている。308は欠失するところが多く、よく分からないのであるが、箱形の容器がふたつ以上組み合わさったようなものか。309は舟形を呈する。祭祀具の可能性もあるが、大きさに容器と捉えておく。

310以降は後期に属する。310、311は小型品である。第297図は脚の付くもので、形状にはさまざまなタイプがある。312は円形の身に突起状の脚が付く。313は精巧な作りで各面の境は明瞭な稜線によって区切られる。314は短辺の一方に穿孔のある溝をもつが、用途は分からない。底径に比して口径がかなり広くなる。315の脚は短辺に接して作られている。318は大型である。

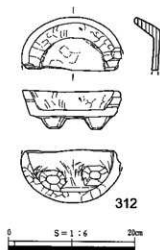
槽・盤の内面や底面には刃物キズを顕著に認めるものが割合多い。こうしたキズは加工の際のものとは思えず、容器としての機能のほかに何かに転用されたことも考えられる。

蓋(第299~301) 第285図に掲げた壺とのセットや第287図の桶形容器とのセットは、蓋と身の関係が分かる好例である。しかし実際には蓋単独で出土することがほとんどで、どのような身とセットになるか不明な場合が多い。

319~322は浅い笠形の壺である。319は作りが精巧で器壁も薄く、外面は赤色塗彩される。鈕かけ孔を両端にもち、頂部にも小さな孔を認める。320とともに口縁部形態から置き蓋に分類される。321、322は口縁部内面に段を有する蓋である。322は外面赤色塗彩され、緊縛したままの補修孔が2ヶ所見られる。

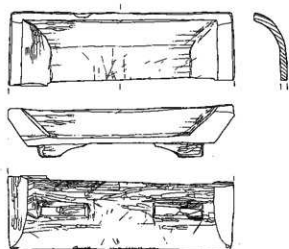


第296圖 木器・箱、盤(1)

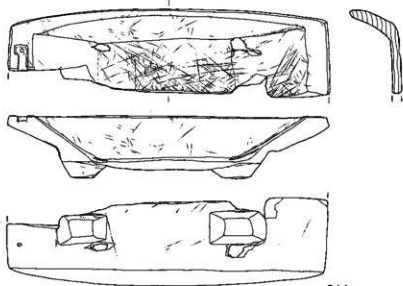


312

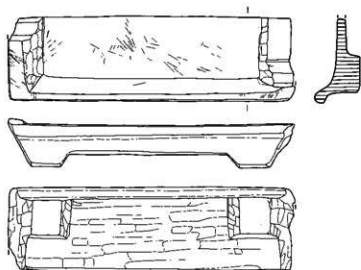
0 S=1:6 20cm



313

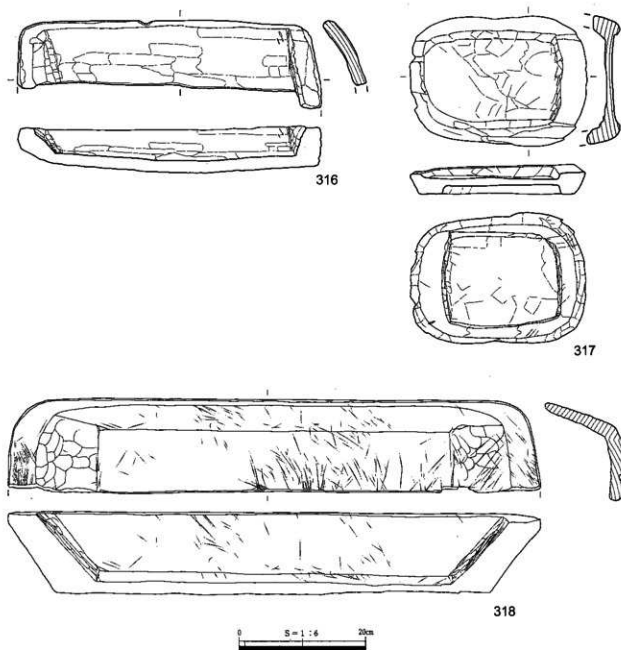


314



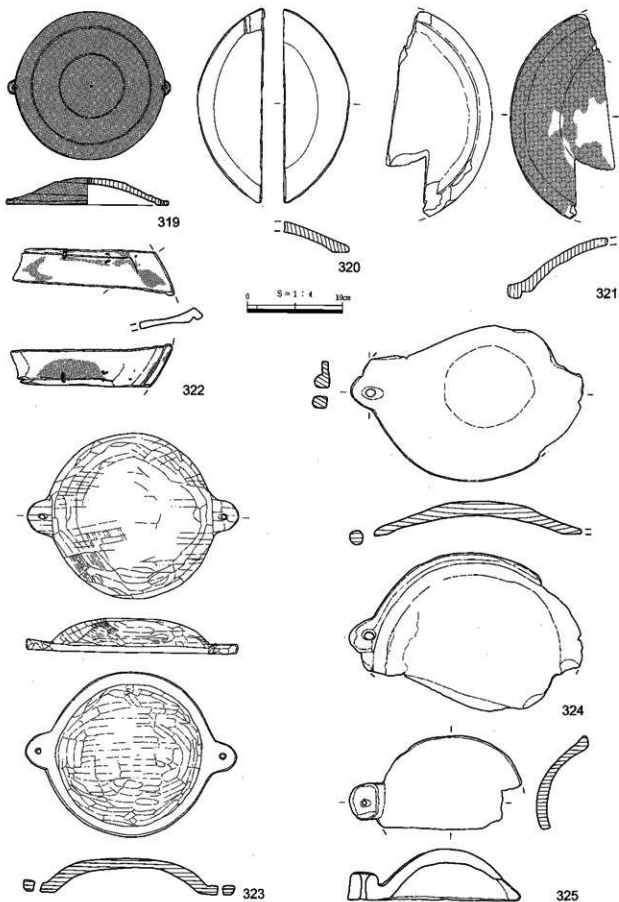
315

第297图 木器·槽·盘(2)



第298図 木器・箱、盤(3)

器名番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法 量	備 考	取上番号
305	箱・蓋	7区	J層	弥生中期後葉	長7.8、幅6.3、高2.9、深1.7		44911
306	箱・蓋	7区	J層	弥生中期後葉	長19.1、幅17.2、高8.9、深4.4		42371
307	箱・蓋	7区	J層	弥生中期後葉	長31.8、幅15.0、高6.5、深3.8、脚高0.4		36531
308	箱・蓋	7区	I層	弥生中期後葉	長(29.6)、幅15.1、高4.1、深3.5		42106
309	箱・蓋	7区	N層	弥生中期中葉	長24.3、幅7.4、高3.3、深2.0		44732
310	箱・蓋	8区	A層	弥生後期	長34.6、幅(13.0)、高7.4、深5.4		30277
311	箱・蓋	8区	GD69	弥生後期末～古墳初葉	長28.4、幅13.5、高3.7、深2.0		27702
312	箱・蓋	8区	SD69	弥生後期末～古墳初葉	長(15.8)、幅(8.4)、高4.0、深3.1、脚高1.7		27735
313	箱・蓋	3区	SD20	弥生後期初葉～後葉	長35.8、幅(11.8)、高8.2、深4.4、脚高2.2	マキ属	20313
314	箱・蓋	3区	⑤層	古墳以前	長61.0、幅(13.9)、高10.0、深7.0、脚高1.5		25021
315	箱・蓋	4区	BA4～6	弥生後期初葉～後葉	長46.1、幅(13.6)、高7.2、深3.5、脚高2.1		2792
316	箱・蓋	4区	SD11	弥生後期初葉～後葉	長38.8、幅(14.2)、高4.9、深4.0		5997
317	箱・蓋	5区	不明	不明	長28.0、幅20.8、高(5.3)、脚高1.4		9227
318	箱・蓋	4区	BA4～6	弥生後期初葉～後葉	長64.2、幅(15.0)、高13.2、深10.0		3534



第299圖 木器・蓋(1)

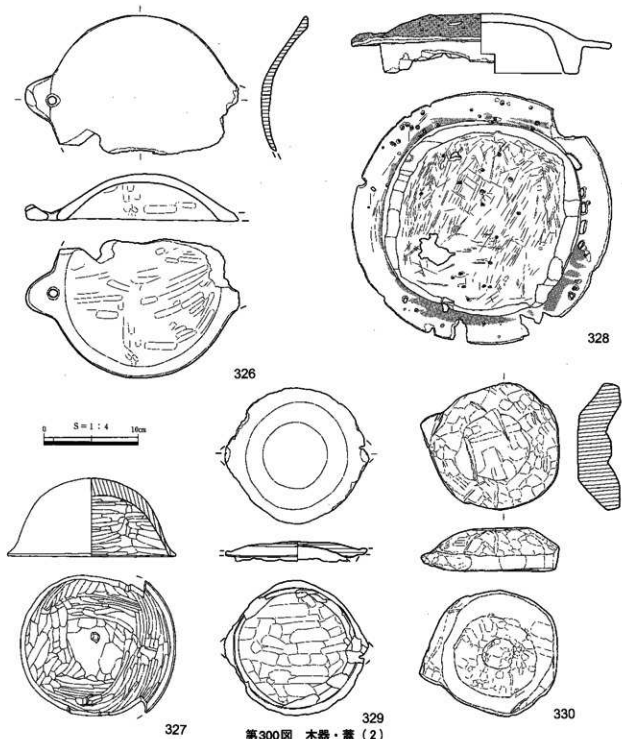
323～326は平面円形のドーム状で、両端に紐かけを作り出す。例物桶の蓋と考えられる。完存する323で計測すると紐かけを除く径は17.5cmで、他のものも大体近い。

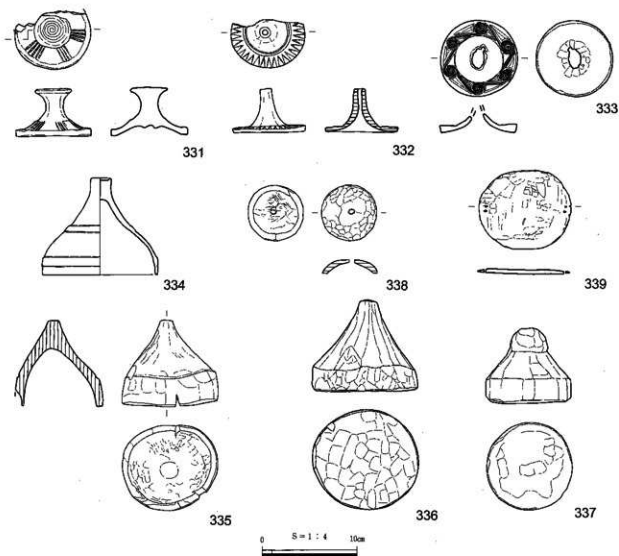
327は器高の高いドーム形を呈する。頂部から口縁部にかけて器壁が薄くなるとともに、裾広がりととなる。内面には加工痕を粗く残す。

328は栓蓋に分類されるもので、水平に延びる口縁の内側に3cmほどの立ち上がり进行を設ける。立ち上がり部分での径20.7cm、口縁部全体で測ると28.7cmと大きい。外面には赤色塗彩が施される。329も口縁部の構造は同じである。遺存状態は悪いが、両端に紐かけが復元できる。

330は未製品である。笠形のものを作ろうとしたのであろう。

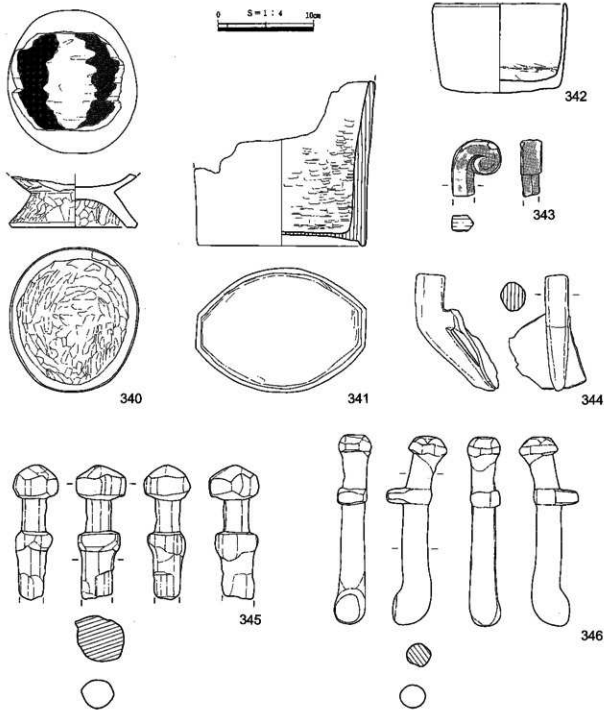
第301図には小型の蓋を掲げた。331～333はつまみを作り出したもので、外面には放射状の直線文、鋸歯文、





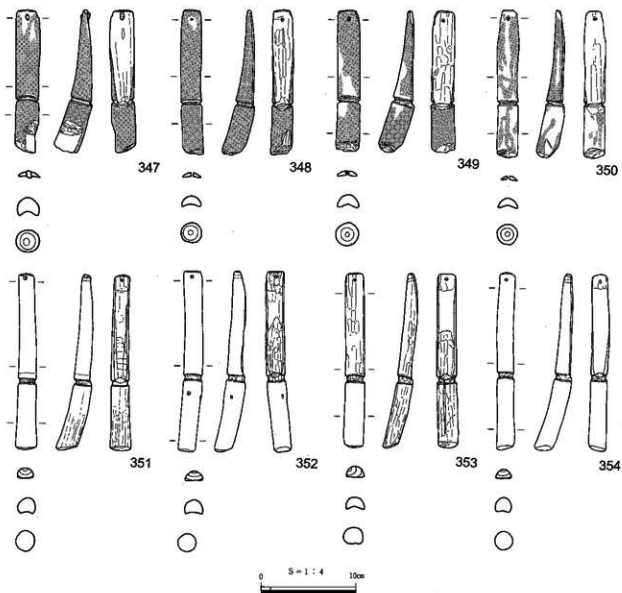
第301図 木器・蓋 (3)

発掘番号	種別	図面記号	遺跡・層位	時期	寸法	重量	取上番号
319	蓋	8底	8D64	弥生後期初期～後葉	径15.7, 高さ約11.1, 蓋1.8, 厚0.8	少ク少ク重	3455
320	蓋	3底	8D20	弥生後期初期～後葉	高3.2, 厚0.9		3025
321	蓋	6底	8K61	弥生中期中葉～後葉	高6.5, 厚1.0	ス干	1927
322	蓋	6底	8D64	弥生後期初期～後葉	厚0.5～		3447
323	蓋	4底	8D11	弥生後期初期～後葉	径17.8, 高さ約10.6, 厚2.4, 蓋1.6, 厚0.8～	ス干	3860
324	蓋	4底	8D11	弥生後期初期～後葉	径24.6x19.6, 高4.2, 厚1.8	ス干	8056
325	蓋	8底	8D38	弥生後期初期～後葉	径18.2x16.0, 高3.4, 厚1.0		3040
326	蓋	6底	8D69	弥生後期末～古墳初期	径22.7x16.4, 高4.0, 厚1.0, 厚0.8		2783
327	蓋	3底	不明	不明	径14.4, 高3.3	ス干	2362
328	蓋	6底	8D38	弥生後期末～古墳初期	径18.7x16.8, 径16.7, 高6.4, 厚0.8～	少ク少ク重	3034
329	蓋	5底	8K143	弥生後期末～古墳初期	径14.4, 高さ約11.3, 口径11.8, 高2.1,		908
330	蓋・木製品	7底	K2	弥生中期後葉	径14.4x13.5, 高4.7		4244
331	蓋	8底	8D64	弥生後期初期～後葉	径16.0, 高4.0, つまみ縁幅1.2, 厚0.5～		3487
332	蓋	7底	J層	弥生中期後葉	径7.8, 高4.7, つまみ縁幅1.2, 厚0.5～		3786
333	蓋	7底	8D27	弥生中期後葉	径8.1, 高2.1, 厚0.3～		4287
334	蓋	7底	8D27	弥生中期後葉	径12.5, 高10.8, つまみ縁幅1.2, 厚0.3～		4054
335	蓋	7底	J層	弥生中期後葉	径10.1x8.8, 高3.2, つまみ縁幅1.2, 厚0.3～		3837
336	蓋・木製品	7底	J層	弥生中期後葉	径11.2x10.8, 高3.3, つまみ縁幅1.8		3802
337	蓋・木製品	7底	8A26	弥生中期後葉	径3.2x3.0, 高1.0		3812
338	蓋	3底	8D20	弥生後期初期～後葉	径5.9x5.8, 高1.4		2142
339	蓋	7底	J層	弥生中期後葉	径3.7x3.2, 厚0.4		4462



第302図 木器・その他容器(1)

器物番号	器種	器底区	遺構・層位	時期	寸法	材質	取上番号
340	その他容器	8区	SD38	弥生後期初層～後葉	高5.41, 底径13.2x13.6, 胴径5.7		33384
341	その他容器	7区	J層	弥生中期後葉	高17.6, 底径18.0x13.1, 胴高0.6, 厚0.3~		36822
342	その他容器	8区	SD38	弥生後期初層～後葉	底元口径13.6, 底元底径12.4, 高8.5, 胴径8.1, 厚0.4~	クワ科クワ属	33135
343	把手	3区	SD20	弥生後期初層～後葉	高6.1, 把手径2.3x1.6	ケヤキ	20816
344	把手	7区	SA20	弥生中期後葉	高12.3, 把手径3.1x2.5		38388
345	把手	4区	弥生6期東土	弥生後期～古墳	高14.3, 握り部径3.4	スギ	2270
346	把手	4区	SD11	弥生後期初層～後葉	高20.13, 握り部径8.9, 径2.6	スギ	3605



第303図 木器・その他容器(2)

器物番号	種類	器名	器名(別名)	材料	寸法	備考	出土層	出土番号
347	容器的部	7区	乙種	弥生後期初層～古墳初層	長15.0、幅2.4、握部部長10.0		イヌガヤ	36081
348	容器的部	7区	乙種	弥生後期初層～古墳初層	長10.2、幅2.1、握部部長10.6		イヌガヤ	36086
349	容器的部	7区	乙種	弥生後期初層～古墳初層	長14.8、幅2.4、握部部長10.0		イヌガヤ	36088
350	容器的部	7区	乙種	弥生後期初層～古墳初層	長15.5、幅2.1、握部部長10.0		イヌガヤ	36086
351	容器的部	7区	H層	弥生後期	長12.7、幅2.2、握部部長11.5			36339
352	容器的部	7区	H層	弥生後期	長19.2、幅1.8、握部部長11.2			36339
353	容器的部	7区	H層	弥生後期	長12.4、幅2.0、握部部長11.2			36339
354	容器的部	7区	H層	弥生後期	長12.2、幅1.8、握部部長10.9			36339
355	容器的部	8区	S064	弥生後期初層～古墳	長20.7、幅2.2、握部部長10.1		カヤ	36498
356	容器的部	7区	H層	弥生後期	長19.0、幅2.7、握部部長13.6			42057
357	容器的部	7区	J層	弥生中層後葉	長11.2、幅2.4、上端加工部長(1.8)			42299
358	容器的部	7区	I層	弥生中層後葉	長10.7、幅2.0、握部部長2.1			42144
359	容器的部	7区	J層	弥生中層後葉	長20.0、幅2.7、握部部長15.1、上端狭り長1.1			36613
360	容器的部	7区	J層	弥生中層後葉	長20.3、幅3.0、握部部長15.5、上端狭り長0.4			36631
361	容器的部	7区	J層	弥生中層後葉	長20.6、幅2.8、握部部長15.2、上端狭り長0.6			36622

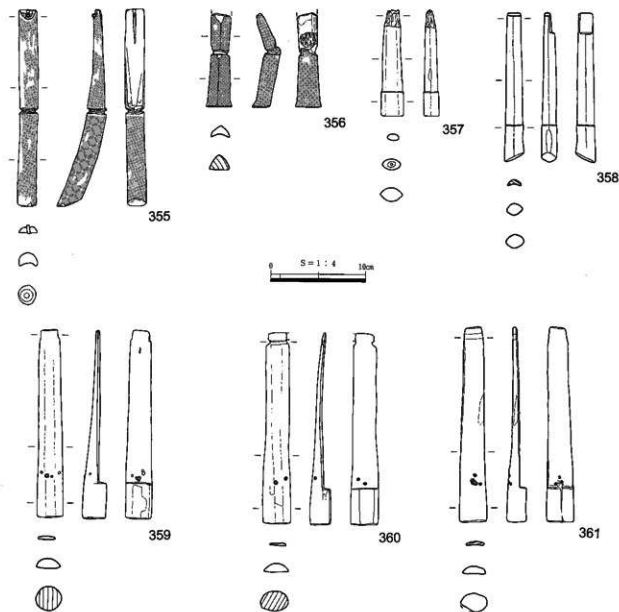
連続渦文がそれぞれ見られ、作りもいい。334～337もつまみを意識したもので、逆梳形をなす。336、337がその未製品で、作りは第286図に掲げた梳形容器に似るところがある。

その他容器 (第302～305図) いくつかに分類した容器の器種に当てはまらないものなどについて述べる。

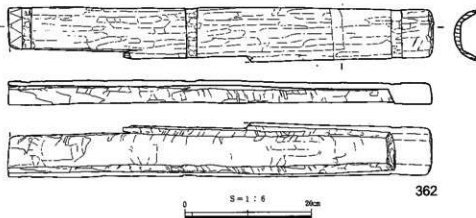
340は脚台付き容器である。本体のほとんどを欠失しているため全体の形状は不明である。内面に黒色塗彩が残る。341は直立する器体をもつ容器で、底部面外縁を0.5cmの高さで高台状に作る。上面観は概略楕円形だが、両側縁は平坦に仕上げる。342は小型方形容器で、口径13.6cm、器高9.5cmを測る。

343～346は把手である。343は頭部を巻き込むように仕上げたものである。赤色塗彩が施される。344は屈曲して立ち上がるもので、頭部をまっすぐとして図化した。これだと容器本体がかなり傾くことになる。345、346は頭部を有頭状に作る。

第303、304図は容器の脚と考えている。356までが弥生後期～古墳初頭に属し、それ以外は中期後葉の遺物包含層より出土した。いずれも容器本体と組み合わせたと思われる面をもち、目釘あるいは緊縛により固定したようである。後期～古墳初頭のものには赤色塗彩されるのが一般的で、側面観は反り返る形となる。中期のものは反り返らない。これらはセットで用いられたと思われ、347～350、351～354、359～361がそれぞれまとまって出



第304図 木器・その他容器 (3)



第305図 木器・その他容器 (4)

発掘番号	器種	出土区	遺構・層位	時期	法	量	附	取上番号
362	その他容器	7区	J層	弥生中期後葉	長66.7、幅12.5、高3.4、深3.0、契跡溝幅1.4~1.7			362B3

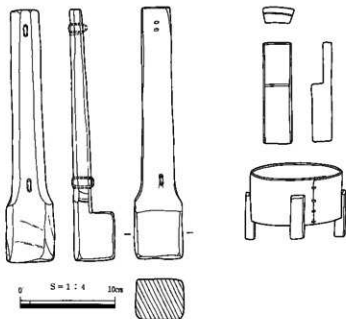
土した。これにより後期～古墳初頭では4本、中期では3本がセットとなっていたことがわかる。問題は容器との関係なのであるが、容器本体といっしょに出土した例がなく、また容器の中にこのような脚の付くものと想定されるものも見当たらず、具体的に知ることはできない。三重県六大A遺跡では古墳中期以降のものであるが、似たものがある⁽³⁴⁾。容器と組み合わせるための面をもち、皮紐結合で固定するものである。これについては民俗例をひきながら曲物の脚とされている⁽³⁵⁾ (第306図)。青谷上寺地例の容器本体が曲物であったかは分らないが、参考となるものである。

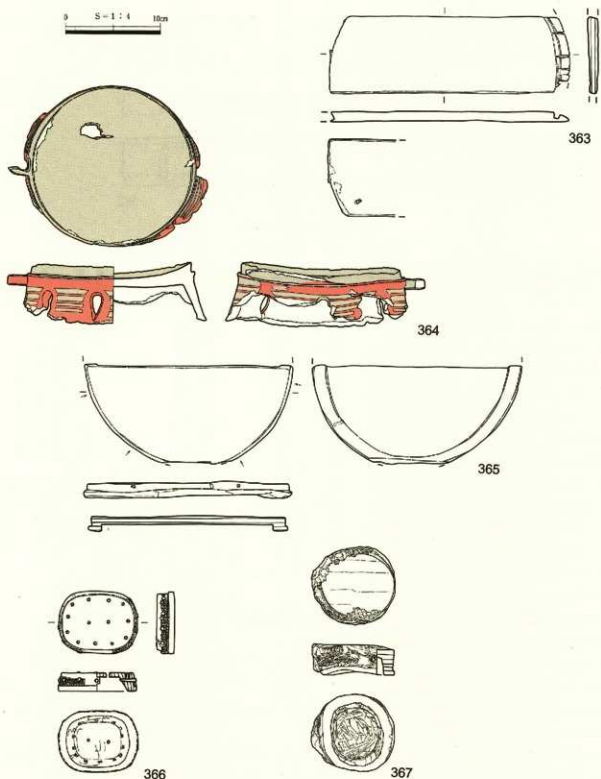
362は筒形容器の蓋と考えられる。半円柱状の器体を削り抜いたもので、上面には緊縛のための溝が3ヶ所に認められる。

曲物 (第307、308図) 筒状の側板と底板を別に作ったうえ組合せる容器を曲物とする。ここに掲げたものは曲物を構成する一部分であったり、曲物と呼んでいい疑問であるが構造上類似するものである。

363は弥生後期～古墳初頭のSD11より出土したものである。底板の一部で、周縁を巡る溝のあり方は「木器集成」の分類でBに当たる。側板をはめ込む溝から裏面に向けて斜めに目釘が打たれている。

364は弥生後期初頭～後葉のSD69-1より出土した。裾広がりとなる脚台をもち、内面底部は周縁にかけてせり上がるカーブを描く。底部周縁は段が設けられており、側板の一部が残っている。脚台部には8ヶ所に逆涙滴状の透かしが削り込まれ、前面に黒漆を塗ったうえで赤漆で直線文等の文様を描く。わずかに残る側板にも同様の彩色がみられ、器体全体に装飾が及んでいたことが想像できる。側板の結合は目釘を使用しておらず、段の部分にも黒漆が塗られていることから、こうしたもので塗り固めていたものと思われる。脚台部の一端に環状の作り出しがあるが、機能は不明である。365も底板で周縁には段が巡る。側板は残っていないが、残存している範囲で4ヶ所に目釘孔が認められる。裏面には高台状の作り出しがあり、底板とみなした根拠でもある。中期後葉の遺物包含層より出土した。

第306図 六大A遺跡の曲物脚と民俗例による使用法
(註 (34) 文献より一部改変のうえ再トレース)



第307図 木器・曲物(1)

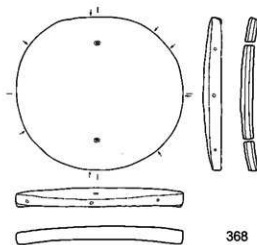
検出番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法	量	樹種	出土番号
363	曲物底板	4区	SD11	弥生後期初段～後葉	復元底径26.7、溝幅0.5		スギ	2763
364	曲物底板	6区	SD69	弥生後期末～古墳初期	底径16.7、復元脚径18.1、脚高3.7、枠装飾部高1.0、幅0.3		モクレン科モクレン属	27729
365	曲物底板	7区	I層	弥生中期後葉	底径22.0、脚幅0.9、脚高0.7、枠装飾部高0.9、幅0.2			42132
366	曲物?	7区	J層	弥生中期後葉	高2.0、底径8.3×6.5、脚高1.5、枠装飾部高1.4、幅0.2		クワ科クワ属	36772
367	曲物?	国津3区	I層相当	弥生中期後葉	高3.2、底径8.8×8.2、脚高1.9、枠装飾部高2.2、幅0.2			13285
368	曲物蓋	7区	J層	弥生中期後葉	径17.6×16.2、高2.0、厚1.4			42387
369	曲物蓋	7区	SD27	弥生中期後葉	復元径24.1、高2.1、枠装飾部高1.1、幅0.2、枠残存幅6.7			43252

366、367は小型で曲物としていいか疑問だが、周縁に段を設け目釘で固定するという手法が共通するため、ここで述べておく。366は底径8.3cm、器高2.0cmで、底部裏面は高台状に立ち上がる。段の部分には目釘で固定された編み物が残る。目釘孔は周縁の段を巡るものが14個、底面の縁を巡るものが11個、中央部に2個認められ、大部分に目釘が残る。段の部分をよく見ると、編み物の内側に薄い板状のものが痕跡的に認められ、これが側板ならばその外側に編み物を取り付けていたことになる。底部内面の目釘はここに貼り付けられたものを固定していた可能性がある。367も366同様のものである。周縁を巡る段には目釘が8ヶ所以上打ち込まれ、取り付けられた編み物を固定している。本例では編み物の内側に側板らしいものは見られない。底部内面に目釘の痕跡はない。

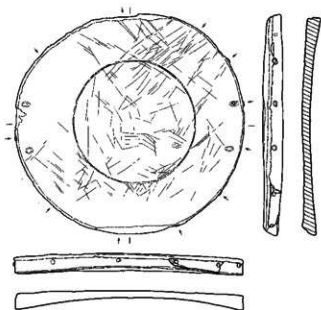
第308図は蓋と考えられる。368は断面図に示すとおり周縁より中心が高くなるようなカーブを描く。周縁には段は設けられていないが、8ヶ所の目釘孔（矢印部分）が認められる。中心からやや離れたところに1対の小孔をもつ。369も器体が1同様のカーブを描く。周縁に段が設けられ、11ヶ所の目釘孔を認めることができる。ここに側板の一部が残っている点、重要である。周縁部に接して相対するところに2孔1対の小孔があることから蓋と判断しているが、そうすると蓋に側板を固定する場合があったこととなる。

以上のように完全な状態で残っていたものはなかったのであるが、本遺跡の出土例により確実な曲物底板が弥生中期後葉にまで遡ることが明らかになったといえる。

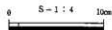
桶（第309～311図） 朝物桶と呼ばれるもので、前述したように中期の桶形容器を祖形にもつ。一般的な形態としては筒状の身で、内面下部に段を有する。底板は別に作られ、目釘などで固定される。内面に黒色塗彩を認めるものが一定量存在する。底板は内面の段に乗せられたのではなく、段よりやや下がった位置に取り付けられていたようだ。身の形状や大きさ、把手の形態などバリエーションが多い。北陸地方に見られる井戸杵として用いられた超大型のものは山陰地方にはない。385は本体自体も焼けているが、中に炭化米が入っていた。桶の内容物を考える好例である。



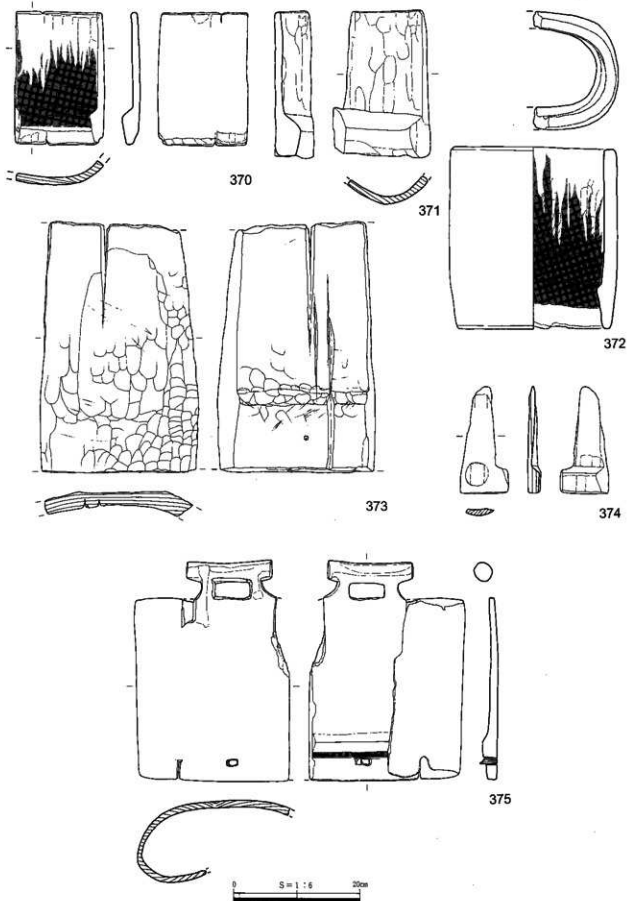
368



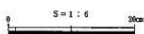
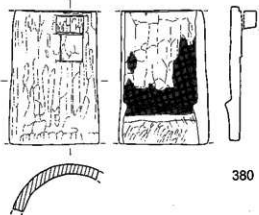
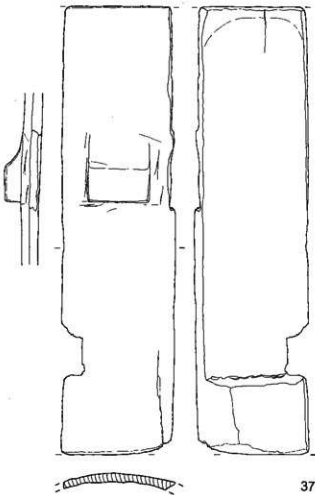
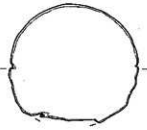
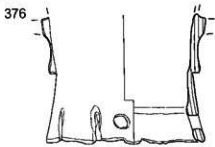
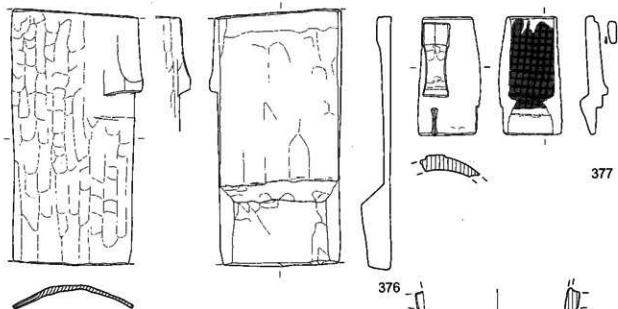
369



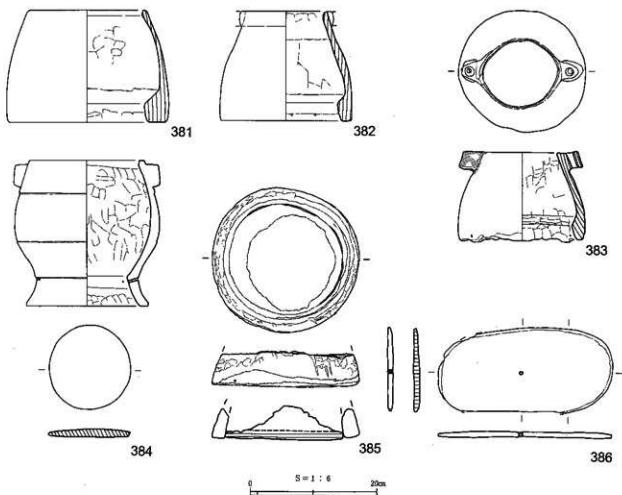
第308図 木器・曲物（2）



第309圖 木器・桶(1)



第310圖 木器・桶 (2)



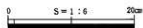
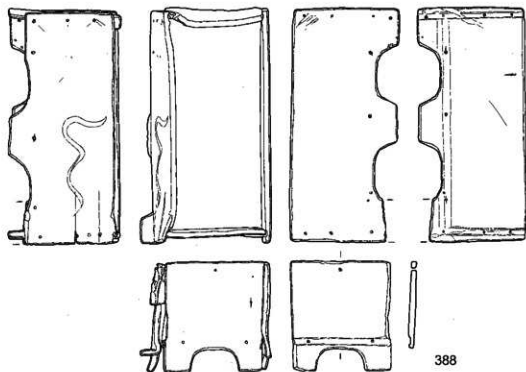
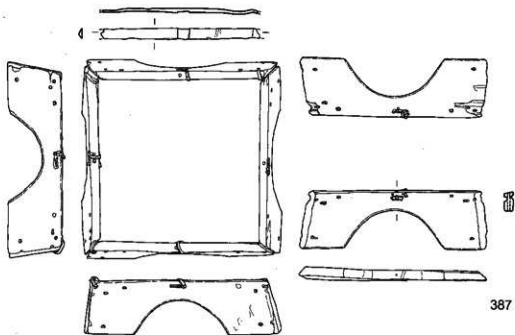
第311図 木器・桶(3)

図番	種別	数量	調査区	遺跡・層位	時期	寸法	材質	出土番号
370	桶	4区	SD11	弥生後期前期～後葉	高21.4、胴口までの高21.7、着色部までの高3.0、厚1.1	スギ	4604	
371	桶	4区	SA4～6	弥生後期前期～後葉	高23.9、厚1.2	スギ	3886	
372	桶	8区	SD69	弥生後期末～古墳前期	復元口径27.2、高29.2、着色部までの高3.2～4.1、厚2.1		2763	
373	桶	4区	SD11	弥生後期前期～後葉	高39.8、厚2.0		3493	
374	桶	4区	SD11	弥生後期前期～後葉	高17.2、厚0.5、把手径2.7		4290	
375	桶	8区	SO36	弥生後期前期～後葉	高34.8、着色部までの高1.7、目釘長(2.7)、把手径13.3、蓋板径13.0		30262	
376	桶	8区	SO36	弥生後期前期～後葉	高40.8、厚1.1		29337	
377	桶	8区	A層	弥生後期	高19.0、着色部までの高4.4、厚2.2		30296	
378	桶	4区	SA4～6	弥生後期前期～後葉	高71.8、厚1.3		2646	
379	桶	8区	SO36	弥生後期前期～後葉	復元口径23.6、高(20.6)、蓋径25.0、目釘孔までの高2.6、目釘孔径2.5、蓋板径20.2、厚0.8		34820	
380	桶	8区	SO36	弥生後期前期～後葉	復元口径19.0、高21.6、着色部までの高4.8～5.0		33386	
381	桶	8区	SO36	弥生後期前期～後葉	口径18.3、高18.0、復元蓋径25.8、厚0.5		29222	
382	桶	8区	SO36	弥生後期前期～後葉	口径15.1、高17.7、直径11.2、厚1.1、目釘までの高1.0		27412	
383	桶	4区	SD11	弥生後期前期～後葉	口径11.8、高14.8、直径19.7、厚1.0、目釘までの高1.1		2591	
384	桶	8区	A層	弥生後期	口径18.2、高23.2、幅23.1、蓋径19.8、目釘までの高3.8、厚2.4、蓋板径13.5、厚1.2		27447	
385	桶	8区	SO36	弥生後期前期～後葉	蓋径23.4、高19.7、底穴径約15.3x14.2、高4.0	スギ	27129	
386	桶蓋板	3区	SO20	弥生後期前期～後葉	径27.8x13.9、厚0.8		21320	

箱(第312～314図)「木器集成」では雑具の欄で述べられているものである。ここに掲げたものも必ずしも底板や側板がセットになるわけではなく、正確には箱状木製品といったほうが妥当かもしれない。

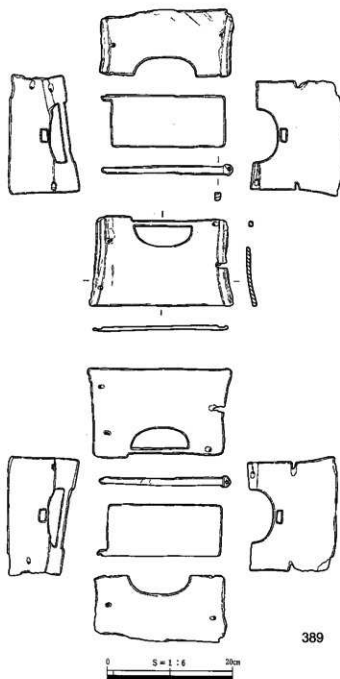
387、388は394の琴と並んで出土したものである(第315図)

387は復元した際の上辺28.2cm、底辺31.5cm、高さ8.9cmを測る。上辺より長い底辺の中央を半円形に挟り脚を作り出すとともに、両端の内側を斜めにカットしたものを4枚組み合わせている。それぞれの板に孔が空けられ



第312図 木器・箱(1)

標識番号	器種	調査区	遺積・層位	時期	法量	材質	取上番号
387	箱	7区	J層	弥生中期後葉	上縁径27.6x28.2, 下縁径31.5, 高さ9, 厚1.5	スギ	38585
388	箱	7区	J層	弥生中期後葉	長37.4, 幅20.6, 高17.6, 厚0.6, 組合せ溝までの高4.1	スギ	38875
389	箱	8区	SD38	弥生後期初段~後葉	上縁長22.6, 下縁長21.0, 高14.4, 厚0.5, 脚高4.9	スギ	34543



第313図 木器・箱 (2)

合わされ、側板の長辺は3脚に、短辺は2脚に仕上げ、底板をはめ込む溝を設ける。各部の結合は目釘によっており、側板同士は4個、長辺の側板と底板は3個、短辺の側板と底板は2個の目釘で固定されている。蓋がついていた痕跡はないが、短辺の側板の上辺中央に1対の小孔がある。1枚の側板にヘビのようなものが彫刻で描かれている。

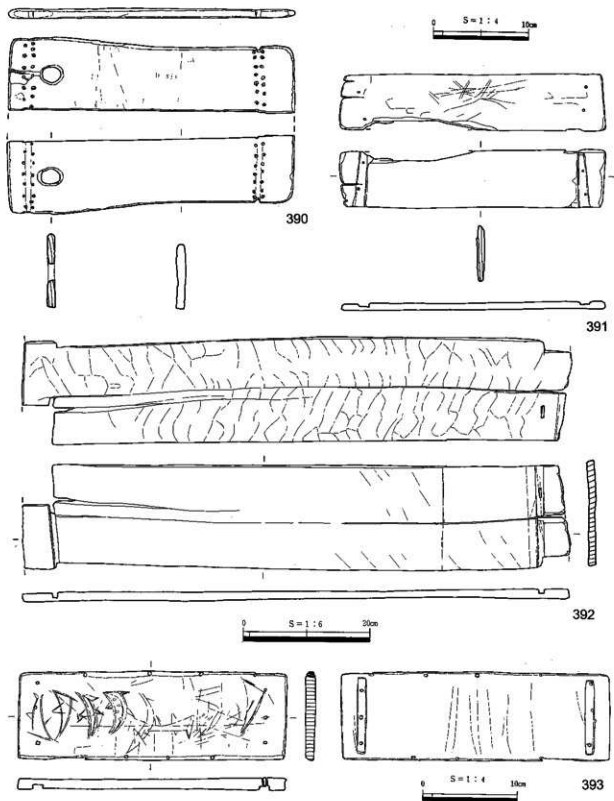
389は弥生後期のSD38より出土した。破損、変形が大きい。4枚の側板と1枚の底板よりなり、残りのいいもので見ると上縁に向かい外反していき、底辺を半円形に削り込み脚を作る。長辺の側板には内面両端に溝を設け、短辺の側板をはめ込んでいたようである。短辺の下端中央には方形孔が穿たれ、棒状の材を差し込んでいたらしい。目釘孔らしきものやそれより大きめの孔が所々に見られるが、規則性がなく、結合方法は定かでない。

第314図は箱と思われる部材である。391は結合のための溝が両端に及んでおり、側板と思われる。392も同様か。390は緊縛用と考えられる孔が両端に並ぶが、箱であるか疑問な部分もある。393は結合のための溝が両端に

ているので、鈕結合であろう。上辺中央部分には方形孔があり、出土時には1本しか残っていなかったが、そこに細い棒状のものが差し込んであった。方形孔には目釘が打たれており、上辺には相対する側板を十字に結ぶ材が合ったと思われる。鈕孔は両端の上下に1個ずつと上辺に沿って3個の計7個がそれぞれの側板に認められる。両端のものは隣り合う側板を結合するためのものであろう。上辺に穿たれた3個の鈕孔のそれぞれの間には鈕孔と同じ方向に目釘が打たれており、上辺の外側(内側は棒状の材があるため考えにくい)に何かを取り付けていた可能性があるが、側板そのものにそのような痕跡はない。底辺は組み合わせた状態で水平となるよう、端部を斜めにカットしている。本例は上記の特徴から四方転びの箱と呼ばれるものに極似する³⁸⁾。しかし四方転びの箱の他の例は4～5世紀に限られており、弥生中期後葉の遺物包含層より出土した本例は極端に古い。小松市八日市地方遺跡に上辺より底辺の長い箱形製品の側板があるが、「いわゆる『四方転びの箱』とは技術的には異なる」と述べられている³⁹⁾。出土状況が等々と並んでいたことから後の時代に掘り込まれた遺構に伴うものという意見もあるが、出土した層は植物が腐食したものを多量に含んでおり他の土との区別は容易であったのに加え、上層はI層と呼んだ砂層にバックされており、I層も中期後葉の遺物包含層なのである。したがって弥生中期にこのような箱があることの意義を慎重に検討しなければならない。

388は復元した長さ37.4cm、高さ17.6cm、幅20.6cmを測る。4枚の側板と1枚の底板が組み

389



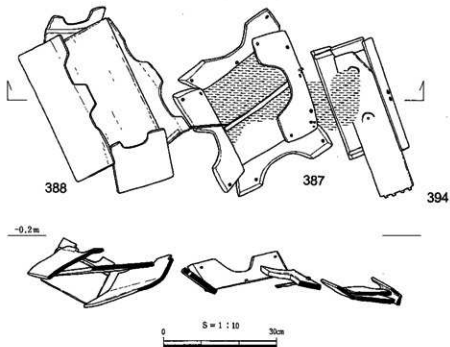
第314圖 木器・箱(3)

標識番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	備註	取上番号
390	箱	4区	SA4-6	弥生前期初段~後葉	長45.7、幅(11.8)、厚1.5、裝飾部幅0.9、小孔徑0.4		2773
391	箱	7区	I層	弥生中期後葉	長42.5、幅9.1、厚1.2、組合せ溝幅1.5		40904
392	箱	4区	不明	不明	長85.8、幅(16.5)、厚1.8、組合せ溝幅1.0		3241
393	箱	7区	J層	弥生中期後葉			42348

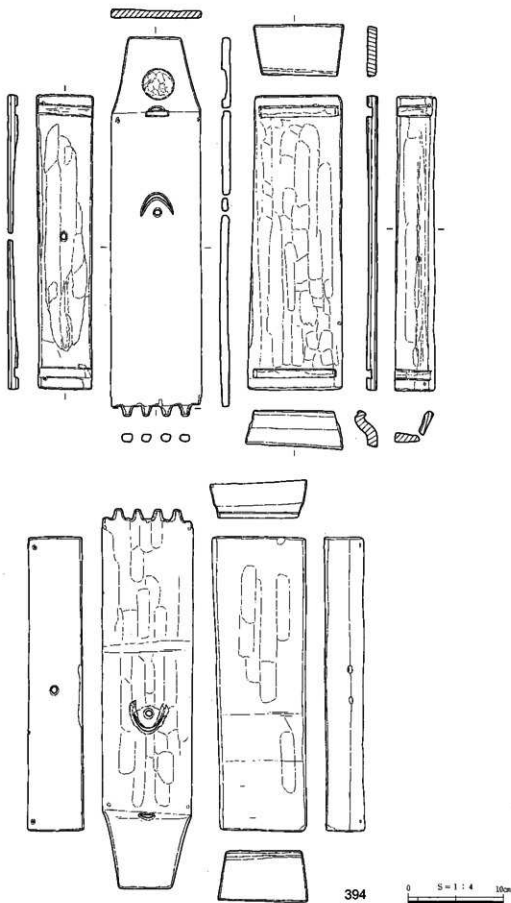
及んでいないため、側板ではないと思われる。絵画の存在から天板と判断しているが、目釘のあり方からこの板は側板と固定されていたことが分かり、天板であれば開閉が不可能である。底板という可能性も残る。目釘は長辺側には4個、短辺側には3個をそれぞれ認めることができる。表面には魚の線刻絵画があり、第116図に掲げた壺形土器に描かれたものと同様、サメと思われる。確認できるのは7匹で、図面の左から下向き、上向き、上向き、上向き、下向き、横向き、上向きとなる。サメが群れ泳いでいるようであり、躍動感にあふれる。線のあり方は各種あり、鋭く細い線で刻むものと輪郭線を太くし輪郭線の間を掘り込むもの、鏝を含め体部全体を彫りくぼめるものがある。サメの表現以外にも鋭い条線が多数見られる。絵画の見られる箱形製品（琴と分かるものを除く）は兵庫県袴狭遺跡³⁹⁴や前原市上鐘子遺跡³⁹⁵、八日市地方遺跡³⁹⁶に類例がある。すべて側板で、袴狭例と上鐘子例は琴板の可能性が示唆されている。側板以外に絵画が描かれるのは青谷上寺地例のみということになるが、先に述べたように底板と考えられなくもないとすれば琴との関連も視野に入れておくべきであろう。とすれば確実に琴の部材ではないと判断される箱形製品に絵画が描かれるのは今のところ八日市地方例のみということになる。

楽器

琴（第316～318図） 394は槽作りの琴の部材がそろって出土したものである。第315図に示したとおり箱と並んで検出された。天板1枚、底板1枚、側板4枚の計6枚で構成される。天板は頭部はD類に分類され、半月形の集弦孔が空けられる。それとは別に円形の削り込みがある。尾部の突起数は4である。胴部には三日月形と円形の削り込みがあり、姫原西遺跡で「日月を表した」とされたものに類似する³⁹⁷。側板を受けるための溝は彫られていない。底板には側板を受けるための溝があり、内面は広い範囲を浅く削り込んでいる。長辺側の側板は短辺側の側板（小口板）を受ける溝を彫り、底板同様内面を削り込んでいる。左側面に1個、右側面に2個の孔が穿たれる。共鳴孔か。小口板は逆台形に作り、幅の狭い方を底板にはめ込み、広い方に天板を乗せる。弥生・古墳時代の槽作りの琴は長辺側の側板と底板が一体となった共鳴槽であるものがほとんどであるとされているが、本例はそれぞれを別に作る箱形のものである。姫原西例や絵画の描かれた袴狭例、上鐘子例が琴板ならばやはり別作りということになる。組み合わせで復元したものを第317図に示した。底板と側板は溝との関係で容易に復元できるが、天板がどの位置にくるかが問題となる。この琴の結合方法を見ると、すべての部材の中で結合用の



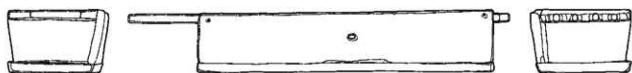
第315図 琴、箱出土状況



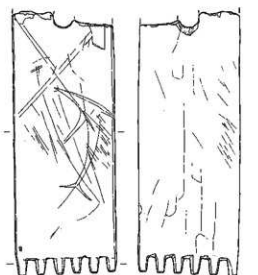
394

0 S=1:4 10cm

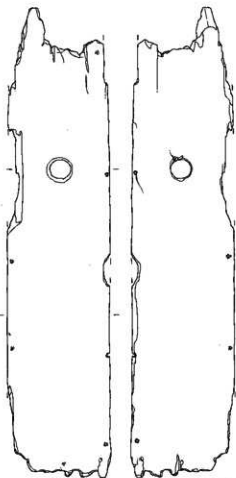
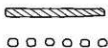
第316圖 木器・琴(1)



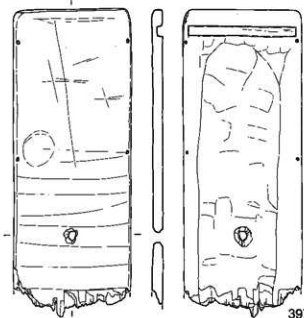
394



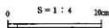
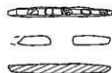
395



396



397

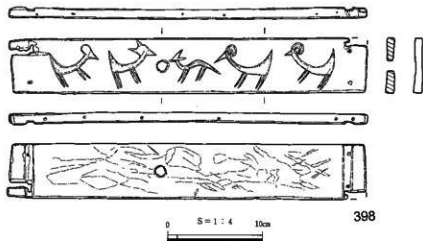


第317圖 木器・琴(2)

孔と思われるものは天板の集弦孔横に1対、尾部突起横に1対、長辺側の側板の上辺端部に1対の8ヶ所しかない。これらに目釘は残っており、他の部分にも目釘が打ち込まれた痕跡はない。天板の4孔と側板の4孔はそれぞれ対応する位置にあり、これより復元すると底板に小口板をはめ込み、側板を装着したものに天板を乗せ、鈕結合したと考えられるのである。このようにして天板の位置が決まってみると、尾部側は突起周辺が少し側板からはみ出す程度であったことが分かる。

395は頭部を欠く天板で、尾部突起は6である。胴部には円形と思われる孔が認められる。側板を受ける溝はない。残存している範囲では結合用の孔は左側縁の突起近くに1個見られるのみで、1同様側板の上に乗せられ、四隅を鈕結合したものである。表面には絵画が描かれる。壺形土器に描かれたものと極似し、サメと考えられる。湾曲する体部の表現は躍動感を感じさせる。線は鋭く細いもので、頭部から背鰭、胸鰭にかけて片切り彫りとなる。396は欠損部が多いものの残存範囲で49.7cmを測る大型の天板である。尾部の突起は6と推定される。胴部には円形の孔が穿たれる。両側縁に一部目釘の残る孔があり、片側6ヶ所、計12個の目釘孔が復元できる。側板を受ける溝がないのは同様だが、先に述べた2例と結合方法がやや異なる。397は側板を受ける溝の様子から底板と考えられるものである。内面を浅く削り込んでいることを重視して琴の部材と考えた。胴部には円形の孔を見ることができる。小口板をはめ込むのみで目釘で固定しないのは1と同様であるが、残存範囲で側縁に3対の孔があり、これは径から目釘孔と思われ、長辺側の側板は目釘で固定していたのであろう。裏面には器体に直交する方向に多数の条線が刻まれている。

398は側板である。小口板を受ける溝は上下端部に及ぶ。内面を浅く削り込んでいることと装飾性から琴の部材とみている。一部目釘の残る小孔が多数あり、他の部材と目釘で固定されていたことが分かる。小口板を固定する目釘は2個ずつ、底板を固定する目釘は6個で、天板も同じであったようだ。欠損が及んでおり定かでないところもあるが、上辺の両端に目釘孔より火きめの孔が1対穿たれており、この部分で天板と鈕結合していた可能性もある。胴部中央付近には円形の孔を穿つ。表面には5匹の動物が描かれている。中央のものは碗形容器に描かれたものと同じで、シカか。これを扶んで対峙する動物は理解に苦しむ。4本足で尾が立ち、長めの頸部を



第318図 木器・琴(3)

標本番号	整理	調査区	遺構・層位	時期	度量	材質	取上番号
394	等	7区	J層	弥生中期後葉	上唇:長40.2、幅9.6、厚0.9、突起長1.0、内彫り径3.3 底板:長31.1、幅8.7~8.3、厚1.1、組合せ溝幅0.9~1.1 側板:長31.1、幅8.0、厚1.0、組合せ溝幅1.1 小口板:上縁長9.4、下縁長7.9、高5.4、厚1.0	スギ	36590
395	等	7区	J層	弥生中期後葉	長(27.9)、幅(10.5)、厚(0.9)、突起長(1.8)		36553
396	等	7区	I層	弥生中期後葉	長(40.7)、幅(11.0)、厚(1.1)		36536
397	等	7区	N層	弥生中期中葉	長(32.6)、幅(12.4)、厚(1.3)、組合せ溝幅(1.1)		36491
398	等?	7区	BD27	弥生中期後葉	長37.8、幅5.8、厚1.0、組合せ溝幅1.0	スギ	43000

もつ。頭部の表現は先端が尖るのを除けばそれぞれ異なり、右側の2匹は同心円状に描かれる。左側の2匹も円形に描かれるが内部を彫りくぼめている。中央よりのものには耳か角か分からないが、突起状の表現がある。4本足が突っ張るような表現は弥生絵画のシカに通用のもので、ここに描かれた動物もシカとみるのが妥当なのかもしれない¹⁰⁰。弥生絵画のモチーフは基本的に同じ場合が多いなかで、本例はサメの絵画とともに地域性を示している可能性がある。

祭祀具

武器形 (第319、320図) 399～404は剣形である。399は他のものと異なり身の部分が厚いが、鏃の表現はなされている。これを除いて弥生中期に属する。402は阿働線の袂りの特徴から、細形鋼剣か中細形鋼剣を模したものである。401、403、404は鉄剣がモデルか。405は先端部の幅が広いことと身と茎の境があいまいであることから、広形胴矛を思わせる。

406、407は戈形である。407は別作りの柄とセットで出土した。身には緊縛用の孔が表現されており、実際に何かで縛られていたものかもしれない。武具の項で簡単にふれたが、身と柄の装着角度は本来鈍角になるものと思われるのであるが、本例は鋭角になるのが気になる。406は茎が欠失するが407の身とほぼ同形、同大である。身は単独で出土しても武器形と認識できるが、柄はそうはいかない。一端に方形孔のある小型棒状製品は注意が必要である。

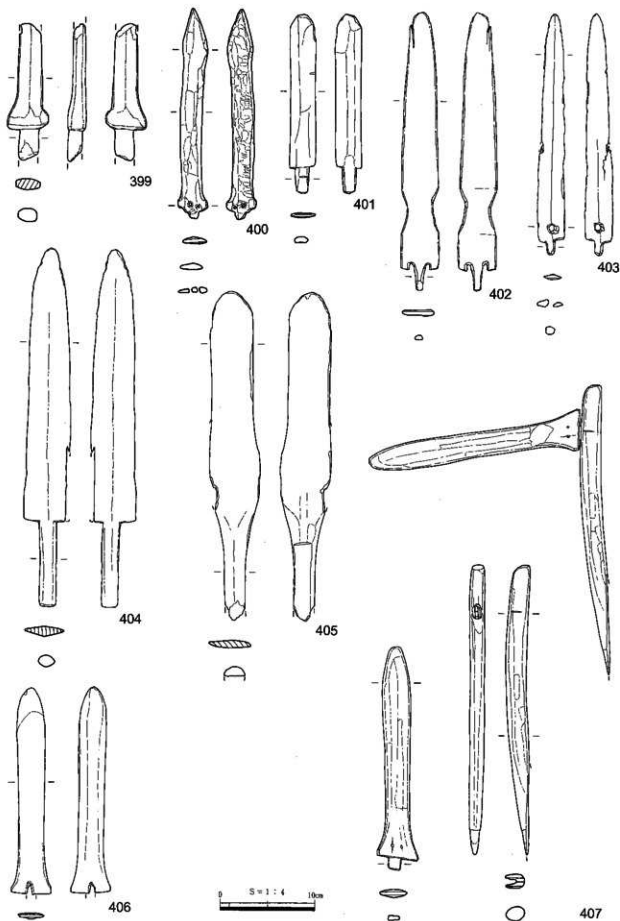
408～410は刀形である。把の作りに違いがあり、410のように装飾性をもたせたものもある。411は刃の作り出しがなく広葉樹製ということもあり、儀仗とすべきものであろう。

農具形 (第321図) 412～414を農具とは区別して形代と理解した。農具のうちでも特に鏝の形態をなすもので祭祀具と考えられる例がある。『木器集成』でも触れられているが、滋賀県服部遺跡では第23号円形周溝状遺構とされた6世紀代の円墳の周溝から出土した一木平鏝について、針葉樹製であることとともに、「使用された形跡が余りない」ことから「当初より祭祀用の供献品として原寸大に製作されたもの」と報告されている¹⁰¹。また滋賀県赤野井湾遺跡の報告で県内の農具を検討した阿刀弘史は組合せ式平鏝のうち鏝A・Bと分類したのについて、「いまだ鏝として完全に認定されていない」しうえて、他の耕起具とは異なり針葉樹を使用していること、完形のものや摩滅度の低いものがあること、分布が極端に水辺に集中することを挙げ、今後類例の増加により「出土状況の傾向がはっきりしてくれば、少なくともいわずの「鏝」という名称を用いることは再考を要するであろう」と述べている¹⁰²。1～3は赤野井湾で鏝Aと分類されたもので、やはり針葉樹を使用している。本遺跡においてスギの多様は認めるところであるが、鏝・鏝は広葉樹に限定されることを考えれば、このタイプだけ針葉樹を使用することに説明がつかず、耕起具とは区別しておきたい。

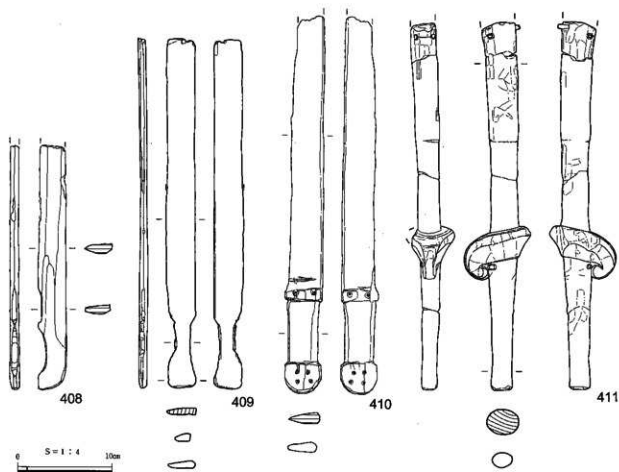
動物形 (第322図) 415～418は鳥形である。いずれも板作りで厚手の1415、416は袂りこみにより頭部と胴部を区別する。417、418は薄く、頭部と胴部の区別がない。翼や柄を装着した痕跡は見当たらない。

419は一見何を表しているかよく分からないのであるが、表面の線刻絵画がヒントを与えてくれる。この絵画は魚を描いたものと思われ、壺形土器や琴の天板に描かれたものと比較すると、頭部から背鰭にかけての表現や尾鰭の様子が簡略化されているとはいえ似ており、サメを描いている可能性が高い。それをふまえてこの製品を見ると、三角形に作り出した部分が左右（図面では上下）非対称で、描かれたサメの頭部に当たっているのではない。又状に作られた部分は尾鰭と見えないだろうか。すなわちこの木製品を魚形と理解するのである。本遺跡では土器・木器・石器・土製品に絵画が描かれているが、サメとみられる意匠はすべてに存在し、本遺跡を特徴付けるものといってもいい。描くだけでなく、形代を作っていたとしても何らおかしくはないのである。

舟形 (第322図) 420、422は一端に1個ないし2個の小孔を穿つ。ともに船首と船尾の反りが大きい。421はそれに比べれば平坦で、底面はほとんど水平をなす。船首・船尾ともに粗く削り尖らせる。一方の側面には5個の小孔を認めるが、弥生時代の櫂でオールとしての使用は考えにくいことから、櫂を取り付ける孔を表現したものでないであろう。



第319圖 木器・武器形(1)



第320図 木器・武器形(2)

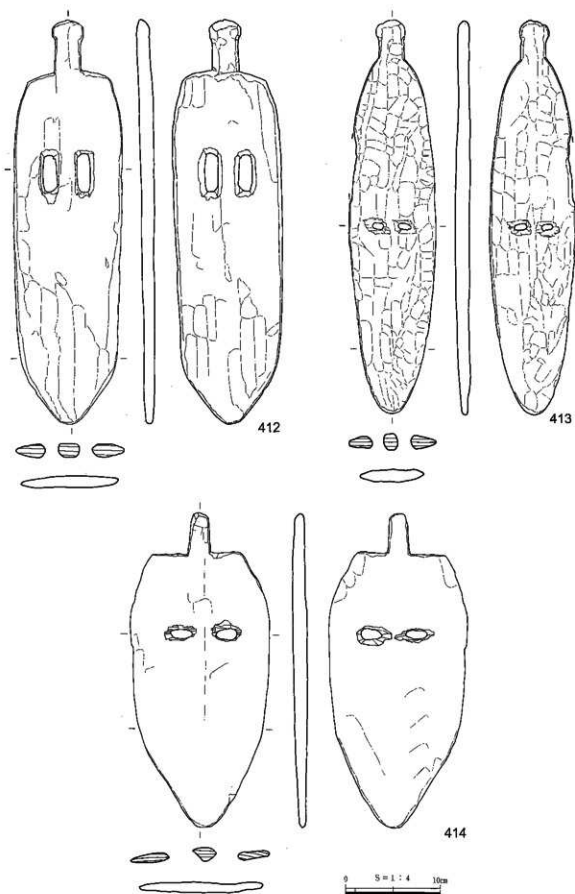
発掘番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	大きさ	備註	取上番号
399	武器形	4区	SD11	弥生後期前期～後葉	長14.6、幅4.2、身径2.5x1.2、重さ0.33、径2.0x1.4		5961
400	武器形	7区	K層	弥生中期後葉	長22.2、幅3.1、身径2.6x0.7、重さ0.8、径1.1x0.7		36743
401	武器形	7区	L層	弥生中期後葉	長18.9、身径2.8x0.5、重さ2.7、径1.4x0.7		36985
402	武器形	7区	L層	弥生中期後葉	長29.4、幅4.0、重さ0.8	スギ	40998
403	武器形	7区	I層	弥生中期後葉	長25.6、幅3.0、重さ0.8	スギ	40748
404	武器形	7区	SA69	弥生中期後葉	長36.0、身径4.1x1.1、重さ9.0、径1.7x1.2		42147
405	武器形	8区	SD38	弥生後期前期～後葉	長34.8、幅5.8、身径4.5x0.8、重さ2.2		33204
406	武器形	7区	GD27	弥生中期後葉	長22.0、幅4.2、身径3.0x0.8、重さ1.0		42247
407	武器形	7区	J層	弥生中期後葉	文：長23.8、幅4.4、身径3.0x0.8、重さ1.2、径1.2x0.5 附：長30.7、幅2.0x1.8、重さ0.7	スギ	42130
408	武器形	4区	GD11	弥生後期前期～後葉	長20.8、身径2.8x1.1、幅1.8x長7.5		5884
409	武器形	4区	SD11	弥生後期前期～後葉	長37.0、身径3.1x0.7、幅1.8x長6.1	スギ	2917
410	武器形	3区	SD20	弥生後期前期～後葉	長40.1、身径3.2x1.2、幅1.8x長8.5	スギ	21980
411	槍頭?	4区	GD11	弥生後期前期～後葉	長08.8、身径2.3x2.7、幅1.8x長11.5、径2.0x0.8	トナリ	5882

雑具

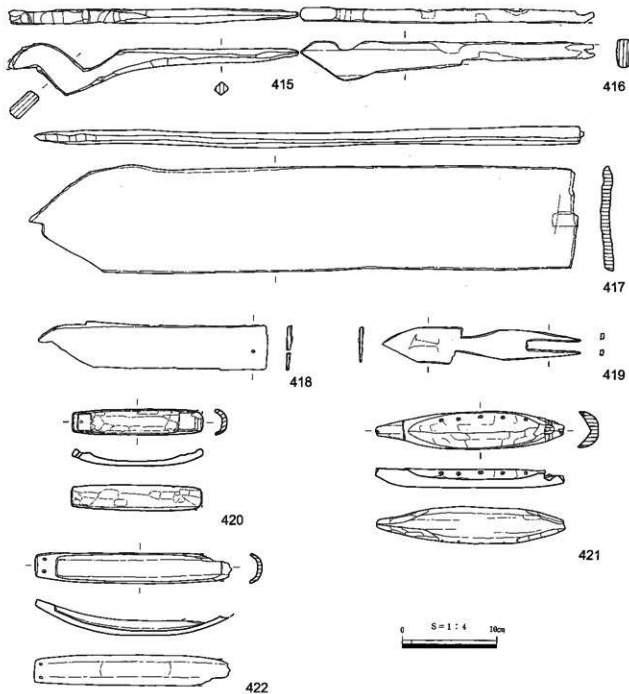
発火具(第323図) 423、424は火鑽白で423は33.7cmを測る。火鑽穴は3ヶ所に認められる。424は一部残りのみのもので、一段高く作ったところに火鑽穴を設ける。

425は火鑽杵としたが、確証を欠く。1.0cmに満たない角棒の先端が焼けているもので、その部分が摩滅しているの、回転運動を想定したのである。

把手・自在鉤(第323図) 426は盾の把手の可能性が考えられるものである。装着部分を平坦に作り、緊縛用の溝と鉋孔を備える。427は自在鉤としておく。意図的に曲げたかどうか定かでないが、全体を削るわけではなく、

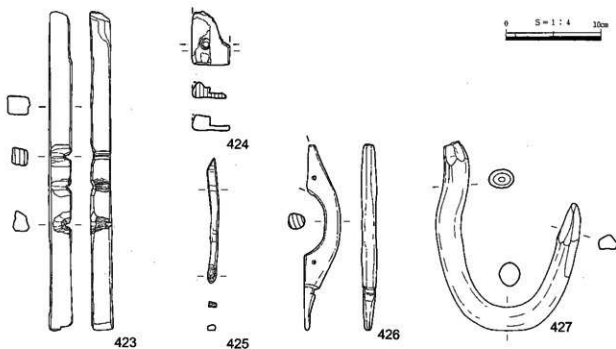


第321圖 木器・農具形



第322図 木器・動物形、舟形

図番	種類	出土区	遺物・層位	時期	法	量	種類	取上番号
412	器具形	7区	M層	弥生前期末～中期前半	長42.8, 身径11.5x7.0, 管柄軸長5.5, 幅2.8			40960
413	器具形	7区	L層	弥生中期後半	長41.8, 身径9.2x1.7, 管柄軸長4.8, 幅2.8			42484
414	器具形	7区	J層	弥生中期後半	長33.3, 身径14.5x1.5, 管柄軸長4.4, 幅2.2			36936
415	鳥形	4区	SD11	弥生後期初頭～後半	長30.5, 幅1.5, 高5.5		スギ	2890
416	鳥形	4区	SD11	弥生後期初頭～後半	長(31.1), 幅1.4, 高4.1		スギ	4424
417	鳥形	4区	SA4～6	弥生後期初頭～後半	長57.7, 幅1.0, 高11.0		スギ	4528
418	鳥形	4区	SD11	弥生後期初頭～後半	長24.3, 幅0.8, 高4.8		スギ	2969
419	魚形	7区	I層	弥生中期後半	長20.8, 幅3.8, 厚0.5			42061
420	舟形	7区	K層	弥生中期後半	長13.7, 幅2.7, 高1.8			38713
421	舟形	4区	乙種埋出	弥生後期～古墳前期	長19.9, 幅3.9, 高2.1			2222
422	舟形	7区	L層	弥生中期後半	長(20.7), 幅3.2, 高3.7			44024



第323図 木器・火鑽臼、火鑽杵、把手、自在鉤

採出番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	樹種	取上番号
423	火鑽臼	8区	①層	弥生中期～奈良	長33.7、幅2.3、高2.3		26222
424	火鑽臼	7区	8D67	弥生後期初頭～奈良	長6.8、幅3.9、高1.7		40870
425	火鑽杵	8区	①～①層	弥生中期～奈良	長13.3、幅0.9、厚0.6、度化断面2.0		35319
426	把手	7区	8D27	弥生中期後葉	長19.7、幅1.6、径1.7x1.6、小孔間隔3.9、 装飾溝間隔16.0		42178
427	自在鉤	7区	J層	弥生中期後葉	長20.0、幅16.3、径2.6x2.0、先端加工距離4.8		38594

先端と頭部に相当する部分を削って仕上げている。頭部には紐かけのための装置が見られない。

腰かけ（第324～326図） 腰かけとしたものはすべて刳物である。第324図に掲げたものは上面観が方形で、4脚が付くものである。装飾のないものほかに、429、431の脚の作り出しに見られるように加飾されるものもある。431は国道調査区に類例がある（報告書第158図154）。429は表裏ともに刃物キズが顕著である。加工痕ではない細かなものなので、台として転用されたものか。

433は上面観は方形だが幅広で、2脚となるものである。座面のカーブは他のものより緩い。

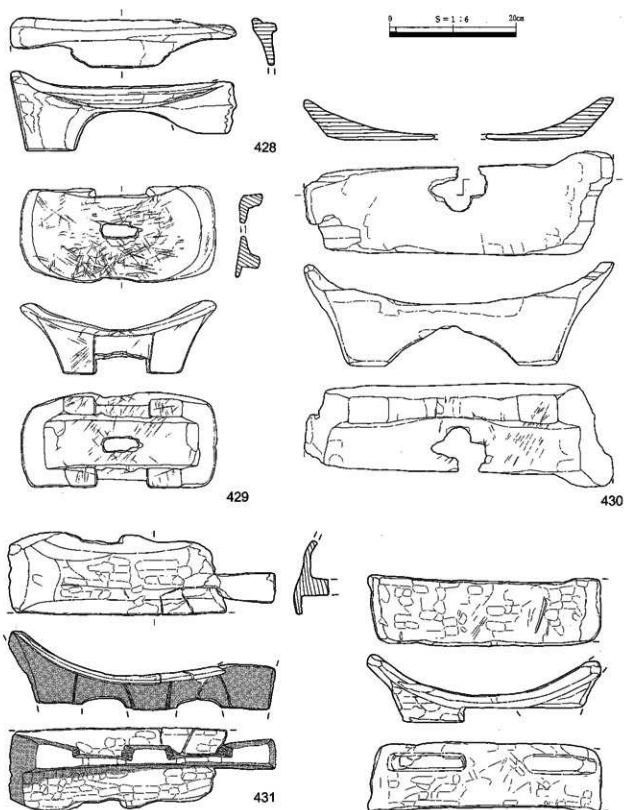
434～436は上面観円形または楕円形である。434、435ともに下駄の歯状の2脚をもつ。436は中空の円柱状を呈する脚が特徴的である。この形態の腰かけは基本的に見られないので、機能を異にするものかもしれない。437は腰かけではなく、机の脚であろう。

第326図も腰かけとはいえないものか。両端部に掘広がりの脚をもつが、腰かける部分が狭すぎる。組み合わせて用いる台の脚のようなものかもしれない。

部材（第327図） 栓を掲げた。446、447を除いて身に穿孔があり、有頭状に作るという共通性がある。440に示したように穿孔部に別材が入ったままのものが数例出土しており、使用樹種も針葉樹に限られることから、建築材として各部材を結合したものの可能性がある。

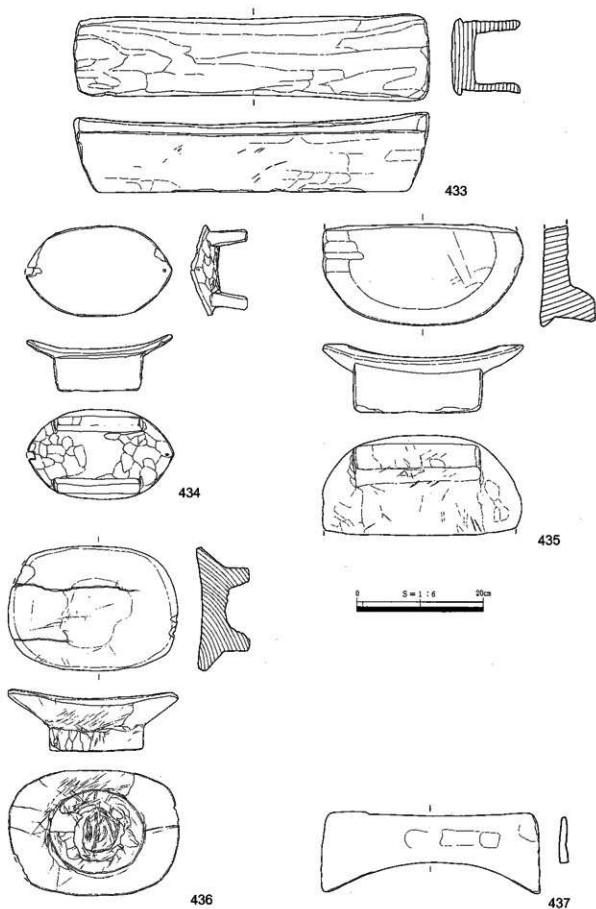
446、447は広葉樹製で、大きさも形態も異なり、前述のものとは異なる使用に供されたものであろう。

建築部材（第328～331図） 第328、329図は7区で検出された弥生後期のピット底面に据えられた礎板である。448は広葉樹製で上下両端に加工が見られる。他の礎板に比べ小さい割には厚さが厚く、農具の素材・未製品を転用した可能性がある。449は針葉樹製であるが、円形に整えられた加工が行き届いているので、本例も転用品と考えている。450以下は針葉樹の板材を方形ないし楕円形の範疇に平面形を整えたものである。大きさも

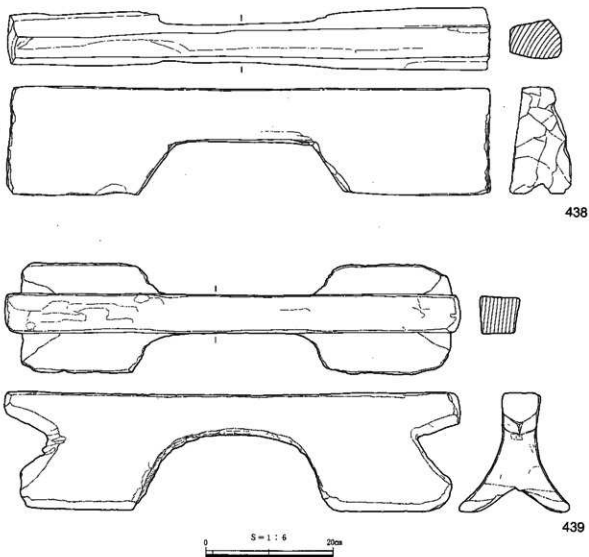


第324図 木器・腰かけ (1)

埋蔵番号	種類	調査区	通称・層位	時期	法量	附属	取上番号
428	腰かけ	4区	BD11	弥生後期初頭～後葉	長30.9、幅7.6、高12.9、脚高6.2		6095
429	腰かけ	8区	E層	弥生中期	長30.9、幅15.2、高11.4、脚高2.4		34902
430	腰かけ	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長49.5、幅16.6、高16.6、脚高6.4		29674
431	腰かけ	4区	BD11	弥生後期初頭～後葉	長42.7、幅11.8、高12.5	トナノ	3034
432	腰かけ	8区	SD38	弥生後期初頭～後葉	長37.0、幅11.1、高10.5、脚高2.4		30489



第325図 木器・腰かけ(2)



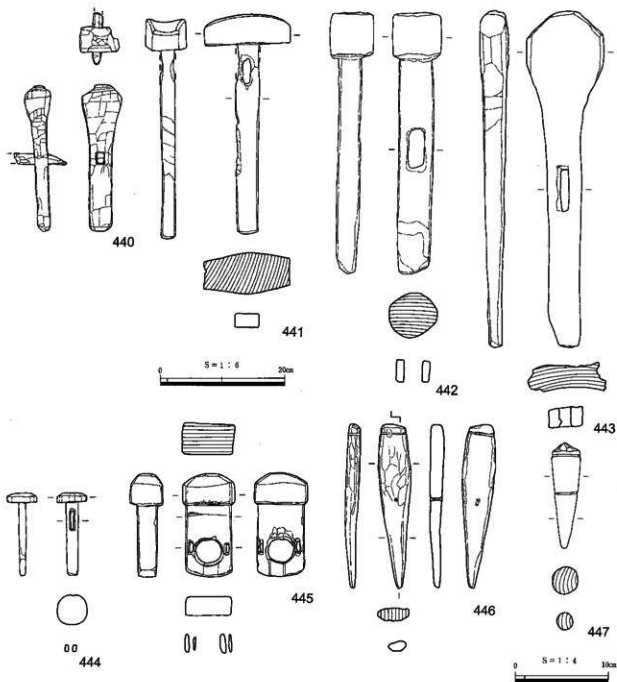
第326図 木器・腰かけ(3)

発掘番号	種類	調査区	遺構・層位	時期	法	量	単位	取上番号
433	腰かけ	7区	SD27	弥生中期後葉	長56.3, 幅13.5, 高17.8, 脚高7.3			42233
434	腰かけ	7区	I層	弥生中期後葉	長22.8, 幅14.2, 高8.9, 脚高4.7			42141
435	腰かけ	7区	J層以下	弥生中期後葉以前	長32.0, 幅16.1, 高10.9, 脚高4.5			37649
436	腰かけ	3区	SD20	弥生後期初葉~後葉	長27.0, 幅19.6, 高9.7, 脚高3.6		スギ	20905
437	机の脚	4区	SD11	弥生後期初葉~後葉	長34.6, 高12.6, 厚1.3		スギ	2664
438	腰かけ?	7区	J層	弥生中期後葉	長77.2, 幅9.8, 上縁幅3.4~4.7, 高17.0, 脚高6.5			42373
439	腰かけ?	8区	SD56	弥生後期初葉~後葉	長73.1, 幅17.6, 上縁幅5.0~5.5, 高19.1, 脚高12.2			30301

ほぼそろえていたようである。450は柱の重みで変形したもので、乗せられた柱の輪郭がおおよそ分かる。復元径であるが、直径25cm程度の柱が乗っていたようである。454は表面を広く挟り込んでいる。柱を固定するためと見れなくもないが、槽・盤の類の未製品を転用したものかもしれない。

第330、331図に掲げたものは建築材の一部と考えられるものである。樺材を縦横に組んだもので、県道調査区からは弥生前期末~中期前葉に1例、中期後葉に22例の計23例を検出している。国道調査区3区で出土したもののうち小型品と似ている⁴⁴⁰。ここでは遺物の実測図ではなく、出土状況を示した。

455は2.6m×1.8mを測る大型のものである。破損しているので定かでないが33本の縦木と7本の横木を格子状に組み合わせたものである。横木は端部を斜めにカットしたもので、縦木より太い材が用いられている。この大きさのものは両調査区をあわせても唯一本例のみである。

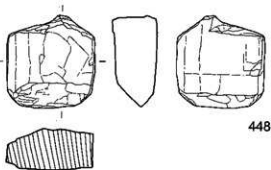


第327図 木器・栓

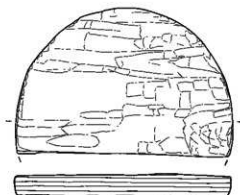
図説番号	器種	調査区	遺積・層位	時期	度量	材質	取上番号
440	投	4区	BA4~6	弥生後期初頭~後葉	長23.7、径3.6x2.1、胴部幅6.3、ぼぞ孔径1.9x1.3、別材長(3.4)		4007
441	栓	4区	BD11	弥生後期初頭~後葉	長39.5、径3.8x2.2、胴部径12.8、ぼぞ孔4.1x1.4	スギ	9082
442	栓	4区	BA4~6	弥生後期初頭~後葉	長42.8、径5.5x3.7、胴部径6.7、ぼぞ孔6.6x2.6	スギ	4599
443	栓	4区	BD11	弥生後期初頭~後葉	長55.0、径5.5x3.3、胴部径12.7、ぼぞ孔6.8x1.9	スギ	9081
444	栓	4区	BD11	弥生後期初頭~後葉	長13.4、径2.0x1.1、胴部径4.9、ぼぞ孔3.6x0.6	スギ	8053
445	栓	4区	BD11	弥生後期初頭~後葉	長16.7、径2.5x1.2、胴部径6.5、ぼぞ孔4.1x1.7	スギ	2977
446	栓	4区	◎層相当	弥生後期~古墳初期	長17.7、幅3.6、厚1.5		3477
447	栓	3区	BD20	弥生後期初頭~後葉	長11.4、幅3.1、厚2.9	ヤブツバキ	21208

456以下は1m×1m程度の大きさである。456~460は横木が3本、461以下は横木が2本のものである。すべてに残っていたわけではないが、数例に樹皮かと思われるもので縦木と横木を緊縛するものがあった。

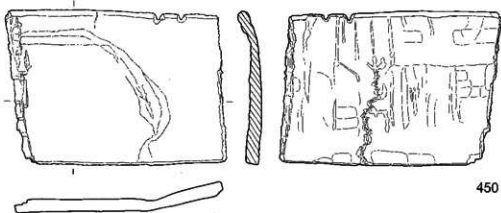
こうしたものの用途を特定するのは容易でない。これらが単独で機能したのか、組み合わされて用いられた



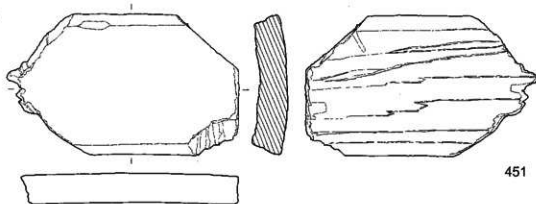
448



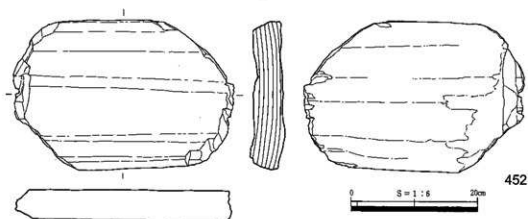
449



450

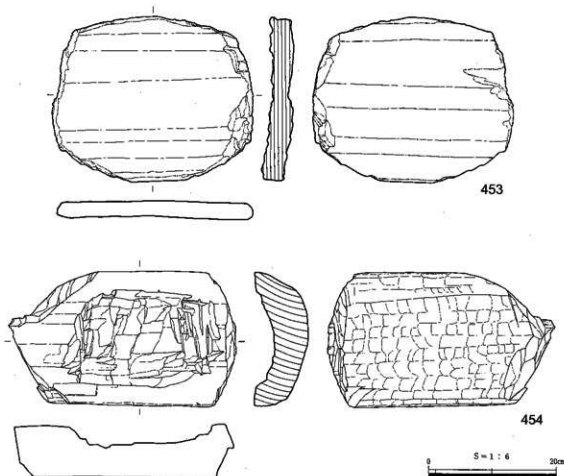


451



452

第328圖 木器・礎板(1)



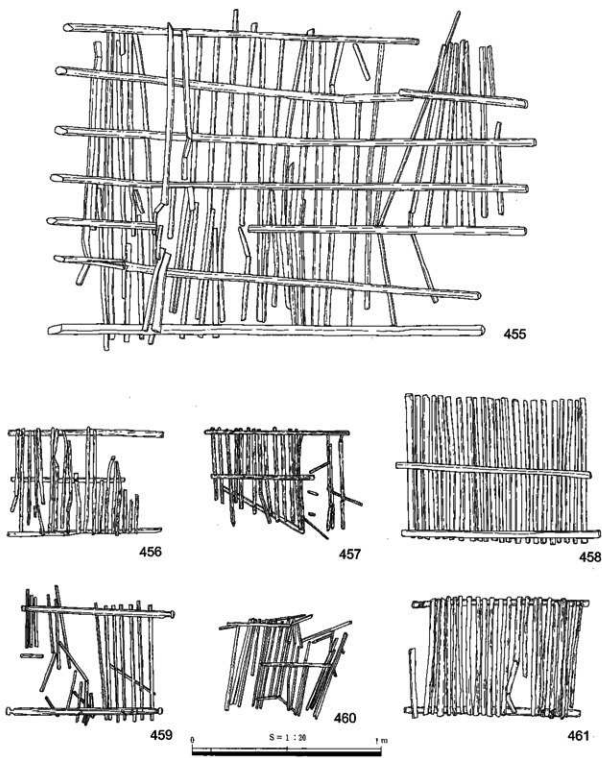
第329図 木器・礎板(2)

発掘番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量	樹種	出土番号
448	礎板	7区	P293	弥生後期	長14.7、幅13.7、厚6.5		41452
449	礎板	7区	P321	弥生後期	長(23.6)、幅34.1、厚3.7		41389
450	礎板	7区	P284	弥生後期	長24.9、幅35.4、厚2.0		41269
451	礎板	7区	P290	弥生後期	長22.7、幅37.0、厚4.5		41367
452	礎板	7区	P290	弥生後期	長23.8、幅35.3、厚5.2		41368
453	礎板	7区	P336	弥生後期	長26.6、幅32.0、厚3.7		41923
454	礎板	7区	P348	弥生後期	長21.4、幅36.3、厚8.1、加工範囲26.1x15.7		42304

ものか分からないし、すべて同じものであるのかも分からないのである。国道調査区ではこうした製品を格子窓と報告している。我々も調査段階では窓と呼んではいたのだが、建築部材の一部であろうことは想像できるが、具体的な機能が定かでない現状では、窓と断定するのは避けておきたいと思う。

用途不明品(第332、333図) 用途不明品は大量にあり、それらの器種認定は今後に残された大きな課題である。ここではその一部を図示するにとどめたい。

482は弥生中期後葉の遺物包含層より出土したスギの板材であり、表面に船の絵が描かれている。確認できるのは中央付近に小型船3隻、右側に大型船2隻である。それぞれ弧状をなす船体で、直立する多数の条線が見られ、櫓を表現していると思われる。この櫓と思われる表現は小型船で16~29本、大型船の全体が残るもので85本を数える。一人2本の櫓を持ったとしても多すぎるように思われ、船体の大きさを表現するために引かれたものと理解したい。左側の欠損部付近にも斜めに立ち上がる線が左右に延びる。これを船首と船尾だとすれば、大型船がもう1隻描かれていることになる。複数の船を描いた例は袴狭遺跡で知られているが¹⁰⁰⁾、数のうえでそれ



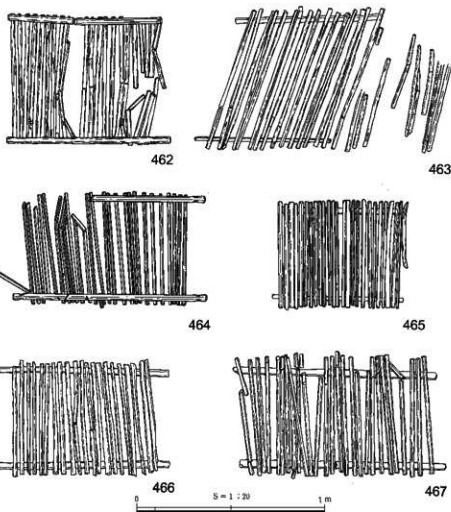
第330図 部材出土状況(1)

発掘番号	整理	調査区	遺構・層位	材	法	整理	取上番号
453	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ200、幅180		43186 ~
456	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ65、幅55	スギ	37381 ~
457	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ70、幅55		43285 ~
458	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ110、幅80		43841 ~
459	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ85、幅70		43791 ~
460	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ70、幅50		43912 ~
461	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ65、幅65		37831 ~

に及ばないとはいえ、本例も船団を表していると思える。

472は長い柄の先に団扇状の作りをみるものである。欠損しているが、復元すると若干楕円形となるものであろう。厚みは先端部に向けて減っていく。一本作りであるが、あたかも両者が別に作られ、それが組み合わされたかのように、柄の延長部分を表現している。精巧な仕上げであり、祭祀に関わる遺物が顕著であったSD11より出土していることも加えて、特別な用途のものであったことが考えられる。

477は環状に復元できると思われる。上端には2孔が穿たれ、全面に赤漆と思われるものが塗られる。前期末～中期前葉の遺構より出土した。(湯村 功)

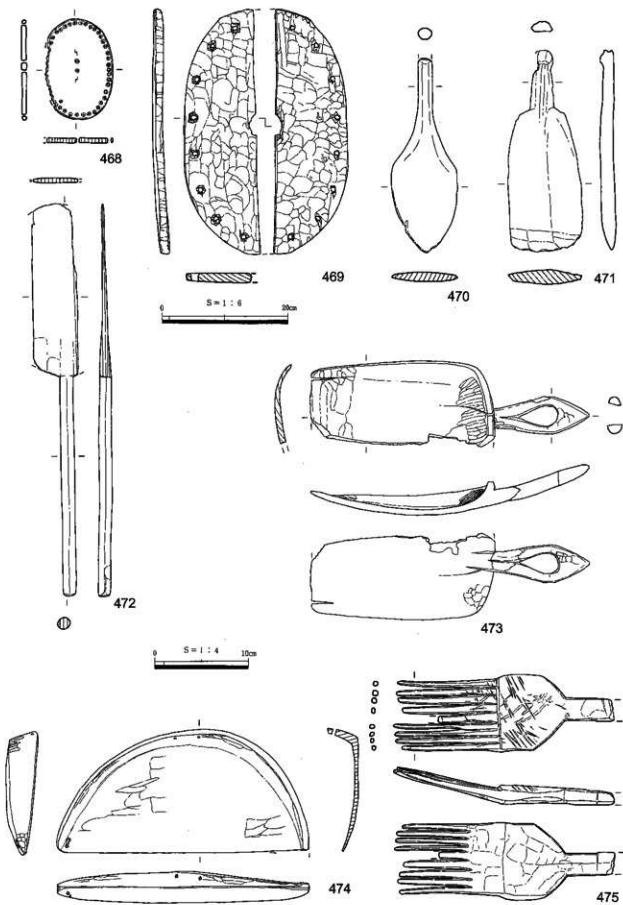


第331図 部材出土状況(2)

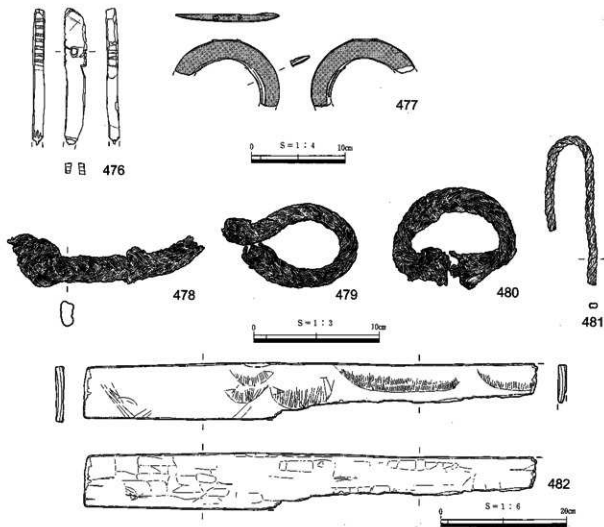
探検番号	部材	探検区	遺構・層位	時期	長さ	直径	取上番号
462	建築部材	7区	SA62	弥生中期後葉	長さ95、幅65	~	42196
463	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ130、幅80	~	43168
464	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ105、幅80	~	43680
465	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ90、幅65	~	43727
466	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ90、幅65	~	44566
467	建築部材	7区	J層	弥生中期後葉	長さ110、幅70	~	44737

註

- (1) 上原真人編 1993『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所。
- (2) 北浦弘人編 2001『青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団。
- (3) 高島 徹・広瀬雅信・畑 暢子編 1983『亀井』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター。
- (4) 註(2)前掲文献の第137図47。
- (5) この他に鑿状片刃石斧と呼んでいるものが8点ある。この石器は斧という名称を付しているが、斧台への装着方法が明らかでない。ここでは斧身と柄との数量比を述べるのが目的であり、とりあえず除外しておく。
- (6) 芋本隆裕編 1987『鬼鹿川遺跡の木質遺物』(財)東大阪市文化財協会。
- (7) 山崎純人 1998『156の弥生紡錘車—甲山南遺跡出土紡錘車の持つ意味—』『大阪文化財研究』第14号。
- (8) 湯村 功編 2000『青谷上寺地遺跡1』(財)鳥取県教育文化財団。



第332圖 木器・用途不明品(1)



第333図 木器・用途不明品(2)

物品番号	形状	調査区	遺構・層位	時期	注意	数量	出土番号
468 不明	7区	I層	弥生中期後葉	径10.7x7.5, 厚0.5, 孔徑0.2			38826
469 不明	4区	SA4-G	弥生後期初葉~後葉	長(38.1), 幅(11.5), 厚(1.2), 孔間隔4.5~5.2			38840
470 不明	7区	SA62	弥生中期後葉	長(20.8), 幅(7.0), 厚(1.0), 柄径1.5			42376
471 不明	7区	K層	弥生中期後葉	長(21.5), 幅(7.6), 厚(1.5), 柄径2.3			42475
472 不明	4区	SD11	弥生後期初葉~後葉	長(21.0), 幅(4.7), 柄径1.4			3036
473 不明	7区	J層	弥生中期後葉	長(24.0), 幅(9.2), 厚(3)			42456
474 不明	7区	SA69	弥生中期後葉	長(13.3), 幅(4.9), 厚(3)			42149
475 不明	7区	J層	弥生中期後葉	長(23.0), 幅(8.3), 曲線状部長(11.6)			42386
476 不明	3区	空溝	古墳以降	長(14.0), 幅(2.4), 厚(1)			20119
477 不明	6区	SD46	弥生前期末~中期前葉	長(7.2), 幅(11.0), 厚0.6			47183
478 縄	7区	SA62	弥生中期後葉	残存長16.75分, 幅2.0			42277
479 縄	7区	SA62	弥生中期後葉	残存長22.5分			42277
480 縄	7区	SA62	弥生中期後葉	残存長22.5分, 幅2.0			42277
481 縄	7区	L層	弥生中期後葉	残存長20.75分, 幅0.8			43884
482 線刻板面版	7区	J層	弥生中期後葉	長(73.2), 幅(9.0), 厚(1.2)			44025

(9) 註(3) 前掲文献の第165図295。

(10) 足立克己編 1999『姫原西遺跡』建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会の第119図1、2。

(11) 豪徳保明・堀内宏司編 1978『森浜遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会。

(12) a註(6) 前掲文献。

b 下村晴文編 1988『鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告』東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会。

- (13) 註(6) 前掲文献。
- (14) 川畑和弘 2000「下之郷」文化庁編『発掘された日本列島2000新発見考古速報』。
- (15) 扇崎 出 1997「岡山県岡山市南方(済生会)遺跡」『日本考古学年報48』日本考古学協会。
- (16) 註(6) 前掲文献。
- (17) 註(10) 前掲文献。
- (18) 力武卓治・大庭康時編 1987『那珂久平遺跡』福岡市教育委員会。
- (19) a 山口譲治・松村道博編 1983『拾六町ツジ遺跡』福岡市教育委員会。
b 註(18) 前掲文献。
- (20) 高島忠平・川谷昭彦ほか編 2000『国営吉野ヶ里歴史公園生活復元展示基本設計報告書』建設省九州地方建設局・国営吉野ヶ里歴史公園工事事務所。
- (21) 『木器集成』では福岡県辻田遺跡例が類似するものとして挙げられているが、足先が左右非対称とならないことや、裏面の突起も他のものに見られないものであり、ここでは除外しておく。
- (22) a 浅岡俊夫 1990「きぬがさの検討」『播磨考古学論叢』。
b 浅岡俊夫 1997「多枝付木製品考」『立命館大学考古学論集Ⅰ』。
- (23) 註(22) b 前掲文献。
- (24) 山田昌久氏のご指摘による。
- (25) 衣笠のⅠ類は弥生中期には認められるのであるが、鍍板を含めた複雑な構造をもつものが中期に存在していたかは、今のところ不明である。
- (26) 匙・杓子の塗彩物については漆と記述されることがある(たとえば工業普通 1994「木工と漆」『季刊考古学第47号 先史時代の木工文化』)。分析データを積み上げたくうえで再検討が必要があると思われる。
- (27) 松井 潔のいう台付裝飾壺である。氏のⅤ期に因幡・東伯耆地域に特徴的に見られる。
松井 潔 1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉—古墳時代初期の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集。
- (28) a 内田律雄編 1988「西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ(海崎地区2)」鳥根県土木部河川課・鳥根県教育委員会。
b 内田律雄編 1989「西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ(海崎地区3)」鳥根県土木部河川課・鳥根県教育委員会。
- (29) 加茂川改良工事関係埋蔵文化財発掘調査団編 1986「日久美遺跡」米子市教育委員会・鳥取県河川課。
- (30) 趙規鐘 1997「光州新昌河低湿地遺跡」国立光州博物館。
- (31) 金沢市西念・南新保遺跡、小松市白江念仏寺堂遺跡で知られていたものである。
宮本哲郎編 1983「金沢市西念・南新保遺跡」金沢市・金沢市教育委員会。
田島明人編 1982「漆町遺跡」石川県埋蔵文化財センター。
- (32) 工業普通 1989「木製高杯の復元」『古代史復元5 弥生人の造形』。
- (33) 三宅博士・柳浦俊一編 1990「タテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ」鳥根県土木部河川課・鳥根県教育委員会。
- (34) 徳積裕昌編 2000「六大A遺跡発掘調査報告(木製品編)」三重県埋蔵文化財センター。
- (35) 山田昌久 1997「考古資料の曲げ物研究を器具研究のために」『人類誌集報』。
- (36) 上原真人 1993「西力転びの筈—古代木工技術の変革(予察)」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』。
- (37) 橋 雅子 1998「八日市地方遺跡出土の人物意匠彫刻板」『考古学ジャーナル』No.432。
- (38) 藤田 淳 1998「出石町袴状遺跡出土の「箱形木製品」について」『考古学ジャーナル』No.432。
- (39) 野田純子 1998「前原市上鎌子遺跡出土の線刻絵画板について」『考古学ジャーナル』No.432。
- (40) 註(37) 前掲文献。
- (41) 註(10) 前掲文献。
- (42) 橋本裕行氏のご教示を得た。
- (43) 谷口 徹編 1984「服部遺跡発掘調査報告Ⅴ」滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会。
- (44) 阿刀弘史 1998「出土木器の検討」『赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会。
- (45) 国道調査区S D 27より出土したもので、小型のものは長さ62.8cm、幅45.7cm、大型のものは長さ111.8cm、幅54.4cmを測る。両者は重なって出土した。北浦弘人編 2000「青谷上寺地遺跡2」(財)鳥取県教育文化財団の第27図、図版10に示されている。
- (46) 中村 弘 2000「線刻面木製品の発見」『古代船田但馬に現る! 発表資料』。

第7節 骨角器

はじめに

骨角器は、県道調査区5～7区にかけての範囲に集中し、特に7区からの出土が顕著である。すなわち、微高地およびその東側縁辺部にかけての範囲である。主に包含層から出土している。弥生時代前期末から古墳時代前期初頭を通じて出土するが、中期後葉以降に出土量が増加する。

本節で扱う内容には、未製品はもちろん、製品化の意図が窺える骨や角をも範疇に含めている。例えば、本文中で「素材」とした短冊形に加工された鹿角や、「素材」化を目指した加工が窺える鹿角も対象とし、単に切断されただけの骨角と仕分けしている。また、ト骨や犠牲獣なども本節中で扱っているが、これらは本来骨角器と区別されるものであろう。

骨角器（ト骨、犠牲獣を除く）の出土総数は895点である。概略的な内訳は、漁撈具関係457点（51%）、刺突具関係208点（23%）、骨鏃・弓矢関係62点（7%）、装身具42点（5%）、その他31点（3%）、用途不明品95点（11%）となる。ト骨は、総数143点を数えた。国道調査区と合算した結果は、骨角器（ト骨、犠牲獣を除く）の出土総数1280点で、その概略的な内訳は、漁撈具関係645点（50%）、刺突具関係266点（21%）、骨鏃・弓矢関係109点（9%）、装身具55点（4%）、その他44点（3%）、用途不明品161点（13%）となる。ト骨は、総数227点に上る。漁撈具や刺突具が卓越する点は、一遺跡における数量組成としては一般的であるが、骨鏃やト骨の出土量の多さは、当遺跡を特徴付けるものである。素材は、同定し得たものの中で鹿角が最も多く、次いで直状タイプのヤスに多用される中手骨、中足骨が目立つ。

漁撈具・ヤス（第334～345図）

漁撈用刺突具と判断したものうち、柄に固定されたままのものをヤス、柄から離れるものを銚とした点は、国道調査区と同様である。県道調査区出土のヤスは、総数226点を数える。本節では、国道調査区報告書（以後「青谷上寺地3」と呼ぶ。）で使用された分類に従って記述するが、新たな視点も加えている。なお「青谷上寺地3」で示した分類基準を以下に概述しておく。

第1基準

- I類・・・アグの無いもの
II類・・・アグのあるもの

第2基準

- A類・・・直状を呈するもの
B類・・・ノ字状を呈するもの

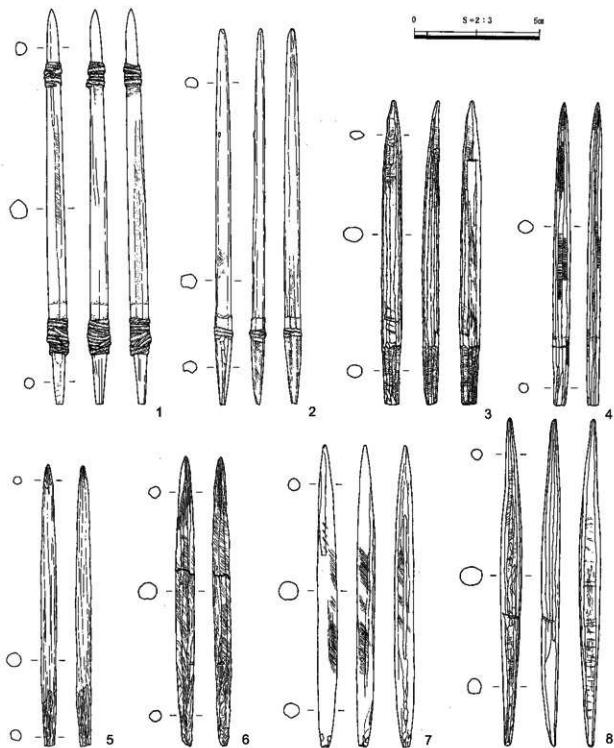
第3基準

- a類・・・基部に面取りが無いもの
b類・・・基部に面取りがあるもの

1から16は、アグの無いタイプで、直状を呈する。『青谷上寺地3』でI A類としたものである。長さは長短があり、13は3.9cm、16は16cmを測る。長さに伴って最大径も変化するが、3.5～9.5mmの範囲で推移する。平均的には6mm前後である。量差的な差異は、魚種や漁法の違いに連関するものと推察するが、直線的な形態からは使用意図の一貫性が感じられる。概形的には、基部からあまり径を減じないで伸び、先端付近で急速にすぼまるものと、両端がすぼまる紡錘形状を呈するものが主体的である。基部は、尖端化させるものやテールエンドを面取りしているものがみられるが（I A a類）、11のように主軸に対し斜めにカットするものもみられる。11は、I A b類としたものである。また3、5などのように、基部を削り細めて莖的に加工しているものもみられる。

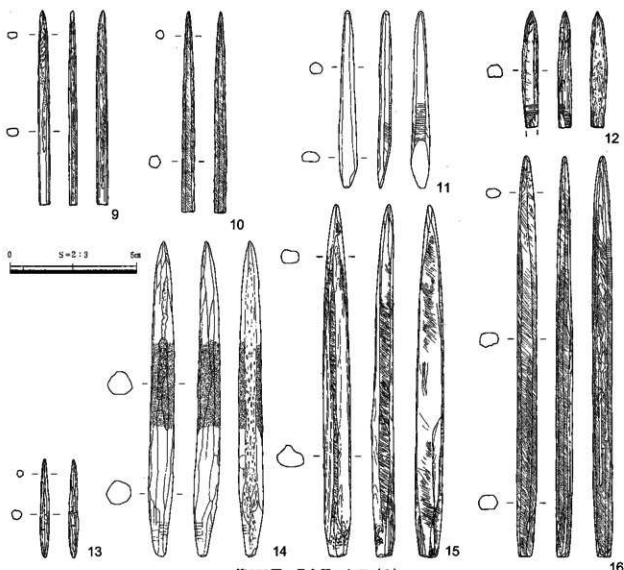
この種のヤスは、中手骨、中足骨などの長骨を用いるものが多くみられ、骨を縦位に裁断して素材を得ている。骨内面の自然面を溝状に一筋加工し残している場合が多いものの、縦裁素材の破面を丹念に磨いて断面形を円形ないし楕円形とし、刺突力を高めている。15は、長骨が素材であることが一目瞭然であり、断面形が扁平で、図上では一見粗い加工に見えるが、縦裁素材の破面を滑らかに調整している。3、4、8に見える主軸に対し横位に入る細かい筋は刃物痕であり、削りの方向と直交するものであるが、6、7などにみえる主軸に対し斜位に入る擦痕は、研磨の方向を示している。研磨は、ヤスを軸で回転させながら行っているものとみえる。

ところで、1、2は、樹皮とみられる紐が巻き付いた状態で出土している。1では、基部側の巻き付け部分から上方に6mm程度の変色域がみえる。これらの紐はヤスを柄と結ぶものともみえるが、1では先端部に近い位置と基部に近い位置の2カ所に遺存しており、柄への装着痕とするには、いささか違和感がある。14で、ヤスの中位の



第334図 骨角器・ヤス(1)

標本番号	種別	調査区	遺跡・遺址	時期	寸法	出土層	出土番号
1	ヤス	7区	Ⅱ層	弥生中期後葉	長15.9, 幅0.7, 厚0.7	中平足骨	I Aa層、樹皮を2ヶ所巻く 43900
2	ヤス	7区	N層	弥生中期中葉	長20.2, 幅0.6, 厚0.7	中平足骨	I Aa層、樹皮を巻く 44107
3	ヤス	6区	②層	弥生後期初葉～古墳初期	長12.3, 幅0.6, 厚0.6	中平足骨	I Aa層 8240
4	ヤス	7区	J層	弥生中期後葉	長12.2, 幅0.6, 厚0.6	中平足骨	I Aa層 36522
5	ヤス	6区	BK103	弥生後期初葉～後葉後葉	長11.4, 幅0.6, 厚0.5	中平足骨	I Aa層 12501
6	ヤス	6区	⑤層	弥生前期末～中期前葉	長11.7, 幅0.7, 厚0.75	中平足骨	I Aa層 17324
7	ヤス	6区	③層	弥生中期中葉～中期後葉	長12.2, 幅0.8, 厚0.8	中平足骨	I Aa層 13860
8	ヤス	4区	③層	弥生中期中葉～中期後葉	長13.7, 幅0.6, 厚0.75	高角	I Aa層 9853

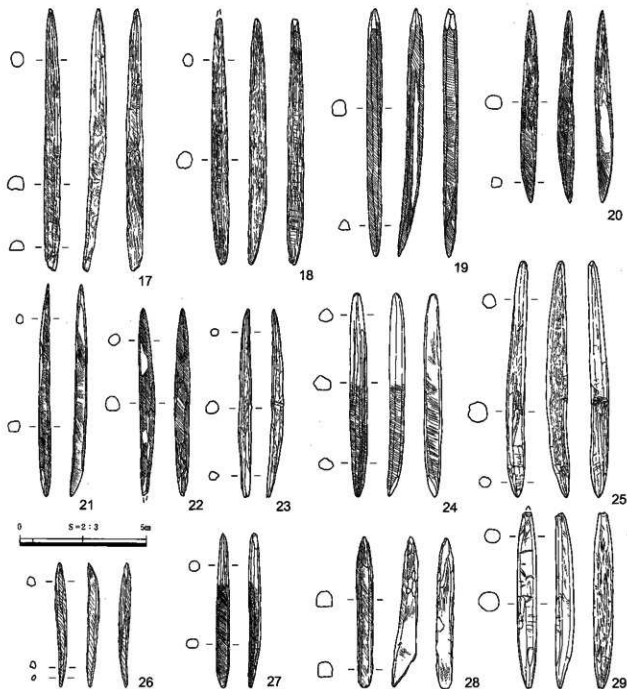


第335図 骨角器・ヤス(2)

物品番号	種	出土区	遺存層位	時期	注意	各	長さ	出土番号
9	ヤス	5区	㊲層	弥生後期初層～古墳初層	長7.75、幅0.45、厚0.35	直角	1 Aa類	9190
10	ヤス	5区	㊲層	弥生後期初層～古墳初層	長8.0、幅0.5、厚0.5	直角	1 Aa類	8256
11	ヤス	6区	㊲層	弥生前期末～中期前半	長7.0、幅0.7、厚0.5	直角	1 Ab類	49301
12	ヤス	5区	㊲層	弥生前期末～中期前半	長4.6、幅0.8、厚0.5	直角	1 Aa類	17423
13	ヤス	5区	㊲層	弥生中期中～中期後半	長3.9、幅0.35、厚0.35	直角	1 Aa類	15525
14	ヤス	7区	N層	弥生中期中	長12.6、幅1.0、厚0.95	直角	1 Aa類、変色あり	44807
15	ヤス	7区	L層以下	弥生中期後半以前	長14.06、幅1.1、厚0.9	中平足骨	1 Aa類	43053
16	ヤス	6区	㊲層	弥生後期初層～古墳初層	長16.0、幅0.8、厚0.6	直角	1 Aa類	9286

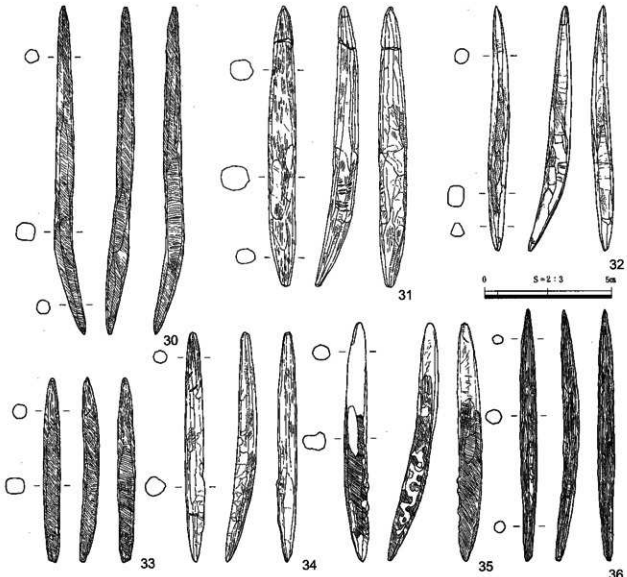
みに黒染みた変色が確認でき、両端側がそろって変色していないのは、本来1と同様な状態であったことを示すものである可能性がある。あるいは、このタイプのヤスとしたものの中には、中柄とすべきものを含んでいるのかもしれない。しかし中柄の機能を鑑みても、縦紋素材の破面の調整が、余りに執拗であるようにも思える。今後、類例の増加を待ちたい。

17から43は、アグが無く、体部がノ字状に反るヤスである。【青谷上寺地3】でIB類としたものである。長さにはやはり長短があるが、その変動幅は上述の直状ヤスほどではない。径は7mm前後が平均的なところであり、平均的な概形としては直状のヤスより短く、わずかに太いという傾向にある。一部に矮小なものも含むが、法量的な差異は、直状のヤスほどにはない。ただし、ノ字状の反りの程度には差異が認められる。また、上述した中柄という視点を、ノ字状のヤスにおいても留意しておきたい。概形は、両端がすばまる紡錘形状を呈するも



第336図 骨角器・ヤス(3)

発掘層位	種別	図記号	出土層位	時期	長さ	骨角種別	取上番号
17	ヤス	5区 ㊸層	弥生中期中葉~中期後葉	長10.4、幅0.65、厚0.55	鹿角	I Bb層	14555
18	ヤス	5区 ㊸層a①層	弥生前期末~中期後葉	長9.9、幅0.7、厚0.7	鹿角	I Bb層	17121
19	ヤス	5区 ㊸K3	弥生前期末~中期前葉	長9.95、幅0.6、厚0.6	鹿角	I Bb層	15514
20	ヤス	5区 ㊸層	弥生~奈良	長7.7、幅0.7、厚0.6	鹿角	I Bb層	12517
21	ヤス	5区 ㊸層	弥生後期初頭~古墳初頭	長8.5、幅0.5、厚0.5	鹿角	I Bb層	13285
22	ヤス	5区 ㊸層	弥生前期末~中期前葉	長7.5、幅0.6、厚0.55	鹿角	I Bb層	15539
23	ヤス	4区 ㊸層	弥生前期中葉~中期後葉	長7.5、幅0.5、厚0.5	鹿角	I Bb層	5707
24	ヤス	5区 ㊸層	弥生前期末~中期前葉	長8.1、幅0.7、厚0.7	中平尾骨	I Bb層	15236
25	ヤス	5区 ㊸層	弥生前期中葉~中期後葉	長8.4、幅0.7、厚0.8	鹿角	I Bb層	14459
26	ヤス	5区 ㊸層	弥生後期初頭~古墳初頭	長5.0、幅0.45、厚0.5	鹿角	I Bb層	8860
27	ヤス	5区 ㊸層	弥生後期初頭~古墳初頭	長6.15、幅0.5、厚0.4	鹿角	I Bb層	9290
28	ヤス	5区 ㊸K67	弥生前期中葉~中期後葉	長6.05、幅0.55、厚0.5	鹿角	I Bb層	17963
29	ヤス	5区 ㊸層	弥生前期中葉~中期後葉	長7.0、幅0.75、厚0.7	鹿角	I Bb層	14457



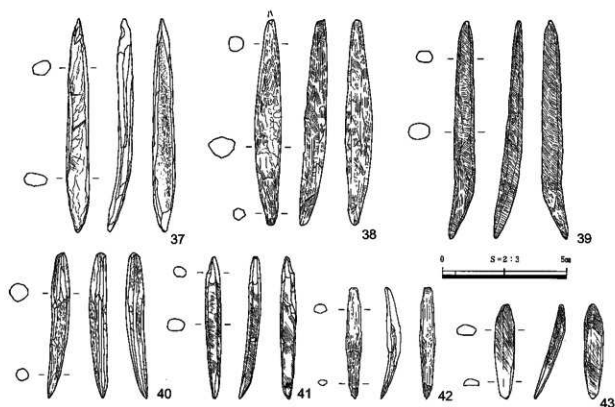
第337図 骨角器・ヤス (4)

発掘番号	種	調査区	遺跡・層位	時期	長さ	管理番号	取上番号
30	ヤス	5区	貝塚	弥生前期末～中期前半	長11.5、幅0.7、厚0.6	鹿角 1 B a 類	15522
31	ヤス	5区	②層	弥生後期後段～古墳初期	長11.5、幅1.1、厚1.0	鹿角 1 B a 類	13405
32	ヤス	4区	③層	弥生中期中葉～中期後葉	長9.7、幅0.8、厚0.9	鹿角 1 B b 類	5434
33	ヤス	5区	貝塚	弥生前期末～中期前半	長12.0、幅0.7、厚0.8	鹿角 1 B b 類	15182
34	ヤス	5区	②層	弥生中期中葉～中期後葉	長9.2、幅0.75、厚0.8	鹿角 1 B b 類	14452
35	ヤス	5区	不明	不明	長6.15、幅0.5、厚0.4	鹿角 1 B b 類	17178
36	ヤス	5区	⑤層	弥生前期末～中期前半	長10.1、幅0.8、厚0.6	鹿角 1 B a 類	15205

のが主体的である。40はやや例外的で、先端部が太く肥厚し、そこからテールエンドに向かって反りながら径を減じていく。後述する44、45に通じる形態である。I B b類に分類される、反り部分に面取りを施すものは、17、18、20、26～28、32～35、41～43が該当する。このうち42、43といった矮小なものは、これ自体が刺突具というよりも、アグ先として他の漁撈刺突具と組み合わせられた可能性もある。

このタイプのヤスは、ノ字状に反らせることの容易さから、鹿角素材を多用している。鹿角を縦位に裁断して得た素材から成形しているが、鹿角表面の顆粒や裁断すると覗く内面の海面質など、素材の自然面を残すのが目立つ。また、断面形も円形を志向しながらもやや角張る感じは否めず、直状ヤスの精緻な仕上げりととの差異を感じずにはられない。無論直状ヤス同様、縦裁素材の破面を丹念に磨き、滑らかな仕上げを目指してはいる。

44と45も、アグの無いノ字状に反るヤスの範疇に捉えられ、I B b類に分類されるが、特徴的な形態を呈する



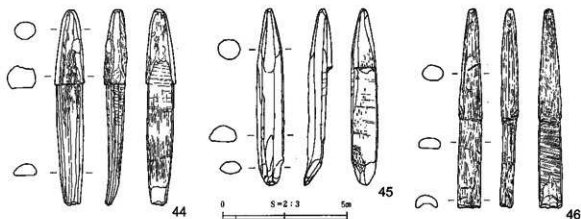
第338図 骨角器・ヤス (5)

標本番号	種	形状	用途・用途	時期	法	骨角部	出土層位
37	ヤス	5区	②層	弥生前期末～中期前期	長8.7、幅0.85、厚0.5	鹿角 I Bb層	15490
38	ヤス	5区	不明	不明	長9.35、幅1.06、厚0.9	鹿角 I Ba層	13419
39	ヤス	5区	②層	弥生中期中葉～中期後葉	長7.2、幅0.85、厚0.7	鹿角 I Ba層	14027
40	ヤス	5区	②層	弥生後期前期～古墳初期	長5.9、幅0.78、厚0.79	鹿角 I Ba層	9249
41	ヤス	5区	②層	弥生後期前期～古墳初期	長5.8、幅0.6、厚0.8	鹿角 I Bb層	9438
42	ヤス	5区	③層	弥生中期中葉～中期後葉	長4.5、幅0.6、厚0.7	鹿角 I Bb層	13016
43	ヤス	5区	③層	弥生中期中葉～中期後葉	長3.3、幅0.8、厚0.5	長骨 I Bb層	13992

ものである。全長の3分の2程度を面取りし、よって先端部が肥大した印象を与える結果になっている。44では基部を削り細め、生じた段差をもって先端部を区分しており、45では面取りによって生じた段差をもって先端部を区分している。いずれも鹿角の海綿質が観察されるが、面取り部以外はよく研磨されている。一方46はアグの無い直状のヤスで、I A a類に属するが、44と同様に基部を削り細め、生じた段差をもって先端部を区分しており、やはり先端部が肥大しているように見える。面取りは全長の2分の1弱に及ぶが、テールエンドをくはませ、断面が半截竹管状を呈している。面取り部をよく研磨しているので、くはみ部の仕上げの粗さが目立つが、破損ではなく、意図的なものである。中柄を装着するための加工であろうか。

47から56は、アグの無いヤスで、基部端部に突起を設けるものであるが、形態的に斉一性はなく、多様性を示す。54、55はI A b類、47～53、56はI B b類に分類される。このうち47～50は、基部側を切り込んで段差を生じさせ、突起を削り出し、その裏面を面取りしている。前述した44の基部端部に突起を付けた形態ともいえる。47は鹿角の縦截素材の顆粒のある側を、48、49は鹿角の縦截素材のエッジをそれぞれ切り込んで、突起を削り出している。結果として両者の切り込みの位置関係は直交をなしている。48、49の形態は、縄文時代晚期に宮城県中沢目貝塚などから出土している「鹿角製湾曲刺具」に類似している。縄文時代晚期の、仙台湾沿岸を中心とした東北地方の太平洋側に分布するものといわれているが、通常切り込み部に直交する方向に2～3ヵ所の穿孔がみられる。本例は無孔であり、また湾曲加減も今一つ甘い。系譜を繋げるには類例の増加を待たねばならない。

なお、47と48には白色の粘土状物質の付着がみられた。その付着状況から推して、柄または中柄への装着に使用した接着剤の残存とみられる。「青谷上寺地3」中に掲載された結合式のヤスの例（「青谷上寺地3」第177図



第339図 骨角器・ヤス(6)

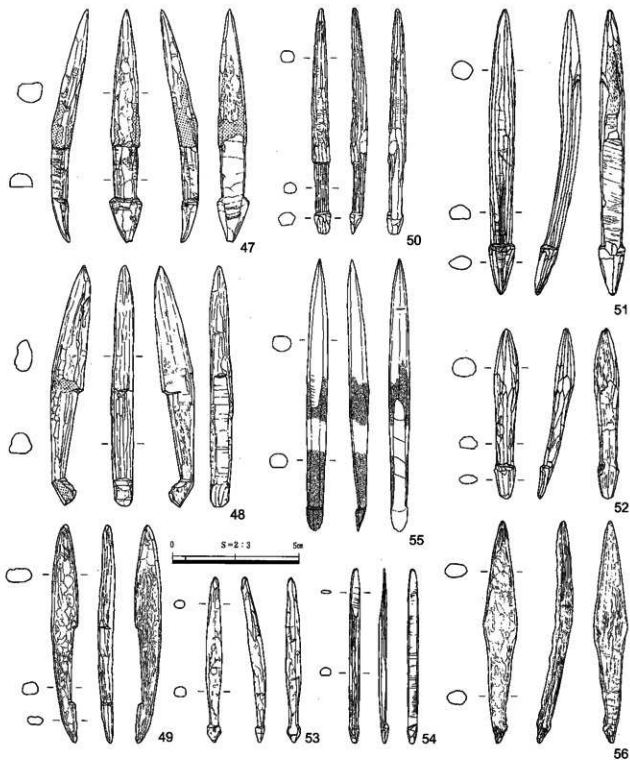
発掘番号	種	出土区	遺構・層位	時期	寸法	骨質	備考	出土層
44	ヤス	C区	遺構	弥生後期初部～古墳前期	長7.95、幅1.2、厚0.9	鹿角	I Bb類	8357
45	ヤス	C区	遺構	弥生後期初部～古墳前期	長7.2、幅1.1、厚1.0	鹿角	I Bb類	8391
46	ヤス	C区	遺構	弥生中期中層～中期後葉	長8.1、幅0.9、厚0.7	鹿角	I Aa類	13640

64) でも、白色の粘土状物質が接着剤として使用されている。47では、切り込み部に粘土状物質が筋状に付着しており、柄または中柄に紐状のもので緊縛した痕跡を示すものと思われる。また55では、円のような変色域がみられた。面取り範囲に変色が及ばず、また上下2段に分かれて変色しており、やはり装着の状況を示すものであろう。

57から83は、アグのあるヤスである。アグの個数は1～8個の間で推移するが、2～4個のものが多いようである。長短があり、併せて径にも大小があるが、法量的な差異は、魚種や漁法の違いによるものであろう。アグをつけるということは、あくまで抜けないことを目指すものであり、試行錯誤の結果が形態的多様性を生み出しているといえる。基部端部に突起を設けないものは57～69、71～73であり、設けるものは74～83である。ただし72は、基部寄りに部分的な切り込みを入れており、47～50の形態に通じるものと捉えれば、突起があるといえなくもない。83では、逆三角形の突起の中途に挟りが入り、突起が連続しているようにみえる。素材は圧倒的に鹿角製が多いが、57と82では鯨骨が用いられている。漁撈利具における鯨骨の使用例が稀であることは、『青谷上寺地3』でも述べたところである（『青谷上寺地3』224頁）。いずれにせよ素材の選択にあたっては、アグを作り出すという細部加工の利便性が追求されているのであろう。

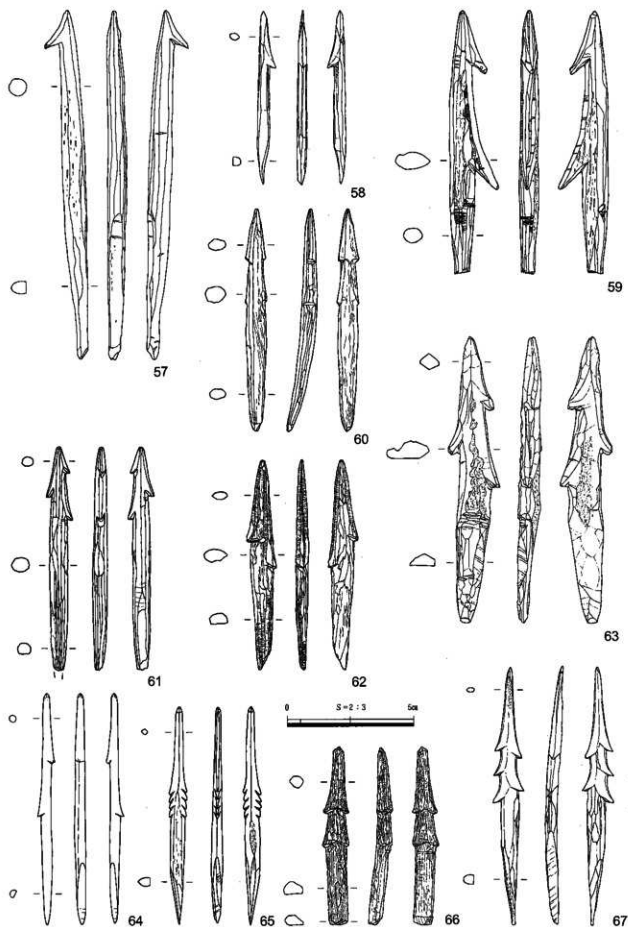
直状で面取りの無いII A a類は59、62、68、69、71、75、81、直状で面取りのあるII A b類は57、58、61、63～67、72、73、76、79、80、82、83、ノ字状で面取りの無いII B a類は78、ノ字状で面取りのあるII B b類は60、74、77である。断面形態は、円形を志向するものと扁平な形態をとるものとに大別される。扁平なものは鹿角の顆粒を残すものが多く、鹿角の辺材をやや幅広く採って素材としているためであろう。アグの間隔や先端部との位置関係には一貫性が窺えないが、全体的にテールエンドの処理がいささかおぞな感じがかり、截断したままのものも多数みられる。アグをつけることによって抜けにくくなるという長所は、折れやすいという短所へ繋がってしまうわけだが、折損のたびに再生され、長さを減じていく過程で、テールエンドの処理が粗くなっていくのであろう。とはいえ、製品化当初から雑に仕上げられているわけではなく、素材の破面を丹念に磨いて、刺突力を高める努力は窺える。66は調整が粗いが、未製品と思われる。59や68では、基部が美的に削り込まれているが、ここに筋状の緊張痕が確認できる。70は、鹿角製で基部を欠損するものであるが、アグのあるヤスの体部に連続した刻み目を入れている。欠損が最下位の刻みに及んでいるので、欠損後の所作ではないだろう。ヤスの機能との関連も推察できず、刻み目による祭儀の可能性も視野に入れておきたい。

84と85は、アグのあるヤスの未製品である。いずれも鹿角の縦截素材から作りかけている。84では、ノ字状に反った体部に4ヵ所のアグと、基部端部に突起を削り出そうとしているが、まだ全体に加工が粗い段階である。II B類に分類されるヤスであろう。一方85では、アグが2ヵ所につきそうだが、それ以上のことはまだ窺いしれ

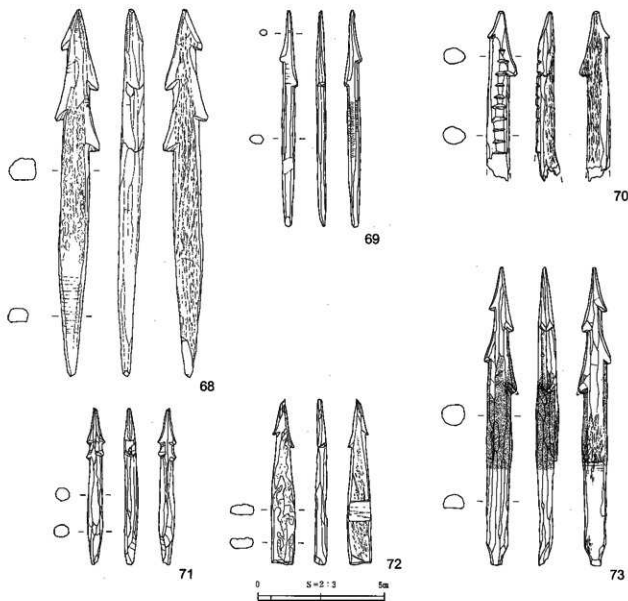


第340図 骨角器・ヤス (7)

発掘番号	種	調査区	遺構・層位	時期	法	骨種	出土番号
47	ヤス	7区	I層	弥生中期後葉	長9.3, 幅1.25, 厚0.9	鹿角	I Bb類, 白色粘土付着
48	ヤス	7区	I層	弥生中期後葉	長9.8, 幅1.2, 厚0.85	鹿角	I Bb類, 白色粘土付着, 鹿角部湾曲器具?
49	ヤス	5区	③層	弥生中期中葉~中期後葉	長8.4, 幅1.05, 厚0.8	鹿角	I Bb類, 鹿角部湾曲器具?
50	ヤス	5区	③層	弥生中期中葉~中期後葉	長9.0, 幅0.7, 厚0.7	鹿角	I Bb類
51	ヤス	5区	③層	弥生中期中葉~中期後葉	長11.4, 幅1.0, 厚0.8	鹿角	I Bb類
52	ヤス	5区	SK30	弥生中期中葉~中期後葉	長8.8, 幅1.0, 厚0.75	鹿角	I Bb類
53	ヤス	7区	I層	弥生中期後葉	長6.55, 幅0.59, 厚0.55	鹿角	I Bb類
54	ヤス	7区	木箱埋3	弥生中期中葉~中期後葉	長6.8, 幅0.45, 厚0.3	?	I Ab類
55	ヤス	6区	③層	弥生中期中葉~中期後葉	長10.8, 幅0.8, 厚0.8	長骨	I Ab類, 灰色
56	ヤス	4区	①~②層	弥生前期末~中期後葉	長8.3, 幅1.3, 厚0.8	鹿角	I Bb類

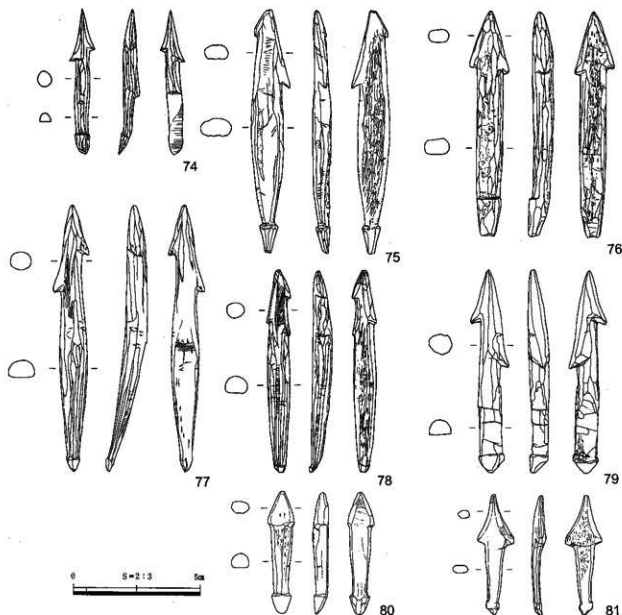


第341図 骨角器・ヤス(8)



第342図 骨角器・ヤス(9)

発掘番号	種別	調査区	遺構・層位	特 別	尺 寸	骨 質	備 考	出土番号
57	ヤス	6区	①層	弥生中期-弥生	長12.9、幅0.89、厚0.8	鹿角	ⅡAb層	45256
58	ヤス	7区	I層	弥生中期後葉	長6.95、幅0.45、厚0.4	鹿角	ⅡAb層	35410
59	ヤス	7区	I層	弥生中期後葉	長10.5、幅1.0、厚0.8	鹿角	ⅡAa層、製練痕	42495
60	ヤス	4区	BD11	弥生後期初葉-後期後葉	長8.9、幅0.6、厚0.65	鹿角	ⅡBb層	6169
61	ヤス	4区	②層	弥生後期初葉-古墳初期	長8.8、幅0.7、厚0.6	鹿角	ⅡAb層	4602
62	ヤス	4区	不明	不明	長9.4、幅0.9、厚0.5	鹿角	ⅡAa層	5272
63	ヤス	4区	③層	弥生-奈良	長11.4、幅1.3、厚0.7	鹿角	ⅡAb層	1531
64	ヤス	7区	I層	弥生中期後葉	長9.2、幅0.4、厚0.4	鹿角	ⅡAb層	42391
65	ヤス	7区	BD67	弥生後期初葉-後期後葉	長6.8、幅0.6、厚0.5	鹿角	ⅡAb層	40995
66	ヤス	6区	貝塚	弥生前期末-中期前葉	長7.15、幅0.8、厚0.7	鹿角	ⅡAb層、木製蓋	11867
67	ヤス	8区	SD36	弥生後期初葉-後期後葉	長10.35、幅0.7、厚0.5	鹿角	ⅡAb層	33106
68	ヤス	7区	H層	弥生後期	長14.7、幅1.1、厚0.9	鹿角	ⅡAa層、製練痕	36193
69	ヤス	7区	①~H層	弥生中期-奈良	長8.6、幅0.6、厚0.35	鹿角	ⅡAa層	38988
70	ヤス	8区	SD38	弥生後期初葉-後期後葉	長(6.75)、幅0.8、厚0.7	鹿角	Ⅱ層、削片あり	33495
71	ヤス	7区	H層	弥生後期	長6.2、幅0.6、厚0.5	鹿角	ⅡAa層	40629
72	ヤス	7区	不明	不明	長6.8、幅1.0、厚0.8	鹿角	ⅡAb層	42877
73	ヤス	8区	SD54	弥生後期初葉-後期後葉	長11.8、幅1.0、厚0.9	鹿角	ⅡAb層	34862



第343図 骨角器・ヤス (10)

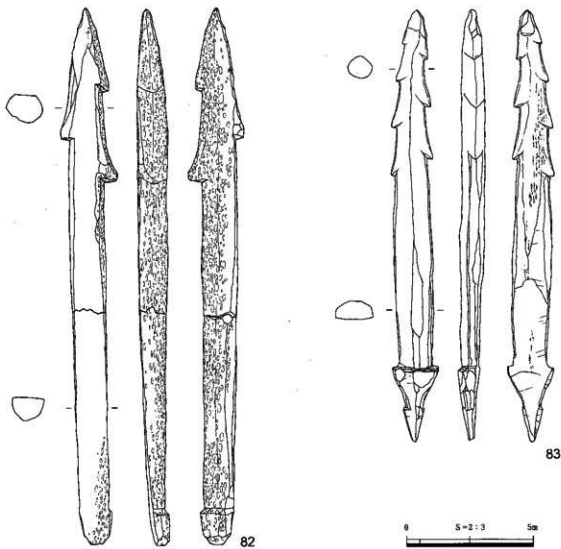
発掘番号	種	調査区	遺層・層位	時期	長さ	骨の種類	出土番号
74	ヤス	7区	J層	弥生中期後葉	長5.7, 幅0.55, 厚0.6	鹿角	II B0類 36006
75	ヤス	7区	H層	弥生後期	長6.7, 幅1.25, 厚0.74	鹿角	II Aa類 42616
76	ヤス	7区	②層	弥生後期初葉~古墳初葉	長9.0, 幅1.03, 厚0.8	鹿角	II Ab類 39233
77	ヤス	7区	SD27	弥生中期中葉~中期後葉	長10.65, 幅1.1, 厚0.9	鹿角	II Bb類 42174
78	ヤス	7区	SD66	弥生後期初葉~鉄器後葉	長8.1, 幅0.88, 厚0.78	鹿角	II Bb類 46353
79	ヤス	7区	H層	弥生後期	長8.1, 幅0.9, 厚0.8	鹿角	II Ab類 38032
80	ヤス	8区	②層	弥生後期初葉~古墳初葉	長4.85, 幅0.82, 厚0.6	鹿角	II Ab類 46876
81	ヤス	8区	③層	弥生前期末~中期前葉	長4.75, 幅0.76, 厚0.5	長骨	II Aa類 47169

ない。しかし素材は、短冊形に整えられたものを使用しているとみられる。II A類に相当するものであろうか。

漁撈具・離頭銜頭 (第346、347図)

離頭銜頭は、柄から離れて、獲物の体内に残るものである。20点が出土しており、いずれも鹿角製である。

86から94は、「青谷上寺地3」で呼称したように上寺地型とするもので、県道調査区からは14点が出土し、国道調査区出土分と合せて総数29点となる。体部の平面形が二等辺三角形状で、断面は扁平な楕円形を呈し、体部にアグのあるもの(86~89)もある。体部からは尾部が二又に分かれ、それぞれの端部には突起が削り出されて



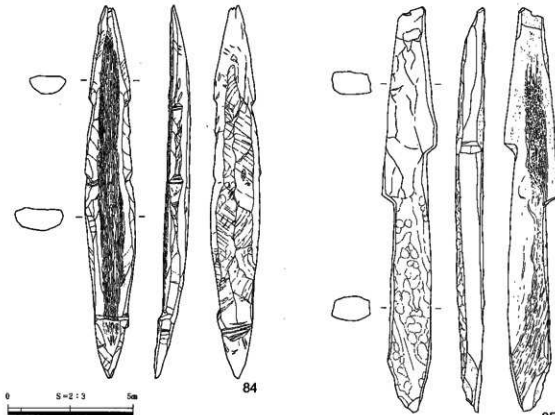
第344図 骨角器・ヤス (11)

発掘層位	種	出土区	出土層位	出土時期	長さ	口径	重量	出土番号
82	ヤス	7区	②層	弥生前期初段～古墳初段	長21.4、幅1.4、厚1.2		0.4g	30714
83	ヤス	7区	②層	弥生後期初段～古墳初段	長17.2、幅1.6、厚0.30		0.1g	30683

いる。86は、二又の尾部に樹皮状の紐を巻き付けた事例である。尾部に紐を巻き付けて空洞を設けソケット状にして、ここに中柄を差し込む構造をとっていたと考えられる。「青谷上寺地3」でも触れたとおり、このタイプの離頭鉾頭は他に類例が知られず、渡辺誠は寺脇型離頭鉾頭の発展形態と捉えている。⁽¹⁾ 体部または尾部付け根部の中心線上に索孔が穿たれる場合があり (86、88～93)、その際、穿孔は片側からのみ行われる場合が多い。93では尾部の付け根を穿ったため、穿孔部が尾部のふところと繋がってしまっている。87は、穿孔のみられないもので、アグを片側にもつが、体部の下端の一方が突出する形態をとり、一見アグ状をなす。尾部の一方を失っているが、欠損した尾部を除去しているので、その後も再利用したものと思われる。94は索孔がみられず、加工もやや粗い。未製品の可能性もある。

95から98も離頭鉾頭である。いずれも直角製である。95と96は、ソケットを有する閉塞式である。95は、アグの根元が一度すままり、そこから急速に径が太くなっている。欠損のため尾部の形状はわからず、穿孔等も不詳で、索綱をどのように繋いでいたかは不明である。96は先端部を鬚頭状に尖らせるものである。95と同様に欠損のため、尾部の形状は不明だが、体部に索溝が巡っている。従来、縄文時代から弥生時代を通じて、本州の日本海沿岸部においては、閉塞式離頭鉾頭の検出例は見聞せず、空白を埋めるものといえる。

97は、「青谷上寺地3」において「楕圓型」とした離頭鉾頭に、尾部の形状が似るものである。先端部から段



第345図 骨角器・ヤス (12)

標本番号	種	調査区	遺跡・層位	時期	長さ	骨種	用途	出土層位
84	ヤス	7区	L3	弥生中期後半	長14.8, 幅2.0, 厚0.9	鹿角	削頭、未製品	207/7
85	ヤス	7区	K層	弥生中期後半	長16.2, 幅1.87, 厚1.1	鹿角	削頭、未製品	390/7

差をもって部が続き、さらに尾部が二又に分かれ末広がりになるいわゆる燕形と呼ばれる形態をとるもので、断面形は半円形状を呈する。ただし、先端部が三角形に尖らず、丸く終わっており、この点福浦型とは異なる。福浦型は従来、別具との組み合わせによる使用が想定されている銚頭であるので⁽¹²⁾、あるいは本例がその別具にあたる可能性もある。「青谷上寺地3」中に掲載した福浦型離頭銚頭には索孔がなく（「青谷上寺地3」第181図78、79）、本例にも索孔がないので、両者を組合わせた場合は先端部を区切る段差部に索網を括り付けるのであろうか。渡辺誠は、組合わせる際に石製ないし金属製の利器を先端に挟み込む復元案を提示している⁽¹³⁾。

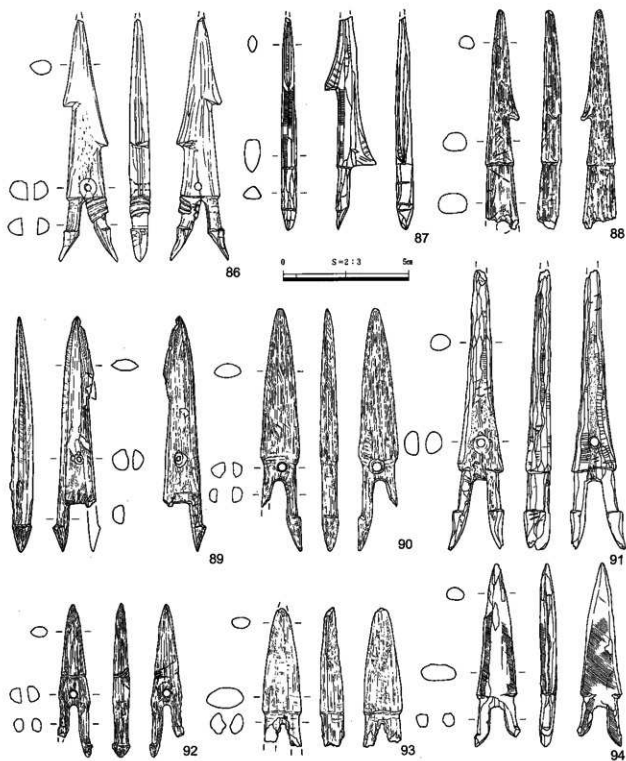
98は、先端部が鋭く尖り、基部が二又にわかれるもので、片側の尾部が長く伸び、もう一方は突起の削り出しをもって短く終わっている。ここに索網を巻き付け、上寺地型と同様、ソケット状にした可能性もある。

漁撈具・釣針 (第348～350図)

釣針には、単式釣針、結合式釣針の軸部及び針部がある。素材は概ね鹿角であるが、稀に猪牙や長骨を用いる場合もある。

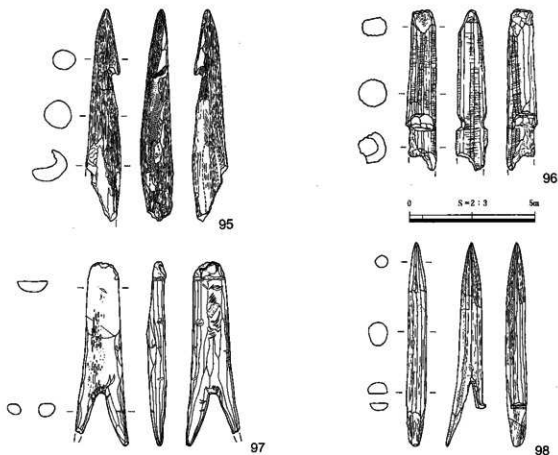
99から110は、単式釣針である。無アグで、チモト部に突起を削り出すものが多い。103は内アグで両アグのもの、105は内アグ、109は外アグである。99、107は湾曲部が幅狭でふところが深く、106や110では湾曲部の幅が広い。101、102、105は特に小型のものであるが、いずれも猪牙製である。108は長骨製の未製品で、骨内面の自然面が溝状に観察される。当遺跡では、長骨製の釣針はこの1点のみである。このように、当遺跡における単式釣針の様相は多様であり、獲物である魚種の豊富さを反映するものであろう。なお110は、鹿角の顆粒がそのまま露頭するもので、未製品である可能性がある。

111から120は結合式釣針の軸部であり、111～113、119は針部との結合部を面取りするもので、114～118、120は溝状をなすものである。チモト部はいずれも突起を削り出しており、未製品と思われる119でも、チモト部の突起を意識した切り込みがみられる。いずれも鹿角製である。



第346図 骨角器・離頭矢頭(1)

博物館番号	種別	調査区	遺構・層位	時期	長さ	骨角	備考	取上番号
86	離頭矢頭(上寺地型)	7区	J層	弥生中期後葉	長9.8、幅7.5、厚0.8	鹿角	基部に附設を巻く	44653
87	離頭矢頭(上寺地型)	7区	J層	弥生中期後葉	長6.8、幅0.9、厚0.6	鹿角	片側の基部欠損後再加工	45063
88	離頭矢頭(上寺地型)	5区	③層	弥生中期中葉~中期後葉	長(8.0)、幅(1.3)、厚0.9	鹿角		15068
89	離頭矢頭(上寺地型)	4区	③層	弥生中期中葉~中期後葉	長9.5、幅1.5、厚0.9	鹿角		5718
90	離頭矢頭(上寺地型)	4区	①~②層	弥生前期末~中期後葉	長9.8、幅1.8、厚0.7	鹿角		4902
91	離頭矢頭(上寺地型)	7区	H層	弥生前期	長11.3、幅2.3、厚1.1	鹿角		39183
92	離頭矢頭(上寺地型)	5区	②層	弥生後期初頭~古墳初頭	長7.2、幅1.25、厚0.7	鹿角		12477
93	離頭矢頭(上寺地型)	5区	②層	弥生後期初頭~古墳初頭	長(5.6)、幅1.6、厚0.66	鹿角		9278
94	離頭矢頭(上寺地型)	5区	②層	弥生後期初頭~古墳初頭	長7.4、幅1.6、厚0.7	鹿角	複製品?	8464



第347図 骨角器・離頭鈺頭(2)

発掘層位	型式	長さ	幅	厚	重量	出土層位	出土品目	
95	離頭鈺頭(角質)	6区	②	離	弥生後期前期～古墳前期	長(8.5)、幅1.40、厚1.15	鹿角	9157
96	離頭鈺頭(角質)	4区	①～②	離	弥生前期末～中期前期	長(8.5)、幅1.2、厚1.1	鹿角	9155
97	離頭鈺頭(角質?)	6区	9D6B	離	弥生後期末～古墳前期	長7.5、幅1.76、厚0.8	鹿角	48804
98	離頭鈺頭	5区	②	離	弥生後期前期～古墳前期	長8.25、幅1.4、厚0.85	鹿角	8226

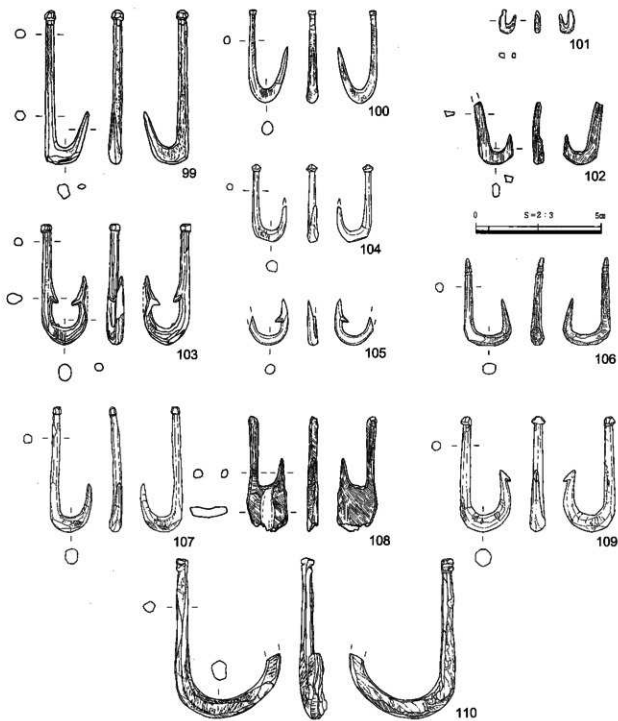
121～123は、結合式的針の針部である。121と123には外アグがつく。121は鹿角製で、122と123は猪牙製である。121は顆粒を残すものの、122と同様に精緻に研磨されているが、123は猪牙のエナメル質に擦痕がみられず、未製品である可能性もある。

漁撈具・擬鈺状骨角器(第351図)

「青谷上寺地3」で骨錐としたものであり、鹿角を紡錘形または円柱状等に加工し、穿孔するものである。『青谷上寺地3』では5つのタイプに分類したが、新たにAタイプとBタイプの複合型であるFタイプがみられた。125～128、130、131は、紡錘状の擬鈺の両端に、長軸に対し直交する方向に穿孔するAタイプであり、127、128は杏仁形を呈し、中程がかなり肥厚している。131の穿孔箇所的位置関係は、両端でややねじれをみせている。124、129は、側面から端面に向けて穿孔するBタイプで、124はかなり大型の擬鈺である。その重量のためか、糸を通すべき穿孔部が両端とも欠損している。133は、長軸に平行する方向に穿孔するCタイプで、有孔土玉状を呈する。135は穿孔のないEタイプで、長軸方向に溝が切り込まれている。134にも穿孔は無いが、Cタイプの未製品である可能性があるため、分類は留保する。132はFタイプであり、片方の端部では長軸に対し直交する方向に穿孔しているのに対し、もう一方では端面からやや深めに穿孔し、その途中で側面へと通じる穿孔がみられる。あるいはこれが、釣針を差し込む棒軸である可能性も提示しておきたい。

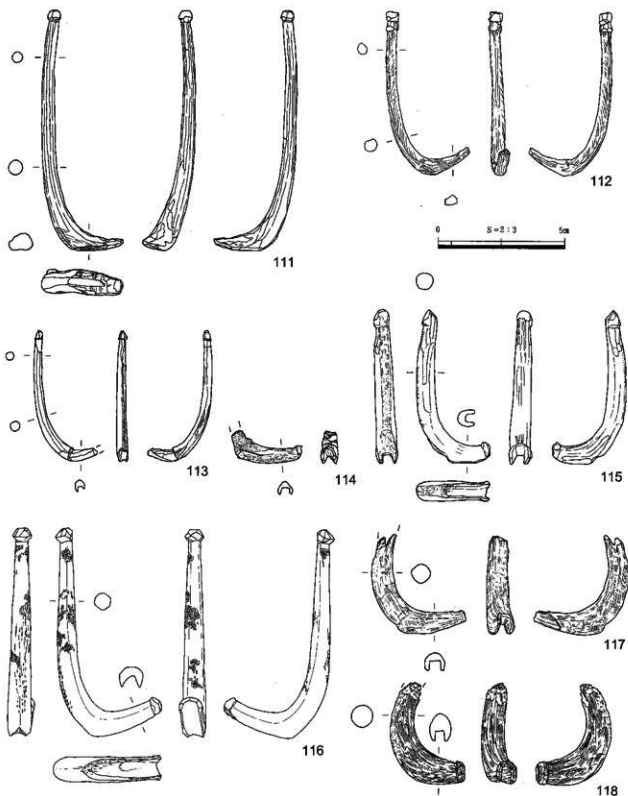
漁撈具・ポイント状骨角器(第352図)

136から143は、「青谷上寺地3」で用途不明品としたものである。ほぼ直角に折れる鈺形の体部の軸頂が尖端化しており、軸部に2～3孔を穿つか、切り込みを入れて段を削り出すという定型化した製品である。穿孔か、削



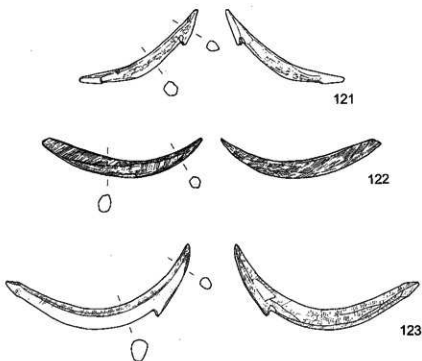
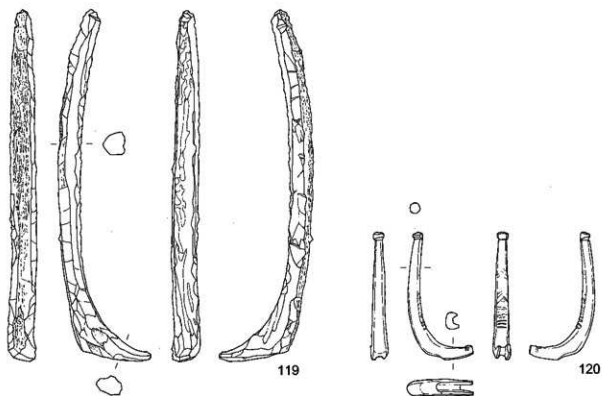
第348図 骨角器・釣針(1)

発掘層・遺跡名	調査区	遺構・層位	時期	注	長さ	管理番号	取上番号	
99	単式の針	4区	不明	不明	長6.2、幅1.7、軸厚0.7	鹿角	無アグ	3333
100	単式の針	7区	L層	弥生中期後葉	長3.75、幅1.6、軸厚0.58	鹿角	無アグ	41306
101	単式の針	5区	良港	弥生前期末～中期初葉	長6.9、幅0.6、軸厚0.2	象牙	無アグ	18000
102	単式の針	5区	②溝	弥生後期初葉～古墳初葉	長(3.0)、幅(1.58)、軸厚0.3	象牙	未製品	8276
103	単式の針	5区	③溝	弥生前期末～中期初葉	長4.9、幅1.8、軸厚0.7	鹿角	無アグで内アグ	15964
104	単式の針	不明	不明	不明	長3.18、幅1.4、軸厚0.45	鹿角		50376
105	単式の針	不明	不明	不明	長(1.85)、幅(1.58)、軸厚0.4	象牙	内アグ	50188
106	単式の針	不明	不明	不明	長3.5、幅1.9、軸厚0.5	鹿角		50208
107	単式の針	不明	不明	不明	長5.05、幅1.55、軸厚0.5	鹿角		50231
108	単式の針	5区	③溝	弥生後期初葉～古墳初葉	長4.7、幅1.8、軸厚0.4	長骨	未製品	3036
109	単式の針	6区	③溝	弥生中期中葉～中期後葉	長4.65、幅2.0、軸厚0.6	鹿角	外アグ	46748
110	単式の針	7区	J層以下	弥生中期後葉以前	長6.45、幅4.3、軸厚0.9	鹿角	未製品	37669



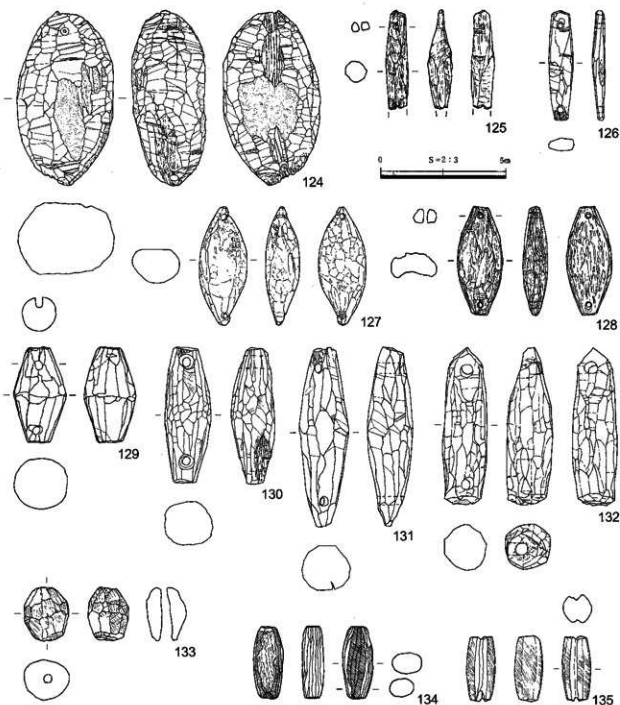
第349圖 骨角器・釣針(2)

標本番号	種	出土層位	時期	長さ	幅	軸厚	形状	結合部形状	出土層位
111	結合式の針軸部	5区	③層	弥生中期中葉~中期後葉	長8.2、幅3.25、軸厚0.7		鹿角	結合部密着U	14154
112	結合式の針軸部	5区	②層	弥生後期初葉~古墳初葉	長6.5、幅3.55、軸厚0.8		鹿角	結合部密着U	8206
113	結合式の針軸部	5区	8D1	弥生前期末~中期前葉	長5.25、幅2.55、軸厚0.4		鹿角	結合部密着U	10667
114	結合式の針軸部	5区	8K27	弥生中期中葉~中期後葉	長(1.35)、幅(2.0)、軸厚0.7		鹿角	結合部溝状	8773
115	結合式の針軸部	7区	K層	弥生中期後葉	長6.2、幅2.8、軸厚0.8		鹿角	結合部溝状	20044
116	結合式の針軸部	6区	③層	弥生中期中葉~中期後葉	長8.2、幅4.2、軸厚0.8		鹿角	結合部溝状	48914
117	結合式の針軸部	5区	不明	不明	長(4.8)、幅(2.8)、軸厚1.0		鹿角	結合部溝状	11773
118	結合式の針軸部	5区	③層	弥生中期中葉~中期後葉	長(3.3)、幅(4.00)、軸厚1.0		鹿角	結合部溝状	14236



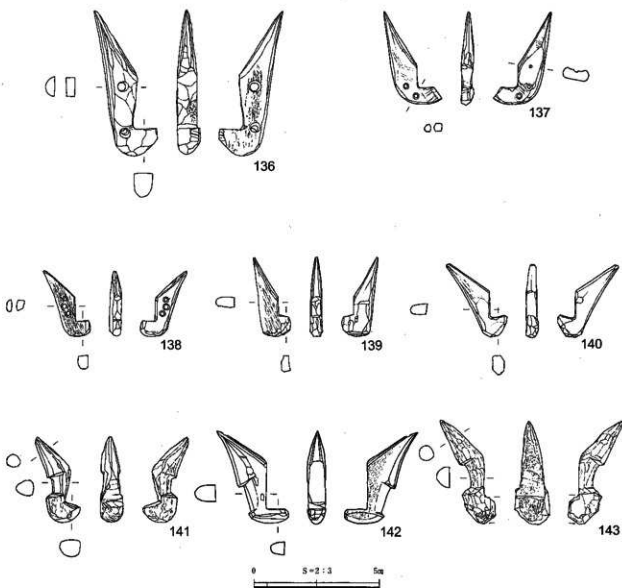
第350図 骨角器・釣針 (3)

図番	器名	図記	出土層位	時期	長さ	幅	厚	特徴	出土番号
119	棒方式的針軸部	6区	①層	弥生中期～中期後葉	長14.1, 幅3.7, 軸厚1.1			鹿角 結合部痕あり	47600
120	結合式の針軸部	6区	②層	弥生中期中葉～中期後葉	長5.1, 幅2.9, 軸厚0.7			鹿角 結合部痕状	45082
121	結合式の針軸部	7区	①層	弥生中期後葉	長5.48, 軸幅0.5, 軸厚0.48			鹿角 外アゴ	41691
122	結合式の針軸部	5区	②層	弥生後期初葉～古墳初期	長6.4, 軸幅0.75, 軸厚0.48			猪牙	8880
123	結合式の針軸部	6区	③層	弥生中期中葉～中期後葉	長7.3, 軸幅0.8, 軸厚0.7			猪牙 未磨品、外アゴ	48914



第351図 骨角器・擬網状骨角器

種別	種名	産地	層位	時期	長さ	幅	厚	骨角	タイプ	出土層位
124	擬網状骨角器	7区	①層	弥生中期中葉～古墳初期	長(5.0)、幅(3.8)、厚(2.8)			鹿角	Bタイプ	3817
125	擬網状骨角器	6区	②～③層	弥生中期中葉～古墳初期	長(5.0)、幅(3.8)、厚(1.0)			鹿角	Aタイプ	8203
126	擬網状骨角器	7区	②層	弥生後期初期～古墳初期	長4.4、幅1.0、厚0.5			鹿角	Aタイプ	39543
127	擬網状骨角器	7区	②層	弥生後期初期～古墳初期	長4.7、幅1.3、厚1.25			鹿角	Aタイプ	39207
128	擬網状骨角器	6区	②層	弥生後期初期～古墳初期	長4.25、幅1.8、厚1.0			鹿角	Aタイプ	9999
129	擬網状骨角器	6区	②層	弥生後期初期～古墳初期	長3.8、幅2.1、厚2.05			鹿角	Bタイプ	8251
130	擬網状骨角器	6区	GD3B	弥生後期初期～後期後葉	長5.5、幅1.8、厚1.4			鹿角	Aタイプ	33032
131	擬網状骨角器	7区	②層	弥生後期初期～古墳初期	長7.2、幅2.0、厚1.8			鹿角	Aタイプ	35583
132	擬網状骨角器	7区	②層	弥生後期初期～古墳初期	長6.4、幅1.8、厚1.8			鹿角	Fタイプ	39070
133	擬網状骨角器	6区	②層	弥生後期初期～古墳初期	長2.2、幅1.8、厚1.65			鹿角	Cタイプ	8470
134	擬網状骨角器	6区	③層	弥生中期中葉～中期後葉	長2.8、幅1.2、厚0.85			鹿角	Cタイプ、未製品	13006
135	擬網状骨角器	7区	不明	不明	長2.8、幅1.1、厚1.1			鹿角	Eタイプ	37636



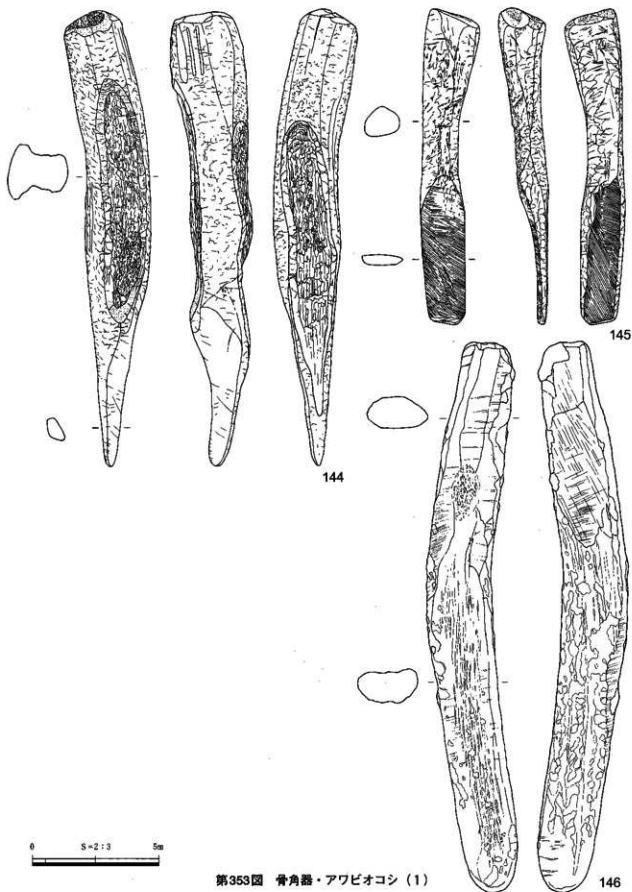
第352図 骨角器・ポイント状骨角器

発掘調査番号	調査区	遺構・層位	時期	長さ	骨角器種別	出土層位	
136	ポイント状骨角器	8区	GD56	弥生前期初期～後期後葉	長5.65, 幅2.5, 厚1.2	魚角 有孔	30085
137	ポイント状骨角器	8区	GD64	弥生後期初期～後期後葉	長3.75, 幅2.35, 厚1.05	魚角 有孔	24696
138	ポイント状骨角器	7区	②溝	弥生後期初期～古墳初期	長2.65, 幅1.8, 厚0.7	魚角 有孔	25694
139	ポイント状骨角器	7区	②溝	弥生後期初期～古墳初期	長3.2, 幅1.5, 厚0.75	魚角	25646
140	ポイント状骨角器	7区	②溝	弥生後期初期～古墳初期	長2.9, 幅2.45, 厚0.65	魚角	35620
141	ポイント状骨角器	5区	②溝	弥生後期初期～古墳初期	長3.45, 幅1.3, 厚0.95	魚角 有段	11531
142	ポイント状骨角器	7区	②～①溝	弥生中期後葉～古墳初期	長4.8, 幅1.6, 厚1.45	魚角 有段	40122
143	ポイント状骨角器	7区	GD27	弥生中期中葉～中期後葉	長(4.15), 幅1.4, 厚0.95	魚角 有段・有製品	42938

り出しの段がつくのは、この部分が何かに結びつけられ、固定されることを示すものと思われる。つまり鉤形の形に合わせる形状のものとの組合せが考えられる。そこで、魚形石器の使用例が参考になるのではなかろうか。

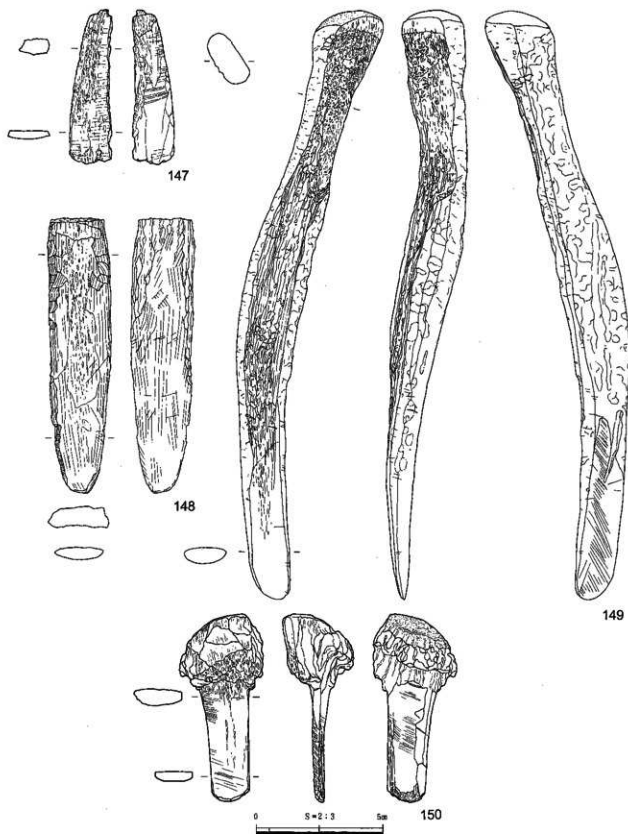
魚形石器は、縄縄文時代の北海道の渡島半島を中心に展開する恵山文化を特色付けるもので、結合式釣針の軸部、錘、握柄という機能を兼ね備える石器である。面取りされた端部に骨角製の釣針先が組合わされ、結合式の釣針となる。このような結合式釣針は、トローリング・フック等と呼ばれ、南太平洋地域などでも、貝殻製のシヤンクに骨製などのポイントととり付け、カツオ漁に使用されている。⁽¹⁾ よって本節では、この製品を形態的な特徴から呼称し難いこともあり、上述よりポイント状骨角器と称することとする。

ポイント状骨角器には、鉤形部に軸となるものを組合せ、尖端部を針部とする新合式釣針の針部の機能を推定



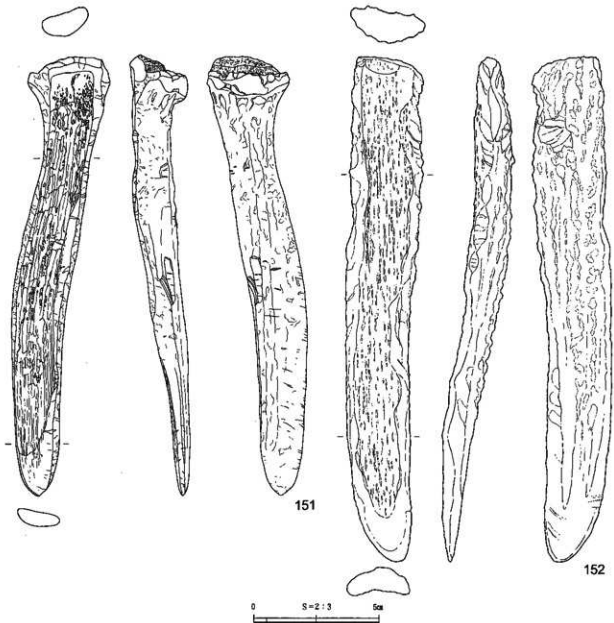
第353図 骨角器・アワビオコシ (1)

図版番号	種別	出土区	遺構・層位	時期	長さ	幅	厚	重量	備考	出土番号
144	アワビオコシ	7区	J層	弥生中期後半	長18.2	幅3.1	厚2.6			41315
145	アワビオコシ	7区	M層	弥生前期末～中期前半	長12.6	幅2.1	厚1.73		鹿角	40878
146	アワビオコシ	5区	乙層	弥生後期初期～有明前期	長22.0	幅2.6	厚1.2		鹿角	8405



第354図 骨角器・アワビオコシ (2)

発掘層・層名	図番	品名・種別	時期	寸法	骨種	出土層名
147	アワビオコシ	5区 片削	弥生前期	長6.2、幅1.7、厚0.8	鹿角	4433
148	アワビオコシ	5区 Q層	弥生中期中葉～中期後葉	長11.0、幅2.5、厚0.9	鹿角	12155
149	アワビオコシ	7区 M層	弥生前期末～中期前葉	長23.8、幅1.8、厚1.8	鹿角	42091
150	アワビオコシ	5区 Q層	弥生中期中葉～中期後葉	長7.45、幅3.3、厚0.7	鹿角	13646



第355図 骨角器・アワビオコシ (3)

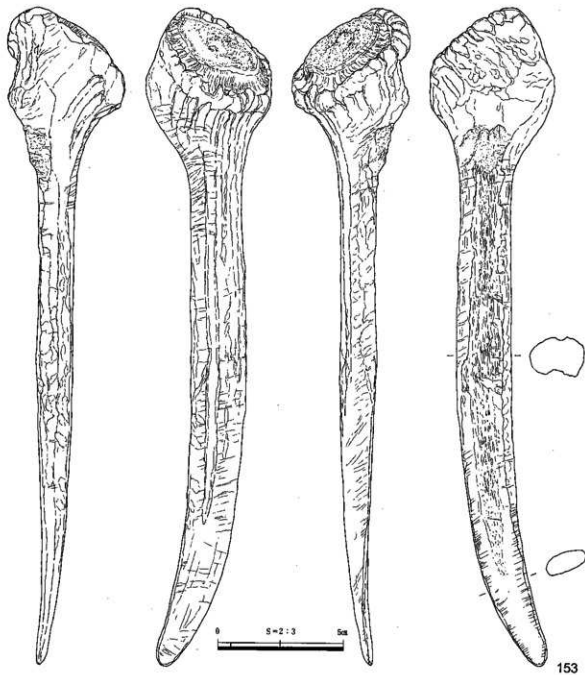
発掘地層名	調査区	遺物位置	物名	土層	骨角器番号	出土層名
151	アワビオコシ	7区	角角	弥生中期中葉	長17.8、幅3.3、厚2.0	44500
152	アワビオコシ	6区	貝塚	弥生前期末～中期初葉	長20.2、幅3.2、厚1.7	47602

する。しかしその場合、軸部となるものの存在が当遺跡では確認されていないことが問題となる。強いて挙げるとすれば、当遺跡から出土している棒状石製品が候補となろうか（『青谷上寺地3』第112図110～114）。棒状の礫を研磨して仕上げ、稜線が長軸方向に入り細かい多面体となるものであるが、上端部の表裏に面を設け穿孔するものや、上端部に溝を巡らすものがある。銅鐸の舌を思わせる形状を呈する。概ね8cm前後の長さを測り、ポイント状骨角器とのバランスも悪くない。

概ね鹿角製だが、137が唯一長骨製である。海绵質が部分的に覗くが、全体によく研磨され、精緻に作られている。143は、欠損品だが加工が粗く、破損のため途中で製作を断念したものであろう。

漁撈具・アワビオコシ (第353～356図)

144から153はアワビオコシとした。いずれも鹿角製で、ヘラ状を呈する。144は、角幹の表裏を削って掘りとし、先端部は斜めにカットされて尖り気味に加工されているが、磨耗している。145では、角幹の片側を加工して掘りやすくしており、板状の先端部は両面から削り、磨かれている。146は、角幹を縦裁した素材を矩冊形に

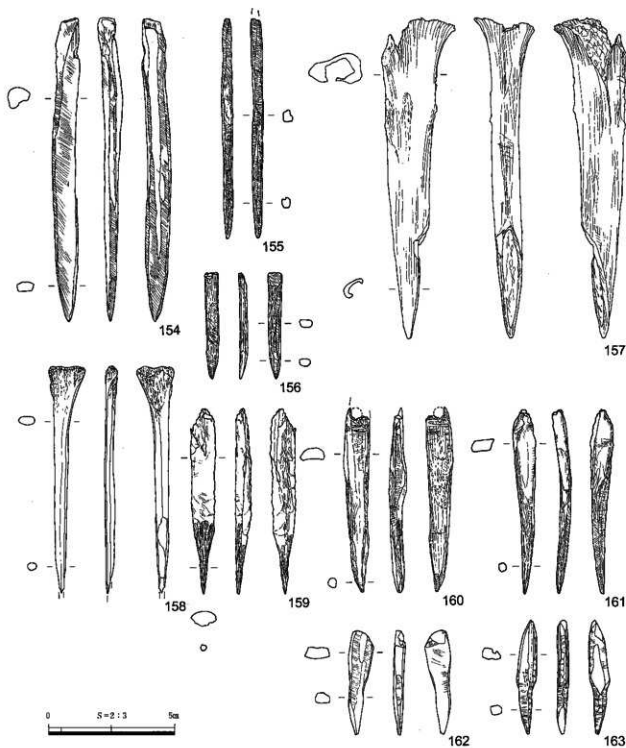


153

第356図 骨角器・アワビオコシ (4)

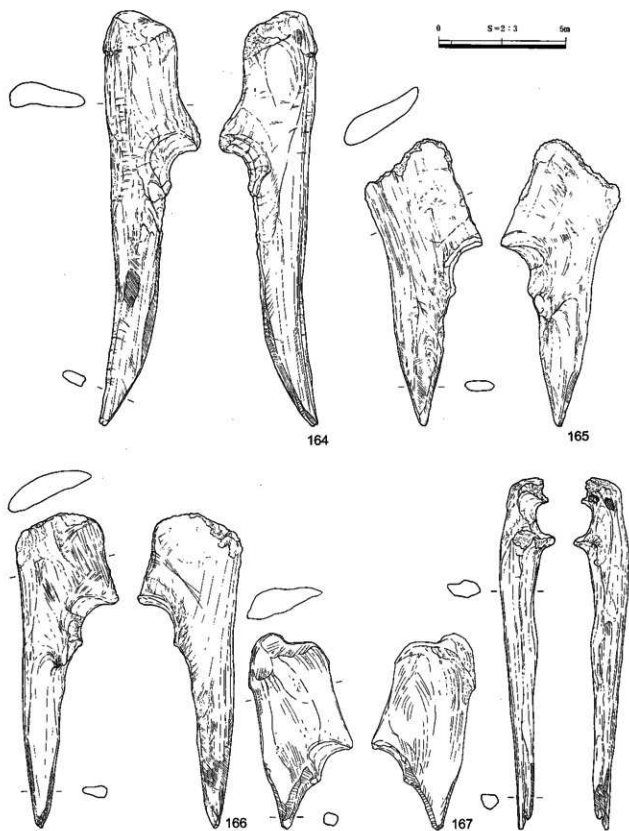
図録番号	図名	図説	図版	時期	出所	資料種別	出土層
153	アワビオコシ	0区	0層	弥生前期末~中期前半	表33, 表40, 第15	鹿角	1504

成形したもので、ややくの字状に屈曲する。先端部は摩滅している。147は小ぶりなものであるが、鹿角の辺材部の破片をヘラ状に加工して使っているものである。148と152は、縦裁した鹿角を短冊状に成形した素材から作られたもので、先端部は舌状に加工されているが、幾分使用減りしている。149、151は角幹を半裁し、先端部をヘラ状に加工している。全体的にねじられたような形態をなす。150は、角座部を持ち手とするものであろう。角幹部は薄く板状に加工され、先端部には使用痕が認められる。153は特に大型のもので、角座部を残したまま角幹を縦裁し、先端部を刀状に加工している。このようにアワビオコシは、使用者の使い勝手のため個別に形態を異にするが、岩礁棲の貝類をてこの原理によって起こし、捕獲するものであるから、柔軟性や強靱性、再加工の利便性から素材を鹿角に求めるのであろう。



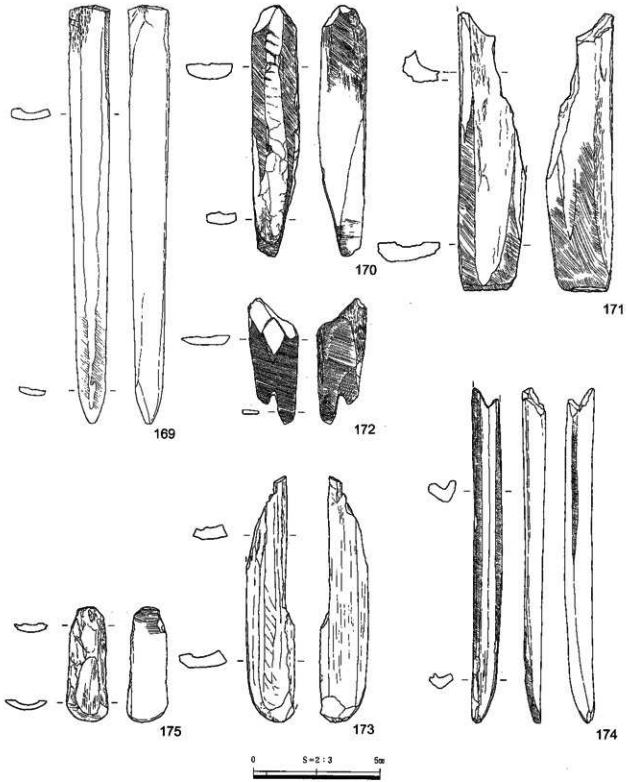
第357圖 骨角器・刺突具(1)

標本番号	種	調査区	遺跡・層位	時期	寸法	骨種	出土層位
154	刺突具	5区	①層	弥生前期末~中期前半	長12.2, 幅0.95, 厚0.9	鹿骨	17298
155	刺突具	5区	①層	弥生中期中央~中期後半	長8.7, 幅0.45, 厚0.5	鹿角	14127
156	刺突具	5区	焼土42	弥生後期初頭~後期後半	長4.3, 幅0.55, 厚0.3	鹿角	14780
157	刺突具	5区	②層	弥生後期初頭~古墳初頭	長12.8, 幅2.3, 厚2.1	馬骨	8999
158	刺突具	7区	J層	弥生中期後半	長9.05, 幅1.4, 厚0.5	鹿骨	38801
159	刺突具	5区	真埋	弥生前期末~中期前半	長7.4, 幅1.0, 厚0.6	鹿角	15288
160	刺突具	5区	②層	弥生後期初頭~古墳初頭	長7.4, 幅1.0, 厚0.7	鹿角	12984
161	刺突具	5区	①層	弥生中期中央~中期後半	長7.3, 幅0.9, 厚0.8	鹿角	13988
162	刺突具	7区	②層	弥生後期初頭~古墳初頭	長4.15, 幅0.65, 厚0.45	鹿牙	38801
163	刺突具	7区	②層	弥生後期初頭~古墳初頭	長4.55, 幅0.8, 厚0.45	鹿牙	35542



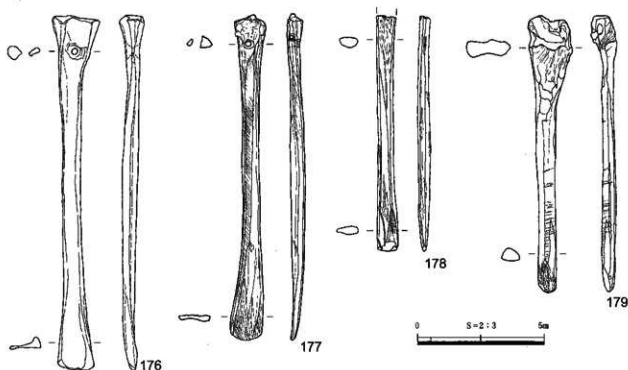
第358図 骨角器・刺突具(2)

器具番号	種別	出土区	遺物・層位	時期	寸法	骨種	出土層位
164	刺突具	5区	S×31	弥生中期中葉～中葉後葉	長18.7, 幅3.6, 厚1.8	尺骨	9603
165	刺突具	5区	②層	弥生後期初葉～古墳初葉	長11.5, 幅3.6, 厚2.1	尺骨	9157
166	刺突具	5区	②層	弥生後期初葉～古墳初葉	長12.7, 幅3.9, 厚2.1	尺骨	8369
167	刺突具	5区	②層	弥生後期初葉～古墳初葉	長7.8, 幅3.7, 厚1.2	尺骨	13266
168	刺突具	5区	②層	弥生後期初葉～古墳初葉	長14.1, 幅2.15, 厚1.6	尺骨	9223



第359図 骨角器・ヘラ (1)

発掘番号	種	調査区	遺構・層位	時期	注	骨種	備考	取上番号
169	ヘラ	5区	8004	弥生後期初層～鉄器後葉	長18.0, 幅1.65, 厚0.65	長骨		34774
170	ヘラ	5区	②層	弥生中期中葉～中期後葉	長10.0, 幅1.0, 厚0.5	長骨		13691
171	ヘラ	5区	②層	弥生中期中葉～中期後葉	長11.1, 幅2.0, 厚0.8	長骨		15437
172	ヘラ	5区	②層	弥生後期初層～古墳初葉	長5.1, 幅1.9, 厚0.4	長骨		12553
173	ヘラ	5区	②層	弥生後期初層～古墳初葉	長9.65, 幅1.8, 厚0.5	長骨		9290
174	ヘラ	5区	②層	弥生中期中葉～中期後葉	長13.4, 幅1.1, 厚0.5	長骨		18078
175	ヘラ	5区	②層	弥生後期初層～古墳初葉	長4.6, 幅1.6, 厚0.3	長骨		8241



第360図 骨角器・ヘラ (2)

発掘層位	種	図	出土層位	時期	長さ	骨種	出土長さ
176	ヘラ	5区	不明	不明	長14.2, 幅1.9, 厚0.7	鳥骨	134.9
177	ヘラ	5区	②層	弥生後期初層～古墳初期	長13.0, 幅1.3, 厚0.6	鳥骨	91.7
178	ヘラ	5区	②層	弥生後期初層～古墳初期	長8.4, 幅0.8, 厚0.5	鳥骨	92.0
179	ヘラ	5区	BD4	弥生前期末～中期前半	長11.05, 幅1.75, 厚0.7	鳥骨	171.69

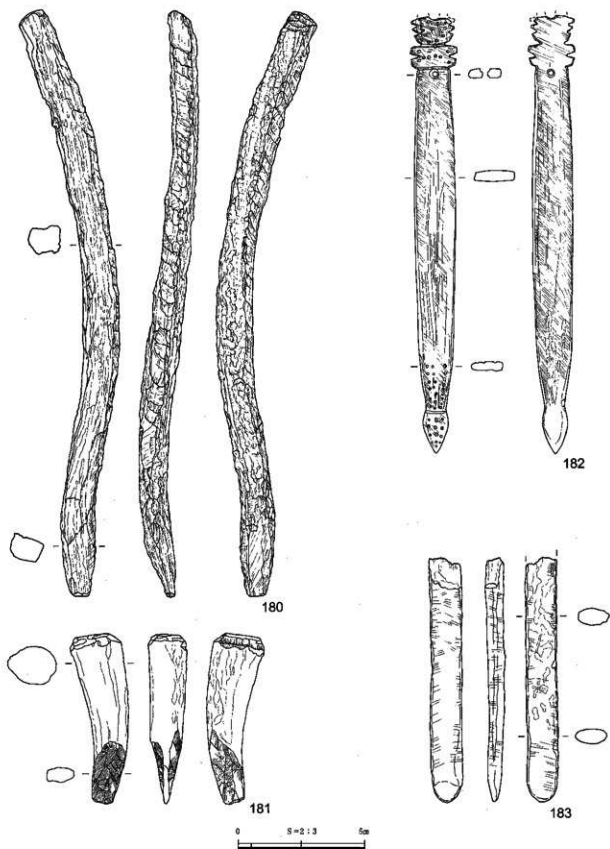
刺突具 (第357～358図)

一口に刺突具といっても、多様な用途があるはずである。しかし、端部の鋭利さは一様ではなく、特徴、別具との組合せを思わせる痕跡も窺われない。供された素材も、鹿角や大型哺乳獣の長骨、猪牙、鳥骨など多様であり、刺突具の用途を個別に特定することは難しい。穿孔具や土器製作時の工具、貝の身を剥く道具などが想起されるどころだが、強いていえば、159はニードル状の先端部を呈するので、穿孔具であろう。154～163の刺突具については、法量的には概ね3つのカテゴリーにまとめられそうである。154、157が長さ15cm以上のもの、155、158～161が長さ10cm前後のもの、156、162、163が長さ5～6cm前後のものである。このような法量の違いは、人が棒状のものを手に持つ場合、その長さによって持ち方を変えるであろうから、刺突具の機能を考える材料となるかもしれない。刺突具と漁撈刺突具の違いは、その仕上げ方にある。刺突具はとりえず先端を尖らせることを目指した加工を行うが、漁撈刺突具は全体的な形態のバランスを保とうとする。よって刺突具は、素材の縦載破面をあまり丁寧に調整せず、断面形が角形を呈することとなる。157、158では骨の片端を斜めにカットして尖らせただけであるし、159～163については素材本来の自然な面が露出している。154～156は、刺突力を高めるためか細かく研磨しているものの、外形ラインはシャープさに欠ける。

164～168は、イノシシ、シカまたは鳥の尺骨製である。機骨をはずした尺骨の掌状突起側を斜めにカットし、その破面を研磨して尖らせるもので、肘頭側をそのまま残して握り取ると、肘突起に丁度指がかかるので、グリップとして好都合である。使用により先端部が磨耗すると再加工し、167のように短くなるまで使い続けるようである。地域や時代を超えてみられる定形の刺突具であるが、その機能を特定するに至っていない。

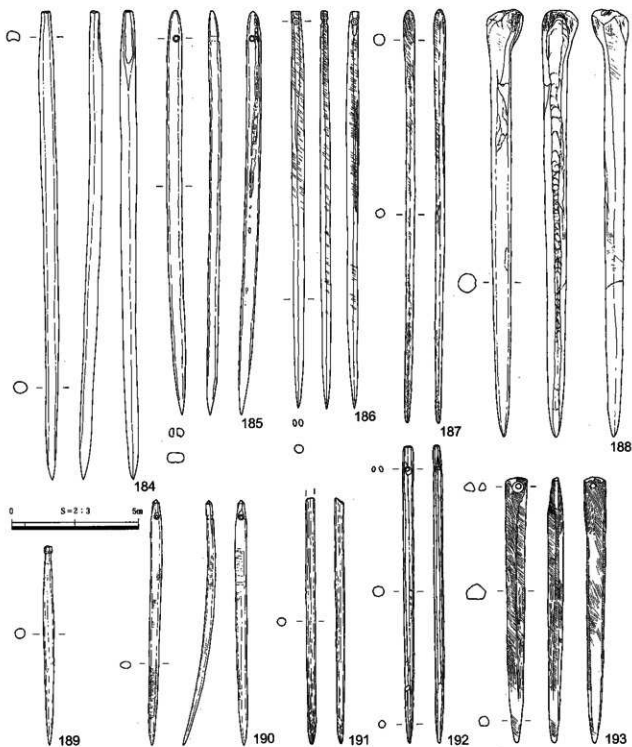
ヘラ (第359～361図)

169～175は、大型哺乳獣の長骨製である。長骨の両端を揃り切って切断したものを縦載し、その端部に刃部を付けるものである。法量的には長短の差があり、169で16.6cm、175で4.6cmを測る。169では握るように、175で



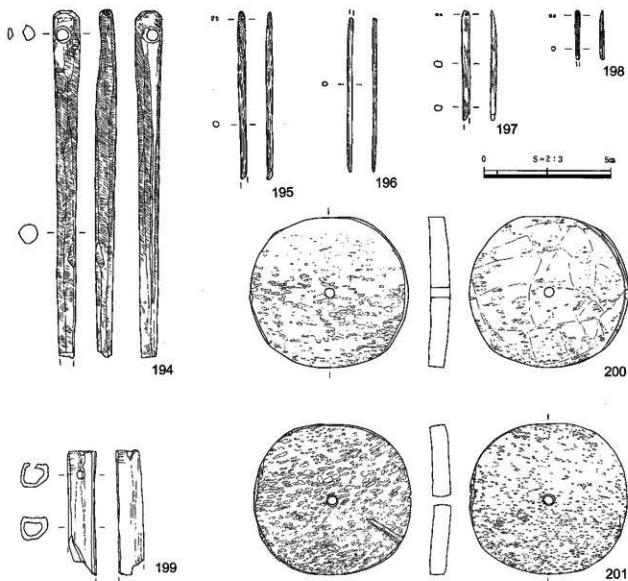
第361図 骨角器・ヘラ (3)

図番	種別	出土区	遺構・層位	器名	法量	骨角種別	取上番号
180	ヘラ	5区	②層	弥生前期初層～宮城初層	長23.3、幅1.5、厚1.35	鹿角	5589
181	ヘラ	5区	③層	弥生中期中層～中期後葉	長6.5、幅1.6、厚1.5	鹿角	13673
182	ヘラ	7区	M層	弥生前期末～中期前葉	長17.4、幅1.8、厚0.4	長骨 装飾あり	40000
183	ヘラ	5区	②層	弥生後期初層～宮城初層	長(8.75)、幅1.25、厚0.7	鹿角	8998



第362図 骨角器・針 (1)

標本番号	種別	出土層	時期	長さ	骨角	取上遺長
184	針	7区 J層	弥生中期後葉	長18.6, 幅0.6, 厚0.5	鹿角	42124
185	針	7区 I層	弥生中期後葉	長16.1, 幅0.6, 厚0.46	鹿角	30426
186	針	7区 SD27	弥生中期中葉~中期後葉	長15.8, 幅0.5, 厚0.4	?	42330
187	針	5区 ㊸層	弥生前期末~中期前葉	長16.5, 幅0.45, 厚0.45	鹿角	19260
188	針	8区 K層	弥生中期	長17.1, 幅1.4, 厚1.45	鹿角	部位の目録
189	針	7区 ㊸層	弥生後期初葉~古墳初葉	長7.9, 幅0.4, 厚0.4	?	無孔、有突起
190	針	7区 H層	弥生後葉	長9.9, 幅0.5, 厚0.35	?	36296
191	針	5区 SK31	弥生中期中葉~中期後葉	長(8.8), 幅0.4, 厚0.4	?	9609
192	針	5区 ㊸層	弥生後期初葉~古墳初葉	長11.9, 幅0.4, 厚0.4	?	8285
193	針	5区 SK46	弥生中期中葉~中期後葉	長10.7, 幅0.9, 厚0.8	鹿角	15327



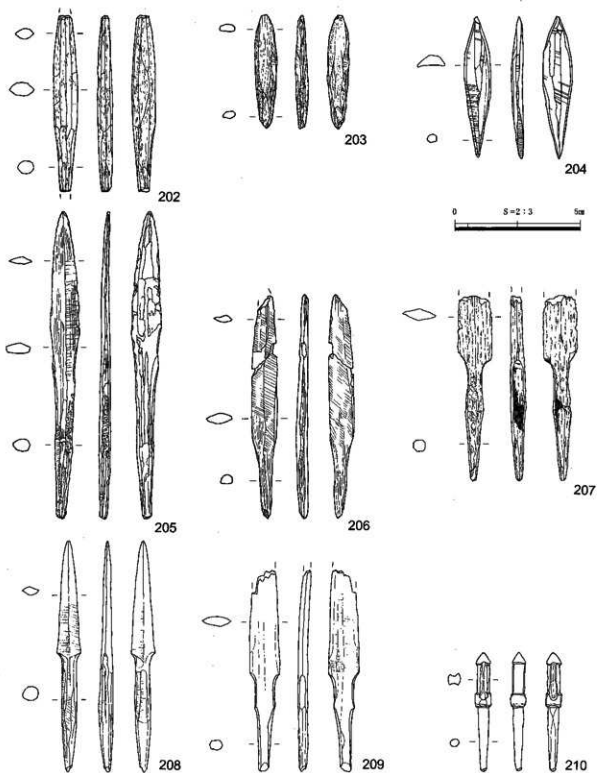
第363図 骨角器・針(2)、紡錘車

図録番号	種	出土区	遺構・層位	時期	注	骨角部	出土層
194	針	5区	②層	弥生前期中葉～中期後葉	長(13.9)、幅0.05、厚0.8	鹿角	14435
195	針	5区	②層	弥生後期初葉～古墳初葉	長(6.7)、幅0.3、厚0.3	?	9290
196	針	5区	②層	弥生前期末～中期後葉	長(6.2)、幅0.2、厚0.15	?	16558
197	針	4区	②～③層	弥生前期末～中期後葉	長(4.4)、幅0.3、厚0.2	?	4952
198	針	5区	焼土65	弥生後期末～古墳初葉	長(1.85)、幅0.2、厚0.15	?	13406
199	針入れ	7区	SA22	弥生中期中葉～中期後葉	長(5.0)、幅1.15、厚1.0	鹿角	41729
200	紡錘車	7区	H層	弥生後葉	長6.3、幅0.5、厚0.8	鹿角	38369
201	紡錘車	7区	②層	弥生後期初葉～古墳初葉	長6.25、幅0.05、厚0.7	鹿角	38084

は指先でつまむように、それぞれもつのであろう。幅はおおむね2cm前後だが、174は長骨の角部分を使うため、断面がし字状をなし、幅もやや狭い。先端の刃部の形状には、舌状に成形するもの(169、173)や、鑿頭状のもの(171)、細く深い抉りを入れるもの(172)などがみられる。刺突具同様加工は粗く、丁寧に成形した169でも、縦紋素材の破面までは充分に研磨していない。169以外は、長骨の破材を利用しているのかも知れない。

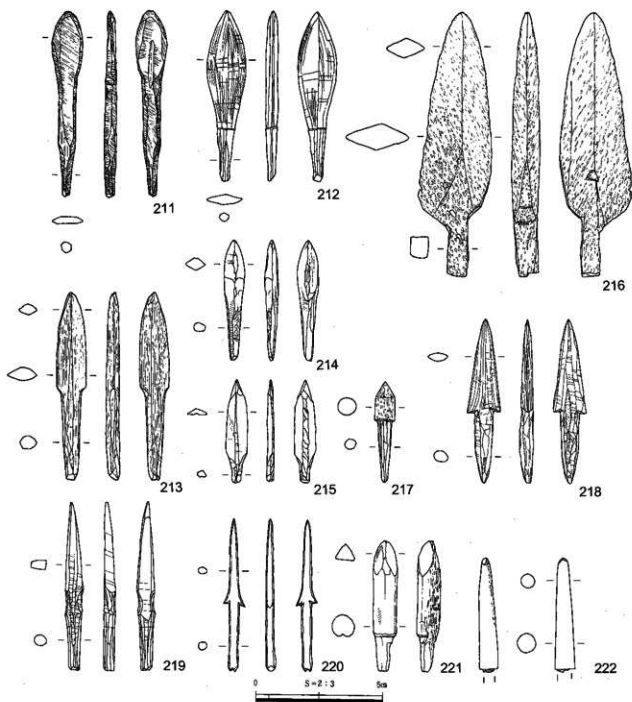
176～179は、鳥骨製のヘラである。端部を穿孔し、もう一方の端部を茶匙のように使用したものであろうか。179には穿孔がみられず、端部も棒状だが、先端に使用痕が確認できる。

180、181、183は、鹿角製のヘラである。長さ23.3cmの180は、長く粗く加工した持ち手の部分がねじれている。先端に3cm程度、鑿頭状の刃を付けている。181は、鹿角の先端部を切断したものを利用しており、鑿頭状



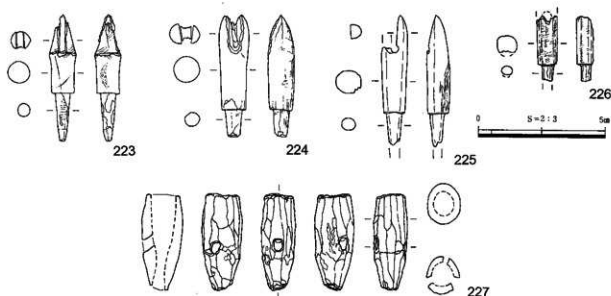
第364図 骨角器・骨鏃(1)

発掘層位	種別	調査区	遺構・層位	時期	用途	骨種	備考	取土層位
202	骨鏃	5区	BD11	弥生前期初段~後期家	長(7.1)、幅1.0、厚0.5	鹿角	研製鏃	4222
203	骨鏃	5区	不明	不明	長4.4、幅0.8、厚0.5	鹿角	研製鏃	8704
204	骨鏃	7区	M層	弥生前期	長5.8、幅1.2、厚0.4	鹿角	研製鏃	40542
205	骨鏃	4区	BD11	弥生後期初段~後期家	長12.5、幅1.15、厚0.5	鹿角	研製鏃	5968
206	骨鏃	5区	②層	弥生後期初段~古墳物類	長(9.0)、幅1.0、厚0.5	鹿角	研製鏃	8160
207	骨鏃	8区	BD38	弥生後期初段~後期後葉	長7.45、幅1.4、厚0.85	鹿角	研製鏃、黒色物質付着	27091
208	骨鏃	8区	黒石9	弥生中期中葉~中期後葉	長(9.3)、幅1.0、厚0.5	鹿角	研製鏃	34358
209	骨鏃	6区	②層	弥生後期初段~古墳物類	長(8.1)、幅1.2、厚0.4	鹿角	研製鏃	45477
210	骨鏃	6区	③層	弥生後期初段~古墳物類	長4.8、幅0.5、厚0.4	鹿角		47004



第365圖 骨角器・骨鏃(2)

標本番号	種	出土区	遺構・層位	時期	度量	骨種	備考	貯上番号
211	骨鏃	7区	H層	弥生前期後半	長7.4、幅1.25、厚0.5	鹿角	柳葉鏃	38082
212	骨鏃	7区	I層	弥生中期後半	長6.8、幅1.0、厚0.45	鹿角	柳葉鏃	39492
213	骨鏃	4区	SD11	弥生後期前期～後期末	長7.5、幅1.2、厚0.5	鹿角	柳葉鏃	2901
214	骨鏃	7区	SD62	弥生後期前期～後期後半	長4.8、幅0.85、厚0.5	鹿角	柳葉鏃	37426
215	骨鏃	7区	SD58	弥生後期前期～後期後半	長4.1、幅0.8、厚0.55	長骨	柳葉鏃	36265
216	骨鏃	5区	㊶層	弥生後期前期～古墳初期	長10.8、幅2.8、厚1.1	鹿角	柳葉鏃	8853
217	骨鏃	8区	SD38	弥生後期前期～後期後半	長4.0、幅0.8、厚0.7	鹿角	柱状鏃	27061
218	骨鏃	7区	H層	弥生後期前期～後期後半	長6.58、幅1.2、厚0.5	鹿角	三角柳葉鏃	38052
219	骨鏃	7区	㊶層	弥生後期前期～古墳初期	長6.7、幅0.75、厚0.5	長骨	?	35897
220	骨鏃	7区	㊶層	弥生後期前期～古墳初期	長6.1、幅0.8、厚0.4	?	?	35892
221	骨鏃	7区	㊶層	弥生後期前期～古墳初期	長5.2、幅0.95、厚0.9	鹿角	柱状鏃	36205
222	骨鏃	5区	GK168	弥生後期末～古墳初期	長(4.3)、幅0.8、厚0.8	鹿角	柱状鏃	11769



第366図 骨角器・楔状み、鳴鏑

遺物番号	種	調査区	遺構・層位	時期	注	管理	備考	取上番号
223	楔状み	7区	②層	弥生前期初葉～前期中期	長4.7、幅1.1、厚1.05	直角	綾織遺存	35487
224	楔状み	7区	①～④層	弥生中期～前葉	長4.9、幅1.2、厚1.05	直角	綾織遺存	37100
225	楔状み	7区	②層	弥生後期初葉～古墳初期	長(5.2)、幅1.0、厚0.8	直角		41321
226	楔状み	6区	③層	弥生中期～中期前葉	長(2.8)、幅0.8、厚0.85	直角		12561
227	鳴鏑	4区	①層	弥生～古墳	長4.95、幅1.55、厚0.8	直角		3714

の刃を付けている。183は、全体を細く平板な形状に加工するものであるが、縦裁素材の破面を丁寧に処理しており、全体に丸みを帯びた作りになっている。

182は、長竹製のヘラである。他のヘラに比して仕上がりが丁寧であるばかりか、裝飾まで施されている。弥生時代前期末～中期前葉に相当する包含層から出土しており、当遺跡骨角器中でも最古の部類に入るものである。先端は突起状に成形して面線で区切り、ここに貫通しない小孔を縦位3列に配する。一方の端部においては、面線により、細かな挟りと貫通しない小孔によって裝飾する2つの部分と、貫通する1孔との3区に区分している。裝飾は片面のみを対象としており、裏面には小孔を穿たず、長骨内面の自然面が部分的に遺存している。しかし両面及び端部ともによく研磨され、丁寧な作りである。一見響風であるが、突起状の先端部には使用痕が確認でき、ヘラとしての使用が窺われた。

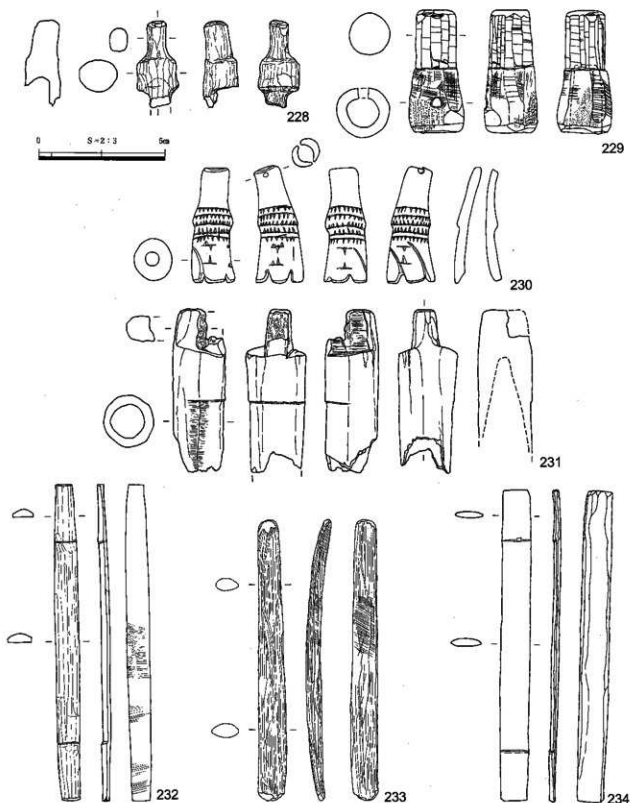
針、針入れ (第362、363図)

184～198は針である。鹿角やシカの中手骨または中足骨を縦裁して素材とし、丁寧に研磨して仕上げている。直線的な棒状の製品で、断面は基本的に円形であるが、193は断面が角張る。190は全体に大きく反るが、土圧によるものであるかもしれない。法量的には概ね3つのカテゴリーにまとめられそうである。184～188が長さ17cm前後のもの、189、190、192、193が長さ10cm前後のもの、195～198は欠損品であるため長さは不明だが、その径から推して裁縫針程度の大きさになるであろうものである。このような法量の違いは、各カテゴリーに属する針の機能差を反映するものであろう。前2者が鑿針で、後1者が礎針であると思われる。基本的に目鉋をあけているが、184は無孔であり、188は関節部をやや幅広にとってそこに縦位の1孔を穿っている。189では目鉋の代わりに突起を削り出している。

199は、鳥骨製の針入れであろう。長骨の両端を截断して調整加工し、端部側面に1孔を穿っている。

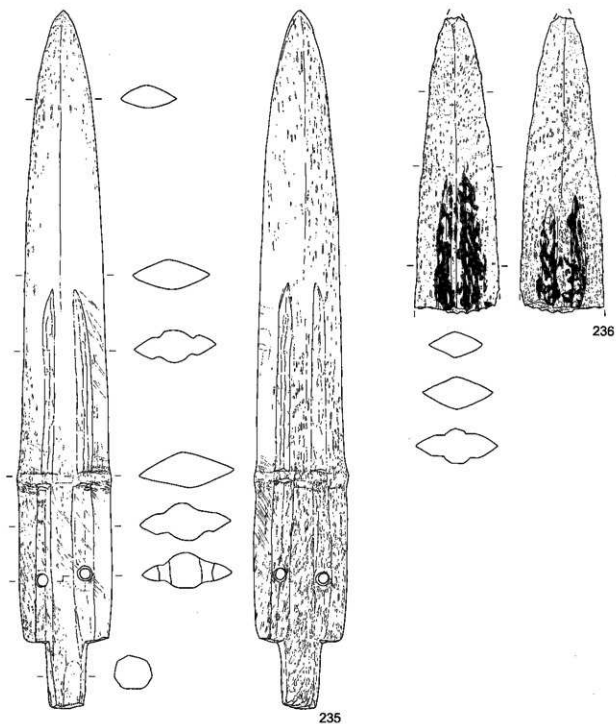
紡錘車 (第363図)

200、201は、鯨骨製の紡錘車である。概ね円形を呈し、中央に1孔を貫通させ、断面形は反っている。表裏で鯨骨特有の多孔質な質感に差異があり、また断面の反りからも、肋骨などの辺材部から素材を取り出し、円形に



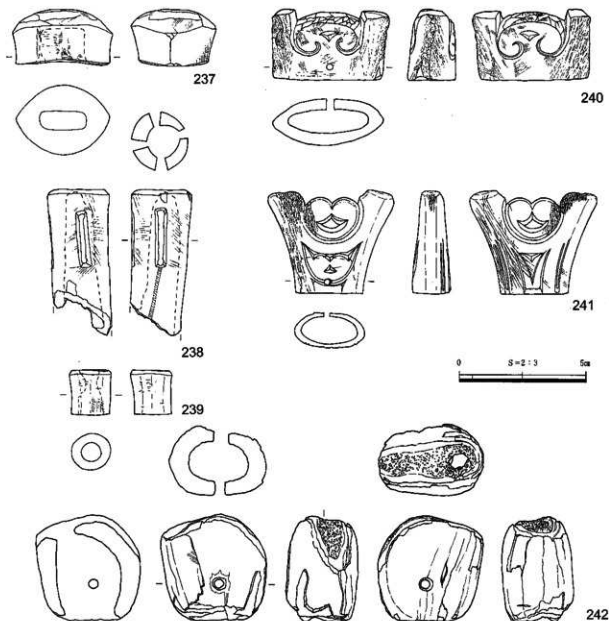
第367圖 骨角器・弭、笄

器物番号	種別	出土層	遺構・層位	時期	寸法	骨角	備考	出土番号
228	環	5区	②層	弥生後期初部～古墳初期	長3.5、幅1.7、厚1.2	鹿角		13272
229	環	7区	H層	弥生中期中葉	長3.1、幅2.1、厚2.1	鹿角		44936
230	環	6区	BK404	弥生後期初部～後期末葉	長4.8、幅1.6、厚1.5	鹿角	連続彫刻三角文	46148
231	環	4区	②層	弥生後期初部～古墳初期	長(8.05)、幅2.4、厚2.05	鹿角		2614
232	笄	7区	H層	弥生後期	長12.95、幅0.9、厚0.35	鹿角		40519
233	笄	5区	②～③層	弥生中期中葉～古墳初期	長11.2、幅1.1、厚0.55	鹿角		12251
234	笄	4区	SD11	弥生後期初部～後期末	長12.5、幅1.15、厚0.3	鹿角		5949



第368図 骨角器・銅剣形骨角器

図号	品名	出土層	出土位置	出土時期	出土層	出土層	出土層
235	銅剣形骨角器	7区	M層	弥生前期末～中期前半	表27A、幅3.5、厚1.5	骨角	42095
236	銅剣形骨角器	7区	K層	弥生中期後半	表(11)B、幅3.2、厚1.4	骨角 黒色物質付着	42429



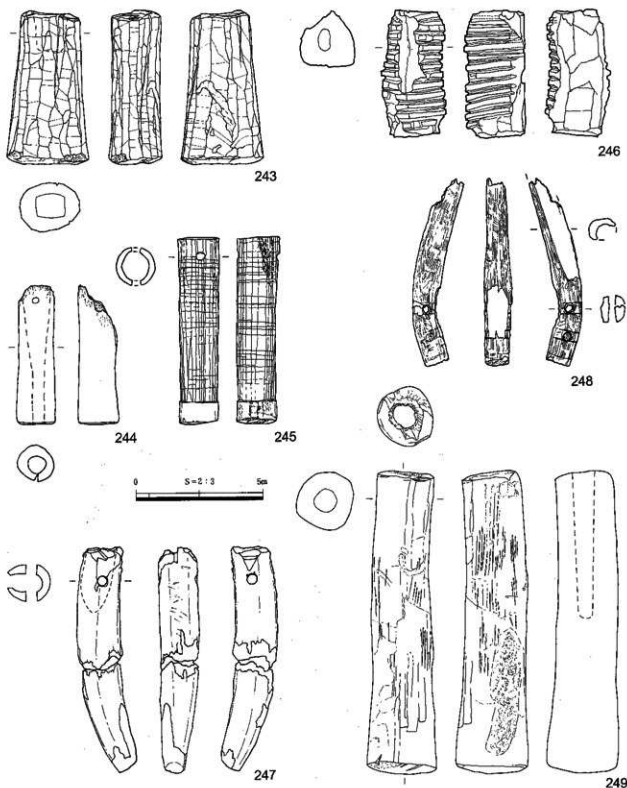
第369図 骨角器・把頭

標本番号	部	種属	産地	層位	時期	法量	骨種	備考	取上番号
237	把頭	7区	乙種		弥生前期初層～古墳初層	長2.25、幅4.0、厚3.56	鹿角		35762
238	把頭	7区	M層		弥生後期初層～後期後葉	長(5.85)、幅2.45、厚2.5	鹿角	筒形銅管状	36049
239	把頭	8区	SD38		弥生後期初層～後期後葉	長1.8、幅1.8、厚1.80	鹿角		34518
240	把頭	8区	SD38		弥生後期初層～後期後葉	長2.8、幅4.7、厚1.9	鹿角		33254
241	把頭	8区	SD38		弥生後期初層～後期後葉	長4.15、幅5.05、厚3.35	鹿角	赤色顔料付着	34517
242	把頭	4区	乙種		弥生～奈良	長4.28、幅4.19、厚2.84	鹿角	主眼大刀把頭状	1835

加工したものと思われる。

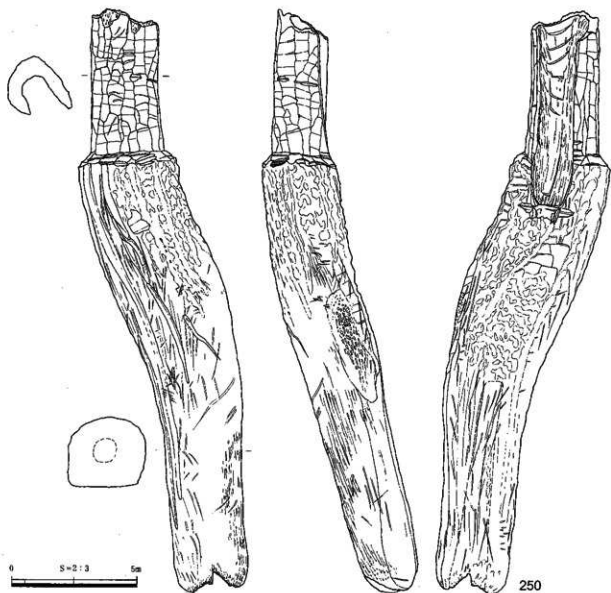
骨鏃・可矢関係製品 (第364～367図)

202～222は骨鏃である。茎を明瞭に作り出すものや、ヤスの分類から逸脱するものを範疇に含めた。骨鏃は精緻に加工されており、よく研磨されて殺傷力をより高めようとしている。202～209、211～216は柳葉鏃である。202～204は鏃身と茎との区別が曖昧であり、205～209、211～216は明瞭な茎を有するが、205や212、214では関節が曖昧である。205～209、212～216には鏃がつく。207、216は、ともに鯨骨製の多孔質な素材を用いている。207では黒色物質の付着がみられるが、矢柄への装着痕かもしれない。216はかなり大型の作りであり、実用



第370図 骨角器・柄

発掘番号	器名	出土区	層位・層位	時期	寸法	骨種	備考	取上番号
243	柄	7区	①層	弥生後期初層～古墳初層	長8.16、幅3.3、厚2.15	鹿角		35013
244	柄	7区	J層	弥生中期後葉	長(5.2)、幅1.7、厚1.0	鹿角		36635
245	柄	7区	L層	弥生中期後葉	長7.5、幅1.6、厚1.7	鹿角		44999
246	柄	7区	②層	弥生後期初層～古墳初層	長5.2、幅2.4、厚2.4	鹿角	柄外有引	39156
247	柄	7区	①層	弥生中期～奈良	長8.0、幅2.4、厚1.55	鹿角	刀子柄	35388
248	柄	4区	②層	弥生後期初層～古墳初層	長(7.4)、幅1.1、厚1.1	鹿角	刀子柄	15043
249	柄	7区	②層	弥生後期初層～古墳初層	長12.1、幅2.7、厚2.8	鹿角	未製品?	40509



第371図 骨角器・柄状骨角器 (1)

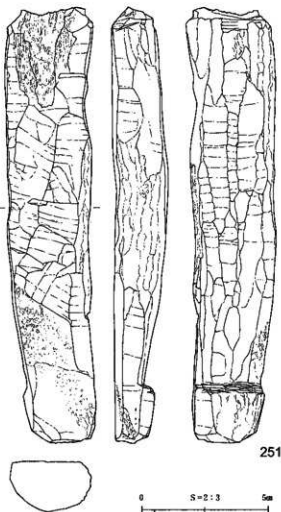
持出地 250	調査区 栗沢	遺跡名 大塚	遺跡種別 I-1	発掘時期 明治中期～昭和前期	注記 図43, 頁51	骨角器 鹿角	出土番号 42731
------------	-----------	-----------	-------------	-------------------	----------------	-----------	---------------

品かどうかが断定できない。217、221、222は、いわゆる柱状鏃で、縄文時代からの系譜を引く鏃である。218は鏃身が三角形を呈する鏃で、精緻に仕上げられており、鬩が被逆状となって殺傷力を高めている。

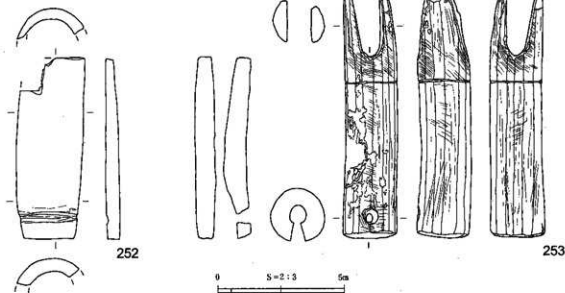
223～226は根挟みである。223、224では、鉄鏃状の先端部が、挟まれた状態で遺存している。形態的には、スリット部と体部を横で画する223と、それ以外に分類される。前者は、体部の外形に反りを見せ、茎はすばまって終る。一方後者は、ずん胴形の体部で、体部に対して茎も短いが、スリットと直交する側に鑿をつけている。なおスリットは、まず体部中央に側面から穿孔し、そこから先端に向けて切れ目を入れているようである。

227は鳴鏑と考える。鹿角を紡錘形で筒状に加工し、すばまる側から矢柄を装着するものと思われる。音を出すため、3か所に穿孔が施されている。

228～231は研である。いずれも鹿角製で、230は筒状に、他はキャップ状に加工している。上下2段に区分され、228と231は頭部の厚みを減じて鶏冠状となし、229、230は頭部との間を段または稜で仕切り、戴冠状に仕上げている。229と230では、弓本体に固定するための穿孔が側面にみられる。230では陰刻による裝飾文様が描かれており、面線で区切られた文様帯に連続三角文が配されている。また下の段には、下端から伸びる細い波状の連続文様がみられ、これらの間隙にも短線と三角文の複合文様が2段巡らされている。230、231が精緻な仕上げ



第372図 骨角器・柄状骨角器(2)



第373図 骨角器・筒状骨角器

図号	品名	調査区	遺構・層位	時期	寸法	管理番号	出土場所
231	柄状骨角器	7区	8D66	弥生前期初段～後段前期	長(17.4)、幅5.4、厚2.2	6601	未製品?
232	筒状骨角器	4区	①～②層	弥生前期末～中期後葉	長8.2、幅1.6、厚0.8	4620	長骨
233	筒状骨角器	5区	①層	弥生前期末～中期後葉	長10.2、幅2.1、厚2.1	6602	鹿角

りであるのに対し、228と229は加工痕が十分に研磨によって消されていない。

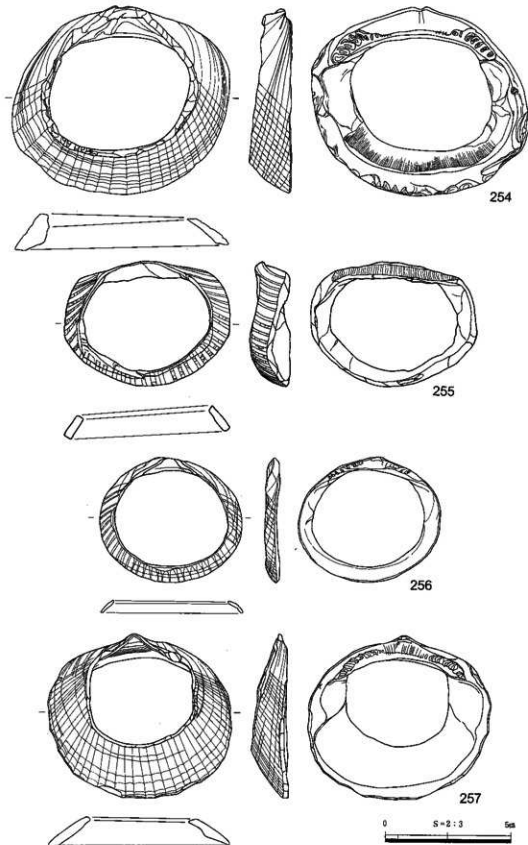
232～234は骨である。鹿角を細長い薄板状に加工するもので、232、234では両端に段が切り込まれ、握り部分が意識されている。233は、弓なりに反りをみせている。

銅剣形骨角器(第368図)

235、236は銅剣形骨角器である。いずれも鯨骨製であるが、どの部位の骨かは分からない。235は、刺方が全く決まらず、元部が張り出さない形態であるが、突起はしっかり表現している。鋒から出る筋は、途中で曖昧になって脊へと続くが、そのあたりから脊を挟んで2条の浅い樋が彫り込まれ、途中突起に遮られるものの、闊まで伸びる。元部にさしかかった2条の樋の内部には各々穿孔がみられ、両面から穿孔されている。断面形は概ね菱形であるが、茎部では多角形気味の円形を呈する。細形銅剣を模したものであると思われるが、いささか忠実に欠けるようである。しかし表裏ともしっかり加工しており、伝聞情報だけの模倣ではないと思われる。236は剣身途中で折れているが、樋の始まる位置からして、235よりかなり短いものになるであろう。なお236は、表裏とも樋の部分を中心に、漆状の黒色物質の付着がみられた。

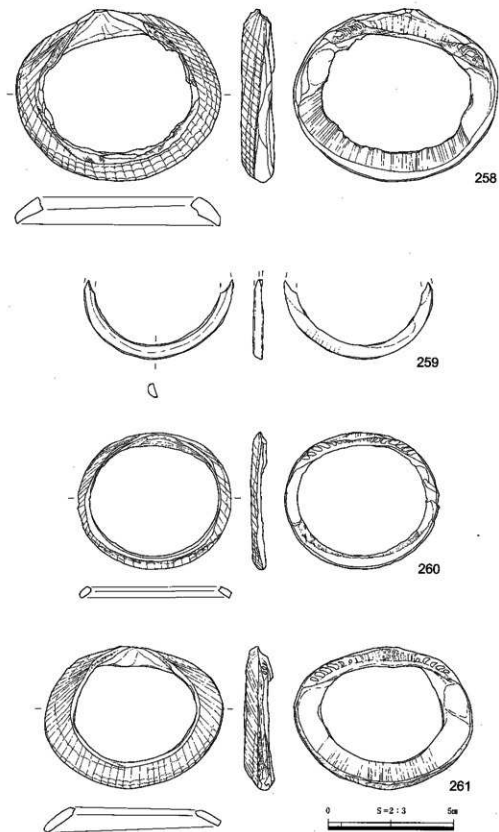
把頭(第369図)

鹿角をキャップ状に加工した製品で、柄や鞘、儀杖などの端部を装飾したものであると思われるものを、把頭として一括



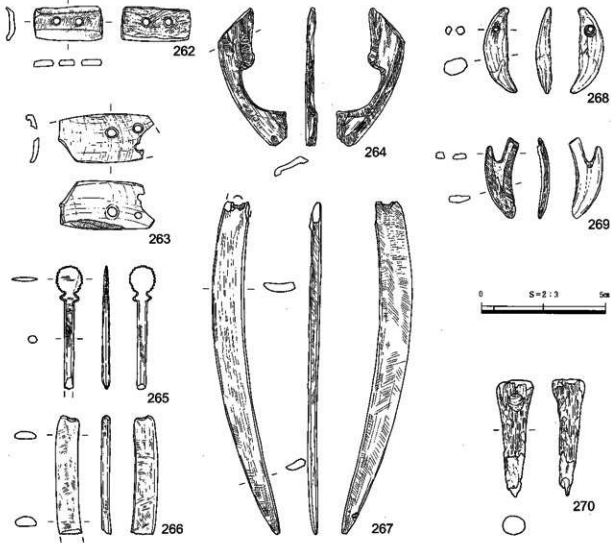
第374圖 骨角器・裝身具(1)

標本番号	種別	調査区	遺跡・層位	時期	寸法	管理番号	取上げ年
254	貝輪	7区	1層	弥生中期後葉	縦7.5、横9.8、幅1.3	二枚貝 未製品	41508
255	貝輪	7区	1層	弥生中期後葉	縦5.0、横6.7、幅0.7	二枚貝	44629
256	貝輪	7区	K層	弥生中期後葉	縦5.0、横5.7、幅0.6	二枚貝	36768
257	貝輪	7区	1層	弥生中期後葉	縦8.5、横7.4、幅0.4	二枚貝 未製品	44012



第375圖 骨角器・裝身具(2)

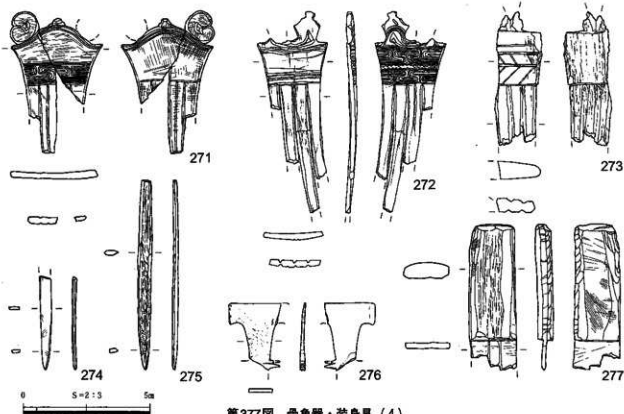
遺物番号	品名	所在地	出土層位	時期	数量	骨質	出土数量
258	貝輪	不明	不明	不明	縦6.8、幅3.15、厚1.3	二枚具 朱製基	50123
259	貝輪	不明	不明	不明	縦(3.2)、幅(6.0)、厚0.3	二枚具	50151
260	貝輪	不明	不明	不明	縦3.5、幅8.15、厚0.8	二枚具	50215
261	貝輪	不明	不明	不明	縦5.75、幅7.15、厚0.8	二枚具	50137



第376図 骨角器・装身具(3)

図番	品名	図番	遺物番号	時期	長さ	幅	厚	備考	出土位置
262	飾物	9区	SD38	弥生後期前期～古墳前期	長14.0、幅2.8、厚0.3			象牙	3045
263	飾物	9区	②層	弥生後期前期～古墳前期	長(3.8)、幅1.9、厚0.3			象牙	9182
264	装身具	9区	②層	弥生中期中葉～中期後葉	長19.7、幅1.4、厚0.45			象牙 未製品	13176
265	簪	9区	⑤層	弥生前期末～中期前期	長5.0、幅1.6、厚0.3			鹿角	16686
266	簪	9区	SD8	弥生中期中葉～中期後葉	長(4.8)、幅0.9、厚0.35			鹿角	8657
267	簪	9区	②層	弥生後期前期～古墳前期	長13.5、幅1.5、厚0.4			鹿角	9410
268	装身品	9区	③層	弥生中期中葉～中期後葉	長3.5、幅1.0、厚0.6			犬歯	14005
269	装身品	9区	②層	弥生後期前期～古墳前期	長(3.3)、幅1.6、厚0.35			象牙	9185
270	装身品	9区	不明	不明	長(4.75)、幅1.5、厚1.3			象牙	17890

した。237～242がこれにあたる。238は、いわゆる筒型銅器に形態が似るものであるが、残念ながら完存していない。240と241は、縦裁して厚みを減じた鹿角をキャップ状に加工するもので、両面とも艶やかに研磨されている。いずれも、開口部分の端部寄りに1孔が穿たれており、固定のための目釘穴であろう。240は、人が両手を上に挙げているかのようなモチーフが施されており、表裏ともに三辺が弧状をなす陰刻三角文が刻まれている。241も、人が両手を上に挙げているかのようなモチーフであるが、擬形に開く形態をとる。文様構成は表裏で異なるが、240と同様の三辺が弧状をなす陰刻三角文が刻まれている。両者は同じSD38中から出土しており、あるいは同じ製品の両端に組み込まれたものである可能性もある。なお、241の線刻内には、赤色顔料が付着していた。242は圭頭大刀の把頭に似るもので、両側面から目釘穴が穿たれている。



第377図 骨角器・装身具(4)

標本番号	種別	出土区	層位	産地	長さ	幅	厚	重量	備考	出土番号
271	鏃	5区	2層	弥生前期前期～古墳前期	長(15.7)、幅3.9、厚0.3				鹿角	11101
272	鏃	7区	2層	弥生前期前期～古墳前期	長(8.65)、幅2.75、厚0.3				鹿角	30164
273	鏃	7区	2層	弥生前期前期～古墳前期	長(5.85)、幅1.8、厚0.75				鹿角	30423
274	鏃の角	5区	2層	弥生前期前期～古墳前期	長(3.7)、幅2.4、厚0.15				鹿角	8356
275	鏃の角	5区	2層	弥生前期前期～古墳前期	長(7.5)、幅2.5、厚0.2				鹿角	8376
276	鏃	6区	3層	弥生前期末～中前期	長(2.65)、幅2.0、厚0.21				鹿角	18176
277	鏃	6区	2層	弥生前期前期～古墳前期	長(5.8)、幅1.9、厚0.6				鹿角	8330

柄(第370図)

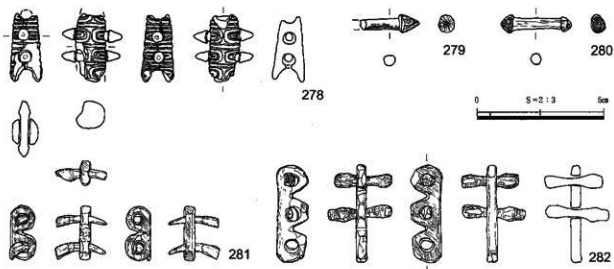
243～249は柄である。いずれも鹿角製である。243は撥方に開く柄で、断面角形に縦位穿孔されている。鉄製鏃の柄であろうか。244、245は細い円筒状の柄で、いずれも目釘穴がみられる。246は刻みの入る柄に断面楕円形の縦位穿孔がみられる。これに鉄製鏃を装着した例が国道調査区から出土している(「青谷上寺地3」第123図27)。247、248は鹿角の本来の形状を利用している。247は弓なりの体部で、浅い縦位穿孔部に側面から目釘穴が打たれている。248も同様な形態であるが、縦位穿孔が深い。ただし側面からの穿孔は、縦位穿孔部とは無関係に入れられている。1孔は貫通し、1孔は毛引き状態で終わっているので未製品と思われる。247、248は刀子の柄と思われる。249は角幹をほぼそのまま利用するもので、截断された端面から断面円形の縦位穿孔を行っている。

柄状骨角器(第371、372図)

用途の判然としない製品であるが、形態的には柄に近いものと考え、このような名称を付した。250は、ねじれを見せる角幹端部の一方を何かを装着するかのようにつ溝状に加工し、もう一方の端面から縦位に穿孔している。角幹部分では、顆粒がかなり摩滅しているが、部分的に削りも入れている。251は、片面を面取りし、もう片面にヤスのテールエンドのような突起を削り出すものである。全体的に加工痕が残り、未製品と思われる。

筒状骨角器(第373図)

用途不明の筒状製品である。252は長骨製で破損しているが、内外面ともに丹念に研磨されているので、長骨



第378図 骨角器・頸状骨角器

標記番号	種別	出土層	遺跡・位置	時期	長さ	骨角	出土番号
278	頸状骨角器	4区	③層	弥生中層中葉～中期後葉	長(2.7)、幅1.2、厚1.1	鹿角	5212
279	頸状骨角器の軸	5区	③層	弥生前期末～中期前葉	長(2.35)、幅0.7、厚0.4	鹿角	16610
280	頸状骨角器の軸	5区	③層	弥生前期末～中期前葉	長2.8、幅0.7、厚0.4	鹿角	17300
281	頸状骨角器	4区	③層	弥生前期末～中期前葉	長2.2、幅1.0、厚0.45	鹿角、象牙 軸に歯牙を使用	47007
282	頸状骨角器	5区	③層	弥生中層中葉～中期後葉	長3.9、幅1.3、厚0.4	鹿角	14297

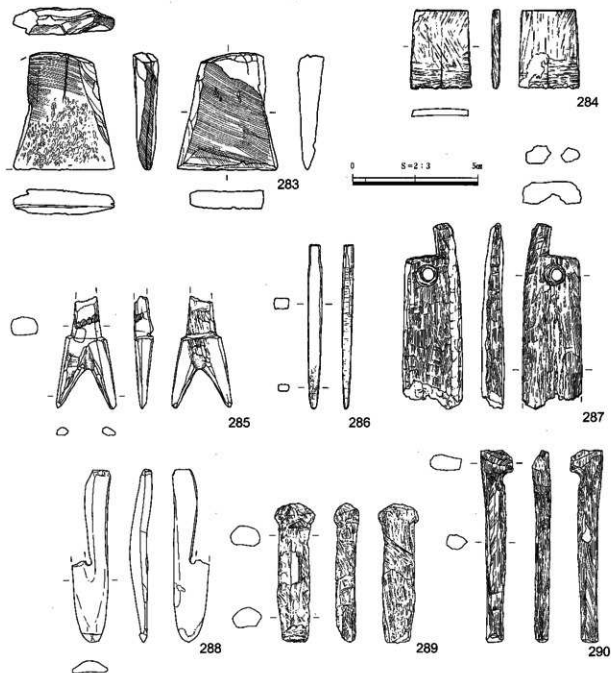
を半截したものと思われる。端部寄りに溝が1条巡っている。253は鹿角製だが、内部を削り抜いて縦位に貫通させている。片側の端部には側面から穿孔し、もう片側は又状に抉れている。離頭鉛頭の柄の端部に装着する指掛けの可能性も考えたが、抉り部の幅がやや狭く、指が掛けにくいようである。

装身具 (第374～377図)

254～261は貝輪である。二枚貝の殻頂部を内から外に向けて打ち撞いて輪を作り、これを丁寧に研磨するものであるが、254、257、258は破断面が研磨されておらず、未製品であろう。259は欠損品で、かなり摩滅の進んだものであるが、本来的にもかなり研磨されたものであったのだろう。262、263は、猪牙製の腕飾である。単独または複数で装着するものであろう。264も猪牙製であるが、研磨されているものの穿孔がなく、特定できないが装身具の未製品かもしれない。265～267は簪である。265は頭部を、縁を細かく刻んだ円盤状に加工したもので、大きさは異なるが、高知県西川津遺跡でも同じような意匠のものが出土している。⁽¹⁾ 267は、弓なりに反って端部が尖る簪で、頭部を穿孔している。266も同様のものであろう。268～270は鍾飾品であろう。268は乳類の犬歯、269は研磨された猪牙片、270は部位不明の骨片に穿孔したものである。271～277は櫛である。273のみ鯨骨製で、他は鹿角製である。271～273は、頭部に両耳をもつ形態を呈するものと思われる。271、272では流水文が、273には横位の綾杉文が線刻されているが、いずれも片面を主体とする施文である。274、275は恐らく櫛の歯であろう。276、277も櫛の頭部と思われるが、276はかなり薄作りのものである。

頸状骨角器 (第378図)

278、281、282は頸状骨角器で、279、280はその軸部の部品である。頸状骨角器は、可動式の軸部を有するもので、従来、楽説説と頸説が取りざたされてきたが、木だに決着をみない。278は頭部を欠すものであるが、基部は遺存しており、キャップ状の窪みが彫られている。表面全体には流水文が線刻され、2孔を穿ってそこに軸を強引に挿入している。2本とも回転可能である。281、282は穿孔された薄板に軸を側面から挿入するもので、軸はいずれも、回転可能である。281は、2穴に獣種不明の門歯を軸代わりに挿入している。歯根側から挿入しているので、無造作に扱うと抜けてしまう。282は3穴に軸を2本挿入するものであるが、軸は本来3本であったものかどうかはわからない。278と281、282は形態の異なるものであるため、本来別に扱うべきものかもしれない。

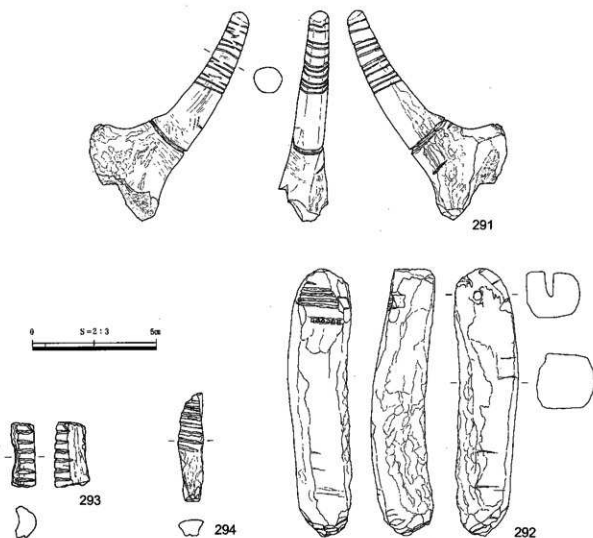


第379図 骨角器・用途不明品

発掘層位	種別	出土層位	時期	寸法	骨角種別	取上番号
283	用途不明品	4区 ②層	弥生前期初期～古墳前期	長4.8、幅4.0、厚1.0	鹿角	4757
284	用途不明品	5区 ②層	弥生前期初期～古墳前期	長3.25、幅2.4、厚0.3	鹿角	8886
285	用途不明品	6区 SO38	弥生前期初期～後期後葉	長(4.5)、幅2.4、厚0.7	鹿角	30450
286	用途不明品	4区 ②～③層	弥生前期末～中期後葉	長6.8、幅0.6、厚0.45	鹿角	5090
287	用途不明品	5区 ③層	弥生中期中葉～中期後葉	長(7.4)、幅2.4、厚0.8	鹿角	13068
288	用途不明品	5区 ①層	弥生～奈良	長6.95、幅1.4、厚0.5	鹿角	10908
289	用途不明品	5区 SO15	弥生後期初期～後期後葉	長5.8、幅1.6、厚1.0	鹿角	12402
290	用途不明品	5区 ③層	弥生中期中葉～中期後葉	長7.75、幅1.3、厚0.6	鹿角	13310

用途不明品・その他 (第379～382図・写真図版93)

283～290は用途不明品である。283、284は鹿角製で楔形を呈するが、刃部に使用痕を観察できない。285は漁撈刺突具のようにも見えるが、欠損のためわからない。286は刺突具風であるが、使用の痕跡は窺えない。287は



第380図 刻み目のある骨角器

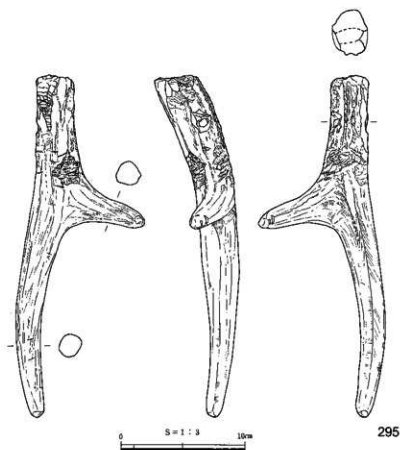
博物館名	種別	調査区	遺跡名	時期	長さ	幅	厚	重量	出土層
291	刻み目のある骨角器	9区	乙-10層	弥生前期末～古墳前期	長8.35、断面幅1.1、断面厚1	鹿角	刻の未製品?	4080	
292	刻み目のある骨角器	9区	乙層	弥生後期初頭～古墳前期	長10.3、幅3.4、厚2.2	鹿角	連続刻三角文	12480	
293	刻み目のある骨角器	9区	GD10	弥生中期中葉～中期後葉	長(2.85)、幅(1.4)、厚(0.7)	鹿角	刻痕?	14403	
294	刻み目のある骨角器	9区	BK158	弥生後期末～古墳前期	長(4.45)、幅(1.0)、厚(0.7)	鹿角	刻痕?	11544	

一隅が突出し、穿孔もみられる。製作途上にあるのかもしれない。288は受熱のため全体的に白色化している。片側が欠損しているが、遺存部の両側面は加工されたものであり、本来中央部の穿孔から端部に向け、溝状の挟りが入るものと思われる。289、290ともに有頭状に加工しているが、290は穿孔のある板材を縦裁して再加工したものかもしれない。

291は、鹿角片の先端部に線刻するものである。別の未製品かもしれない。292は、鹿角を直方体状に加工したもので、一面のみに4条の溝状線刻と少し離れて連続する陰刻三角文の文様帯が1条走る。その表面には貫通しない1孔が穿たれている。全体に加工は粗く、線刻等の刻印は弱い。293、294は刻目的な刻みがみえるが、断片であり、判断としない。なお293は受熱のため、白色化している。

381は又状骨角器である。儀仗具あるいは威儀具とされるものである。鹿角の角幹を切断し、端部寄りに穿孔している。穿孔部周辺には、粗い刻み状の加工痕が集中的にみられる。一方先端側はかなり磨耗しており、光沢を帯びている。

296は横状であり、雄のイノシシの下顎骨の穿孔部に、木の棒が貫通状態で遺存するものである。この状態で出土している。写真図版93にも、横状としてイノシシと小型哺乳動物の穿孔した下顎骨を掲載している。297



第381図 骨角器・又状骨角器

埋蔵層名	調査区	遺構・遺物	時期	出土層	骨角器	出土番号
255	又状骨角器	5区	弥生前期初頭～古墳初頭	270.0, 283.0	鹿角	5401

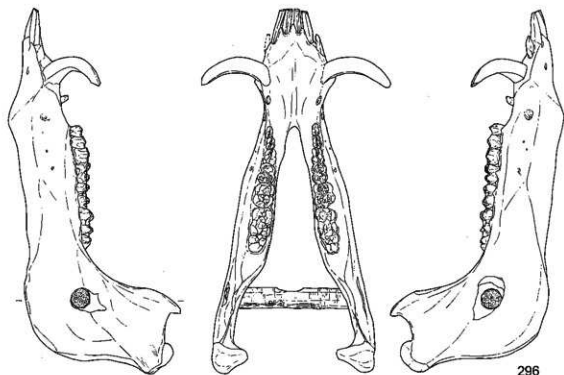
はシカの下顎骨片であるが、特に顕著な改変を加えているわけではない。ただ全体を執拗に研磨している。

骨角器製作に関連する遺物 (第383～387図)

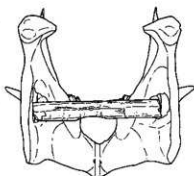
298～310は、骨角器製作に関連する遺物である。298、300、302は鹿角を、299は角座骨を縦断に半裁しようとしている状態で、301の鹿角はその結果得られた縦裁品である。こうして得た縦裁品は、端部を加工して303～307のような短冊形の素材に成形する。303では、すでに一部が何らかの骨角器として使用されている。305～307の端部には、バリ状の小さな切離痕跡がみられるが、おそらくすでに何かが製作され、この部分から切り離されているのであろう。ある種の鹿角製品の製作工程上、短冊形素材を必然的に作ることになるのであろうが、鹿角の形態的性質上、鹿角幅以上の大きさのものは製作できないのであるから、むしろあらかじめ鹿角幅で短冊状の素材を準備しておくことは（さらに305のように粗く研磨までしておくことは）有効である。しかもこの短冊形の骨角器素材は手に持ち易く、もう一方の手に工具をもって作業するのに大変便利である。鹿角以外の場合では、308のように鯨骨からまず素材を取り出すかのように加工している場合もある。もちろんこうした方法によらないで、骨角器を製作する場合もある。309、310は短冊形素材を作らず、ある程度完成イメージをもって成形を開始しているようである。

卜骨 (第388～403図) ・数量組成と計測基準

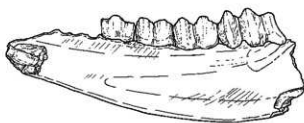
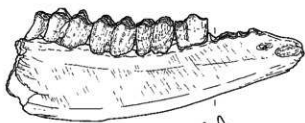
県道調査区から出土した卜骨は、143点である。国道調査区出土分と合算すると総数227点となる。弥生時代中期中葉に遡るものが今のところ最古であり、以後弥生時代中期後葉から古墳時代前期初頭に至るまでみられる。大半は遺物包含層から出土するが、弥生時代後期の溝であるSD11(4区)、SD38、54(8区)などの埋土中からもまとまった数が出土している。用いられた骨は、インシン75点(右肩甲骨38点、左肩甲骨34点、肩甲骨左右不明1点、下顎骨2点)、シカ62点(右肩甲骨31点、左肩甲骨31点)、不明6点(左肩甲骨1点、左右不明肩甲骨



296



0 S=1:3 10cm



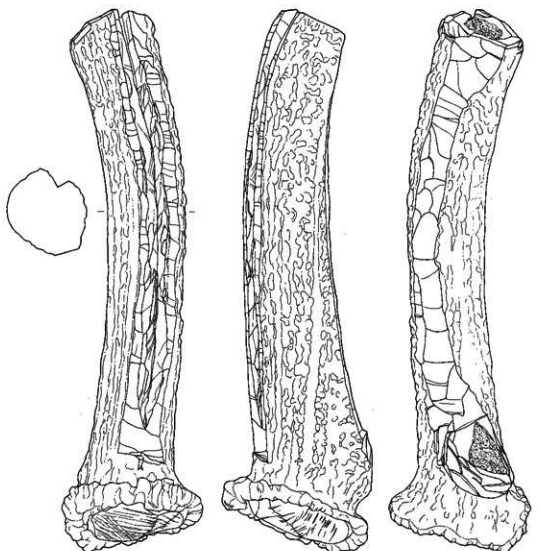
297



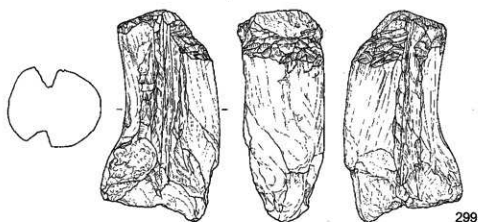
0 S=2:3 5cm

第382図 骨角器・犠牲獣・研磨された下顎骨

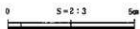
標本番号	種	出土区	遺構・層位	時期	法	骨	長さ	厚	重	備	参考
296	犠牲獣	4区	⑤層	弥生前期末～中期前半	長29.4, 幅15.2, 高10.2	下顎骨				歯の長さ約9	6243
297	研磨された下顎骨	5区	②層	弥生後期初頭～古墳初頭	長4.5, 幅11.4, 厚1.55	下顎骨					14249



298

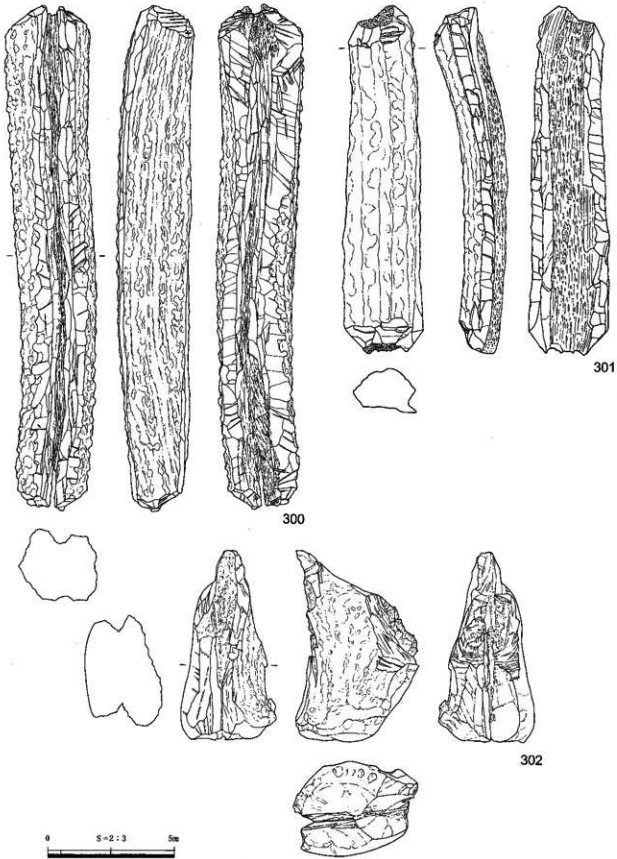


299



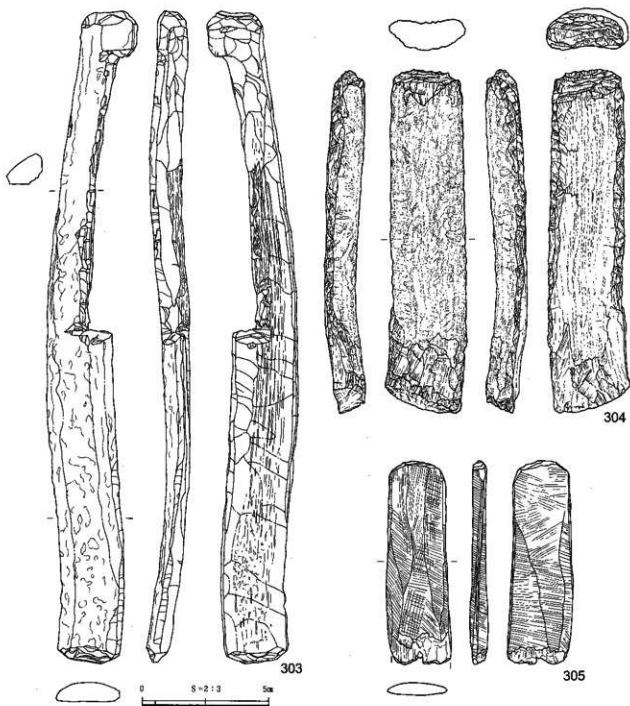
第383図 骨角器・縦断半截途上の鹿角、角座骨(1)

発掘調査番号	調査区画・遺構・層位	時期	数量	骨の種類	出土層位
298	縦断半截途上の鹿角	7区 J層	不定中層位	長21.5、幅5.8、厚0.7 鹿角	42404
299	縦断半截途上の角座骨	5区 不明	不明	長0.5、幅4.4、厚3.0 角座骨	13420



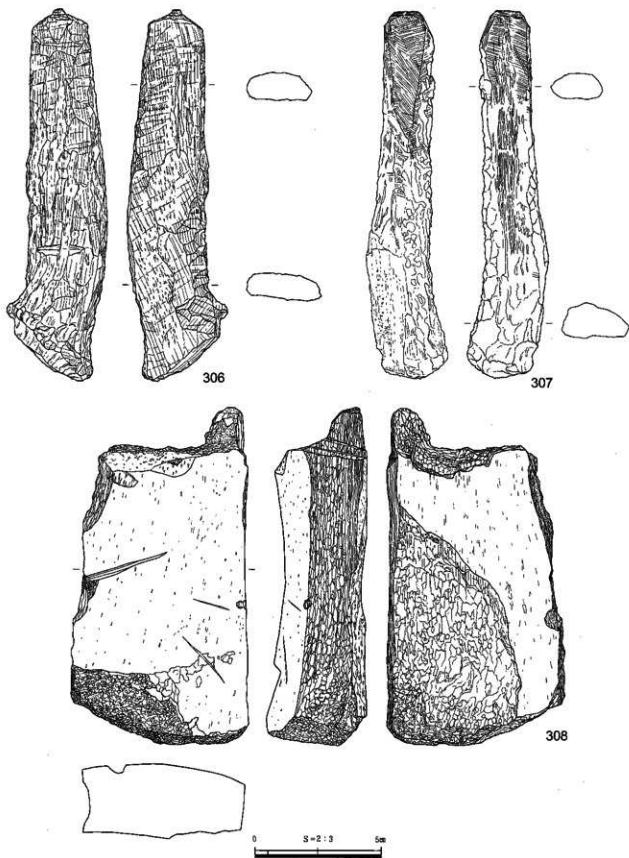
第384図 骨角器・縦断半截途上の鹿角(2)、縦断半截された鹿角

標本番号	種	採取区	遺構・層位	時期	法量	骨角部	出土番号
300	縦断半截途上の鹿角	8区	不明	不明	長20.75、幅3.2、厚2.9	鹿角	28490
301	縦断半截された鹿角	7区	J層	弥生中期後半	長13.9、幅3.2、厚1.8	鹿角	36821
302	縦断半截途上の鹿角	7区	K層	弥生中期後半	長7.6、幅4.4、厚3.8	鹿角	44713



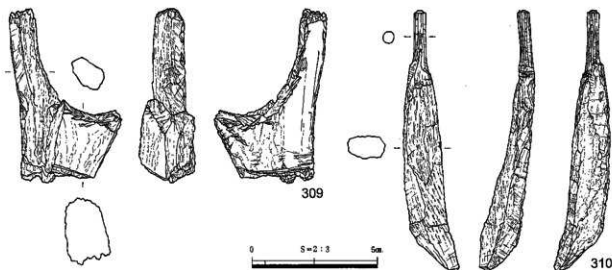
第385圖 骨角器・骨角器素材(1)

遺品番号	種別	産出区	遺跡・層位	時期	注記	骨質	取上番号
303	骨角器素材	6区	③層	弥生中層中風～中層後葉	長26.1, 幅2.7, 厚1.1	鹿角	44722
304	骨角器素材	4区	②層	弥生後期初葉～古墳前期	長12.7, 幅2.1, 厚1.4	鹿角	4811
305	骨角器素材	5区	不明	不明	長8.05, 幅2.45, 厚0.5	鹿角	13418



第386圖 骨角器・骨角器素材(2)

標本番号	種別	調査区	遺構・層位	時期	寸法	骨質	備考	取上番号
306	骨角器素材	5区	◎層	弥生前期末~中期前半	長14.8、幅3.5、厚1.1	鹿角		9298
307	骨角器素材	5区	不明	不明	長14.6、幅2.8、厚1.4	鹿角		13428
308	骨角器素材	7区	H層	弥生後期	長13.7、幅7.1、厚3.4	麋骨		40534



第387図 骨角器・加工途上品

発掘調査番号	種別	調査区	遺物番号	時期	長さ	径	重量	出土層	出土番号
309	加工途上品	0区	SK59	弥生中期前半—中期後半	長7.0, 幅4.0, 厚2.2			腰角	15732
310	加工途上品	0区	SK44	弥生中期前半—中期後半	長10.7, 幅1.0, 厚1.5			腰角	15732

5点)であり、国道調査区出土分との合算はイノシシ127点(右肩甲骨67点、左肩甲骨54点、左右不明肩甲骨2点、下顎骨4点)、シカ93点(右肩甲骨44点、左肩甲骨47点、左右不明肩甲骨2点)、不明7点(左肩甲骨2点、左右不明肩甲骨5点)となる。ト骨における肩甲骨の使用頻度は98.2%と圧倒的であり、残りの1.8%に相当する4点はイノシシの下顎骨である。肩甲骨の左右の比率は僅かに右側が優勢であるが、ほぼ等分であるといっても差し支えないかもしれない。イノシシ対シカの比率は概ね4:3であり、イノシシの使用が優越しているのは、西日本地方のト骨使用状況に合致している。

なお、ト骨の計測にあたっては、『青谷上寺地3』中の第5章第3節「動物学から見た肩甲骨のト骨の計測法」に従い、一覧表には下記の計測データを記載した(『青谷上寺地3』第228図参照)。

計測項目1. 全長: 関節上結節の最下点から肩甲棘のラインが背線に交差する点までの長さ

計測項目2. 頸部最小幅: 肩甲頭で、前線の一番くぼんだ点から後線の一番くぼんだ点までの最小幅径

計測項目3. 頸部周: 肩甲頭の最も細い部分の周長

計測項目4. 下部幅: 関節窩後縁端から烏口突起外端までの径幅

計測項目5. 関節窩長: 関節窩の前・後縁間の最大長

計測項目6. 関節窩幅: 関節窩の内・外縁間の最大長

計測項目8. 残存肩甲棘長: 関節窩前縁から残存している肩甲棘の背側までの直線距離

欠損等により、上記計測基準を適用できない個体については、単に遺存状態の大きさを示すための長さ(最大長)と幅(最大幅)という項目を設定し、これを計測した。

ト骨の属性・焼灼痕

『青谷上寺地3』では、ト骨の属性として、焼灼痕、ケズリ、ミガキ、鑽の4つを提示した。焼灼痕については『青谷上寺地3』で、1: 肩甲頭にみられるもの、2: 肩甲棘上窩、肩甲棘下窩にみられるもの、3: 肩甲棘上窩、肩甲棘下窩から背線にかけての範囲に広がるもの、4: 肩甲棘から背線にかけての範囲に広がるものの4つのパターンを示している(『青谷上寺地3』第200図参照)。焼灼痕とは、骨の表面を棒状の用具で点状に焼いた痕跡である。焼灼1は、肋骨面側の肩甲頭部分、肩甲骨の狭く厚い部分に焼灼を加えるものであり、熱変化が裏面に表れない。焼面と下面が同一となる。当遺跡では最古のト骨にみられるパターンであり、弥生時代中期作業に遡るものである(311~314、325)。

これが中期後業となると、焼灼位置が肩甲骨のより広い部分に移り、焼灼2がみられるようになる(315~324、326~336、338、349)。この位置は骨の厚みが薄く、熱変化が裏面に及ぶ。焼面は肋骨面、下面は外面と分離

し、表裏の関係になることが指摘されている。⁽⁴⁾この焼灼パターンをト面である外側面からみると、イノシシでは肩甲棘を挟んだ棘上窩と棘下窩にそれぞれ焼灼位置があり、左右対称状にみえる。一方シカでは、棘上窩部分が狭すぎるためか、焼灼位置は棘下窩部分に限定される。焼灼は肋骨面から行っているため、棘上窩部分を焼灼することは可能であるのだが、焼灼が肩甲棘の部分にかかって熱変化がト面に及ばなくなることを避けた結果と思われる。その後、焼灼箇所の数は増し、焼灼3(339、356)、焼灼4(340~345、347、348、350~354)へとその範囲を拡散していく傾向が窺われるのであるが、これらはケズリのあり方とも連関する事象であるので、後に詳述する。

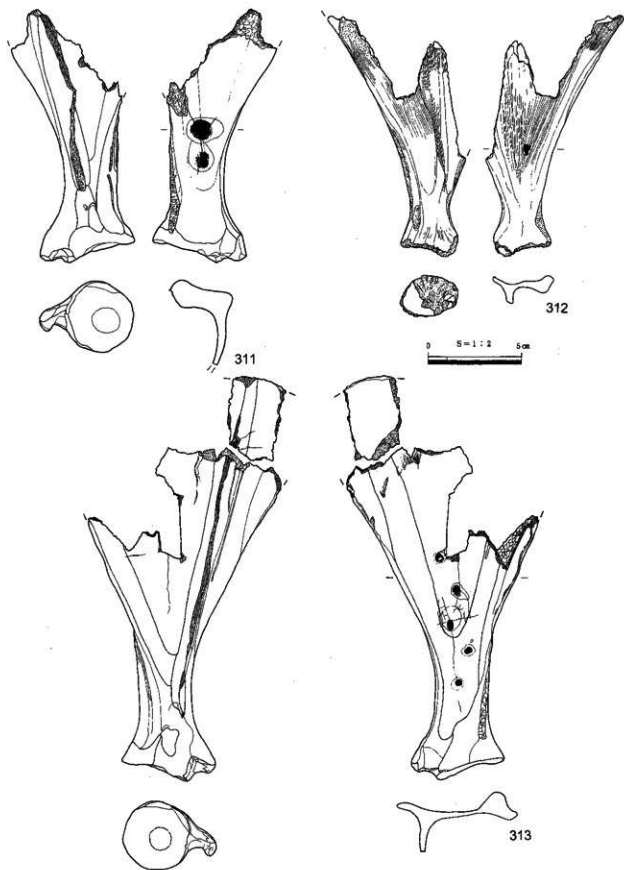
ト骨の属性・ケズリ

ケズリとは、肩甲骨の突出する部分を刃物で削る行為であり、主に肩甲棘から肩甲頭にかけての範囲に集中してみられるが、稀に前縁や後縁に及ぶこともある。「青谷上寺地3」では、肩甲棘のケズリについて4つのパターンを提示している(「青谷上寺地3」第201図)が、県道調査区出土骨中で該当するものをそれぞれ以下に例示した。A:削らないもの(311~323)、B:肩甲棘の上方を削るもの(324~333)、C:肩甲棘を全去するもの(334~339)、D:肩甲棘の全去がさらに肩甲頭、関節窩にまで及ぶもの(340~354)、である。

「青谷上寺地3」中ではケズリの理由として、肩甲骨をより平板にすることを志向した、と曖昧に説明しているが、肩甲棘を削ることの必然性に乏しい理由付けであった。再度検討した結果、ケズリの必然性は焼灼痕との関連性に求めることができるのではないかと考えるに至っている。肩甲棘を削らないケズリAの場合、イノシシの肩甲骨に焼灼2のパターンで焼灼すれば、肩甲棘の上部が屈曲しているため、ト面である外側面の焼灼痕が一部隠れてしまって観えないのである(319)。しかし、この肩甲棘上部の屈曲部分を除去してしまえば、焼灼2のト面は、不都合なく観られるようになる。肩甲棘上方を削るケズリBのト骨では、概ね焼灼2が行われているのはこのためではないだろうか。さらに、今まで欠損と捉えてきた肩甲棘の割れも、刃物を用いずに肩甲棘を除去した結果である可能性が考えられる(315、318、320~323)。特に、焼灼2のパターンである315のト骨は、棘下窩部の焼灼痕が肩甲棘個にかなり寄っているため、余計に観えにくいはずである。「青谷上寺地3」中に掲載しているト骨について再検討してみると、やはり同様なものが含まれているようである(「青谷上寺地3」第202図233、第203図238)。よってこうした肩甲骨の割れについても、「ケズリA」という名称を与えることにしたい。しかし一方で、ト面を観るのにほとんど不都合のないはずのシカの肩甲棘にも、ケズリA'やケズリBがみられるのである。焼灼1から焼灼2へ移行した当初、イノシシのト骨の焼灼痕があまりに観にくいという理由で行われていた肩甲棘の除去が、そのまま無造作にシカでも行われたのではないかと考えられる。その後には、骨トの際には肩甲棘を除去するものという作法が成立したのかも知れない。このように、ケズリA'とケズリBの成立は、焼灼2と連動するものと想定されるのであり、その時期は、当遺跡においては弥生時代中期後葉に比定される。

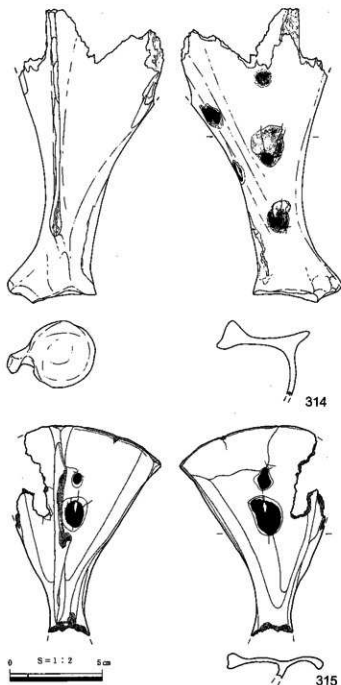
焼灼2から焼灼3、焼灼4へ移行する段階で、ケズリのパターンに変化が生じる。焼灼2のト骨である334、336、338では、肩甲棘を根元から除去しているのである。ケズリCの出現である。観るのに邪魔になるという単純な理由から行っていた肩甲棘上部の除去が、やがて肩甲棘そのものを取り去ってしまうという念の入れ様をみせるようになるのである。しかし肩甲棘の全去という作業は、思いのほか困難な作業であったのではないだろうか。骨の保湿度状態によっては、335のト骨のように、骨の表面がはがれて内部の海綿質が露出し、さらに中途半端に肩甲棘が残ってしまう結果になりかねないのである。このような状態のト骨が、その後のケズリD成立への契機になっている可能性も考えられる。

ケズリDでは、肩甲棘の全去がさらに進み、肩甲頭や関節窩までも削り込んでしまう。肩甲骨に対し垂直方向から肩甲頭を截断するが、関節窩を切り離さないよう中途で留め、さらにそこから背縁に向けて、一部海綿質を露出させるほど肩甲棘を根こそぎ除去している(343、344、346、347、349、350、352~354)。ケズリが関節窩に及ぶ場合は、横から関節窩を半分程度截断し、そのまま背縁に向けて、肩甲棘を根こそぎ除去している(340~342、345、351)。この執拗な肩甲棘の除去について「青谷上寺地3」では、やはり肩甲骨をより平板にするこ



第388図 卜骨(1)・A1

発掘層位	調査区	遺物位置	時期	種別	形状・骨質の寸法	遺物	出所	計	測定 (cm)					出土番号
									1	2	3	4	5	
311	7区	N層	弥生中葉中葉	鹿角類骨	A 肋骨	1	GL	2.80	10.20	5.00	3.60	3.70	13.50	44957
312	5区	2層	弥生後葉初段～古墳初段	鹿角類骨	A 肋骨	1	肋、外	2.10	8.50	3.00	2.30	2.10	11.30	9195
313	7区	N層	弥生中葉中葉	鹿角類骨	A 肋骨	1	GL	2.70	7.60	4.80	3.80	3.65	21.80	44754



第389図 ト骨・A1、A2

とを志向した、と説明しているが、平板にすることの必然性が説明されていなかった。再検討の結果は、ケズリB同様、肩甲骨のあり方に起因する処置であろうと考えるものである。焼灼3、焼灼4は、焼灼2よりも焼灼痕が増えて拡散していくパターンであるが、それまでのト骨では、肩甲骨の存在がこれを阻害しており、焼灼位置を限定してしまっていた。イノシシにしろ、シカにしろ肩甲骨を全去し、さらに肩甲骨を半裁すれば、肩甲骨のほとんどの部分は厚みが薄くなり、ト骨となしうるのである。つまりト骨内容が多様化したため、一度の骨トに多くを望むようになったことが考えられる。こうしたニーズに対応するためか、場合によっては肋骨面と外側面の両面を焼面とすることもある(340、351、352)。また、肩甲骨以外の骨を使用して対処するなどの工夫も見受けられる。(357、358)

以上のように、ケズリという属性は、焼灼の位置や数に左右されてきたといえる。第404図で、ケズリと焼灼のこうした関係を整理してみた。I→II→IIIの順に変遷し、記号末尾のcはシカの肩甲骨、sはイノシシの肩甲骨であることを示している。青谷上寺地遺跡では、I期は弥生時代中期中葉、II期は中期後葉、III期は中期後葉～古墳時代前期初頭に位置付けられよう。

ト骨の属性・ミガキ

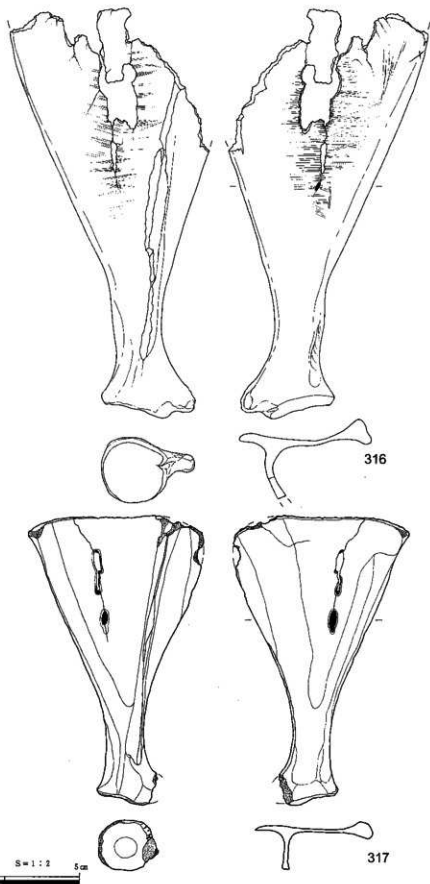
ここでいうミガキとは、骨の表面に加えられたケズリ以外の調整痕の総称である。刃物等で骨の表面を擦ることによって、光沢や縦横の筋を生じさせている(312、316、318～320、322～326、328～330、332、333、340～353、355～358)。神澤勇一は、焼灼痕を明瞭にするための行為と説明

しており¹⁷⁾、当遺跡においても、ミガキの範囲と焼灼位置は概ね一致するといえそうである。「青谷上寺地3」においては、焼灼範囲外にもミガキが行われていることを留意点として挙げ、むしろ血肉を削ぎ落として骨面を清浄にする意図の表れとの考えを提示したが、説得力に欠けるものであった。現時点では神澤説に従いたい。

ト骨の属性・鏝

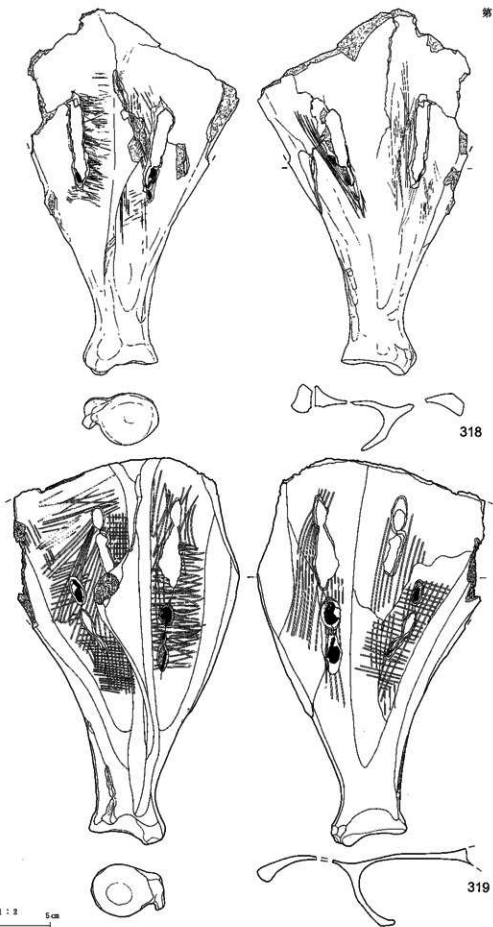
鏝らしきものを1点確認した。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に相当する溝SD69から出土した344である。このト骨は、外側面の海綿質の間隙に深い窪みが2ヵ所あり、この中を焼灼するものであるが、この窪みが鏝である可能性がある。鏝であるならば、神澤勇一のいう第III形式に相当するもので、断面が楕円状に近い粗楕

発掘年度	調査地区	発掘層位	時期	種別	骨種	ケズリ	焼灼				骨長	骨幅	骨厚	骨重			
							1	2	3	4							
314	0区	①-②層	弥生前期後葉～古墳	ト骨	肋骨	A	2	2	2	2	2.90	6.40	4.80	3.45	3.80	15.90	40257
315	7区	L層	弥生中期後葉	ト骨	肋骨	A'	2	2	2	2	1.80	4.70			11.20	7.80	40471



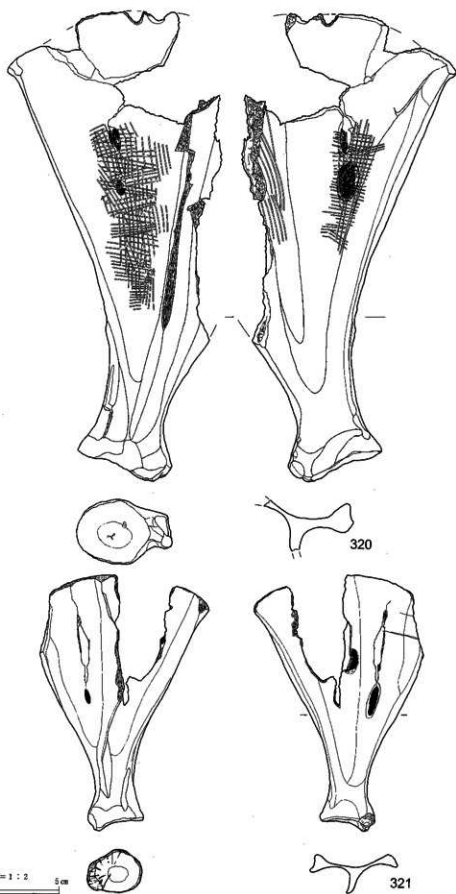
第390圖 卜骨(3)・A2

発掘地	層位	品名	形状	材質	用途	備考	骨の		重量	計測					出土層位	
							長さ	幅		1	2	3	4	5		6
316	6段	卜骨	長方形	骨	卜用	△	2.50	2.10	14.40	1.90	5.20	4.30	3.50	3.50	17.90	34850
317	7段	卜骨	長方形	骨	卜用	△	2.50	2.10	14.40	1.90	5.20	4.30	3.50	3.50	17.90	42566



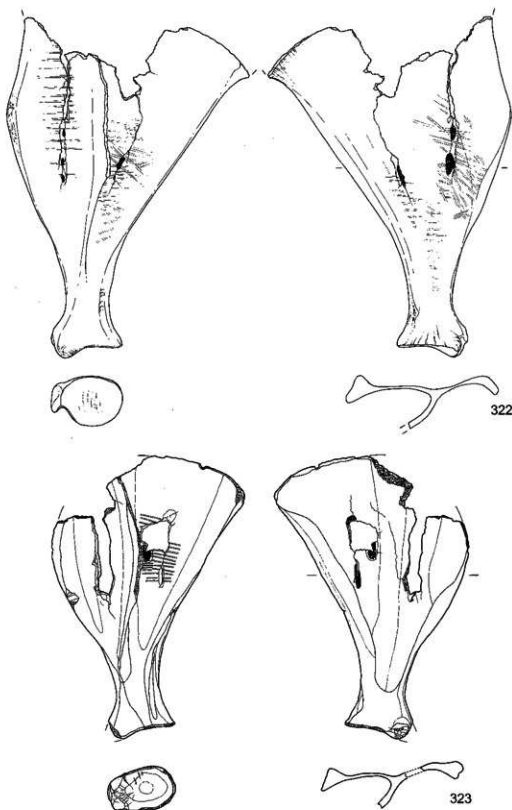
第391図 卜骨(4)・A2

発掘遺跡 経典区 遺跡・層位		時期	出土層・骨埋ケズリ	標本	ハナシ	ニリキ	骨	角	計	測	量	(cm)	重量		
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14		
318	7区	1層	弥生中前期後半	無蓋埋骨	A	肋骨面	2	肋・外	2.90	7.10	3.80	2.90	19.90	28119	
319	7区	SD27	弥生中期中葉—中期後半	無蓋埋骨	A	肋骨面	2	肋・外	20.30	3.68	7.80	3.95	3.26	2.90	42510



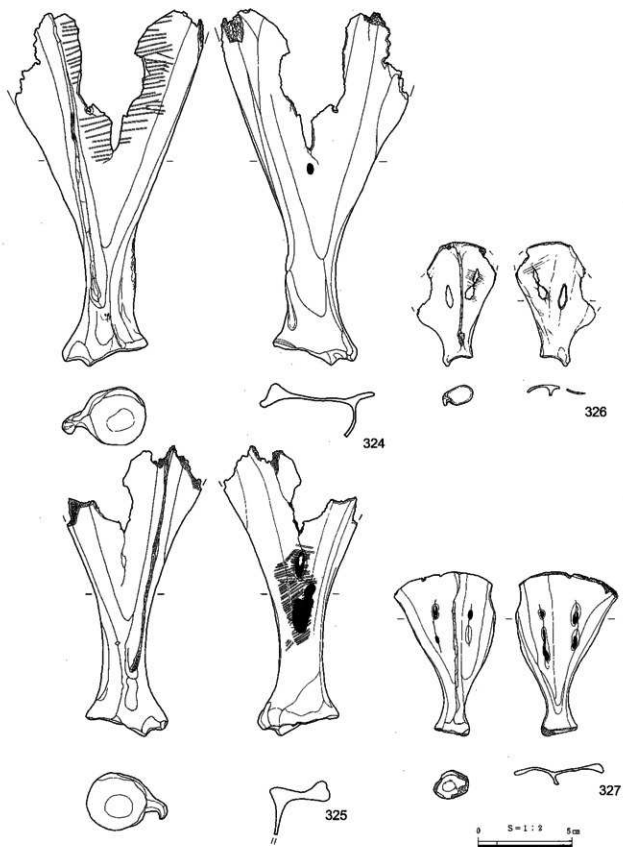
第392図 卜骨(5)・A2

標本番号	調査区	遺構・層位	種別	形状・骨質	ケズリ	検出場所	測長		計					重量(g)	出土層位	
							1	2	3	4	5	6				
320	7区	BA22	弥生中期前半～中期後半	硬骨	A	跡書面	2	跡・片	13.40	3.30	8.65	5.00	3.90	3.40	20.80	38011
321	7区	J層	弥生中期後半	硬骨	A'	跡書面	2	跡・片	13.40	1.85	8.05	2.85	2.40	1.80	38041	



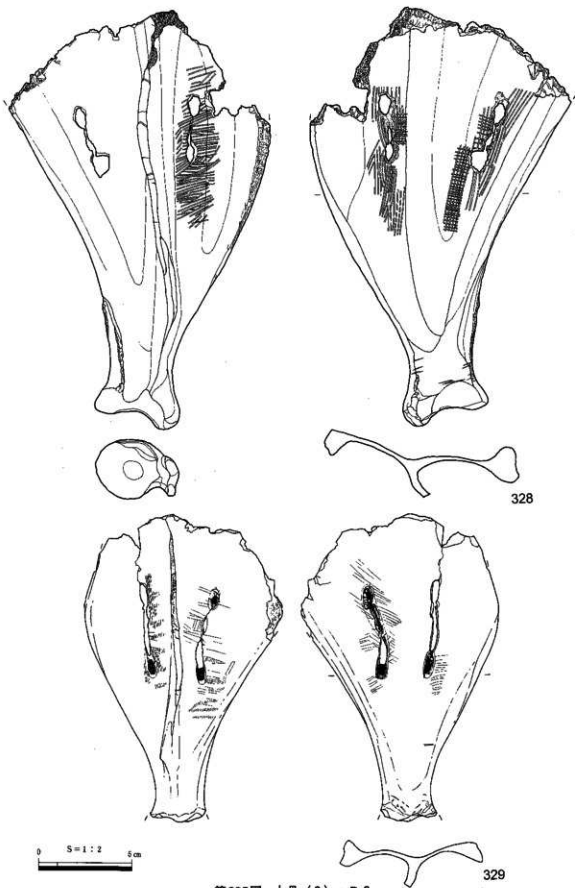
第393図 卜骨(6)・A2

種名	種名	種名	種名	種名	種名	標尺						種名				
						1	2	3	4	5	6					
322	6区	C層	新中層一後部	緑島層中骨	A'	肋骨	2	肋	外	2.30	5.90	2.80	3.00	2.30	16.20	3404
323	7区	I層	新玉中層後部	緑島層中骨	A'	肋骨	2	肋	内	2.30	5.90	2.50	2.50	2.80	10.20	3407b



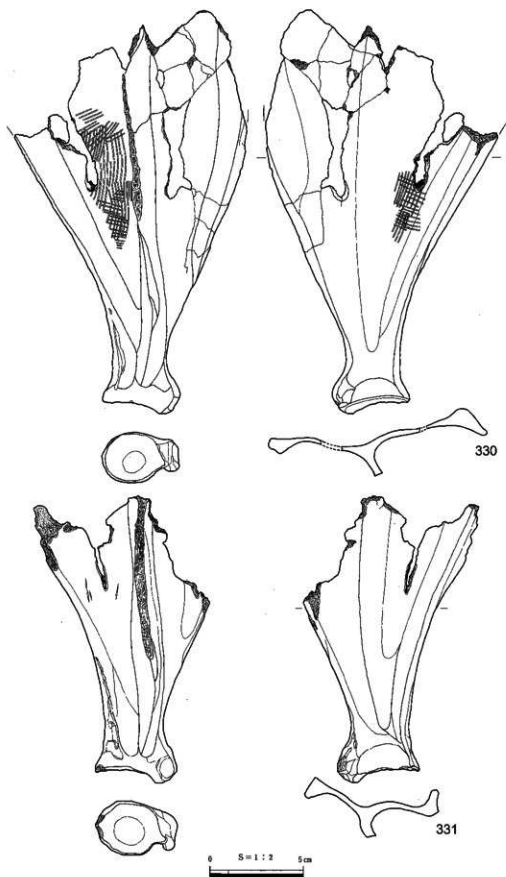
第394図 卜骨 (7) ・B1、B2

発掘地	調査区	遺位	時期	種別	骨の位置	骨の種別	骨の部位	骨の形状	測定値 (cm)						出土層位
									1	2	3	4	5	6	
324	B区	不明	不明	鹿	鹿角	鹿角	2	外	2.55	6.60	4.45	3.10	3.05	16.00	26380
325	7区	J層	弥生中期後葉	鹿	鹿角	鹿角	1	外	2.20	5.80	4.25	3.15	3.00	14.70	42296
326	B区	SD3B	弥生中期後葉	鹿	鹿角	鹿角	2	外	6.20	1.45	3.60	1.80	1.10	6.90	33444
327	7区	K層	弥生中期後葉	鹿	鹿角	鹿角	2	外	9.90	1.10	3.10	1.80	1.20	1.40	36943



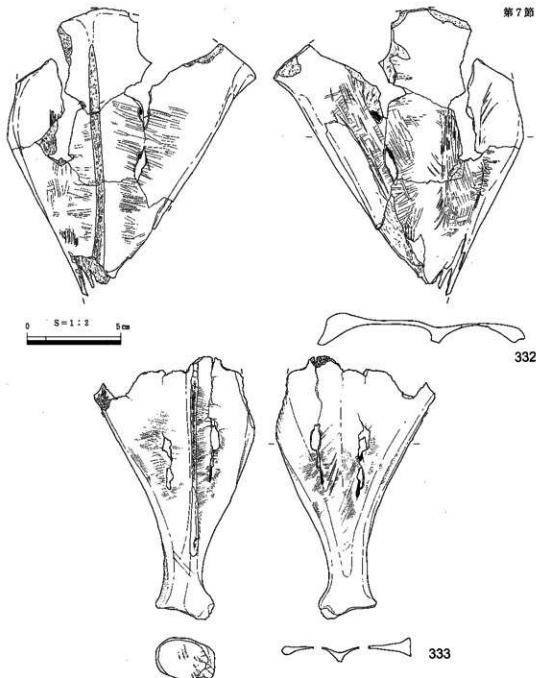
第395図 卜骨(8)・B2

標本番号	調査区	遺跡・層位	時期	出土層	骨種・骨部	ケズリ	長さ	横径		厚さ	計	測定値					重量	取上番号
								ハナシ	ミガキ			1	2	3	4	5		
226	7区	H-1層	弥生中期後半—後期	標石岡野舎	B	肋骨面	2	肋骨	2	肋骨	3.20	8.45	4.50	3.50	3.10	22.00	4.017	
329	7区	埋	弥生中期後半	標石岡野舎	B	肋骨面	2	肋骨	2	肋骨	2.82	7.50				16.30	14.00	3842



第396図 卜骨(9)・B2

発掘地	層位	調査番号	発掘者	出土時期	出土層位	出土品名	数量	形状	測定値 (cm)					備考	
									1	2	3	4	5		
330	7区	8027	林生中	縄文	中層	骨	2	片	2.80	7.50	4.10	3.10	2.20	20.50	42177
331	7区	H層	林生中	縄文	中層	骨	2	片	3.00	7.50	4.20	3.30	2.50	15.20	39121

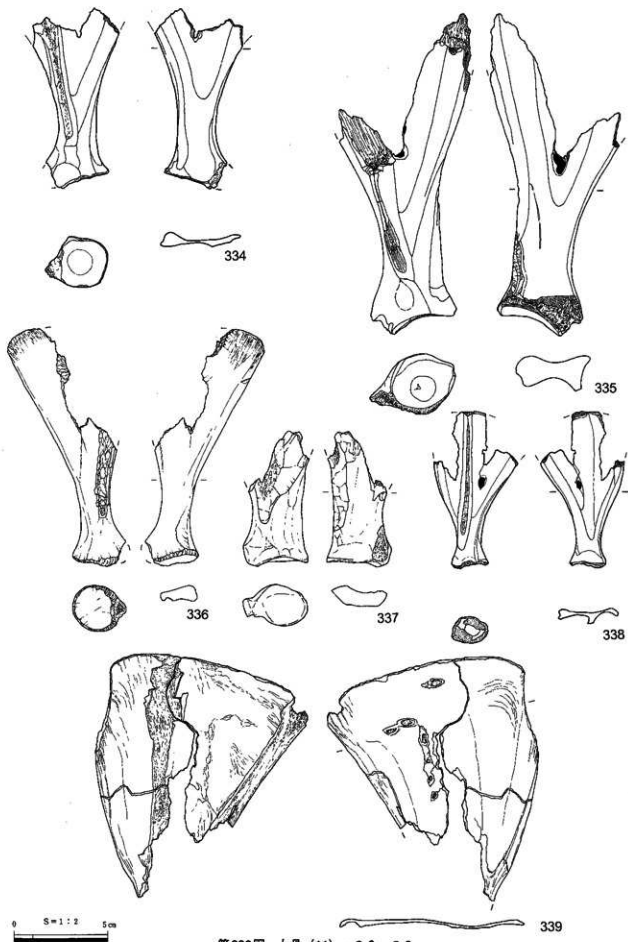


第397図 卜骨 (10) · B 2

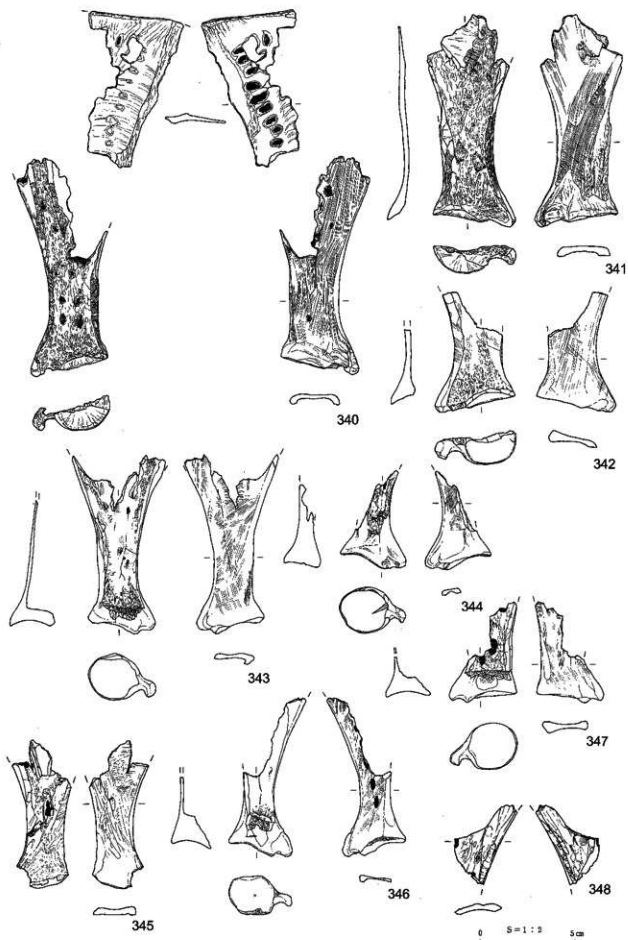
発掘番号	調査区	遺跡・層位	検出時期	骨種	形状・処理	ケズリ	使用	横的 ハチシ	縦的 ミゾキ	骨 片	計						重量	長さ	出土番号
											1	2	3	4	5	6			
332	7区	1層	弥生中前期	猪生後期	B	肋骨	2	肋、外	肋骨、管状		2.60	5.50	3.00	2.75	2.15	13.70		34729	
334	7区	2層	弥生後期	猪生後期	C	肋骨	2	?			2.60						8.70	4.50	30044
335	7区	3K419	弥生後期	猪生後期	C	肋骨	2	?			3.00	7.90	3.50		11.90				41652
336	9区	3D54	弥生後期	猪生後期	C	肋骨	2	?	管状		1.55	4.50	2.50	2.20	7.10				34691
337	7区	2層	弥生後期	猪生後期	C	肋骨	2	?			2.80		2.90	2.40	1.70	5.00			30482
338	7区	3A82	弥生中期	猪生後期	C	肋骨	2	なし	管状		1.25	3.30	1.80	1.40	1.30		8.30	4.10	42191
339	4区	3D11	弥生後期	猪生後期	C	肋骨	3	なし									12.90	10.30	4004

なものである。(1) 国道調査区からも、鑽らしき窪みをもつ卜骨が2点出土しているが、いずれも表面に変化をきたしていない。

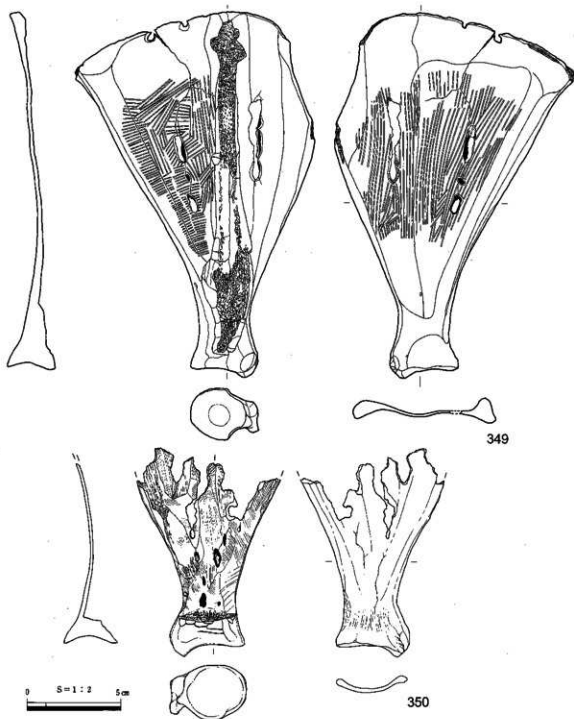
以上、国道調査区出土の卜骨を通して、青谷上寺地遺跡の卜骨について概観し、整理を試みた(2)。焼灼とケズリが密接に関連していることが窺われたが、果たして他の遺跡にも一般化できるのか、今後の類例の増加を待ちたい。それにしても、227点という卜骨の出土数は尋常ではない。これらは数百年間の蓄積であるから、年間あ



第398圖 卜骨 (11) · C2、C3

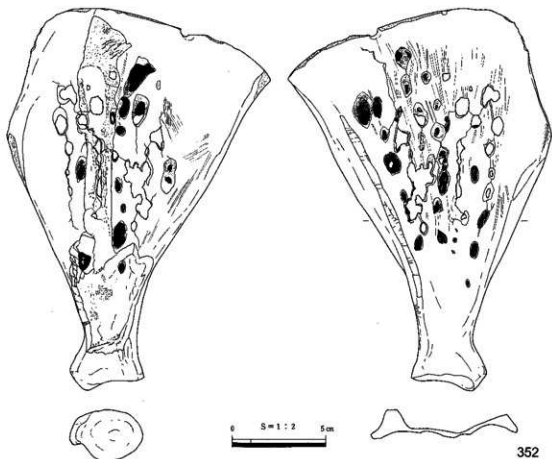
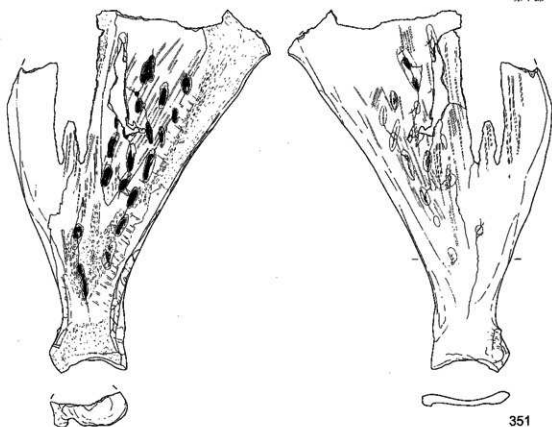


第399圖 卜骨 (12) · D 1、D 4



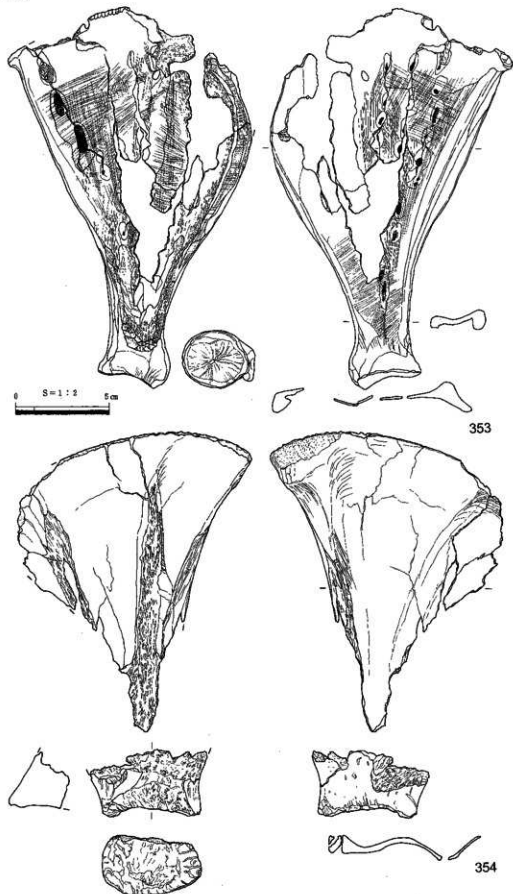
第400図 卜骨 (13) ・ D 2、D 4

発掘番号	調査区	遺構・層位	時期	原形・骨種	ケズリ	用途	焼灼		寸法 (cm)										
							ヒヤシ	ヒガシ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
340	4区	不明		鹿角質甲骨	D	肋骨、外側	4	外	2.50								8.30	4.50	6391
341	4区	BD11	弥生後期初層～後期後葉	鹿角質甲骨	D	肋骨、外側	1	肋、外	2.70								11.20	4.30	6006
342	6区	SD54	弥生後期初層～後期後葉	鹿角質甲骨	D	外側面	1	肋、外	2.50	4.30	3.00						6.30	4.30	34648
343	8区	SD38	弥生後期初層～後期後葉	鹿角質甲骨	D	外側面	1	肋、外	2.00	3.70	2.80	2.80	5.00						33187
344	8区	GD69	弥生後期末～古墳初層	鹿角質甲骨	D	外側面	1	肋	2.40	2.80	2.20						5.20	3.50	27651
345	7区	CD	弥生後期初層～古墳初層	鹿角質甲骨	D	外側面	1	肋、外	1.90								7.90	2.70	37176
346	7区	CD	弥生後期初層～古墳初層	鹿角質甲骨	D	肋骨面	1	肋、外	1.58	2.50	2.50	2.10	8.00						30913
347	8区	SD54	弥生後期末～中期後葉	鹿角質甲骨	D	外側面	1	肋、外		0.78	2.70	2.45					5.30	3.85	34785
348	8区	SD69	弥生後期末～古墳初層	鹿角質甲骨	D	外側面	1	肋、外									4.30	3.30	27798
349	7区	DA82	弥生中期中葉～中期後葉	鹿角質甲骨	D	肋骨面	2	肋、外	18.80	2.65	3.90	2.90	2.70						42190
350	8区	GD38	弥生後期初層～後期後葉	鹿角質甲骨	D	外側面	4	外	2.78	3.95	3.30	2.90	10.40						30218



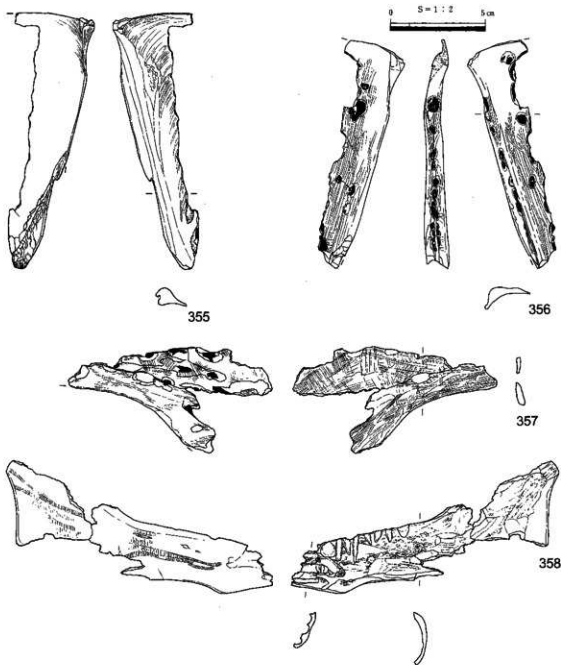
第401圖 卜骨 (14) ・D 4

発掘地	調査年度	遺跡名	層位	出土品	出土位置	出土状況	出土時期	骨角器					重量 (g)	備考
								種別	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
351	4区	SD11	弥生後期前期	一袋取後葉	腰左側中骨	D	肋骨、外側	4	肋、外	3.15	4.10	19.30	6958	
352	4区	SD11	弥生後期前期	一袋取後葉	腰左側中骨	D	肋骨、外側	4	肋、内	20.10	2.80	4.00	2.70	4391



第402図 卜骨 (15) ・ D 4

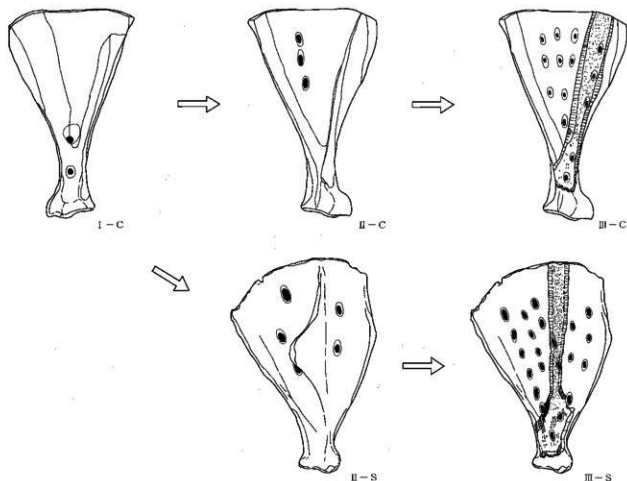
調査年度	調査区	遺跡名	発掘層	出土位置	出土層	出土物	形状	寸法	重量	備考	計測	単位	備考	出土位置
353	C区	C層	弥生中層中葉	一期後葉	掘削後葉	D	片断、外製	4	2.90	15.90	1	2.90	15.90	13718
354	4区	BD11	弥生後期前期	一期後葉	掘削後葉	D	片断、外製	?	5.20	15.90	1	5.20	10.50	40.00



第403図 ト骨 (16) ・タイプ不明 (焼灼痕3)、イノシシ下顎骨使用ト骨

発掘地	区	層位	時期	出土層	種別	用途	特徴	焼灼痕	計						重量	出土番号
									1	2	3	4	5	6		
305	4区	BD11	弥生後期初期～後期後葉	藤原野原	ト骨	?	肋骨面	肋	13.95	4.30	3587					
306	7区	②層	弥生後期初期～中期初期	藤原野原	?	肋骨面	肋、并	12.20	4.30	35062						
307	4区	①層	弥生中期	藤原野原	内側	肋骨面	肋、并	10.70	5.80	5152						
308	8区	BD38	弥生後期初期～後期後葉	藤原野原	内面	肋骨面	肋、幼	7.00	14.05	34108						

なりに換算すれば、さしたる数ではないということになってしまうのであろうか。しかしそうした単純計算には、誤謬が附いて回るものである。確かに『魏志』『倭人伝』中には骨トについての風俗が記述されているが、弥生時代の日本においては骨ト行事が年中行事的なものであったとするためには、まだまだ検討の必要があるだろう。現状ではト骨の出土分布が局地的な状況を示していること、焼灼2やケズリDのようなパターンが遠隔地間同士や時代を超えて共通することなど、骨トについてのネットワークが存在するかのような状況である。『青谷上寺地3』では、遠く韓国は勸島遺跡との共通性も指摘した。今後の展開が期待される。(北浦弘人)



第404図 ト骨の変遷

註

- (1) 渡辺誠 2000「弥生・古墳時代における回転式埴輪鈿頭の研究」『高宮廣衛先生古希記念論集 琉球・東アジアの人と文化』(下巻) 高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- (2) 加藤隆昭 1986「島根県八東郡美保岡町の福浦海底遺跡について」『郷土と博物館』第31巻第1号 鳥取県立博物館
- (3) 註(1)
- (4) 高山純・甲斐山佳子 1993『珊瑚島の考古学—中部太平洋キリバス共和国調査記—』大明堂
- (5) 内田律夫編 1988「朝陽川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ(海崎地区2)」島根県教育委員会
- (6) 宮崎泰史 1999「まつりの品々」『平成11年度春季特別展 渡来人登場—弥生文化を開いた人々—』大阪府立弥生文化博物館図録18 大阪府立弥生文化博物館
- (7) 神澤勇一 1990「呪術の世界—骨トのまつり—」『弥生人とまつり 考古学ゼミナール』石川日志編六興出版
- (8) 神澤勇一 1976「弥生時代・古墳時代及び奈良時代のト骨・ト甲について」『畿台史学』38
- (9) ト骨の整理、検討にあたっては、大阪府教育委員会宮崎泰史氏の御教示によるところが大きかった。末尾ながら深甚の謝意を表します。

No.	地区	地上集卵 区	採 集 期 間	種 類	取 得 骨 塊 の 寸 法	種 別		種 名		種 名		種 名		種 名	種 名	種 名	種 名	種 名	種 名							
						種 名	種 名	種 名	種 名	種 名	種 名	種 名	種 名							種 名	種 名	種 名	種 名			
1	4区	2385	1	SD 1 1	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	B	?	?	?	1.68	4.4	2.37	2.4	1.8	6.1										
2	4区	4033	1	SD 1 1	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	C	?	?	?	3.04	7.4	3.8	2.9	2.6	7.8										
3	4区	4378	1	SD 1 1	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	C	?	?	?						5	3.0	3.3	9.8							
4	4区	4490	1	SD 1 1	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	B	?	?	?	3.41	8.8	4.2	2.5	3.23	6.7										
5	4区	2480	1	③	卵生中期中葉～後葉	雄右肩甲骨	A'	?	?	?	2.51	8.3	4.96	3.2	2.5	10.8										
6	4区	2497	1	SD 1 1	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	C	?	?	?	3.2	8.4	5.2	4.35	8.2											
7	4区	2479	1	②	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	?	?	?	?										6.3	2.3					
8	4区	8922	1	SK 1 4 6	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	A'	?	?	?						7.9	7.4	3.4	3.35	2.5	10.8					
9	4区	3203	1	②	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	B	?	?	?						10.7	2.6	6.6	3.6	3	3					
10	5区	13122	1	①～③	卵生中期中葉～古墳初産	雄右肩甲骨	A'	?	?	?											8.2	4.2				
11	5区	14697	1	①～③	卵生前期末～中期後葉	雄右肩甲骨	B	?	?	?						2.37	6.1					7.5	4			
12	5区	14252	1	③	卵生中期中葉～後葉	雄右肩甲骨	A'	?	?	?	2.5	6.8	3.65	2.8	2.45	20										
13	5区	2898	1	SD 3 8	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	A'	?	?	?	3.07	7.7										17.3	8.9			
14	5区	30841	1	SD 5 6	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	D	?	?	?												3.1	3.9	2.8		
15	5区	33401	1	SD 3 8	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	D	?	?	?												2.9	2.7	3.1	2.9	
16	5区	34523	1	SD 3 8	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	D	?	?	?	2.87	6.84	3.5	3.35	8.8											
17	6区	34528	1	SD 5 4	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	B	?	?	?	2.02	5.1	3.24	2.8	2.4	6.2										
18	6区	34836	1	SD 5 4	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	CorD	?	?	?														7.1	2.8	
19	6区	34843	1	SD 5 7	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	B	?	?	?	3.26	8.2	4	3	2.78	17.1										
20	6区	34794	1	D 8	卵生中期～後期	雄右肩甲骨	A'	?	?	?	2.65	6.7												11.9	6	
21	6区	34848	1	D 8	卵生中期～後期	雄右肩甲骨	A'	?	?	?	3.1	8.3	4.15	3	2.6	18.3										
22	7区	33190	1	①	卵生中期～前葉	雄右肩甲骨	C	?	?	?														6.3	2.3	
23	7区	35288	1	①	卵生中期～前葉	雄右肩甲骨	A'	?	?	?	1.8	5.1	3.9	2.6	2.6	11.2										
24	7区	35303	1	不明	不明	雄右肩甲骨	BerC	?	?	?	2.17	8.2	5	3.8	3.9	18										
25	7区	35349	1	不明	不明	雄右肩甲骨	B	?	?	?														10.1	3.2	
26	7区	35349	1	不明	不明	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.3	4.9	4.1	2.7	2.6	6.1										
27	7区	35516	1	②	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	C	?	?	?	1.8													8.8	4.4	
28	7区	35572	1	②	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.2	6.8												8.5		
29	7区	35592	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	C	?	?	?						4.17	2.18	2.97	6.5							
30	7区	35647	1	②	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	D	?	?	?	2.62													5.6	3.74	
31	7区	35728	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.82	4.61	3.61	3.31	8											
32	7区	35761	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.46	6.2												7	4.8	
33	7区	35838	1	不明	不明	雄右肩甲骨	A'	?	?	?	2.7	6.7												14.4	6.2	
34	7区	36078	1	②	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.25	6.5	4.33	3.2	8.6											
35	7区	36086	1	②	卵生後期初産～古墳初産	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.84	7												9.2	4	
36	7区	36124	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	B	?	?	?	2.65	9.3	4.37	2.57	3.14	9.5										
37	7区	36246	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.36	6.2	3.42	2.57	8.8	3.8									8.8	3.8
38	7区	36251	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.61	6.9												6.4		
39	7区	36306	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	B	?	?	?	2.87	7.25	2.72	2.68	14.7	8.4										
40	7区	36322	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	B	?	?	?						3	7.75	3.9	4.2	3.8	14					
41	7区	36333	1	J 8	卵生中期後葉	雄右肩甲骨	B	?	?	?															8	7.2
42	7区	36919	1	②	卵生中期後葉	雄右肩甲骨	A'	?	?	?	2.8	7.05												16.8	8.8	
43	7区	37095	1	不明	不明	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.8	7.8	4.8	2.7	3.54	12.6										
44	7区	37116	1	不明	不明	雄右肩甲骨	B	?	?	?	1.23	4.1	2.5	1.85	1.76	6.5										
45	7区	37164	1	不明	不明	雄右肩甲骨	B	?	?	?	2.34	6.7	3.6	3.3	11.2											
46	7区	37171	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	C	?	?	?	2.15	4.14	3.08	2.8	8.2											
47	7区	37171	1	②	卵生後期	雄右肩甲骨	B	?	?	?															12.2	5.4
48	7区	37283	1	SD 5 9, 6 2	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	B	?	?	?	2.22	5.5													3.9	4
49	7区	37431	1	SD 6 2	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	A'	?	?	?	3.15	8.1	4.3	4.65	2.5	14.6										
50	7区	37558	1	SD 5 9	卵生後期初産～後葉	雄右肩甲骨	B	?	?	?															15	9.2

第405図 卜骨一號 (図掲載分以外) (1)

第3章 出土遺物

No.	地区	出土番号	遺物・部位	時期	種・形・寸法	骨内径		備考	測定									
						最大径	最小径		1	2	3	4	5	6	7	8		
51	TK	27722	1 J層以下	弥生中期後半以前	鹿右肩甲骨	C	?	?	肋、外	2.24 8.05								5.5 4.7
52	TK	28007	SA 2.6	弥生中期後半	鹿右肩甲骨	B	?	?	肋、外 着痕、又は着痕	1.8	4.9	2.85	2.2	2	6.3			
53	TK	28866	不明	不明	鹿右肩甲骨	B	?	?	Y 着痕	1.54	4.5	2.7	2.42	1.93	2.9			
54	TK	28887	不明	不明	鹿左肩甲骨	C	?	?	肋、外	2.36	6.2		1.8	2.72	2.1			
55	TK	28924	不明	不明	鹿右肩甲骨	A'	肋骨面	2	肋、外	2.6	7.28	4.6	3.5	3.3	2.7			
56	TK	28926	不明	不明	鹿右肩甲骨	C	?	?	肋、外	2.3	6.5	4.3	3.1	3	5.3			
57	TK	29172	H層	弥生後期	鹿右肩甲骨	B	?	?	肋骨面						11.1	5.2		
58	TK	29177	②層	弥生後期初期～占碑初期	鹿右肩甲骨	B	?	?	肋骨面	3.01	8.2		3.2		10.3			
59	TK	29203	H層	弥生後期	鹿右肩甲骨	?	肋骨面	1	肋、外 着痕							9.4	3.4	
60	TK	29462	I層	弥生中期後半	猪心肩甲骨	A'	肋骨面	2	肋、外 着痕?	2.2	6.1	3.15	1.6	2.3	2.75			
61	TK	29891	H層	弥生後期	猪?肩甲骨	B	?	?	?						3.8	1.8		
62	TK	40302	H層	弥生後期	??肩甲骨	B	?	?	外側面						2.1	3.6		
63	TK	40517	II層	弥生後期	鹿左肩甲骨	B	?	?	2 肋、外	2.7	7.4		3.55	3.4	10.5			
64	TK	40521	II層	弥生後期	鹿左肩甲骨	C	?	?	肋、外	2.6		4.33	3.1	2.95	9.7			
65	TK	40595	H層	弥生後期	鹿右肩甲骨	A'	肋骨面	2	肋、外				4.47	3.42	16.3	9		
66	TK	40608	H層	弥生後期	鹿右肩甲骨	B	?	?	肋、外 着痕	1.31	4.8	2.7	2.34	1.91	5.9			
67	TK	40622	H層	弥生後期	猪右肩甲骨	B	?	?	肋、外	2.66	6.9	3.71	3.28	2.5	6.5			
68	TK	40727	I層	弥生中期後半	鹿左肩甲骨	B	肋骨面	2	肋、外	2.6	5.6			2.2	13	9		
69	TK	41151	II層	弥生後期	猪心肩甲骨	A'	肋骨面	2	肋骨面 着痕	1.57	4.1	2.45	1.96	1.93	6.4			
70	TK	41661	II層	弥生後期	猪心肩甲骨	C	肋骨面	1	外側面 着痕	1.78	4.1			1.07	8.1	3.4		
71	TK	42041	L層	弥生中期後半	猪左肩甲骨	A	?	?	なし	20.3	2.6	6.7	3.8	3	2.6			
72	TK	42048	II層	弥生後期	鹿右肩甲骨	B	?	?	肋、外 着痕	1.9	5				6.9	4.8		
73	TK	42129	J層	弥生中期後半	鹿右肩甲骨	A'	肋骨面	1	なし 着痕、又は着痕	13.1	2	5.1	2.8	2.1	2.1			
74	TK	42214	SD 2.7	弥生中期後半	猪左肩甲骨	A'	肋骨面	2	肋骨面	3.2	8.1	4.3	3.6	3.15	19.2			
75	TK	42262	SD 2.7	弥生中期後半	猪右肩甲骨	A'	肋骨面	2	肋、外 着痕	1.94	4.8	2.7	2	1.8	7.7			
76	TK	42282	I J層	弥生中期後半	??肩甲骨	B	?	?	?						7	2.1		
77	TK	42293	J層	弥生中期後半	鹿右肩甲骨	B	?	?	肋、外 着痕	2	5.8	2.4	2.16	2.15	7.4			
78	TK	42294	J層	弥生中期後半	鹿右肩甲骨	B	?	?	外側面			4.5	3	2.08	11.1			
79	TK	42413	J層	弥生中期後半	鹿右肩甲骨	A'	肋骨面	1	なし	2.4	6.6	4.2	3	2.9	12.8			
80	TK	42449	J層	弥生中期後半	鹿右肩甲骨	A'	肋骨面	2	肋、外	2.6	7	4.7	3.25	3.4	19.4			
81	TK	42462	J層	弥生中期後半	鹿左肩甲骨	B	肋骨面	2	肋、外	2.25	5.9				13.6	6		
82	TK	42609	I～J層	弥生中期後半	猪心肩甲骨	B	肋骨面	1	なし						11.9	5.9		
83	TK	42616	H～J層	弥生中期後半～後期	鹿左肩甲骨	A'	肋骨面	2	肋、外	20.9	2.8	7.8	6.2	3.87	3.3			
84	TK	42623	I I～J層	弥生中期後半～後期	鹿右肩甲骨	C	?	?	なし	2.62	7.3				3.94	7.4		
85	TK	42624	II～J層	弥生中期後半～後期	猪左肩甲骨	B	肋骨面	1	?	着痕	1.62	4.1			1.7	6.1		
86	TK	42659	I～L層	弥生中期後半	猪右肩甲骨	B	肋骨面	2	肋骨面 着痕						6.9	2.9		
87	TK	42652	I～L層	弥生中期後半	鹿左肩甲骨	B	肋骨面	2	?	外側面、肋縁寸法	3.1	8.3	4.7	3.6	3.6	10.6		
88	TK	42653	I～L層	弥生中期後半	鹿右肩甲骨	B	肋骨面	2	肋骨面 着痕あり	3.27	8.4		3	2.6	13.4			
89	TK	42676	2 J層	弥生中期後半	鹿右肩甲骨	A	肋骨面	2	肋、外 着痕、又は着痕	1.82	4.7	2.7	1.3		8			
90	6K	44203	③層	弥生中期(中層)～後期	鹿左肩甲骨	B	?	?	?	2.84	7.4	4.6	3.6	2.4	16.4			
91	TK	44815	J層	弥生中期後半	猪左肩甲骨	C	?	?	外側面	3.05	7.7	4.97	3.2	3	9.9			
92	6K	45479	②層	弥生後期初期～占碑初期	鹿左肩甲骨	C	肋骨面	2	肋骨面 着痕	2.25	6	3.1	2.3	2.2	6.4			
93	6K	45149	5 K 4.0.4	弥生後期初期～後期	鹿右肩甲骨	B	?	?	肋、外	2.2	5.7	3.25	2.41	2.36	9			
94	6K	46661	③層	弥生中期(中層)～後期	鹿左肩甲骨	A'	?	?	?	2.95	8.28	5	3.9	2.7	19.4			
95	T～HK	30568	不明	不明	猪右肩甲骨	A'	肋骨面	2	肋骨面 着痕、又は着痕	1.91	5.1				7.5	5.7		

第406図 卜骨一覽(図掲載分以外)(2)

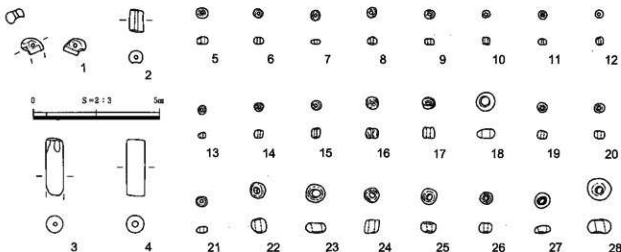
第8節 ガラス製品

県道調査区から出土したガラス製品は勾玉1、管玉3、小玉81の計85点である。このうち時期不明・不詳のものを除き、小玉2点が弥生中期中葉～後葉の遺物包含層より出土している（③層およびJ層）ほかは、弥生後期～古墳前期初葉に位置付けられる。とりわけ勾玉と小玉43点が出土したSD38にその半数が属することとなる。第2章第3節でふれたように（56ページ）、これらは碧玉製管玉・小玉とともにまとまって出土しており、伴出した大量の人骨と関連をもつもの、すなわち装身具として身体を飾っていたものと理解できる。藤田 等にれば弥生後期のガラス小玉は大部分が埋葬に伴うものとされる⁽¹⁾。SD38出土のものも環濠内に埋められた人骨に伴うというやや特殊な状況ながら、副葬品として取り扱うべきであろう。

図示したものを概観しておく。1の勾玉の表面は風化しているが、欠損面を見ると濃い緑色を呈する。管玉のうち2は透明感のない薄い青色で、3も同様であろう。4は風化により本来の色調が確認できない。小玉は5～23がSD38出土のものである。色調は10、17が濃い青色を示す。18、23は風化のためか表面が暗褐色～灰褐色となる。中期後葉に属する28は濃い緑色で、他のものとやや異なる。その他は薄い青色をなす。27は所属時期が不明であるが、透明感のある鮮やかな色調が印象的である。（湯村 功）

註

(1) 藤田 等 1994『弥生時代ガラスの研究—考古学的方法—』。



第407図 ガラス製品・勾玉、管玉、小玉

標本番号	器種	調査区	遺構・層位	法量	取上番号	標本番号	器種	調査区	遺構・層位	法量	取上番号
1	ガラス勾玉	8区	SD38	長さ0.7、最大厚0.5、孔径0.1	33244	15	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.4、孔径0.1	33327
2	ガラス管玉	7区	H層	長さ0.8、最大径0.5、孔径0.1	40910	16	ガラス小玉	8区	SD38	径0.5、厚さ0.4、孔径0.1	33327
3	ガラス管玉	5区	②層	長さ2.2、最大径0.7、孔径0.1	15776	17	ガラス小玉	8区	SD38	径0.5、厚さ0.4、孔径0.2	33327
4	ガラス管玉	3区	②層相当地	長さ2.2、最大径0.7、孔径0.2	20300	18	ガラス小玉	8区	SD38	径0.8、厚さ0.4、孔径0.4	33327
5	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.2、孔径0.1	33327	19	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.3、孔径0.1	30254
6	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.3、孔径0.1	33327	20	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.3、孔径0.1	34557
7	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.2、孔径0.1	33327	21	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.3、孔径0.1	30256
8	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.3、孔径0.1	33327	22	ガラス小玉	8区	SD38	径0.8、厚さ0.5、孔径0.2	34570
9	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.2、孔径0.1	33327	23	ガラス小玉	8区	SD38	径0.7、厚さ0.5、孔径0.4	29230
10	ガラス小玉	8区	SD38	径0.3、厚さ0.3、孔径0.1	33327	24	ガラス小玉	8区	SD54	径0.8、厚さ0.5、孔径0.2	34766
11	ガラス小玉	8区	SD38	径0.3、厚さ0.2、孔径0.1	33327	25	ガラス小玉	7区	②層	径0.6、厚さ0.4、孔径0.2	38977
12	ガラス小玉	8区	SD38	径0.3、厚さ0.3、孔径0.1	33327	26	ガラス小玉	7区	H層	径0.5、厚さ0.4、孔径0.2	38407
13	ガラス小玉	8区	SD38	径0.3、厚さ0.2、孔径0.1	33327	27	ガラス小玉	7区	不明	径0.6、厚さ0.3、孔径0.3	41546
14	ガラス小玉	8区	SD38	径0.4、厚さ0.3、孔径0.1	33327	28	ガラス小玉	7区	J層	径0.8、厚さ0.5、孔径0.5	36564